西宮遺跡（2）
川原畑の宝篋印塔

－本文編－

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第71集

2020

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第670集
西宮遺跡（2）・川原畑の宝篋印塔
―本文編―
八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第71集
二〇二〇
国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

西宮遺跡（2）
川原畑の宝篋印塔

－本文編－

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第71集

2020

国土交通省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

1．街道（7 号道）沿いに並んだ屋敷群

2．1 号建物床板の出土状況 1（土間側から板の間方向）

口絵 2

3．1 号建物床板の出土状況 2（建物裏から居間方向）

4．1 号建物床板の出土状況 3（土間側から居間方向）

5．1 号建物床板の出土状況 4（建物裏から客間方向）

6．1 号建物根太の出土状況（土間側から）

7．1 号建物竈全景

8．1 号建物木組み遺構全景

9．1 号建物 1 号囲炉裏全景

10. 1 号建物唐臼支柱出土状況

11. 1 号建物漆椀出土状況 1

12. 1 号建物漆椀出土状況 2

13. 1 号建物竈周辺出土の桶

14. 1 号建物出土のひょうたん、捕獲具、鍵

15. 1 号建物出土の敷物 1

16. 1 号建物出土の土壁

17. 2 号建物出土の敷物 1

18. 2 号建物出土の敷物 2

口絵 4

19. 2 号建物居間の間取り

20. 2 号建物居間のゴザ

21. 2 号建物 1 号囲炉裏全景

22. 2 号建物 1 号囲炉裏下部構造

23. 2 号建物遺物出土状況(漆椀)

24. 2 号建物遺物出土状況(陶磁器)

25. 2 号建物遺物出土状況(箸)

26. 1 号建物遺物出土状況(土人形)

27. 10号建物出土の埋設桶を覆う板材

28. 10号建物の間仕切り状況

29. 4 号建物出土の草壁

30. 4 号建物出土の堆肥

31. 7 号建物出土の床板材

口絵 6

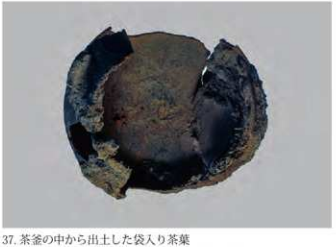
32. 7 号建物出土の大引・根太の出土状態

33. 7 号建物出土のゴザ

34. 7 号建物出土の箱入り漆椀

35. 7 号建物出土の箱入り陶磁器・砥石

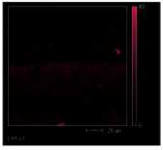
36. 薬缶の中から出土した茶葉

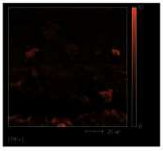


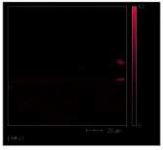
37. 茶釜の中から出土した袋入り茶葉

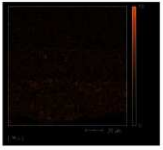
38. 沢筋に堆積した土石流堆積物

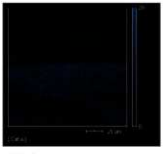
39. 同・堆積物で埋もれた陥穴

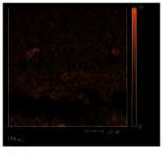

試料番号6a-M-AlKa

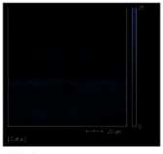

試料番号6a-M-OKa

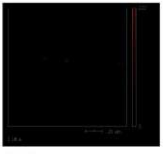

試料番号6d-M-AlKa

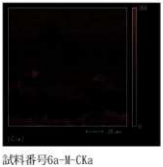

試料番号6d-M-PKa

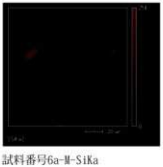

試料番号6a-M-CaKa

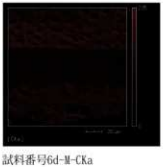

試料番号6a-M-PKa

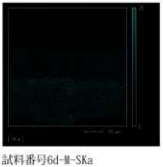

試料番号6d-M-CaKa

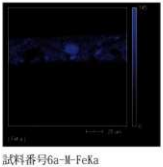

試料番号6d-M-SiKa

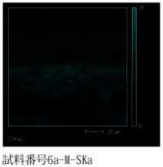

試料番号6a-M-CKa

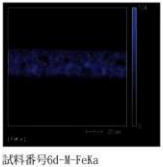

試料番号6a-M-SiKa


試料番号6d-M-CKa

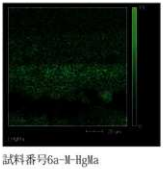

試料番号6d-M-SKa


試料番号6a-M-FeKa

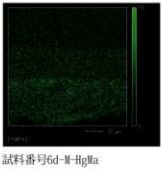

試料番号6a-M-SKa

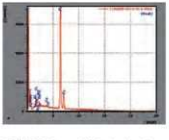

試料番号6d-M-FeKa

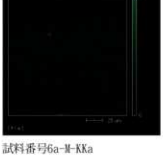
試料番号6d-SEM

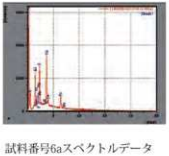

試料番号6a-M-HgMa

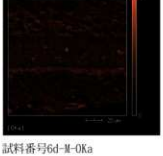
試料番号6a-SEM


試料番号6d-M-HgMa

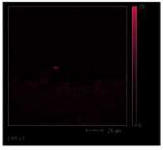

試料番号6dスペクトルデータ


試料番号6a-M-KKa

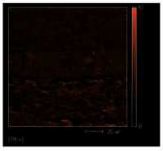

試料番号6aスペクトルデータ


試料番号6d-M-OKa

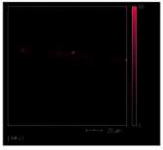
口絵 8



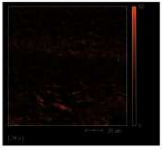
試料番号7a_M_AlKa



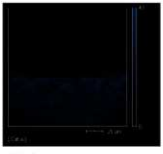
試料番号7a_M_OKa



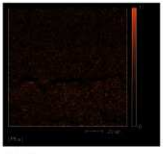
試料番号7c_M_AlKa



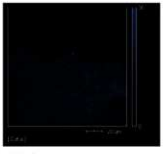
試料番号7c_M_OKa



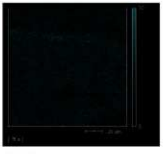
試料番号7a_M_CaKa



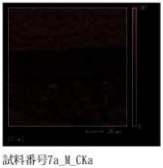
試料番号7a_M_PKa



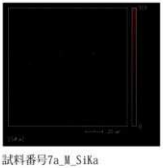
試料番号7c_M_CaKa



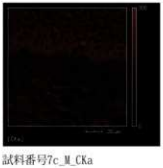
試料番号7c_M_PKa



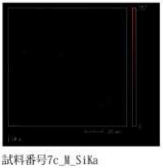
試料番号7a_M_CKa



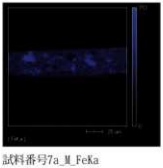
試料番号7a_M_SiKa



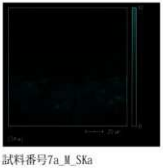
試料番号7c_M_CKa



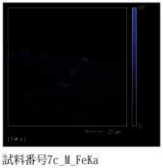
試料番号7c_M_SiKa



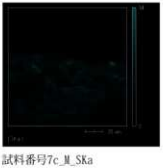
試料番号7a_M_FeKa



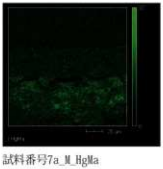
試料番号7a_M_SKa



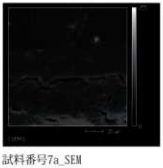
試料番号7c_M_FeKa



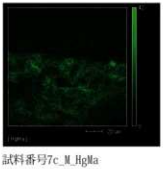
試料番号7c_M_SKa



試料番号7a_M_HgMa



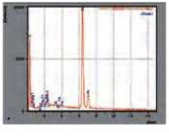
試料番号7a_SEM



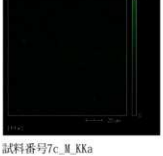
試料番号7c_M_HgMa

試料番号7c_SEM

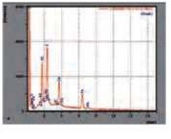
試料番号7a_M_KKa



試料番号7aスペクトルデータ



試料番号7c_M_KKa



試料番号7cスペクトルデータ

序

八ッ場ダムは、治水・利水・発電を伴う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められてきました。八ッ場ダムの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は当事業団が平成６年から実施し、本年で26年を迎え最終年にもなりました。

西宮遺跡は平成20年度に発掘調査が開始され、令和元年９月にすべての発掘調査を終えました。平成26年度以前の調査成果についてはすでに報告されていますが、今回は平成27年度から30年度の調査成果について報告することになりました。発掘調査は天明泥流に埋もれた旧川原畑村の全域に及び、絵図や古文書でしか分からなかった屋敷や畑の全貌が明らかとなりました。そのほか戦国時代真田氏に支配された頃の建物や畑、古代の陥し穴などが発見されています。

これらの調査所見は、長野原町を中心とした地域ひいては群馬県における古代や中・近世史を考える上でも重要な資料となるものと考えております。

発掘調査から報告書の刊行にいたるまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には多大なる尽力を賜りました。

本書を上梓するにあたり衷心より感謝申し上げます。

令和２年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　向田忠正

例　言

1．本書は、八ッ場ダム建設工事に伴い平成27～30年度に発掘調査された「西宮遺跡」の発掘調査報告書である。

2．本遺跡では平成20年度から発掘調査が行われており、平成20・26年度調査分についてはすでに発掘調査報告書の刊行を終えている。本報告書は、平成27年度から平成30年度の調査成果である。

3．今回報告対象となる地点は前回報告地点に隣接しており、全体図等には必要に応じて前回調査地点の遺構図を掲載した。

4．遺跡名称および所在地

西宮遺跡：群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑

平成27年度：16-1、26-1、27-1、28-1、49-1、52-2、53、54、60-1、60-4

平成28年度：26-1、26-2、27-1、28-1、36、38、44-1、44-2、44-3、甲46、乙46、48-1、48-2、49-1、50-1、50-3、51、52-1、52-3、52-4、54、55、57、58、59-1、59-2、59-3、59-4、60-1、60-2、60-4、61-1、61-2、61-5、61-7、62-1、62-13、62-15、62-16、62-22、62-3、62-4、68-1、68-3、89-1、89-2、91、92-3、95-4、95-10、95-3、96-1、96-2、96-3、104-6、377-4、379-5、甲378

平成29年度：13-5、13-6、13-7、16-1、17-1、17-3、25-1、26-1、26-2、27-1、28-1、50-1、50-3、51、52-1、52-3、52-4、60-2、61-1、61-2、61-5、61-7、62-4、62-16、62-22、68-1、62-5、62-7、62-8、62-9、62-10、62-20、63-1、63-2、63-3、64-1、64-2、77、78、79、80、81、82、83、84、85、86-1、86-2、80-3、86-4、87-1、88-1、88-5、88-8、92-1、92-5、92-7、93-2、94-3、94-4、94-6、95-1、99-2、100-1、100-3、100-4、100-5、101-1、101-3、102-4、105-1、105-2、105-3、106-1、乙107、108、109、111-1、111-2、113、114-1、114-2、115、116、117、118、119、120、121、147、150、乙155、157、158、159、7、甲8、乙8-1、9、10、11-1、11-2、11-3、12、17-2、17-3、17-4、17-5、18、19、甲20、乙20、21、22、23、24、25-2、25-3、61-3、61-4、61-6、62-4、62-7、62-8、62-21、64-2、65-1、65-2、66-1、66-2、67、68-2、68-3、69、70、71、72-1、72-2、73、74-1、74-2、75、76-1、76-2、123

平成30年度：11-1、11-2、13-5、13-6、13-7、17-1、17-3、17-5、25-1、25-3、26-2、49-1、49-2、49-3、49-4、49-5、50-1、50-2、50-3、51、52-2、52-3、52-5、53、60-1、60-2、60-3、60-4、61-1、61-2、61-4、61-5、61-7、62-1、甲62-2、62-3、62-4、62-5、62-6、62-8、62-13、62-14、62-15、62-16、62-17、62-18、62-19、62-21、62-22、68-1、68-3、88-1、88-3、88-6、88-7、乙88、89-2、92-1、92-3、92-6、92-8、乙92、94-3、94-4、94-7、95-1、95-3、95-4、95-5、95-6、95-7、95-8、95-9、95-10、乙95、96-1、96-3、97-1、97-3、97-5、98-1、98-4、99-1、99-2、99-3、100-2、100-3、100-5、102-1、104-1、104-5、104-6、105-3、105-4、377-5

川原畑の宝篋印塔：群馬県吾妻郡長野原町大字西宮19

5．事業主体　国土交通省関東地方整備局

6．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

7．発掘調査の期間と体制は、次の通りである。

・調査期間　平成27年６月１日～平成27年６月30日

発掘担当者　主任調査研究員　関俊明、小野隆、藤井義徳、小林茂夫

遺跡掘削請負工事　シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財掘削工事経常企業体

地上測量　株式会社　測研

・調査期間　平成28年８月１日～平成28年12月31日

発掘担当者　主任調査研究員　宮下寛、小林茂夫

遺跡掘削請負工事　測研・技研コンサル・瑞穂建設吾妻地区埋蔵文化財掘削工事経常企業体

地上測量　株式会社　測研

・調査期間　平成29年４月１日～平成30年３月31日

発掘担当者　主任調査研究員　宮下寛、石田真　調査研究員　関明愛、山本直哉　専門調査役　飯田陽一

遺跡掘削請負工事　歴史の杜・吉澤建設・南波建設吾妻地区埋蔵文化財掘削工事経常企業体

地上測量　株式会社　測研

・調査期間　平成30年４月１日～平成30年８月31日

発掘担当者　主任調査研究員　宮下寛　調査研究員　関明愛

遺跡掘削請負工事　歴史の杜・吉澤建設・南波建設吾妻地区埋蔵文化財掘削工事経常企業体

地上測量　株式会社　測研

８．整理事業の期間と体制は、次の通りである。

整理期間　平成30年４月１日～平成31年３月31日

（履行期間　平成30年４月１日～平成31年３月31日）

整理担当　主任調査研究員　唐沢友之　専門調査役　石守晃　専門調査役　岩崎泰一

遺物保存処理　専門員　板垣泰之　専門調査役　関邦一

整理期間　平成31年４月１日～令和２年３月31日

（履行期間　平成31年４月１日～令和２年３月31日）

整理担当　専門調査役　岩崎泰一

遺物保存処理　専門員　板垣泰之　専門調査役　関邦一

９．本書作成の担当者は、次の通りである。

編　集　岩崎泰一　デジタル編集　斎田智彦

遺物写真撮影　岩崎泰一（土師器）、資料２課長　津島秀章（石器・石製品）、専門調査役　山口逸弘（縄文土器）、資料１課長　矢口裕之・専門調査役　大西雅広（陶磁器）、板垣泰之（金属器）

執　筆　石守晃（第４章、第５章６）、高島英之（第６章３）、板垣泰之（第６章４）、飯森康広（第６章７）、岩崎泰一（本文：上記以外）

遺物観察　津島秀章（遺物観察表：石器・石製品）、山口逸弘（遺物観察表：縄文土器）、神谷佳明（遺物観察表：土師器）、矢口裕之（遺物観察表：陶磁器）、板垣泰之（遺物観察表：金属器）、岩崎泰一（木器）

10. 出土漆椀の顔料分析については、当事業団と群馬大学研究・産学連携推進機構機器分析センターの共同研究とした。群馬大学機器分析センター長　若松馨、准教授　林史夫、技術職員　坂本広太

11. 出土建築材・木製品の実測・トレースは、株式会社　測研に委託した。

12. 樹種同定は古環境研究所・パリノサーヴェイ株式会社、花粉分析・植物珪酸体分析(1)(2)は古環境研究所に分析委託した。

13. 出土石器類の石材同定は、飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）に依頼した。

14. 発掘調査資料および出土遺物は、やんば天明泥流ミュージアムに保管してある。

15. 発掘調査および報告書の作成に際しては、下記の方々や機関にご協力・ご指導いただきました。記して感謝いたします。

群馬県教育委員会、長野原町教育委員会、入間市博物館、箱崎和久、目黒新吾、関俊明

凡　例

1．本文中に使用した座標・方位は、すべて国家座標「日本測地系　平面直角座標Ⅸ系）」で、座標北で示した。

2．グリッドについては、本文中に記したとおり、1㎞四方の大グリッドを「地区」、これを100m四方に区切り中グリッドを「区」、この100mグリッドを4m毎に区切り、「グリッド」とした。グリッドの東西方向にA～Y、南北方向に算用数字1～25を与え、南東隅を起点としてグリッド呼称した。遺構毎のグリッド表記は、アルファベットと算用数字で、全体図には国家座標値を併記した。

3．発掘調査では、調査区、調査年度に係らず遺構名称は連番としている。整理作業で途中遺構として外したものは、欠番とした。また、遺構名称が適当でないものもあるが、図面・写真、遺物の注記訂正が煩雑になるため、原則として遺構名等については、そのまま使用している。

なお、発掘調査では任意に止めた確認面毎に面呼称しているが、年度毎の齟齬が大きく、本書では時代毎に再編集して報告した。巻末に遺構新旧対照表を掲載したので参照されたい。

4．遺構断面図に示した数値は、標高（単位：m）を表している。

5．遺構図・遺物図の縮尺は、下記の通り遺構種毎に縮尺を統一した。同一の遺物図中に異なる縮尺の図が加わる場合は、必要に応じて該当する遺物番号に続きカッコ内に縮尺を記した。

遺構図：土台建物1:60、1:80　カマド・囲炉裏1:40　土坑1:40、1:60　集石1:40　焼土1:40
掘立柱建物1:60　畑・水田1:100、1:200　柵列1:60　井戸1:60　溝1:80
遺物図：陶磁器類1:3、1:4　金属器1:2、1:3、1:4　縄文土器1:2　木器・石造物は図版中に表示

6．遺物写真は遺物図と概ね同一縮尺となるよう掲載した。

7．遺構図中で使用したトーンは、下記の内容を示している。これ以外に用いる場合は、挿図中に凡例を示した。

遺構平面図　As-A　焼土　壁土　ローム・黄色土
炭化物　灰層　粘土　敷物
硬化面　植物痕
遺構断面図　ローム　カクラン

8．「へや」の名称については、上郷岡原遺跡（第410集）に民俗建築学を踏まえた用法がある。ここでは、ザシキ：居間、デイ：客間、オクリ：寝間、コザシキ：納戸に読み替え記述した。

9．遺構の主軸方位・走行を記載する際は、座標北を基準として東に傾いた場合はN－○°－E、西に傾いた場合はN－○°－Wというように記した。

10．遺物観察表の凡例については、観察表冒頭に記した。

11．本書で使用した地図は、以下の通りである。

国土地理院1：25,000「長野原」（平成21年4月1日発行）
国土地理院1：200,000「日光」（平成15年11月1日）

西宮遺跡（２）・川原畑の宝篋印塔
総　目　次

本文編（第１分冊）

巻頭カラー
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
本文中写真目次

第１章　調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経緯
　第２節　発掘調査の方法・経過
　第３節　調査区の概要
第２章　遺跡の概要
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　基本土層
第３章　西宮遺跡の調査
　第１節　復旧坑
　第２節　屋敷跡
　第３節　中・近世の遺構と遺物
　第４節　古代・縄文時代の遺構と遺物
第４章　川原畑の宝篋印塔の調査
第５章　自然科学分析
第６章　まとめ
　計測一覧表・新旧遺構対照表
　遺物観察表

遺物図版・写真図版編（第２分冊）

遺物図版目次
写真図版目次

目　次

巻頭カラー
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
本文中写真目次

第１章　調査の経過
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の方法・経過 …… 1
　第３節　調査区の概要 …… 4

第２章　遺跡の概要
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 8
　第３節　基本土層 …… 15

第３章　西宮遺跡の調査
　第１節　復旧坑 …… 19
　第２節　屋敷跡 …… 28
　　１．概要 …… 28
　　２．屋敷跡 …… 29
　　３．屋敷跡以外の遺構 …… 161
　第３節　中・近世の遺構と遺物 …… 187
　　１．土石流堆積物上面の遺構と遺物 …… 188
　　２．下層土石流下の遺構と遺物 …… 190
　　３．上層遺構群 …… 202
　　４．その他の遺構群 …… 216
　第４節　古代・縄文時代の遺構と遺物 …… 262
　　１．陥し穴 …… 262
　　２．縄文時代の埋甕・土坑 …… 282

第４章　川原畑の宝篋印塔の調査
　第１節　概要 …… 285
　第２節　調査経過 …… 285
　第３節　確認調査 …… 287
　第４節　発見された遺構と遺物 …… 287
　　１．川原畑諏訪神社跡 …… 287
　　２．川原畑諏訪神社の旧社跡 …… 291
　　３．川原畑の宝篋印塔 …… 291
　　４．道路跡 …… 301
　第５節　小結 …… 304

第５章　自然科学分析
　１．出土建築部材等の樹種について …… 319
　２．薪（粗朶木）の樹種同定 …… 340
　３．植物珪酸体分析（１） …… 347
　４．花粉・植物珪酸体分析（２） …… 352
　５．西宮遺跡出土漆椀の科学分析 …… 360
　６．出土人骨・獣骨 …… 363

第６章　まとめ
　１．建物構造と転用材の比率 …… 366
　２．木材資源の利用について …… 372
　３．西宮遺跡出土の文字資料 …… 375
　４．西宮遺跡出土の漆椀 …… 378
　５．粗朶木置場について …… 386
　６．竈と囲炉裏 …… 387
　７．中近世の掘立柱建物を中心とした検討 …… 390
　８．天明泥流以前の川原畑村 …… 396
　９．天明泥流後の川原畑村 …… 400

計測値一覧表・新旧遺構対照表
遺物観察表
付図

巻頭カラー

1．街道（７号道）沿いに並んだ屋敷群
2．１号建物床板の出土状況１（上間側から板の間方向）
3．１号建物床板の出土状況２（建物裏から居間方向）
4．１号建物床板の出土状況３（上間側から居間方向）
5．１号建物床板の出土状況４（建物裏から客間方向）
6．１号建物根太の出土状況（上間側から）
7．１号建物竈全景
8．１号建物本組み遺構全景
9．１号建物１号囲炉裏全景
10．１号建物庁口支柱出土状況
11．１号建物漆椀出土状況１
12．１号建物漆椀出土状況２
13．１号建物竈周辺出土の桶
14．１号建物出土のひょうたん、捕獲具、鍛
15．１号建物出土の敷物１
16．１号建物出土の土壁
17．２号建物出土の敷物１
18．２号建物出土の敷物２
19．２号建物居間の間取り
20．２号建物居間のゴザ
21．２号建物１号囲炉裏全景
22．２号建物１号囲炉裏下部構造
23．２号建物遺物出土状況（漆椀）
24．２号建物遺物出土状況（陶磁器）
25．２号建物遺物出土状況（箸）
26．１号建物遺物出土状況（土人形）
27．10号建物出土の埋設桶を覆う板材
28．10号建物の間仕切り状況
29．４号建物出土の草壁
30．４号建物出土の堆肥
31．７号建物出土の床板材
32．７号建物出土の大引・根太の出土状態
33．７号建物出土のゴザ
34．７号建物出土の箱入り漆椀
35．７号建物出土の箱入り陶磁器・紙石
36．薬缶の中から出土した茶葉
37．茶釜の中から出土した袋入り茶葉
38．沢筋に堆積した土石流堆積物
39．同・堆積物で埋もれた陥穴
口絵７　元素マッピングデータ及び二次電子画像１
口絵８　元素マッピングデータ及び二次電子画像２

挿図目次

第１図　調査区図 …… 5
第２図　遺跡位置図（国土地理院発行１/200,000日光） …… 6
第３図　遺跡および遺跡周辺の地形（概況図１/5,000） …… 7
第４図　周辺遺跡（国土地理院発行１/25,000長野原） …… 11
第５図　基本土層作成地点 …… 15
第６図　基本土層図１ …… 17
第７図　基本土層図２ …… 18
第８図　天明泥流上の遺構全体図（復旧坑） …… 19
第９図　天明泥流上面の復旧坑（ミョウガ沢右岸） …… 20
第10図　天明泥流上面の復旧坑（ミョウガ沢左岸） …… 21
第11図　３号屋敷周辺の復旧坑（８区） …… 22
第12図　ミョウガ沢右岸の復旧坑（５・８区） …… 25
第13図　１号屋敷周辺の復旧坑（６区） …… 26
第14図　１ａ号屋敷全体図 …… 28
第15図　１号建物 …… 30
第16図　１号建物断面図１ …… 31
第17図　１号建物断面図２ …… 32
第18図　１号建物断面図３ …… 33
第19図　１号建物建築材出土状況１（土台・大引・根太） …… 34
第20図　１号建物建築材出土状況２（上：床板材、下：大引根太） … 35
第21図　１号建物馬屋 …… 37
第22図　１号建物２号桶 …… 38
第23図　１号建物木杭 …… 38
第24図　１号建物１号桶 …… 38
第25図　１号建物１号竈 …… 39
第26図　１号建物１号囲炉裏 …… 39
第27図　１号建物２号囲炉裏 …… 41
第28図　１号建物本組遺構 …… 41
第29図　１号建物庁口・１号焼土・木杭 …… 42
第30図　１号建物遺物分布図１ …… 44
第31図　１号建物遺物分布図２ …… 45
第32図　１号建物遺物分布図３ …… 46
第33図　１号建物、建替え前の痕跡 …… 48
第34図　２号竈、３・４号囲炉裏（建替え前） …… 49
第35図　３号桶（建替え前） …… 50
第36図　４号建物 …… 51
第37図　４号建物１・２号桶 …… 52
第38図　４号建物建築材分布図 …… 52
第39図　４号建物遺物出土状態 …… 53
第40図　１号井戸（１ａ号屋敷） …… 53
第41図　１ｂ号屋敷全体図 …… 54
第42図　２号建物 …… 56
第43図　２号建物断面図１ …… 57
第44図　２号建物断面図２ …… 58
第45図　２号建物建築材分布図、木杭断面図１ …… 59
第46図　２号建物馬屋 …… 61
第47図　２号建物竈 …… 63
第48図　２号建物１号囲炉裏・木組遺構 …… 64
第49図　２号建物庁口断面図（上）・収納施設（下） …… 65
第50図　２号建物暗渠・灰溜 …… 66
第51図　２号建物遺物分布図１ …… 68
第52図　２号建物遺物分布図２ …… 69
第53図　10号建物 …… 71
第54図　10号建物柱穴断面図 …… 72
第55図　10号建物１・２号桶 …… 73
第56図　10号建物遺物出土状態 …… 73
第57図　１ｂ号屋敷石垣 …… 75
第58図　１ｂ号屋敷周辺遺構（木杭・植物痕・道路）１ …… 75
第59図　１ｂ号屋敷周辺遺構（木杭・植物痕・道路）２ …… 76
第60図　１ｃ号屋敷全体図 …… 77
第61図　３号建物 …… 78
第62図　３号建物断面図 …… 79
第63図　３号建物竈 …… 80
第64図　３号建物１号囲炉裏 …… 81
第65図　３号建物２号囲炉裏 …… 82
第66図　３号建物１～４号土坑 …… 82
第67図　３号建物遺物分布図 …… 84
第68図　14号建物 …… 85
第69図　14号建物馬屋 …… 86
第70図　14号建物竈・囲炉裏 …… 86
第71図　14号建物木組遺構 …… 87
第72図　９号建物 …… 88
第73図　９号建物１・２号桶 …… 89
第74図　井戸（１ｃ号屋敷） …… 90
第75図　柱穴列（１ｃ号屋敷） …… 90
第76図　２ａ号屋敷全体図 …… 91
第77図　５号建物 …… 93
第78図　５号建物断面図 …… 94
第79図　５号建物・１号囲炉裏 …… 96
第80図　５号建物２・３号囲炉裏、１・２号桶 …… 97
第81図　５号建物庁口 …… 98
第82図　５号建物遺物分布図１ …… 99
第83図　５号建物遺物分布図２ …… 100
第84図　５号建物建替え前の痕跡 …… 101
第85図　囲炉裏・焼土（５号建物建替え前） …… 102
第86図　13号建物 …… 103
第87図　13号建物１～３号桶（板材等出土状態） …… 104
第88図　13号建物（１～３号桶、板材等出土状態）・15号建物（４号桶） …… 105
第89図　６号建物 …… 105
第90図　２ａ号屋敷畳の石垣 …… 106
第91図　２ｂ号屋敷全体図 …… 107

第92図　7号建物 …… 109
第93図　7号建物断面図 …… 110
第94図　7号建物建築材出土状況1(土台・大引・根太) …… 111
第95図　7号建物建築材出土状況2(床板材) …… 112
第96図　7号建物竈・1号囲炉裏 …… 114
第97図　7号建物2・3号囲炉裏 …… 115
第98図　7号建物馬屋・1号桶 …… 116
第99図　7号建物2号桶・2号土坑 …… 116
第100図　7号建物遺物分布図1 …… 117
第101図　7号建物遺物分布図2 …… 118
第102図　7号建物遺物分布図3 …… 119
第103図　7号建物遺物分布図4 …… 120
第104図　11号建物 …… 122
第105図　11号建物遺物出土状態 …… 123
第106図　11号建物1～4号桶・柱穴 …… 124
第107図　12号建物 …… 125
第108図　1号井戸(2ら号屋敷) …… 126
第109図　1号土坑・通路(2ら号屋敷) …… 127
第110図　3ぁ号屋敷全体図 …… 128
第111図　16号建物 …… 130
第112図　16号建物断面図 …… 131
第113図　16号建物竈・1・2号囲炉裏 …… 132
第114図　16号建物1号桶・133～135号土坑 …… 133
第115図　16号建物遺物出土状態 …… 134
第116図　16号建物建替え前の状態 …… 136
第117図　囲炉裏・竈併設遺構、2号桶(建替え前) …… 137
第118図　18号建物 …… 138
第119図　18号建物1・2号桶 …… 139
第120図　19号建物 …… 139
第121図　3ぃ号屋敷全体図 …… 141
第122図　17号建物 …… 142
第123図　17号建物断面図 …… 143
第124図　17号建物2・3号桶 …… 144
第125図　17号建物竈・1号囲炉裏・1号桶 …… 145
第126図　3ぁ・3ぃ号屋敷周辺遺構(石垣、粘土、灰かきほ、腐植土) …… 146
第127図　4号屋敷全体図 …… 147
第128図　20号建物 …… 149
第129図　20号建物断面図 …… 150
第130図　20号建物馬屋 …… 150
第131図　20号建物1・2号囲炉裏 …… 152
第132図　20号建物1～4号土坑 …… 153
第133図　20号建物遺物分布図 …… 154
第134図　21号建物 …… 155
第135図　4号屋敷周辺遺構(左)と造成状況(右) …… 156
第136図　8号建物および建物周辺の畑 …… 157
第137図　8号建物 …… 158
第138図　7区蔵跡 …… 160
第139図　天明泥流下畑の大区画 …… 161
第140図　天明泥流下の畑(ミョウガ沢右岸) …… 162
第141図　天明泥流下の畑(ミョウガ沢左岸) …… 163
第142図　泥流で埋もれた遺構分布(建物・畑を除く)1 …… 164
第143図　畑の中の平坦面1 …… 170
第144図　畑の中の平坦面2 …… 171
第145図　泥流下の石垣1 …… 173
第146図　泥流下の石垣2 …… 174
第147図　泥流下の石垣3 …… 175
第148図　櫛目状に広がる農道1 …… 177
第149図　櫛目状に広がる農道2 …… 178
第150図　櫛目状に広がる農道3 …… 179
第151図　同・断面図1 …… 181
第152図　同・断面図2 …… 182
第153図　粗染木置場1 …… 183
第154図　粗染木置場2 …… 184
第155図　泥流で埋もれた遺構分布(建物・畑を除く)2 …… 185
第156図　上層土石流堆積物上面の遺構(全体図) …… 187
第157図　上層土石流堆積物上の畑 …… 189
第158図　下層土石流で覆われた畑(全体図) …… 191
第159図　下層土石流で覆われた畑3 …… 193
第160図　下層土石流で覆われた畑3 …… 194
第161図　下層土石流で覆われた畑5 …… 195
第162図　下層土石流下に重複した畑3・⑨ …… 196
第163図　下層土石流で覆われた畑(9区) …… 197
第164図　下層土石流で覆われた沢筋の水田(5区・6区) …… 198
第165図　同・上層図 …… 199
第166図　下層土石流で覆われた水田(9区) …… 201
第167図　中近世の遺構群(上層・北側遺構群) …… 202
第168図　同・上層図 …… 203
第169図　1号掘立柱建物 …… 205
第170図　101・102号土坑、1～4号集石 …… 206
第171図　2・6・7号集石、3・4号焼土 …… 207
第172図　暗渠と暗渠排水1 …… 210
第173図　暗渠と暗渠排水2 …… 211
第174図　4・5号石垣 …… 212
第175図　上層遺構群の分布(中近世)2 …… 213
第176図　3・4号石列、97・98号溝、5号暗渠 …… 215
第177図　中・近世の遺構群(その他) …… 217
第178図　2～6号掘立柱建物と周辺遺構 …… 218
第179図　7号掘立柱建物と周辺遺構 …… 219
第180図　柵と周辺遺構 …… 219
第181図　8号掘立柱建物と周辺遺構 …… 220
第182図　2・3号掘立柱建物 …… 221
第183図　4号掘立柱建物 …… 222
第184図　5号掘立柱建物 …… 223
第185図　6号掘立柱建物 …… 224
第186図　7・8号掘立柱建物 …… 225
第187図　1号竪穴状遺構 …… 226
第188図　1・2号柵 …… 227
第189図　1号土坑墓 …… 228
第190図　3・8・9～12号集石 …… 229
第191図　13号集石 …… 231
第192図　1・5～10号焼土 …… 232
第193図　11～17号焼土 …… 234
第194図　中・近世土坑長幅比・軸方位の分布 …… 236
第195図　中・近世土坑1 …… 237
第196図　中・近世土坑2 …… 238
第197図　中・近世土坑3 …… 239
第198図　中・近世土坑4 …… 240
第199図　中・近世土坑5 …… 241
第200図　中・近世土坑6 …… 242
第201図　中・近世土坑7 …… 243
第202図　中・近世土坑8 …… 244
第203図　中・近世土坑9 …… 245
第204図　中・近世土坑10 …… 246
第205図　中・近世土坑11 …… 247
第206図　中・近世土坑12 …… 248
第207図　中・近世土坑13 …… 249
第208図　中・近世土坑14 …… 250
第209図　中・近世土坑15 …… 251
第210図　中・近世土坑16 …… 252
第211図　中・近世土坑17 …… 253
第212図　中・近世土坑18 …… 254
第213図　中・近世土坑19 …… 255
第214図　中・近世土坑20 …… 256
第215図　中・近世土坑21 …… 257
第216図　中・近世土坑22 …… 258
第217図　1号井戸 …… 259
第218図　112・117号溝 …… 260
第219図　1・2・5号列石 …… 261
第220図　古代土坑(陥しが)の分布 …… 263
第221図　土坑長幅比 …… 266
第222図　古代土坑(陥しが)1 …… 267
第223図　古代土坑(陥しが)2 …… 268
第224図　古代土坑(陥しが)3 …… 269
第225図　古代土坑(陥しが)4 …… 270
第226図　古代土坑(陥しが)5 …… 271
第227図　古代土坑(陥しが)6 …… 272
第228図　古代土坑(陥しが)7 …… 273
第229図　古代土坑(陥しが)8 …… 274
第230図　古代土坑(陥しが)9 …… 275
第231図　古代土坑(陥しが)10 …… 276
第232図　古代土坑(陥しが)11 …… 277

第233図　古代土坑(陥し穴)12 …… 278
第234図　古代土坑(陥し穴)13 …… 279
第235図　古代土坑(陥し穴)14 …… 280
第236図　古代土坑(陥し穴)15 …… 281
第237図　縄文時代土坑の分布 …… 282
第238図　縄文時代土坑１ …… 283
第239図　縄文時代土坑２ …… 284
第240図　調査区全体図(宝篋印塔) …… 286
第241図　参道、５号トレンチ …… 288
第242図　５号トレンチ土層図 …… 289
第243図　拝殿・本殿その１ …… 292
第244図　拝殿・本殿その２ …… 293
第245図　拝殿・本殿土層図 …… 294
第246図　拝殿・本殿土層注記 …… 295
第247図　拝殿・本殿基礎伏せ図 …… 296
第248図　宝篋印塔跡 …… 299
第249図　宝篋印塔跡土層図 …… 300
第250図　道路(西端部路面)、６号トレンチ …… 301
第251図　道路(東端部路面) …… 302
第252図　３・４号トレンチ …… 303
第253図　長野原町(ダム水没地区)の神社・仏閣分布図 …… 305
第254図　長野原町(ダム水没地区)の宝篋印塔・庚申塔分布図 …… 308
第255図　周辺宝篋印塔分布図 …… 309
第256図　周辺庚申塔分布図 …… 310
第257図　建物構造材の復元的配置１ …… 367
第258図　建物構造材の復元的配置２ …… 368
第259図　種別端材構成比 …… 372
第260図　漆椀の出土状況１ …… 379
第261図　漆椀の出土状況２ …… 380
第262図　漆椀属性比(飯椀・汁椀・平椀・壷椀) …… 381
第263図　漆椀属性比(蓋) …… 382
第264図　粗朶木樹種構成比 …… 387
第265図　囲炉裏・竈の併設例(東宮・下田遺跡) …… 388
第266図　長野原一本松遺跡５区の建物と竪穴状遺構 …… 395
第267図　下原遺跡の中世屋敷配置説明図 …… 395
第268図　中近世遺構の変遷 …… 397
第269図　天明泥流の堆積状況(厚さ) …… 404
第270図　遺跡別に見た復旧坑の分布(中棚Ⅱ・下田・下原遺跡) …… 405
第271図　旧川原畑村絵図(天保期) …… 407
第272図　壬申地引絵図に描かれた街道・農道(想定) …… 407
第273図　税の推移１(川原畑村) …… 408
第274図　税の推移２(川原湯村・横壁村) …… 409

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 12
第２表　復旧坑計測値一覧表 …… 21
第３表　畑計測値一覧表 …… 167
第４表　周辺神社・仏閣一覧表 …… 306
第５表　周辺宝篋印塔・庚申塔一覧表 …… 311
第６表　建築材の利用状況 …… 371
第７表　建物別にみた杭の素材構成 …… 373
第８表　素材別にみた杭の長さ構成 …… 373
第９表　西宮遺跡出土文字資料　遺構・器種別出土量一覧表 …… 376
第10表　西宮遺跡出土文字資料一覧表 …… 377
第11表　出土状況からみた漆椀の器種構成 …… 378
第12表　分析資料観察結果 …… 385
第13表　掘立柱建物計測値(補足) …… 390
第14表　西宮遺跡屋敷面積一覧表 …… 400
第15表　東宮遺跡屋敷面積一覧表 …… 400
第16表　災害復旧費内訳表 …… 402
第17表　流域各村人口・石高等一覧表 …… 408

本文中写真目次

写真１　No.13の土石流堆積物 …… 16
写真２　吾妻川崖上の泥流(１区) …… 23
写真３　泥流中に含まれた火山礫(１区) …… 23
写真４　復旧坑と泥流中の礫(５区) …… 24
写真５　復旧坑底面の礫出土状態(６区) …… 24
写真６　泥流下の耕土(６区) …… 24
写真７　枠木・石組の検出状態 …… 40
写真８　床板の出土状態１(北から) …… 43
写真９　床板の出土状態２(南から) …… 43
写真10　床板下出土の籠入り漆椀 …… 43
写真11　建物奥に置かれた厚板材 …… 54
写真12　座敷床面の高低差と厚板材 …… 60
写真13　板材で固定された樋 …… 60
写真14　馬屋北の貼床下から出土した曲げ物 …… 60
写真15　灰層下から出土した大型礫と栗石 …… 62
写真16　居間南にある収納施設 …… 70
写真17　建物奥(建替え前)の石列 …… 83
写真18　木枠遺構を埋めた泥流？ …… 87
写真19　建物南西の石列 …… 89
写真20　14号建物裏の水路 …… 89
写真21　柱穴周辺の貼床 …… 90
写真22　列状に並んだ陶磁器の出土状況(北から) …… 98
写真23　７号建物全景(東から) …… 108
写真24　居間床下出土の下駄・片ツルハシ …… 121
写真25　泥流の堆積状況 …… 123
写真26　建築材の出土状況(建物手前の植木) …… 123
写真27　建築材の出土状態 …… 123
写真28　133～135号土坑全景 …… 133
写真29　泥流到達想定ライン …… 140
写真30　礫の廃棄とカワヤ位置１(南から) …… 141
写真31　礫の廃棄とカワヤ位置２(東から) …… 141
写真32　土間に広がる炭化物 …… 151
写真33　馬屋全景(西から) …… 151
写真34　貼床下の礫の出土状態 …… 151
写真35　完掘した１号土坑 …… 151
写真36　１号土坑(調査前：白色粘土が方形に廻る) …… 151
写真37　同・断ち割り …… 153
写真38　建物前面に延びる雨落溝(左端)と菜園 …… 155
写真39　畑の中の平坦面 …… 169
写真40　ドーム状に突き出た石積み遺構 …… 172
写真41　３号石垣全景 …… 172
写真42　側溝に敷かれた樹皮(１号道) …… 179
写真43　溝脇の境木(ウツギ？) …… 186
写真44　丁寧に埋め立てた井戸 …… 186
写真45　畑耕土下に堆積した土石流堆積物(上から２層目) …… 188
写真46　谷を埋める堆積物(36号トレンチ) …… 191
写真47　雨水で抉られた畑サク跡(５区) …… 192
写真48　９区水田脇の溝 …… 201
写真49　９区水田を覆う土石流 …… 201
写真50　上層遺構群の検出状況１(手前１号暗渠、奥：４号石垣) …… 204
写真51　上層遺構群の検出状況２(２号集石) …… 204
写真52　５号集石の断ち割り状況 …… 207
写真53　遺構の確認状況(手前左：３号暗渠、右：２号集石) …… 207
写真54　暗渠の接続部 …… 211
写真55　礫の出土状態１(９層上面) …… 230
写真56　礫の出土状態２(12層上面) …… 230
写真57　礫の出土状態３(セクションB-B') …… 230
写真58　道路跡発掘作業状況 …… 302
写真59　軒下に置かれた伐採木ほか …… 374
写真60　部分的の残る下層土石流？(矢印) …… 398
写真61　下層土石流？を切る柱穴(85号) …… 398
写真62　天明泥流下畑耕土と下層土石流(→) …… 398

第１章　調査の経過

第１節　発掘調査に至る経緯

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の鳥居峠に発し、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・白砂川・熊川等の支流を合わせ、途中、吾妻峡と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する全長76.2㎞の一級河川である。

八ッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③水道及び工業用水の新たな確保並びに発電を目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高116m、湛水面積約3.0㎢、総貯水容量1.075億㎥の規模を誇る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字八ッ場、右岸が大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峡」の入口部付近にあたる。

八ッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年５月に調査着手後、平成４年７月に、「八ッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることにより本格着工となった。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成６年３月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長は「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結し、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長が年度区分ごとに発掘調査受託契約を締結したうえで、以後の発掘調査が実施されることとなったのである。

この協定を踏まえ平成６年４月１日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を発掘調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年４月１日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の３者で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書の一部を変更する協定書（第１回変更）」が締結され、発掘調査受託契約の変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長に変更され、現在の発掘調査体制が確立することとなった。

同協定書は、平成17年４月１日の第２回変更により、発掘調査の業務完了期日が「平成18年３月31日」から「平成23年３月31日」まで延長されたのに続き、その後も必要に応じ協定変更を重ねてきた。最終的には、平成31年３月31日の第６回変更で業務終了期日が「平成34年３月31日」までとされた。平成31年（令和元年）９月、平成６年に発掘調査を開始して以来26年を掛けて現地発掘調査のすべてが終了、現在その業務完了に向け作業を急いでいるところである。

第２節　発掘調査の方法・経過

本県では、地域歴史の展開を考えるうえで欠かせないものとして、近世遺跡についても発掘対象としている。吾妻川流域に広がる近世遺跡については、集落や生産域全体が天明泥流に埋もれていることが確実視されることから、重要度に応じた調査を実施することとして、発掘調査を進めた。

１．調査の方法

西宮遺跡の報告（第634集）では、平成20・26年度発掘調査や絵図の検討を通じ、「集落の構成要素である屋敷・畑・石垣などの遺構群を精査し、これを記録保存して集落の全体像を追求した」と明確に発掘調査の目的が示されたように、これ以後の発掘調査でもその方針は受け継がれ、国道や鉄道の建設で削平を受けた地点以外、そのほとんどを調査対象として集落の全貌把握に全力を注いできた。

発掘調査では、遺跡を覆う泥流を重機掘削して取り除き、重機を追い掛けるようにジョレン作業を行い、遺構確認を進めた。泥流中から出土する遺物は、常識的には泥流により大きく流されていると見られがちだが、建物北に石垣があり、これが幸して建物毎の道具立て(家財道具)が把握できることや、条件次第だが建築部材等の出土が予想されたため、注意深く調査を進めた。

遺構測量は、従来通り、業者委託とした。遺構写真についても、従来通り業者委託して対応しているが、水没地域内の民家が解体され工事の安全が確保されてからは、事業団職員(有資格者)によるドローン撮影を積極的に取り入れ、効率的かつ機動的な調査を心がけた。

２．調査の経緯

本遺跡発掘調査は、足掛け４年(平成27年６月～平成30年８月)に及んでいるが、調査対象地内には未調査地が残されており、令和元年度(平成31年度)上半期に最後の発掘調査が行われた。最終年度に行われたこの地点の調査成果については別途報告する予定であり、ここでは平成30年８月までの発掘調査の経過を簡単に振り返っておきたい。

ダム建設では代替え国道や県道、代替地の整備、吾妻線の付け替え工事が平成26年度までにおおむね終了、平成27年度にはダム本体工事が本格的に始まり、水没地域内の発掘調査が本格化した。

水没地域内の遺跡は林・川原湯・川原畑地区にあり、その発掘調査面積は約100万㎡に達しているが、旧国道(145号線)の拡幅工事や資材運搬用ベルトコンベアーの設置工事が始まり、平成27年度以後これに対応する調査が先行した。平成27年度の発掘調査もダム本体工事に必要な旧国道の拡幅工事に対応するものであった。

平成28年度の調査は、水没地内住民の居住地移転完了を見込んでいたが、住民転居が大幅に遅れ、旧国道周辺域の調査を行い、集落中心部の発掘調査は次年度へ持ち越されることとなった。平成29年度の発掘調査は、前年にも増して広域の調査が行われることとなったが、６・７区より多量の建築部材が出土したことにより、膨大な量の建築部材の処理に追われた。調査の大幅な遅延状況に対応するため、この年はじめて冬季調査が行われた。通常、八ッ場地区では冬の平均気温が大幅に下がり、日中でも地面が凍結して融けず、冬季調査は行わず図面類等の整理作業を実施してきたが、ダム湛水試験が翌年に迫り、急遽テントを設置し、凍結防止策を講じ調査を進めた。テントは重機で移設させる必要があり、機動的な運用が難しいことを痛感させられた。

平成30年度の発掘調査は、ベルトコンベアー周辺域(８～10区)の調査を実施した。調査対象地に接し盛土があり、安全確保に万全を期し調査区を二分して調査を行い、一部(町道を含む)については次年度調査とした。

＜平成27年度＞Ａ・Ｂ区(1,660㎡)

６月10日　表土掘削開始
６月22日　天明泥流下畑全景ドローン撮影
６月23日　下層遺構確認
６月24日　調査終了

＜平成28年度＞１・２・４区(8,086㎡)

＜１区＞
８月23日　調査地内盛土搬出作業開始(～10/28日)
９月15日　１区１号トレンチ掘削(遺構確認)
10月12日　表土掘削開始
10月20日　復旧坑調査開始
10月26日　天明泥流下畑調査開始
11月22日　全景写真撮影(As-A下畑)
11月25日　下層遺構確認(陥穴確認)

＜２区＞
11月１日　調査地内盛土搬出・表土掘削作業開始
11月22日　天明泥流下畑調査開始
12月５日　全景写真撮影(As-A下畑)
12月６日　下層遺構確認(陥穴確認)
12月14日　水路東側掘削開始
12月20日　全景写真撮影(水路東As-A下畑)
12月26日　陥穴群(１・２区)全景ドローン撮影

＜４区＞
12月12日　表土掘削開始
12月26日　天明泥流下畑全景ドローン撮影
12月28日　環境整備、撤収

＜平成29年度＞４・５・６・７・８区(18,062㎡)

＜４区＞
４月10日　下層遺構確認開始、掘削作業開始
４月12日　１号石垣調査、下層土坑調査

４月24日　下層遺構調査終了

＜５区＞

４月26日　表土掘削開始(復旧坑・天明泥流下畑確認)
５月19日　全景写真撮影(天明泥流下畑確認)
５月22日　下層遺構確認作業
５月25日　２面掘削開始
６月12日　全景写真撮影(第２面)
６月13日　３面掘削開始、遺構調査開始
６月23日　全景写真撮影(第３面)、４面掘削開始
６月30日　水田(第２面)調査開始
７月５日　全景写真撮影(水田)
７月10日　５区調査終了、埋戻し作業開始

＜６区＞

６月６日　表土掘削開始、復旧坑調査開始
７月上旬　建物の土壁確認、おびただしい量の建築材が依存することが判明する。
８月上旬　復旧坑調査継続、屋敷群を構成する建物の概要が判明する。１号屋敷全景写真撮影。
８月下旬　１号建物床の調査開始。
９月下旬　屋敷跡の調査継続、このころ７区でも建築材を多量に伴う建物跡確認。
11月13日　第２面の掘削開始
11月17日屋敷跡の調査終了
12月７日　第２面調査終了
12月８日　第３面調査開始(～12/11)

＜７区＞

８月23日　表土掘削開始
９月21日　このころ２号屋敷の調査を本格的に開始
10月12日　７号建物全景写真撮影
11月１日　２号屋敷全景ドローン撮影、７号建物の床(大引・根太)全景写真撮影
11月８日　９・10号建物全景写真撮影
11月15日　８号建物全景写真撮影
12月21日　11号建物埋設桶調査
12月22日　下層遺構確認
12月23日　現地調査終了

＜８区＞

12月４日　表土掘削開始
１月９日　全景写真撮影(１面)、３号屋敷調査開始
１月11日　16～18号建物調査、復旧坑調査
１月16日　８区東の下層遺構調査開始
１月17日　８区西の表土掘削開始
２月13日　８区西の全景ドローン撮影(１面)
２月14日　３号屋敷建物調査終了、第２面の掘削開始
２月19日　第３面の掘削開始
３月16日　現地調査終了

＜平成30年度＞８・９・10区

＜８区＞

４月11日　マキ集積場の調査開始
５月15日　８区中央で第３面の掘削開始
５月17日　８区東で第２面の掘削開始
５月22日　８区中央の第３面調査終了
６月５日　８区東で近世前半期の土砂災害前の田畑を確認
６月21日　８区東で第３面調査開始
７月３日　８区東の第３面調査終了、旧ＪＲ吾妻線下の調査開始
８月８日　第１面の全景ドローン撮影
８月29日　調査終了

＜９区＞

４月５日　第１面の調査開始
４月８日　４号屋敷建物跡の調査開始
４月17日　17号建物全景写真撮影
４月19日　20・21号建物全景写真撮影(以後、５月下旬まで建物調査継続)
５月25日　９区西で第２面の調査開始
５月30日　９区東で第２面の調査開始
５月31日　９区西の第２面全景写真撮影
６月５日　近世前半期の土砂災害前の田畑確認
６月12日　９区東の第３面全景写真撮影
６月18日　９区東の調査終了
７月23日　旧ＪＲ吾妻線下の調査開始
８月30日　調査終了

＜10区＞

６月19日　表土掘削開始
６月26日　第１面全景写真撮影
６月27日　下層遺構確認調査開始
７月18日　第３面調査開始(7/31調査終了)

３．整理作業の方法と経過

整理作業は、平成30年４月１日～令和２年３月31日に実施した。本遺跡では建築部材の他、陶磁器・金属器類も多量に出土しており、これについては資料を分類したうえで、実測対象遺物を選び出した。この際、必要に応じ破損箇所に石膏を入れ、また、サビ付いた金属器類はＸ線撮影を行い、形状を確認してから実測図を作成した。陶磁器・金属器類の遺物実測は長焦点実測用写真や三次元測定機を使い、これを実測素図として等倍の手書き実測図を作成した。手書き実測図の作成後は、これを掲載サイズの２倍に縮小してトレース図を作成した。なお、建築部材等についてはあらかじめ掲載サイズを見越して業者委託しているが、報告書の掲載に際して掲載サイズを変え掲載したものや掲載面数を変更して掲載したものがある。

遺構写真は発掘調査中に撮影記録したもので、この中から報告に必要な写真を選び、画像修正し報告書掲載用写真のデータとした。これら遺構遺物のデジタルデータ及び本文文字原稿を編集、報告書印刷データとした。

平成30年度においては調査対象地が広域に及び、検出されている遺構も多様で、遺構検出面も多面になるため、遺跡の全貌を把握してから遺構図編集その他の作業を進めることとした。調査中撮影した写真データは膨大で年度単位に保管されていたため、これを遺構別に整理して作業中、容易に検索確認できるようにした。これと並行して遺構編集作業を進めることとしたが、遺構が複雑で理解できないところが多く、重なるよう出土した木器類については上下関係の確認も難しく、作業は難航した。また、出土遺物も多量で、陶磁器・金属器・木器類と多岐に及び、それらについて資料化を進める必要があり、対応に追われた。

平成31年度においては前年度作業を受けて、これを集約し報告書完成に向けて作業を進めた。具体的には、前年度に手掛けていた中近世遺構および古代以前の遺構を先行して取り纏め、次いで天明期集落の記載を手掛けることとして、作業を進めた。年度後半にはこれまでに得られた遺構図・遺物図などのデータを集約し、最終的に報告書作成データとした。

第３節　調査区の概要

１．グリッド設定と調査区

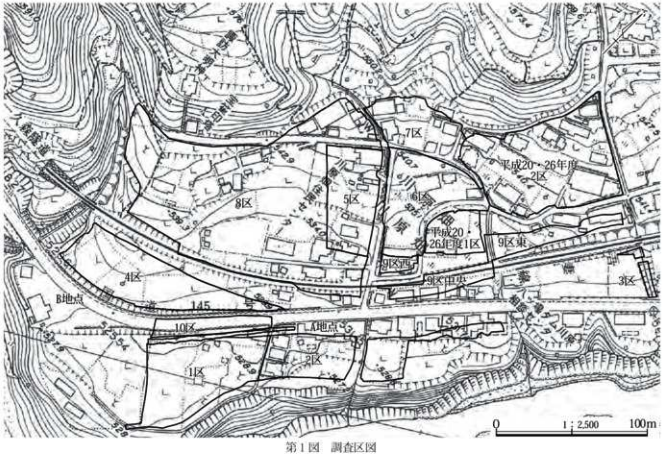
八ッ場ダム建設に伴う発掘調査では、遺跡名称の略号やグリッド設定などについて「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき、以下の通り対応している。

調査における遺跡番号は、長野原町の大字５地区（１：川原畑、２：川原湯、３：横壁、４：林、５：長野原）、東吾妻町の大字３地区（６：三島、７：大柏木、８：松谷）に番号を付し八ッ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に番号を付して遺跡番号とした。西宮遺跡は「YD1-9」である。

基準座標は、国家座標に基づく平面直角座標Ⅸ系(日本測地系)を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点(X＝58,000.000、Y=-97,000.000)とした１km方眼を起点に60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼んだ。本遺跡は、この№35地区にある。この１km方眼は南東側から100m方眼の１～100に区画され、この中グリッドを「区」とした。区の100m方眼は、さらに４m方眼に区切られ、この小グリッドを「グリッド」とした。なお、小グリッドについては東から西へＡ～Ｙ、南から北へ１～25の算用数字を振り、南東隅を基点としてグリッド呼称した。

本遺跡調査区には、以上のグリッド呼称とは別に道・水路を境に調査区名称(第１図)が付されている。調査区名称については担当者間の共通認識が得られ、当事業団では多用されているが、調査順に区名称が付されることが多く、最終的に煩雑になってしまうことが指摘されていた。当事業団実施事業では、こうした指摘を踏まえて、事業対象地の端から順に区名称を付して煩雑にならないように対応することが確認されていたが、本遺跡の発掘調査ではこれに対応できていなかったようで、調査区名称も調査順に付されていた。これについて再整理も検討してみたが、図面・遺物・写真等のリネームには膨大な時間と労力を要するため、ここでは発掘調査時の区名称に従い、整理・報告することとした。

今回報告する地点は、平成27年度がＡ・Ｂ（計1,660㎡）地点と呼ばれたが、平成28年度以後は算用数字により呼称されており、吾妻川に近い旧国道南の調査区を１・２



第１図　調査区図

区、旧国道北の調査区を４区、ＪＲ吾妻線北の調査区を５～８区、ＪＲ吾妻線および旧国道下の調査区を９・10区として調査が行われた。

２．調査前の状況

平成26年度、ダム建設に伴う代替地の整備・国道等の付け替え工事など付帯工事のすべてが完了、同年10月１日にはＪＲ吾妻線の運行が新線に移行するなど、これ以後ダムの本体工事が本格化した。

平成27・28年度の時点では、対象地内には未だ民家が残されており、電気・水道・ケーブル等のライフラインはすべてそのままに残されていたため、民家の移転が完了していたＪＲ吾妻線以南で調査が行われた。平成27年度の下期には工事用ベルトコンベアーが設置され、ダム本体工事が本格化した。水没地区内は許可を得た車両の通行のみ許されることとなり、重ダンプ等の大型車両の通行が増えた。

平成29年度には民家移転も終わり、調査対象地全域が更地化した。域内の電柱や共聴ケーブルも撤去され、梅林も伐採され、遺跡全域を眺めることができるようになった。また、山林伐採が行われるようになると、段丘崖を刻む谷や扇状地地形が露になり、改めて複雑な地形を実感することができるようになった。段丘崖を刻む小河川出口の扇状地地形や、段丘内の低地部がそれである。段丘内低地は近世水田の有無に係わるものであり、当地で水田が発見されるとすれば、こうした低地しかないと思われた。

本遺跡は戸倉沢－境川間にあり、吾妻川流域ではやや広い平坦面を有している。右岸側に比べて日当たり良好で環境的に優れているが、絵図や古い地形図（都市計画図を含む）も重要で、被災後の復興状況を知る材料の一つとなった。また、石垣も重要であった。当地は主屋の背後に斜面を背負い、山側に石垣が築かれることが多い。平成26年度の調査では石垣の積み方を記録し、その在り方を検討した。平成27年度以後の調査では特に意識されていないが、建物裏の石垣は丁寧に積まれ、畑等では雑に積まれること、建物裏の石垣は積み方に優劣があり、財力の相違を反映している可能性があり、石垣についても注目しておく必要があるだろう。

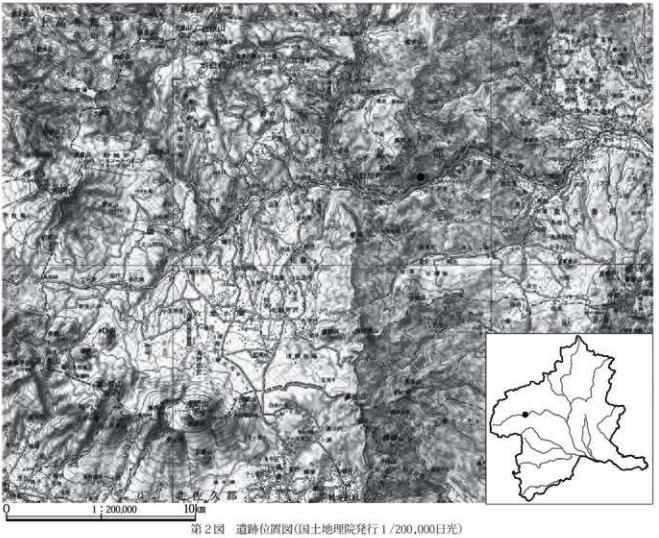
第２章　遺跡の概要

第１節　地理的環境

本遺跡は群馬県の北西部にあり、吾妻郡長野原町大字川原畑に所在する。町の人口は5,500人ほどで、面積は約133㎢である。山林(約80％弱)が大部分を占め、耕地は1,249ha、そのほとんどを畑(96.8％)が占める。町は南側が長野県軽井沢町に、東側が東吾妻町・高崎市倉渕町に、北側が草津町・中之条町に、西側が嬬恋村にそれぞれ接している。

町の東側には、古い火山列(菅峰・丸山・王城山・高間山)が続き、これが行政界となっている。町内で最も標高の高い地点は菅峰南方に聳える浅間隠山の1,757mで、本遺跡とは1,000m近い標高差がある。町の地形は北部と南部では大きく異なり、南部の地形は浅間山北麓に展開する高原地形を特徴とするのに対し、北部地形は吾妻川流域に広がる山稜および段丘地形を特徴とする。南部の高原地形は火山堆積物によるもので、河川浸食は弱く、上流域では枯れ沢(水無川)となっている。これに対し、吾妻川流域に広がる段丘地形は狭小である。

吾妻川は全長76.2㎞の河川である。その源流は県境の鳥居峠付近にあり、嬬恋村田代付近まで東流したあと、これより嬬恋村芦生田の間は略北東方向に流路を変えている。長野原町に入ると、流路(芦生田－林間)は再び東に戻り、林より以東は５㎞ごとに流路変更を繰り返す。そして、渋川市東町で利根川に合流する。田代－芦生田



第２図　遺跡位置図(国土地理院発行１/200,000日光)

間の流路変更は、浅間火山の影響で河道が草津白根山側に押され北東方向に流れたものであるが、林ー松谷間の流路は古い火山列に刻まれた断層をトレースしているという。吾妻線終点大前駅周辺より下流の吾妻川流域には段丘地形が発達しており、(最上位)・上位・中位・下位段丘に区分されている。現集落は上位・中位段丘面に点在しているが、これが近世集落を引き継いだものであることは疑う余地がない。町内には「草津道」・「真田道」と呼ばれる古道や頼朝伝説に係わる古道があり、いずれも現代(国道144～146・292号線)に引き継がれている。以上が長野原町の地勢の概要だが、もう少し詳しく遺跡地周辺の地形的特徴について記しておこう。

本遺跡が所在する川原畑地区は、段丘上に拓けた集落である。遺跡地南の吾妻川は略北東方向へ流れている。

第3図　遺跡および遺跡周辺の地形(概況図1/5,000)

吾妻川が断層由来の破砕帯を流れていることは前述したとおりであり、吾妻川流域を典型的な「地すべり」地帯として不安視する意見もある。吾妻川は断層特有の脆い破砕帯を流れ、そして、その上に浅間起源の泥流堆積物が厚く覆い、それがために「地すべり」が起こりやすいのであろう。実際、左岸側の川原畑・林地区や右岸側の上湯原地区には弧状の地すべり痕が多数みられる。ここでは、これにより生じた緩斜面に現集落があるということだけを指摘しておこう。

本遺跡は旧川原畑村の下村に当たり、中位段丘面上に立地する。中位段丘においては上位段丘から断続的な礫供給があり、西宮－東宮遺跡の間を流れる境川両岸には砂礫層が厚く崖錐堆積し、小規模な扇状地が形成されている。また、山麓斜面には小河川が流れ、これが段丘面を浸食して吾妻川に流れ込んでいる。通常、段丘面は平坦であるというのが常識だが、想像以上に起伏に富んでいるというのが実態である。実際に天明泥流を取り除き江戸時代後半期(天明三年)の旧表土を見ると、起伏ある地形を実感することができる。天明泥流の下層には江戸期の土砂災害を示す砂礫や、古代の山崩れ等もあり、刻々と変わる旧地形の様子が見えてくる。

西宮遺跡は戸倉沢－境川間の全域が調査対象となり、境川－松葉沢間に広がる東宮遺跡とともに、旧川原畑村(下村)の全貌を明らかにすることができた。また、出土した豊富な建築材や木製品類からは、厚く堆積した天明泥流が透水層となり、これが幸して建築材等が腐食を免れたことも明らかになった。これほど良好に建築材が残されたのは地下水によることは明らかであるが、埋没前の屋敷まわりには溝があり、敷地内の湿気対策は果せていたと見たい。ミョウガ沢や境川は小規模扇状地を形成しているが、いずれも扇状地中央部に流路が固定され、明らかに河川管理されており、抜かりなく湿気対策も行われたものと思われる。

第２節　歴史的環境

長野原町域には、縄文時代から江戸時代まで多数の遺跡が残されている。町の遺跡詳細分布調査(長野原町教育委員会1990)では212遺跡があるとされ、時代別の集計では縄文期遺跡84(39.6%)、平安期遺跡96(45.3%)が突出して多数を占めている。八ッ場ダム関連の発掘調査では縄文時代の中後期大規模集落や近世の天明泥流下遺跡が注目されてきたが、実態は平安期遺跡が約半数を占め、しかもそれが９世紀中ごろから10世紀前半に限られるという地域的特徴が指摘できるということである。

ここでは、四半世紀に及んだ八ッ場ダム関連の発掘を総括した『発掘された八ッ場の軌跡』(2018)を踏まえつつ、周辺遺跡の概要について記していこう。

縄文時代　事業団調査遺跡は水没地域およびその代替地に限られているが、長野原・横壁・林・川原畑・川原湯５地区に大規模な縄文集落が確認されている。横壁中村遺跡(14)・長野原一本松遺跡(20)・林中原Ⅱ遺跡(30)・東宮遺跡(３)・石川原遺跡(11)が各地区の代表的遺跡ということになる。いずれも中･後期の大規模集落であり、先の「八ッ場の軌跡」では中期後半(加曾利Ｅ３式期)に集落のピークがあるという。主要遺跡一覧に竪穴建物の数が示されているが、遺跡別に竪穴建物の増減をみてみると、中期前半の勝坂２式期より集落が形成され、徐々に規模を拡大し、中期後半の加曾利Ｅ３式期にピークを迎え、その直後から集落規模が縮小、後期前葉(称名寺式期)にかけて大きく竪穴建物の数を減じている。その後、後期前半(堀之内式期)にはもち直しているが、集落は小規模となり細々と継続したように見える。縄文時代中期後半の時期、大字単位(長野原以下の各地区に相当)に大規模集落が展開したのは、それだけの人口を養える資源に恵まれたということであり、逆に人口減少期は資源の減少で説明されることが圧倒的である。近年では、古環境研究が著しく進み、世界規模で気候変動の実態が明らかにされている。具体的にはグリーンランド氷床コアや水月湖堆積物コアに含まれる酸素同位体や花粉を分析することにより気候変動の様子が詳細に判明、縄文時代気候変動が集落動向に係わることが想定されるようになり、これを踏まえ、気候悪化と食糧難に対峙する縄文人の対応として呪術性を深める配石施設や、モニュメント(祭祀施設)の協働造営、盛土遺構を踏まえた社会像や集団像が矢継ぎ早に提示されている。

県内の晩期遺跡は圧倒的に少なく、桐生市千網谷戸遺跡・藤岡市沖Ⅱ遺跡・榛東村茅野遺跡など周知の遺跡は限られており、実態は意外に少ない。近々では東吾妻町唐堀遺跡の調査で膨大な量の遺物が出土しているが、川

原湯地区にも同時期の遺跡があり、注目されている。石川原遺跡がそれであるが、竪穴建物と水場遺構が確認されており、その動向が注目されよう。これまで述べた縄文期の大規模遺跡は吾妻川両岸に点在している。地形的には山麓端部や吾妻川の段丘崖を背にした緩斜面に立地しているが、長野原一本松遺跡や横壁中村遺跡、林中原Ⅱ遺跡が山麓端部に広がる緩斜面に、石川原遺跡や東宮遺跡が段丘崖を背にした段丘面に立地する。長野原町誌では、長野原一本松遺跡・林中原Ⅱ遺跡が最上位段丘面にあり、横壁中村・東宮・石川原遺跡が中位段丘面にあるというが、前者は山麓端部に広がる緩傾斜地に立地する遺跡と理解している。それでは、縄文時代中期以前の遺跡立地はどのように捉えることができるであろうか。

草創期遺跡として、横壁勝沼遺跡(13、隆起線文土器)や、楡木Ⅱ遺跡(23、表裏縄文土器)があるほか、前掲一覧表に三平Ⅰ・Ⅱ遺跡(５・６)、石畑Ⅰ岩陰(７)を掲載しておいた。なかでも石畑Ⅰ岩陰は著名で、ＪＲ吾妻線落石防止工事の際に多量の土器片類が出土したことで知られている。いわゆる岩陰遺跡であるが、町内には30ヶ所を超える岩陰遺跡があるとされている。近年吾妻川の支流(白砂川)で縄文早期の人骨が出土した居家以遺跡も、そうした岩陰遺跡のひとつである。

早期関連の遺跡では楡木Ⅱ遺跡が群を抜いて充実している。同遺跡には撚糸文期の竪穴建物33棟があり、遺構の希少性以外にも押型文主体の竪穴建物と撚糸文主体の竪穴建物からなることや屋内炉が確認されたことでも注目を浴びた。このほか、早期遺跡は立馬Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡(37～39、林地区)、三平Ⅰ・Ⅱ遺跡があり、竪穴建物が確認されている。早期遺跡は、林地区の遺跡が充実している。長野原・川原畑地区では遺跡分布が散漫になり、川原湯地区には早期遺跡・遺物は確認されていない。

これに対し、前期遺跡は長野原地区や林地区に広く分布するようになる。竪穴建物が確認されている遺跡は意外に少ない。通常前期後半期は集落規模が拡大する時期であるにもかかわらず、数棟という遺跡が多く、明らかに平野部の様相とは相違する。こうした中、上原Ⅰ遺跡(34、林地区)には前期初頭の竪穴建物15棟があり、突出している。

吾妻川流域における縄文時代遺跡分布は山麓端部に広がる扇状地地形と比較的平坦な段丘面に分けて理解するのが分かりやすい。山麓端部には草創期以来の遺跡が形成されることになるが、段丘面には中期以降遺跡が形成されるようになる。川原畑・川原湯地区では離水後も山側から絶えず礫供給があり、厚く土砂に覆われて、当初これほどの集落があるとはだれも予想していなかったが、東宮遺跡では近世江戸期の遺構調査終了後、数m下から土器片が発見されたのを契機に厚く覆われた土砂の下から集落が発見され、予期せぬ発見となった。

弥生時代　長野原・横壁地区に各４遺跡、林地区に10遺跡、川原畑地区に２遺跡、川原湯地区に２遺跡がある。遺跡数は中期前半期とされるものが22遺跡、中期後半期とされるものが10遺跡、後期とされるものが７遺跡を数える。

中期前半期の22遺跡には、林中原Ⅱ遺跡に竪穴建物１棟があるほか、同じ林地区の立馬Ⅰ遺跡や長野原地区の尾坂遺跡(18)で再葬墓が確認されている。このほか、遺構は確認されていないが、包含層遺跡とされるもの19遺跡がある。大半で縄文晩期の土器片(氷式期)が出土しており、ある意味で遺跡の継続性を認めることができる。

中期後半期には10遺跡と遺跡数が半減、明確な遺構が確認できなくなる。それでも横壁中村や林中原Ⅱ、立馬Ⅰ遺跡では遺物量が多く、地区の中核的遺跡としての体面は保持されているように見える。

群馬県内の弥生集落では、中期後半期に本格的な稲作農耕が営まれるようになるが、当地には農耕集落として評価に耐える遺跡はないように思う。

古墳時代　長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡・上原Ⅳ遺跡(36)・下原遺跡(27)・石畑Ⅰ岩陰・下湯原遺跡(８)が知られるだけである。下原遺跡(林地区)に５世紀中頃の竪穴建物１棟が確認されているが、これ以外竪穴建物は検出されておらず、全体として地域の開発状態は貧弱である。

平安時代　長野原町では、９世紀後半になり突如として遺跡が出現する。町の分布調査では約100ヶ所が平安期の遺跡であるということである。この理由について解決できていないが当地の土器が県内産であることや、灰釉陶器の量比が遺跡により異なることを述べた見解(神谷2007)があるほか、『延喜式』にある上野国献上品「零羊角６具」「鹿皮60張」を確保するために当地に進出したのであり、陥し穴によりそれが達成されたという主張がある

（石田2018）。これは、９世紀になり突如遺跡が出現するのは必要に迫られたとする考え方で現象が冗く説明できており、賛同者が多い。

陥し穴は、長らく縄文時代早期から前期初頭の遺構として理解されてきた。これに対して民俗例として「しし穴」が紹介されたこともあったが、民俗例を取り上げることはギャップがありすぎて反応は鈍かったように記憶している。こうしたなか、長野県下では中世末から近世初頭の陥し穴があり、その動向が注目されよう。

近年、八ッ場地区で発見される陥し穴は縄文期というより古代であろうとする見解が圧倒的である。その発端は、陥し穴の壁面に金属器の工具痕が発見されたからである（石田2004）。そこでは陥し穴の構築が古代にくだるとされたが、縄文期の陥し穴すべてが否定されたわけではないことに留意しておきたい。三平Ⅰ・Ⅱ遺跡では、陥し穴が二次堆積ロームで埋もれているとされ、それが古代の自然災害によることが指摘されている。

中世　吾妻川流域の中世遺跡は、断片的だがその実態が次第に明らかになりつつある。分布調査では中世遺跡は３ヶ所があるだけであるが、林中原Ⅰ遺跡や下湯原遺跡で中世の屋敷跡が、上ノ平Ⅰ遺跡で中世墓壙１が、楡木Ⅰ遺跡で土坑４が確認されており、ダム関連の発掘調査で町内の中世遺跡は増加傾向にある。

町内の中世遺跡は、これだけ調査を進めてなお遺跡数が少ない状況に変わりないが、中世山城を評価することで吾妻川流域の中世遺跡の実態に迫ろうとする視点が示されている。山城中心の戦略的解釈になりがちであるが、ある意味妥当な考え方である。吾妻川流域では、中・近世と大枠で捉えるしかない遺構の発掘例が多い。流域の中世遺跡の動向は明らかではないが、近世遺構の存在が知られる以上、その前身が中世にさかのぼるのは確実である。現状で細分は難しいようであるが、社会体制を踏まえたところで建物を捉え、集落を評価することが必要であろう。

本遺跡には中世的要素を残す火葬土坑・竪穴状遺構が確認されているが、いずれも近世まで残る可能性があり、決定的根拠にはなり得ないということである。「河原畠」の名が渡文書にもあるように、旧川原畑村の前身は中世までさかのぼる。どの程度さかのぼるかデータはないが、少なくとも16世紀末に儀甘儀を収めていたことがわかり、これに見あうだけの耕地が開発されていたということであろう。

本書では、川原畑の宝篋印塔を併せて報告しているが、宝篋印塔について広く吾妻地区の分布について言及しているので、遺跡分布と併せ一読していただきたい。

近世　長野原町には県境の鳥居峠を経て信州上田に至る「真田道」や浅間山麓から草津温泉に向かう「草津道」が良く知られているが、渋峠や万座温泉など県境の峠を越え信州に抜ける街道もある。町内の街道は真田道を軸に草津道が交わり、ルート上に村々が点在した。江戸時代の町内には10ヶ村があり、石高100石未満の小村が半数を占めた。村の石高は羽根尾村258石、長野原村252石が最大で、吾妻川流域には左岸側５、右岸側２ヶ村があり、耕作地には恵まれていない。発掘調査で明らかにされた天明期集落では残地がないほど畑が広がり、屋敷には庭木を植えることもなく、農地は極めて集約的に利用されていた。村はずれには寺院があり、そして、お堂があるという構造も共通している。こうした景観は、崖線上の山麓斜面に広がる集落も変わらないはずである。川原畑村は道陸神峠ルート（吾妻の街道1983）上にあり、街道には川原畑を加え、林・長野原・坪井・羽根尾の５ヶ村がある。また、対岸には横壁・川原湯を経て大戸へ抜ける街道があり、川原湯には温泉があり、それなりに賑わいを見せていたようである。

発掘調査では、こうした山麓斜面部の調査も実施しているが、泥流に覆われていない分だけ実態を捉えるのが難しい状況にある。三平Ⅰ・Ⅱ遺跡、上ノ平Ⅰ遺跡（４）が旧川原畑村（上村）に、上原Ⅰ～Ⅳ遺跡（34～36）、東原Ⅰ～Ⅲ遺跡（31～33）、林宮原遺跡（26）、林中原Ⅰ・Ⅱ遺跡（29・30）が旧林村に相当する遺跡であり、それぞれ泥流被害を免れている。上ノ平Ⅰや東原Ⅲ、林中原遺跡では礎石建物があり、集落が広がることが明らかである。このほか、比較的規模の大きな掘立柱建物や桶理設土坑なども確認されており、段丘崖に近い緩斜面に屋敷群や耕作地が広がり、秣場となる山々が周辺部を取り囲む、そんな景観を復元することができる。

第４図　周辺遺跡(国土地理院発行１/25,000長野原)

第１表　周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代						報告書
		縄文	弥生	古墳	平安	中世	近世	
1	西宮	土坑14 埋設土器2			土坑69、集石1	<中近世> 小竪1・掘8・集石6・土178(うち墓坑1)	屋敷3 畑20・石垣9・道9・井戸2	634 670
2	宝篋印塔						本殿1、拝殿1、経石	
3	東宮	竪建62(中・後期) 土坑615 列石(後期)	包(中期後半)				屋敷10(うち酒蔵1) 畑21、溝5、道7、井戸8	514 536 628
5	三平Ⅰ	包(前期、中期)						303
5・6	三平 Ⅰ・Ⅱ	竪建2(諸a・諸磯b) 土坑10 包(表裏・稲・沈・花下～諸a・b、十・五)			・焼土10、土坑69、 ※焼土=9c後半 ※焼土は掘立に重複 ※陥し穴69		・1号掘(1×3間)、 ・2号掘(1×2間)、 ・3号掘(不明) ・土坑2、集石3、溝1	401
4	上ノ平Ⅰ	竪建10(中中、後初) 土坑12 ・包(関・黒・諸、阿・勝)	包(中期前半)		・竪建15(9c末～10c初) ・土坑134 ※集落より古い陥し穴 ※竪建、灰釉31点	・礎石1 ・墓坑17(中世1、近世16) 中世→横臥屈葬、 近世→仰臥伸展葬1、仰臥屈葬2、 横臥屈葬2、座葬9、不明2 ・土坑10、井戸1		
		竪建13(中中8、後初4) 土坑19 包(前中・後、中初・中中・後、後初・前)	包(前・中期)		・竪建12/? ・焼土(竈焼土と誤認、根の攪乱等) ・土坑50(貯蔵穴、陥穴)		野口茂四郎宅ほか 屋敷跡(礎石)調査	623
		竪建5(前初1、中前1、後初2、後前1) 土坑1(後前) ・包(燃、花下・諸b、勝・焼・E1、B2、晩浮	包(弥生後期)		・竪5(9c1、9c後1、10c後2) ・土坑72(陥し穴)	・掘立2(2×3間)、(2×3間) ・礎建1(1/20で再確認) ・土坑93、柱穴194、石垣2、柵3、溝5 ※石垣は茂四郎宅東 ※溝は区画溝		637
7	石畑	包(草創期～晩期)	弥(中期～後期)					
8	下湯原	A1区:小竪(前後)、土坑7(中中)、土坑2(後前)、土坑13(不明) A2区:土坑2(中中～後)、土坑3(後後)、焼土4 包(前後～後前)			A1区:竪建4(9c後半～10c中)、土坑1 A2区:竪居1(10c中頃)、鍛冶1	小竪穴状遺構1、掘立7、柵列15、土坑75、pit615、道1、溝1		641
9	西ノ上	掘立2、土坑82、pit23					畑33、復236、道12、溝1、石垣3、炭窯2、焼8	349 651
10	川原湯 中原Ⅲ	竪建1(E3)、			土坑(陥し穴) 43	<中近世>土坑(陥し穴)22、 <近世>土坑(墓)1、		639
11	石川原	後・晩期 竪居、掘、埋甕、配石、集石、水場、道、土坑、柱穴、			竪建41	中近世1 掘20、畑7、復7、柵2、溝12、道1、列2、集15、焼9、小竪1、土坑320(墓坑13)、柱320 中近世2 畑3、溝10、土坑5	泥流直下 建物53、寺1、掘1、畑43、道7、溝7 近世 畑、掘1、柵3、小鍛1、溝6、石垣1、集3、焼3、土166、柱115	640
12	川原湯 勝沼	埋設土器3、土坑38、焼土6			竪建3	溝1、	畑11、道5、溝3	356
						土坑9、畑1	畑20、溝5、道1、集石7	658
13	横壁勝沼							
14	横壁	<前期>　埋設1、土坑、 <中期> (勝坂)竪9、土坑6、(E1)竪14、土22、埋設2、(E2)竪17、土4、(E3)竪97、土74、埋設28、(E4)竪10、土23、埋設4、 <後期> (称1)竪3、(称2)竪7、(堀2)竪5、(B1)竪2、(高東)竪2、(安2)竪1			竪穴10、土坑2	掘立14、礎石4、竪穴状1、鍛冶1、石垣17、石列3、集石3、石組11、焼土34、溝3、墓37、畑		355ほか
15	山根Ⅲ (1)	竪建4(E3)、土坑31 包(茅上、関・黒、十、E1～3、堀2、B2・3)	包(中期)			土坑3(近世以降39)、溝1		429
16	西久保Ⅰ	包(E3・E4)						655
17	西久保Ⅴ	掘立2、柱穴列1 包(後期)			竪建1、土坑145、焼土			655
18	尾坂	竪穴建物建物5(中後～後初) 土坑301、埋甕7、列石2	再葬墓1、土坑28		竪穴建物11、土坑56、溝2、焼土2	掘立柱建物3、土坑3、焼土6、溝2	屋敷跡1、掘立柱建物1、畑42、道19、溝20、石垣7、石列1、暗渠1、土坑4	546 618

遺跡番号	遺跡名	時代						報告書
		縄文	弥生	古墳	平安	中世	近世	
19	久々戸						掘立2、A下畑、道 ※1掘(1×1間) 上間・P¹ 2掘(2×3間)	349
		敲石1、土坑4、 包(押、茅上、有、五、勝3、三、E4、B1、B3、高東	土坑2 包(中期)		土坑14、		A下畑、石垣、道	627
20	長野原一本松	竪穴207、土坑734、埋甕19、集石7、配石4 ※中期後半期の環状集落			竪穴10、土坑117、溝4	掘立6、竪穴状6、焼土11、溝4、土坑6		287ほか
21	幸神遺跡	竪2(E1・E3)、土2、 包(稲原、十、勝、阿・焼)			土坑15		畑1	429
22	檜木Ⅰ	土坑1			竪4(9c後半)、釜屋1、焼9、 ※土坑(陥し穴) 2・4・9・13・22・25・34・42・51土坑	集石 ※中世土坑(31・33・36・52土坑) 52号は墓? ※近世土坑(3・5～8、11・14～17・23・29・30・53土坑)方形タイプ		549
23	檜木Ⅱ	早期(竪26、小竪1、石囲10) 前前(竪11、小竪2) 中前(竪3、土坑1、集14、配1、埋1)			竪34、小竪3、 ※「三家」「口家」「三」の墨書 ※古井型、月夜野型羽釜の伴出	掘立20、石垣1、焼土、集石1、石列1、土坑187(うち陥し穴42、墓1) ※16号焼土は昭和の釜焚き跡 ※ローム質土のレンズ状堆積は12基に見られる		432 458
24	二反沢	包(後・晩少々)				石垣造成 ※14・15c、極型洋等あり付近に鍛冶跡?	水田(天明以後)	379
25	中棚Ⅰ	包(鏃、押、関、有、諸b、諸c、阿1b、勝3、E2、掘1			竪建5	掘立4、櫓1、溝1、集石3、土坑53、焼土4		648
26	林宮原					・掘立15、 <西部>1掘(5×2間半)、2掘(4×1間) ※1掘立は北に庇あり <東部>7掘(4×1間)、11掘(4×2間) ※7掘は東に庇?、11掘は北に庇あり ・土15(墓2、井戸1を含むか可能性)		604
27	下原	包(加E)	集1、 包(条痕文)	竪建1	竪建3、土坑32	畑、溝8、井戸1、墓坑、土坑25(墓1)、集石、焼土7		389
		竪建2、土坑12、埋設3			竪建1	掘立6、礎石1、土坑19、墓3、畑1、焼土7	畑10、水田、道13、溝4	647
							建物1、畑1	303
28	下田	包(有、諸c、末、五、阿1、勝Ⅰ・Ⅲ、E2・E5、称、高)	包(中期)		竪4、掘1、小竪1、土坑15、焼土1 ※1号竪10c後半、2号竪9c後半～10c、3・4号竪10c前半	掘6、土坑26、焼土10、柱穴5 ※1掘(2×3間) ※2掘(4×7間) ※土4は近世 ※掘1は近世 ※焼土遺構に古銭伴出 ※10,31,35,36,42土坑が墓	<泥流直下> 5建(3×6間) 6建(1×2間) 7建(2×5間) 8建(4×5間) 道2、畑、平坦面 <泥流上> 復旧坑	629
29	林中原Ⅰ	竪5、小竪1、土坑108 ・前初1、中2、後葉1 ・中期 阿1b竪1、E4小竪1 ※土坑は貯蔵穴タイプのものが主体。 ※包含層(盛～堀)	包(終末期、 土器片1)			<林城> 堀3、橋2、土橋1、石垣、池 ・池(15c代の古瀬戸)、第5区画(13c後半～15c前半の中国陶磁器) <中近世屋敷、第3区画> ・3区画の建物→7棟は江戸中期より新 ・建物桁行尺、総長い ・石垣は19c代の構築 <中近世屋敷、第6区画> ・掘立37棟、主軸方位で5分類5時期 ※1区画(礎1、土37、旭2、道1、溝2) ※2区画(礎1、竪2、焼6、土37(土取り穴20、極土坑6、他の土11は性格不明)) ※3区画(掘7、垣1、焼1、土21、溝6) ※4区画(土4、溝4、焼1) ※5区画(石垣1) ※6区画(掘10、配1、土9、溝2、焼1) ※7区画(掘11、礎2、小竪1、土11、溝2)	586

遺跡番号	遺跡名	時代						報告書
		縄文	弥生	古墳	平安	中世	近世	
30	林中原Ⅱ（国道分）	竪54、上313、小竪1、理2、炉1、焼93、集19、列3、配1				掘3、礎3、石垣2、道1、井戸2、溝2、集石2、焼上15、土坑120 ※1掘（1×4間）、北庇つき →南東隅焦屋土坑、補理設土坑あり? ※2掘（1×4間）、北庇つき ※3掘（2×3間）庇なし		617 650
	林中原Ⅱ（町道分）	竪65、掘立4、土坑107、小竪3、埋9、焼上13、集石2、列石2	中期前、竪穴2 小竪穴2 理設2 土坑3			土坑6		643 650
31	東原Ⅰ	・包(諸b)			土坑48(20基/48基が陥し穴)、	・掘立2 1掘(2×2間) 2掘(1×2間) ・柵1	包	502
32	東原Ⅱ	・土坑4(うち陥し穴1?) ・包(諸b、E4、堀)			土坑(陥し穴7) ※8/21基が陥し穴	・掘立1 1掘(詳細不明) ・焼?2	土13	502
33	東原Ⅲ	土1 包(早後、花下、諸b、黒、E1、勝)			土坑32(陥し穴3含) 掘4 1掘(2×4間) 2・3掘(不詳) 4掘(不詳)		礎石1(不詳) 土坑28 焼土4	502
34	上原Ⅰ	竪建19(前初15、中後4) 土坑10、柱2、焼13 ※町調査分を含む ・包(花下・二・関・諸a～c、阿・E3・E4、称)	包(中期)	竪建 土坑	竪建14(9c後8、9c後～10c前3、10c前3) 土坑77、 pit14、 焼上4		土坑4、 焼上5	604
35	上原Ⅱ	・包(後)	包(中期)	土坑1	竪14、小竪1、鍛1、掘1、土50、焼6、溝2		土墓1、土坑116、柱穴154	604
	上原Ⅱ		中期初頭理設 土坑1		竪切1、小竪4、土12、焼2、溝1、柱4			627
	上原Ⅲ	・土坑覆土(E3)	理設土坑1		竪切1、小竪穴4、土11、柱4、焼2、溝1			627
36	上原Ⅳ	竪1(掘2)、3(掘2～加E)、小竪1、土7、焼3、列1・集(掘2)、 包(堀・加B、関・黒、諸b・c、前末、阿1b～2、高井東、晩期)	包(中期前半)	6c前半 土器片	竪建9c前半、 10c土器片のみ	(中世遺物混入、両辺に寺?) ※信州型内耳鍋15c～17c前半	溝5	429
31	立馬Ⅰ	竪建3(漆1、田下1、晩1)、 小竪1、土19、集4(沈1、漆1、関1) 包(表裏、夏、稲台、押、田下、上、沈、野、桑、二、関、黒、諸abc、十、五、加E、称、堀、加B、安、高、水、大、千)	中期後半竪建2 土坑墓3		竪4、掘2、小竪1、土坑76(うち陥し穴62)、溝4、焼上3 ※竪建は10c後半			388
38	立馬Ⅱ	竪穴(中期初頭～中期前半9、中期後半1、中期1)、土坑58、焼上1、集石1 包含層(五領ヶ台、阿玉台が主体、勝坂、加E、後期、晩期) ※陥し穴には貼り壁(3基)、貼り床(44上)あり			土坑(陥し穴) 18、通常土坑9			375
39	立馬Ⅲ	竪(早4、E31)、小竪2、集2、上48 包(黒、押、田上、子、沈、前初、関、黒、諸b・c、五、E3・E4、焼、勝、称、堀)			陥し穴34、通常土坑8	土12、溝14		457

1、縄文時代の時期名称および土器型式名は文字数が限られ、以下の通り略した。
前前:前期前葉、前中:前期中葉、前後:前期後葉
中初:中期初頭、中中:中期中葉、
後初:後期初頭、
表裏:表裏縄文、夏:夏島、押:押型文、稲:稲荷台、稲原:稲荷原、田下:田戸下層、田上:田戸上層、茅上:茅山上層、鵜:鵜ヶ島台、子:子母口、沈:沈線文、
花下:花積下層、二:二ッ木、関:関山、有:有尾、黒:黒浜、諸a:諸磯a、諸b:諸磯b、十:十三菩提、
五:五領ヶ台、阿:阿玉台、勝:勝坂、焼:焼町、E1:加曽利E1、E2:加曽利E2、E3:加曽利E3、E4:加曽利E4、
称:称名寺、堀:堀之内、B1:加曽利B1、B2:加曽利B2、B3:加曽利B3、高東:高井東、安:安行、大:大洞、千:千網
2、遺構名称については文字数が限られ、場合により下記の通り略した。
竪・竪建:竪穴建物、掘・掘立:掘立柱建物、土:土坑、理設:理設土器、小竪:小竪穴建物、井:井戸、集:集石、配:配石、焼:焼土

第３節　基本土層

吾妻川の流路が断層に規定されていることは、第１節で触れたとおりであるが、もう少し詳しく見ると、吾妻川は山間地を蛇行して流れ、至る所で狭小な段丘面を形成しているのが分かる。旧川原畑村の集落が載る段丘は背後の崖線まで200m弱しかなく、家々は街道ぞいに建ち並んでいた。

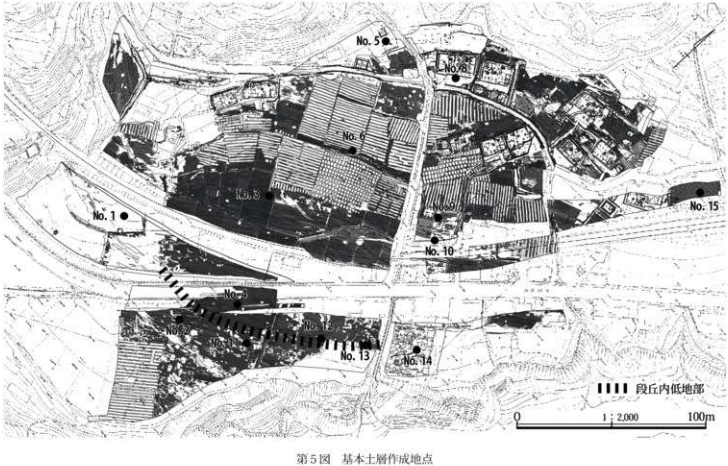
旧川原畑村は中位段丘上にあり、絶えず崖線上から礫供給される環境下に置かれてきた。また、集落内には小河川が流れ、これにより小規模扇状地が形成されたように、離水後の地形は平坦地形から緩斜面地形へ移行していることが明らかである。こうして屋敷を構える際は例外なく斜面が切り盛り段造成されることになったが、主屋の背後に石垣が築かれるのは背後が傾斜地であるからであり、傾斜地の崩落を防ぎ、効率的に狭い土地を利用しようとしたからである。

河岸段丘と言えば平坦であると思われがちであるが、規模の小さい段丘面では山側から繰り返し土砂供給を受け、地点毎に土層堆積が異なるのが大きな特徴になっている。本遺跡でも土層の地点間対比ができないでいるが、概ね山側から供給される土砂の分布範囲は旧国道までであることから、旧国道を境に南北で分け土層堆積を説明することとしたい。それでもなお、山側の土層堆積は複雑であるため地点別に土層堆積を示し、土層対比できるものはその都度説明することとした。また参考データとして地点毎の遺構確認面を分かる範囲で図示したので参照していただきたい。

＜旧国道南の基本土層＞（第６・７図）

２地点(No.１・No.２)の基本土層を図示した。１層が表土、２層が天明泥流、３層がAs-Aで共通する。No.１では５層以下が縄文時代に堆積した崩落ローム、No.２では９層以下が水成堆積したロームになる。No.２はNo.１より下位にある分だけ、土層の堆積速度が速く、厚く黒色土が堆積、黒色土中にAs-Kkがブロック状に堆積しているように見える(巻頭カラー39を参照)。

加えて、旧国道南を特徴づけるものとして窪地に流れ



第５図　基本土層作成地点

写真１　No.11の土石流堆積物

込んだ土石流堆積物(ローム質、写真１)がある。同様な堆積物はミョウガ沢の両岸(No.11～14)にもあり、沢筋を伝い土石流堆積物が堆積したのか戸倉沢ルートで旧河道の窪地に堆積したのか、いずれかだろう。ミョウガ沢は深く崖線を刻んで吾妻川に流れ込んでおり、ミョウガ沢の出口が塞がれて、堆積物が溢れ出る状態は想像できないが、沢筋から離れるのに従い、層厚を減じるのは明らかであり（第７図）、土石流堆積物が沢を流れ下る過程で堆積物が溢れたということだろう。この土石流堆積物は戸倉沢ルートで堆積してもいいが、上流側(戸倉沢)に土石流堆積物で埋もれた土坑が見当たらないことが弱点になる。

さて、これに似た現象は県内各地にあり、平野部では前橋市飯土井二本松遺跡、蟬山遺跡、青柳宿上遺跡ほかに縄文時代の洪水堆積物(再堆積ローム)がある。新里町不二山の再堆積ロームは、弘仁９(818)年の弘仁地震の地すべりによるものである。近年、八ッ場ダム関連の発掘調査でも縄文時代中期を前後する頃の崩落層や、江戸時代の土砂災害が注目されている。このほか、三平遺跡や立馬遺跡などでは、平安期の土砂災害が取り沙汰されている。吾妻地区を走る旧国道は日雨量120㎜を超えた時点で交通規制が行われたように、吾妻川流域一帯は豪雨災害には敏感であり、これまで繰り返し災害に襲われてきたが、個々の災害発生時期についてはなかなか決定的証拠が得られていないのが現状である。

本遺跡では下層の崩落ロームが中期中葉の土坑群に切られ、上層の土石流堆積物が陥し穴を埋めていた。これにより、下層崩落ロームの堆積終了が縄文時代中期中葉以前であることが確定、上層土石流堆積物の堆積時期についてはそれで埋まるものと、埋まらないものがあり、陥し穴を前後する頃ということになる。八ッ場地区の陥し穴については平安期に盛行したとされているが、具体的には粕川テフラ(As-Kk)の認定がカギを握る。現状でデータは限られているが、土石流堆積したロームは吾妻川左岸に広域に広がり、地域災害の様相を呈することが判明したというだけである。

＜旧国道以北の基本土層＞(第６・７図)

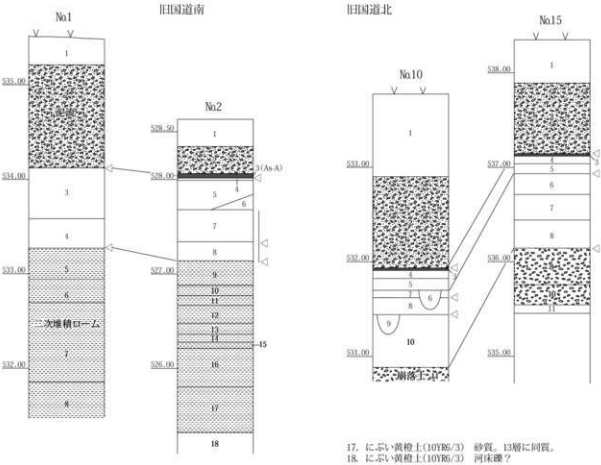
旧国道北の土層堆積は、本来的に段丘に直交する方向(No.８－No.14)で土層堆積を検討すべきであるが、良好な土層堆積がなく、ここでは地形の高い境川右岸と低地に分けて説明してみよう。第６図に示したNo.10・No.15の土層がそれである。

No.15は境川右岸にあり、厚く扇状地礫層が堆積していた。３ｍを掘り下げてなお厚く礫層が堆積、それ以上の掘削は断念した。No.10は扇状地の傾斜が弱まる平坦地に移行した地点の土層である。国道南の地点同様に、ここでも１～３層(１層：表土、２層：天明泥流、３層：As-A)は共通する。No.15ではAs-Aから70㎝下位が崩落土(８層)となり、その間の崩落層は確認されていないが、近接して４号屋敷跡があり、そこでは畑耕土の下に崩落層(山砂、土砂災害)が堆積、これに覆われた畑がある。No.10付近では山砂に覆われた畑２面がある。この山砂は沢筋に堆積するもので、これより上流側の沢筋には水田と畑が確認されている。No.14の８層に相当する崩落土はNo.10の11層が相当する。

＜No.３～６・８・９の基本土層＞(第７図)

以下には、その他の地点の基本土層を簡単に紹介しておこう。No.３・４は丘陵に近い地点の、No.５・６は沢筋の土層堆積である。No.５の５層が礫混じり崩落土で、No.６では間層を挟んで２層が堆積した。ここでも山砂は確認されておらず、沢筋の狭い範囲のみ堆積したことが分かる。

沢から離れた地点の土層堆積は、どうであろうか。No.３・４の土層堆積がそれであるが、いずれも畑耕土下に崩落土が堆積しているが、No.３では間層を挟んで上下２層に、No.４では１層のみ確認されただけである。崩落土は礫混じり黄色土であり、沢筋の山砂とは明らかに異なる。ただ、No.３には畑耕作土下に土石流を認めてもいいが、No.４の土石流とは別ものであり、どちら



基本土層No.１（４区13号トレンチ基本土層A-A'）
1．表土
2．天明泥流
3．黒褐色土(10YR3/2)　小礫を含む。
4．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を含む。
5．暗褐色土(10YR3/3)　角礫・ローム塊を含む。
6．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　角礫を多量に含む。崩落層。
7．にぶい黄褐色土(10YR6/4)　崩落層。粘土化が著しい。
8．にぶい黄褐色土(10YR6/2)　角礫を多量に含む。崩落層。

基本土層No.２（１区基本土層A-A'）
1．表土
2．褐灰色土(7.5YR4/1)　天明泥流
3．As-A
4a．褐灰色土(10YR4/1)　白色・青灰色小礫を含む。泥流下畑の耕土。
4b．黒褐色土(10YR3/1)　白色・青灰色小礫を含む。4a層より暗い。
5．黒褐色土(10YR3/2)　黄橙色粒を少量混入。
6．As-Bk
7．暗褐色土(10YR3/3)　黄橙色粒混入。上面に鉄分凝集層形成。
8．暗褐色土(10YR3/3)　黄橙色粒混入。７層よりやや暗い。
9．灰黄褐色土(10YR4/2)　10層と同質。土壌化して漸移的に変化。
10．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　白色粒を少量混入。
11．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　風化白色軽石(As-YPk起源)を多混。
12．褐色土(7.5YR4/3)　粘性に富み土壌化が著しい。
13．にぶい黄橙土(10YR6/3)　砂質で、風化土壌化の程度は弱い。
14．褐色土(7.5YR4/3)　12層と同質で、土壌化が著しい。
15．明黄褐色土(10YR5/6)　11層と同質で、風化白色粒(As-YPk起源)を多量に含む。
16．明黄褐色土(10YR7/6)　粘質土と灰白色粘質土が互層堆積する。
17．にぶい黄橙土(10YR6/3)　砂質。13層に同質。
18．にぶい黄橙土(10YR6/3)　河床礫？

基本土層No.10（９区基本土層A-A'）
1．表土
2．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流(小～大礫を含む)
3．As-A
4．灰黄褐色土(10YR5/2)　泥流下畑の耕土。炭化物少量を含む。
5．灰黄褐色土(10YR4/2)　泥流下畑の耕土(角礫５～１cmを含む)。
6．黒褐色土(10YR3/2)　角礫(５～30cm)及び粗砂粒を含む。炭化物を含む。
7．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　角礫(５～10cm)少量混入。炭化物・粗粒砂を含む。
8．黒褐色土(10YR3/2)　角礫(５～30cm以上)多量混入。崩落層。上面が第２面の遺構確認面？
9．暗褐色土(10YR3/3)　小礫(１～20cm)多量混入。崩落層。
10．暗褐色土(10YR3/4)　角礫を含む崩落層。上面が第３面の遺構確認面

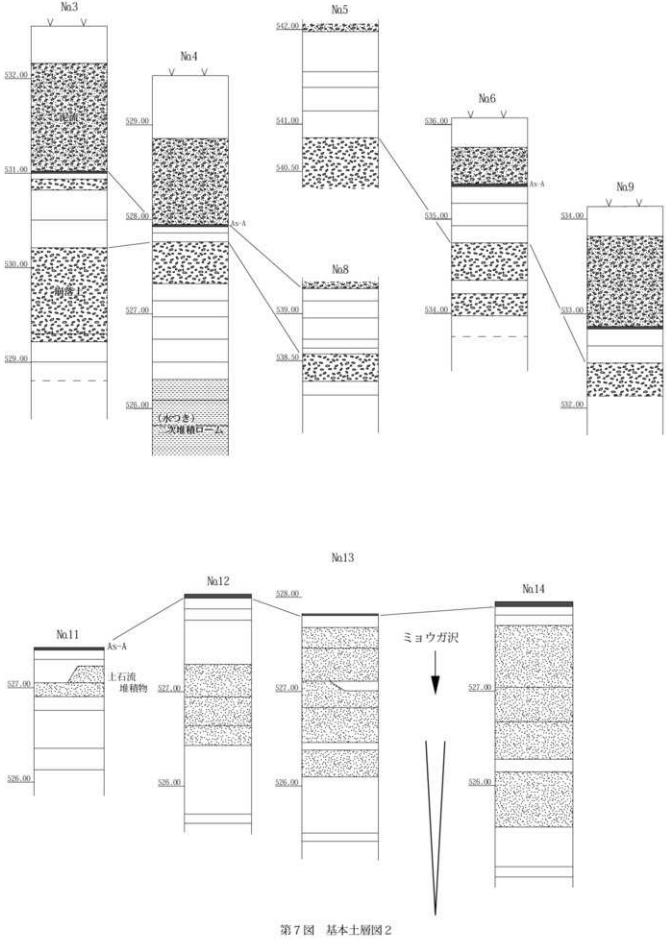
基本土層No.15（62・63号トレンチA-A'）
1．表土層
2．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
3．As-A
4．灰黄褐色土(10YR5/2)　泥流直下畑の耕土
5．灰褐色土(10YR4/2)　４層と同質、炭化物を多量に含む。
6．灰褐色土(10YR4/2)　５層よりやや暗い色調を呈す。
7．灰褐色土(10YR4/2)　４層に同質で、小礫を含む。
8．黒褐色土(10YR3/2)　大型礫を含んでいるが、比較的安定した土壌。
9．暗褐色土(10YR3/3)　礫(０～20cm)多量に含む。崩落層。
10．黄褐色土(10YR6/5)　礫(０～20cm)多量に含む。９層と同質だが明るい色調を呈す。崩落層。
11．暗褐色土(10YR3/4)　角礫(20cm以上)多量に含む。上面が第３面の遺構確認面。

第６図　基本土層図１

かというと、下層土石流に対応する可能性が高い。

No.５・８は、天明泥流の到達点に近い地点の基本土層で、いずれも畑耕土下に角礫主体の崩落土がある。

No.６・９は旧国道に近い平坦地の基本土層であり、崖線から離れている分、厚く崩落土が堆積している。


No.3
No.4
No.5
No.6
No.8
No.9
No.11
No.12
No.13
No.14
532.00
531.00
530.00
529.00
528.00
527.00
526.00
542.00
541.00
540.50
539.00
538.50
536.00
535.00
534.00
533.00
As-A
（水つき）
次堆積ローム
土石流
堆積物
ミョウガ沢

第７図　基本土層図２

第3章　西宮遺跡の調査

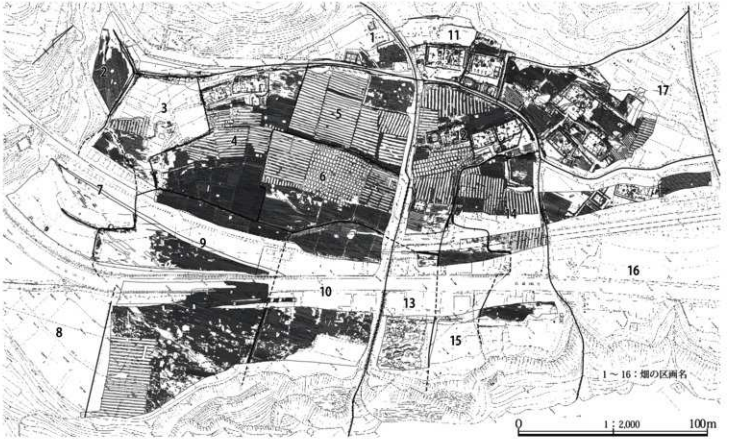
第1節　復旧坑

1．概　要

八ッ場ダム関連の発掘調査では、天明泥流下の遺構面より下層が調査対象とされているが、被災後の復旧坑があり、泥流直下遺構調査の際、泥流関連遺構としてその土砂を取り除いている。結果的に復旧坑の分布状況が把握されることになり、古文書に残る畑の砂入り面積（被災面積）と、復旧された畑の面積を比較することが可能となっている。被災後の復旧には幕府資金も投入されているが、かたちばかりの賃仕事となり、再度復旧作業が耕作者の手で行われたという。発掘で確認されるのは、この二番開発までということになる。

復旧坑は泥流に埋もれた旧耕土を掘り返し、泥流の上に被せ耕土とするものであるが、指摘するところによれば、「上掘りばかりで御金を頂戴したが後に良く掘る所存」と記された古文書が残されている。この記述が正しければ、復旧坑は二番開発ということになる。はたして本遺跡の復旧坑が二番開発に当たるものか分からないが、広い意味で被災直後に行なわれた復旧作業のひとつとして間違いない。

復旧坑の存在と調査意義が認知され、県内外とも類例が増えている。形態的には短冊状を呈するものと、小区画水田を思わせる土坑状のものがある。耕作痕とされるなかに、耕作土と火山灰を反転したものがあるが、現状は復旧坑の形態認識に止まり、それがどのように埋められたのか、意外に詳細は知られていない。復旧坑については耕作者自身が復旧したことが明らかであるが、こうした見解は当初復旧坑の意義が示されたころと何ら変わらず、改めてここで



第8図　天明泥流上の遺構全体図（復旧坑）

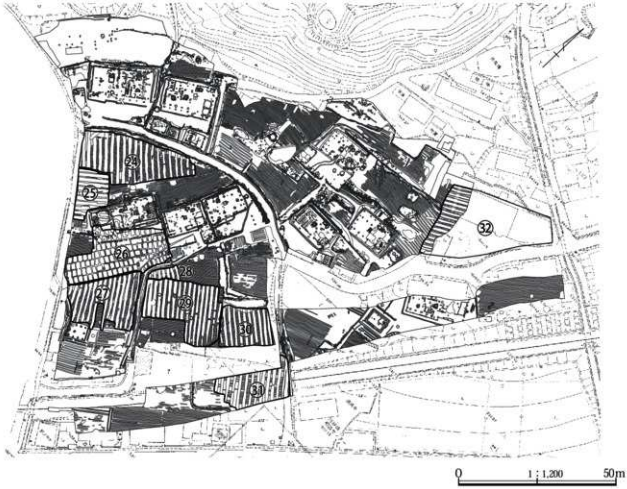
付け加えることはない。

本遺跡で確認されている復旧坑は、単位的に括れる畑36ヶ所、面積にして8,993.2㎡である。復旧坑の大半は屋敷まわりにあり、屋敷から離れている復旧坑は戸倉沢に近い村はずれにあるだけである。泥流直下の畑面積は29,003.0㎡であるから、31％が復旧されたのにすぎない。

２．復旧坑の広がり

天明泥流被災後の田畑復旧は各所で行われているが、具体的な様相は水没地区発掘データが充実している。尾坂・下田・石川原・川原湯、そして、川原畑地区の発掘データがそれで、尾坂が旧長野原村に、下田が旧林村に、石川原・川原湯中原・川原湯勝沼・下湯原が旧川原湯村に、西宮・東宮が旧川原畑村に相当、これら遺跡の復旧

第９図　天明泥流上面の復旧坑（ミョウガ沢右岸）



第10図　天明泥流上面の復旧坑(ミョウガ沢左岸)

第２表　復旧坑計測値一覧表

区画	復旧坑群番号	数量(基)	長軸方向	長さ(m)	幅(m)	面積(㎡)	摘　要
3	①	12	南北	7.03	0.98	122.0	短冊・畝
4	②	13	東西	8.62	1.10	170.3	短冊・斜め
4	③	26	東西	2.76	1.15	101.1	短冊＋土坑
4	④	6	東西	13.99	1.07	117.7	短冊・横
4	⑤	13	東西	13.75	0.98	249.9	短冊・横
4	⑥	12	東西	8.74	1.05	145.5	短冊＋土坑
4	⑦	6	東西	1.17	1.57	14.7	土坑状
5	⑧	23	東西	13.73	1.21	445.9	短冊・横
5	⑬	8	東西	19.46	1.08	206.9	短冊・横
5	⑭	19	東西	18.93	1.07	493.2	短冊・横
5	⑮	16	東西	10.60	1.26	268.9	短冊・横
5	⑰	10	南北	10.58	1.20	186.1	短冊・畝
5	⑱	10	東西	11.30	1.17	198.5	短冊・横
6	⑨	6	東西	11.13	1.09	101.9	短冊・横
6	⑩	7	東西	11.61	1.04	110.9	短冊・横
6	⑪	13	東西	15.07	1.05	306.9	短冊・横
6	⑫	15	東西	2.75	1.03	58.7	土坑状
6	⑯	262	東西	1.38	1.63	802.3	土坑状
6	⑲	14	東西	5.60	0.81	170.4	短冊・横
6	⑳	5	東西	4.87	0.87	34.4	短冊・横
6	㉑	6	東西	5.41	0.87	50.5	短冊・横
6	㉒	6	東西	5.47	0.88	47.1	短冊・横
9	㉔	26	東西	(21.54)	1.23	1002.6	短冊・横
12	㉔	21	東西	11.16	1.01	410.5	短冊・畝
12	㉖	119	南北	1.28	1.89	381.9	土坑状
12	㉗	17	南北	12.37	0.96	291.1	短冊・畝
14	㉘	7	南北	3.24	1.01	30.0	短冊・畝
14	㉙	18	東西	13.66	1.02	382.7	短冊・畝
14	㉚	11	東西	12.74	1.04	215.6	短冊・畝
17	㉛	16	東西	(5.38)	1.16	673.5	短冊・横

※１．計測値は個別復旧坑の計測値を平均したものである。
※２．調査区外に延びる復旧坑については平均値算出から外している。

第11図　３号屋敷周辺の復旧坑（８区）

坑が当時おこなわれた復旧作業の具体像であり、復旧坑を分析することで、被災後の生活再建の様相が明らかになるものと思われる。まずは、復旧坑の広がりについてみておこう。

第８図には、西宮遺跡の復旧坑を図示した。西宮遺跡は境川以西の川原畑村に相当しているが、ここでは河川・街道・農道・溝・石垣を指標としてこれに基づき復旧坑を捉えた。西宮遺跡には大きな区画16ヶ所がある。内訳は、屋敷が取り込まれている区画４ヶ所、屋敷が含まれていない区画12ヶ所である。

屋敷が含まれている区画からみていくと、区画４・12・16・17があり、いずれも屋敷周辺に復旧坑があり、屋敷まわりの田畑復旧を優先させていることが分かる。区画11・16については復旧坑が見られないが、２ａ・２ｂ号屋敷北には泥流が及んでおらず復旧坑がないのは当然で、４号屋敷の南は調査対象地から外れており、復旧坑がないとはいいきれない。所有単位とも取れる大区画が各々の屋敷に帰属するとは限らないだろうが、その実態を把握するためにも発掘データと絵図を付き合わせる作業が必要となるだろう。

屋敷が含まれない大区画は12ヶ所（ミョウガ沢西：区画１～３・５～10、ミョウガ沢東：13～15）がある。未調査部分も多く、語り得ない点も多々あるが、復旧坑が見られるのは区画３・９・14の３ヶ所になる。

区画３・14は１・４号屋敷に近く評価は保留せざるを得ないが、区画９は村境に近い。屋敷まわりの復旧作業が終わり、屋敷から離れた畑の復旧作業に手を付けることができるようになったということであろう。

３．形状と規模

復旧坑の形状は短冊状を呈するもの（１類）と、土坑状を呈するもの（２類）がある。復旧法を選択できるものと仮定して、１類の復旧坑で構成されるものを復旧畑Ａ、２類の復旧坑で構成されるものを復旧畑Ｂ、１・２類の復旧坑が混在するものを復旧畑Ｃ類と呼ぼう。

ａ．形状

まず、復旧畑Ａからみていくと、区画３では復旧畑１、区画４では復旧畑２・４・５、区画５では復旧畑８・13～18、区画６では復旧畑９～12・19～22、区画９では復旧畑34、区画12では復旧畑24・25・27、区画14では復

旧畑29・31・32、区画15では復旧畑30、区画17では復旧畑33がこれに相当する。復旧畑は計28ヶ所に及ぶ。

復旧畑Ｂは土坑状を呈した復旧坑群からなる畑で、６ヶ所が確認されているだけであるが、小区画水田に似た土坑状の復旧坑が群在するタイプと、１列のみ列状に並ぶタイプ(復旧坑12)がある。前者は沢の両岸に各１が あり、いずれも傾斜が弱まる地形変換点に所在する点が特徴と言えるだろう。

復旧畑Ｃは、短冊状か土坑状の復旧坑が混在しているものである。区画４の復旧畑３が該当する。

ｂ．規模

短冊状を呈し等高線に並行するもの(短冊・横)は、長さ５ｍ前後(復旧坑群19～22)・長さ10m前後(復旧坑群９・10・15・18)、長さ13m前後(復旧坑群４・５・８)、長さ15m前後(復旧坑群11)、長さ20m前後(復旧坑群13・14・33・34)の５群がある。幅はサイズに係わらず１ｍ前後に収まる。

短冊状を呈し等高線に直交するもの(短冊・縦)は、長さ３ｍ前後(復旧坑群28)、長さ７ｍ前後(復旧坑群１)、長さ11m前後(復旧坑群24・27)、長さ13m前後(復旧坑群29・31)の４群がある。幅はサイズに係わらず１ｍ前後となる。

土坑状を呈するものは、沢の両岸に各１ヶ所があることは既に指摘したとおりである。土坑サイズは長軸1.63m、短軸1.38mを測る。この種の復旧坑は傾斜変換にあり、特異な存在である。

ｃ．その他

復旧坑群３は短冊状と台形状を呈する復旧坑２種が入り混じることから、耕土として反転する土が一律に掘り返せていないことを示唆している。また、この種の復旧坑はミョウガ沢の右岸側より左岸側に圧倒的に少ない。加えて、斜交する復旧坑群２は石垣に対し斜交しているということであり、隣接する復旧坑群を見れば、どちらかといえば等高線を意識した配列といえそうである。

４．作業状況

冒頭引用した「上掘りばかりで・・・」とあるのは、10㎞以上下流の原町の記事である。続いて記事には、後で「良く掘る所存」とあるから、深く掘り直して泥流と旧耕土を反転させ、畑を復旧したものと思われる。その際、耕作者は耕土中の礫を嫌い深く埋めたはずだが、具体的に確認できていないのが現状である。天明泥流に係る記載は、久々戸遺跡ほか(事業団第319集)の報告を除いてほとんどないが、調査担当者は吾妻川に近づくほど畑が破壊されていることを経験的に認識している。被災後、どのようにこれを復旧したのか具体像が示せないでいるが、ここでは先の報告を参照して復旧作業の様子を考えてみたい。

まず、泥流の堆積状況について、残された写真から考えてみよう。写真２・３は吾妻川に近い地点(１・２区、国道南)の泥流堆積で、写真２は泥流下層に大型礫(河床礫)が、写真３は泥流なかほどに大型火山岩が堆積することを示している。河床礫の石材は確認できていないが、空隙の少ない緻密質石材が主体を占めるように見える。この地点の写真には中・上層の礫が見られないが、同じ国道南の別地点(写真３)では錆色した火山岩や大型の礫岩が泥流中にあり、本流筋における泥流堆積の典型例とすることができる。

写真４は山側に近い調査地点(５区)の泥流堆積で、復

写真２　吾妻川崖上の泥流(１区)

写真３　泥流中に含まれた火山礫(１区)

旧坑と泥流の関係を示している。土層断面を見る限り、大型礫は確認できないが、復旧坑底面には大型礫が出土していることが分かる。写真５は沢を挟んだ対岸（６区）の復旧坑から出土した礫の出土状態である。

ここでも、復旧坑底面からは大型の河床礫が出土しており、大型礫は深く埋める傾向が見て取れる。

写真２・３が吾妻川崖上、写真４・５がそれより150～170m山側の天明泥流である。いずれも河床礫や火山岩を巻き込み堆積する点では変わらないが、絶対量が大きく異なり、これが復旧作業に大きく影響したものと思われる。

写真６は、復旧坑により反転された耕土を断面で見たものである。黄色味が強く、決して地味あふれる耕土にみえないが、厚さ10㎝の耕土を得ようとして、厚い泥流を掘り下げ耕土を反転したわけである。調査中は、上畑とは思えないほど畑には礫があり、サクを切る度に顔を出す礫を根気よく取り出す百姓の苦労が偲ばれた。

河川際は泥流が厚く、礫の含有量も多く、当然作業は手間が掛かる。これに対し山側は泥流も１m前後と薄く、

写真４　復旧坑と泥流中の礫（５区）

写真５　復旧坑底面の礫出土状態（６区）

写真６　泥流下の耕土（６区）

比較的容易に作業を進めることができたはずである。屋敷まわりには泥流が堆積しているが、その層厚は吾妻川崖上より薄く、泥流中の礫も少ないため、まず復旧作業は屋敷まわりから行われたのであろう。復旧坑分布の粗密は泥流の難易度と屋敷まわりから復旧させようとした心理的要素を反映しているように思う。

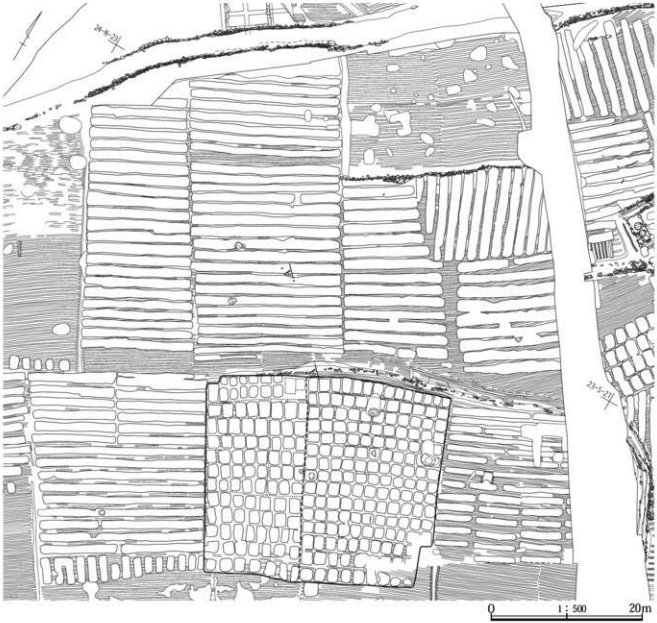
５．形態差の理由

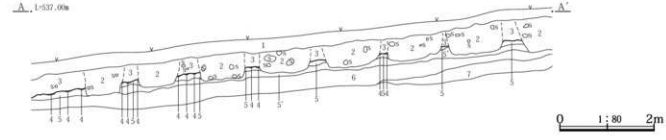
短冊状を呈する復旧坑は等高線の並行するものが主体だが直交するものもあり、ミョウガ沢を挟んで分布域が相違した。なぜこうしたことが起きるのか考えてみたが、相違点を挙げるとすれば、沢の右岸側が比較的乾燥しているのに対し、左岸側は水位が高い点であろうか。左岸側建物では多量の建築材や木器が出土したように、その保存には水位が影響したのは明らかである。このため、復旧坑を南北方向に掘り、標高の低い吾妻川側から山側に向け復旧作業を進めたものとしておきたい。

一方、土坑状を呈す復旧坑は綺麗に列状に並んでいることが明らかである。一つ一つ土坑を掘り下げたなら、これほど規則的であるはずがなく、土坑状を呈す復旧坑も上面は短冊状を呈したのではないかと思われる。この種の復旧坑については、このことを前提に理解する必要があるように思う。結論から言えば、短冊状の復旧坑を掘り進め、耕土を掘り上げる際は土坑状に掘り、これを作業単位として掘り下げたということだろう。

ａ．復旧畑16（区画６）

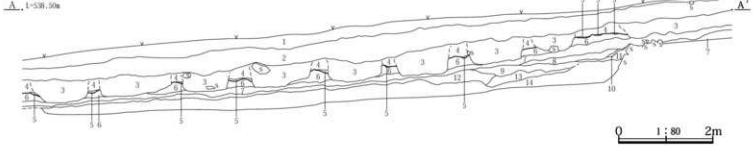
復旧畑16は面積802.3㎡ほどで、復旧畑としては２番目に広い。横13列があり、総計262の土坑からなる。１列あたり22の土坑が並んでおり、土坑サイズは平均で長





５区中央部・北部西壁（復旧溝群・畑）A-A'
１．暗褐色土（10YR3/3）　現表土
２．復旧溝埋没土（天明泥流）
３．褐灰色土（10YR4/1）　天明泥流。砂質、小～大礫多量混入。
４．As-A
５．灰褐色土（7.5YR4/2）　天明畑耕土。上面にAs-Aを含む。
５'．灰黄褐色土（10YR4/2）　第５層よりやや暗い。角礫少量を含む。
６．灰黄褐色土（10YR5/2）　第５層に類似。色味は明るい。
７．灰黄褐色土（10YR4/2）　第５層に類似。にぶい黄橙色小礫を含む。

第12図　ミョウガ沢右岸の復旧坑（５・８区）



30号トレンチ(西壁)A-A'

1．暗褐色土(10YR3/3)　現表土。
2．黒褐色土(10YR3/2)　盛土。
3．復旧溝埋没土(天明泥流)
4．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。小～大礫多量混入。
5．As-A
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　天明畑耕土。にぶい黄褐色土小塊を含む。
7．褐灰色土(7.5YR4/1)　褐色土小塊少量。小礫を含む。
8．褐灰色土(7.5YR5/1)　黄褐色土を多量混入。
9．明褐色土(7.5YR5/6)　砂質。酸化鉄分多量。
10．暗灰黄色土(2.5Y5/6)　砂質。酸化鉄分多量付着。
11．褐灰色土(10YR4/1)　約3.0～5.0cm礫を含む。
12．褐灰色土(10YR4/1)　黄褐色土を含む、酸化鉄分多量、約1.0cm礫少量混入。
13．褐灰色土(10YR4/1)　にぶい黄褐色小礫を多量混入。酸化鉄分の沈着が顕著。
14．暗灰色土(N3)　砂質。約3.0～5.0cm礫を含む。

第13図　１号屋敷周辺の復旧坑（６区）

軸1.63m・短軸1.38mを測る。復旧坑を仔細に見ると、縦列８番目を境に列が乱れ、また、これを境に東西で土坑サイズが異なることが分かる。

さらに、西側復旧坑群をみると、列１の最西端復旧坑は南北に、最東端の復旧坑は東西に長く、その間の復旧坑群は６基が１単位になる。列３～８の復旧坑群は５番目の復旧坑を境に列が乱れるように見える。列９以下は復旧坑の間隔が空き気味だが、７基が１単位となる。

これに対して東側復旧坑群は１列目こそ14の復旧坑で構成されているが、２列目以降は復旧坑11となり、西側復旧坑群で見られたような細分、ブロック化するような現象は基本的に見られなくなる。全体として復旧坑(土坑状)は縦方向より横方向のとおりがいい。

b．復旧畑26(区画12)

復旧畑26は面積381.9㎡ほどであるが、左岸側の復旧畑としては平均的サイズの畑になる。横８列があり、総計119の復旧坑からなる。１列あたり17の復旧坑が並ぶ。復旧坑の平均的サイズは長軸1.86m・短軸1.27mを測る。復旧坑群は細分ができるような状況ではないが、東側の土坑７基の配置が大中に乱れるところがあり、ここでも復旧坑(土坑状)は横のとおりがいい。作業単位として、短冊状を呈する復旧坑が復元可能かもしれない。

６．復旧率

区画４には３ａ・３ｂ号屋敷があり、区画内に石垣２列がある。区画４の泥流下畑面積2,755.2㎡に対して799.2㎡(29.0%)が復旧されている。復旧畑は②～⑦で、いずれも３ａ・３ｂ号屋敷に近い畑である。

区画12には１ａ～１ｃ号屋敷があり、屋敷の南北に畑が広がっている。街道と沢で区画され、区画自体明瞭である。区画12の泥流下畑2,030.0㎡に対し、復旧坑は1,261㎡(62.1%)に達し、屋敷まわりの畑の大半が復旧されている。復旧坑は４群があり、このうち２群が等高線に直交した短冊状の復旧坑、１群が等高線に並行する短冊状を呈する復旧坑、残り１群が土坑状を呈する復旧坑であった。

報告の済んでいる西宮遺跡(第643集、平成20・26年度調査分)では泥流下の畑は1,210㎡ほどになるが、復旧畑は境川西の畑１ヶ所(トレンチ調査で範囲確認、推定673.5㎡・55.6%)があるだけである。被災前の屋敷３棟が、被災後どれだけ再建されたのか明らかでないが、被災前の屋敷１棟は同じ位置に建物を再建、移転前まで現地に家屋が存在した。残る屋敷２棟については分からないが、明治期絵図に屋敷３が記載されており、山側に家屋を移動させたのではないだろうか。

７．その他

復旧坑は早い段階から歴史的意義が与えられ、調査が行われてきた。遺構としては遺物が出土するわけでなく、ほぼ火山灰を掘り上げるだけの調査であるが、災害の前後という枠組で言えば、被災前の様相・被災後の対応という点では対等であり、いくら被災前の様子が分かっても被災後の対応が不明というのでは説明不足ということになろう。当時の作業状況に言及するにも礫の埋まり方、坑底の鍬先痕、作業方向など、網羅的調査は無理でも場所を限り記録することも必要になろう。

報告にあたり、村はずれの復旧坑群について評価できないでいる。泥流で壊滅的被害を受けた畑は約30,000㎡弱に上り、復旧坑により復旧された畑は9,000㎡弱、約30%が復旧されたのにすぎない。復旧坑だけが復旧手段とは考えていないが、それではどのように復旧されたのだろう。

詳細は分からないが、痩せた土地も時を経ればやがて草が生え土壌化が進み、ついには耕作できるようになるだろう。ならば、①そうして土壌化を待ち再び畑としたのか、②荒地に草を鋤き込み、人工的に土壌化を早め畑としたのであろうか。当地の生産が元に戻るまで100年を要したというが、その間どのように生計を立てたのであろうか。いずれも課題として残されたままである。恐らく、それに代わる賃仕事を取り込んだのであろうが、それだけでは済まなかったはずである。

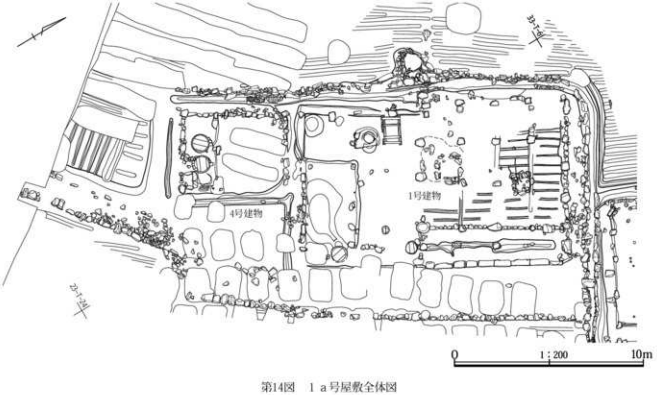
第２節　屋敷跡

１．概要(付図１)

西宮遺跡の調査は平成20年度が初年度で、26年度調査分と合わせ報告書(事業団第643集)が刊行されている。続いて、平成27年度に国道拡幅調査(27年度Ａ・Ｂ地点)が行われ、以来４年が過ぎた。この間37,090㎡の調査が行われ、屋敷跡８・掘立柱建物１・道９・溝５・石垣18・粗朶木置場１・畑29,003㎡など天明泥流直下の遺構群が確認されたほか、中・近世遺構群や古代の陥し穴、縄文時代の埋甕などが確認されている。西宮遺跡の屋敷は被災前11棟ということになったが、隣接する東宮遺跡では屋敷跡10ヶ所が報告されている。このうち１ヶ所は酒蔵とされているから実質的な屋敷跡は計９ヶ所となり、計20棟が確認されたことになる。西宮遺跡の屋敷跡は群在化する傾向にあり、街道沿い(真田道)に屋敷跡４群が点在している。これら群在化した屋敷跡は同族であると思えるほど近接しているが、４群中３群が同じ地点にダム建設直前まで住んでいた。残る１群は屋敷地から農地へ転換したようであるが、家屋は泥流到達点より高所に移転させただけであるといいたくなるほど、被災前の家屋と耕作地の関係が保たれていた。

真田道が村の主要街道(道陸神峠ルート)であることは、今も変わらない。また、泥流下には上村から下村に下る８号道があり、農道も土地の境界もおどろくほど変わっていないことに気づく。東宮遺跡の復旧坑は街道沿いに並んだ屋敷群の南側(川寄り)にあるだけであるが、西宮遺跡では屋敷跡周辺にはみな復旧坑があり、被災前の畑の地境が見えるのではないかと思えるほど、正確に筆ごとに復旧させていた。こうした現象は他人ではまずあり得ないというのが大方の理解で、耕作者自らが農地を復旧させたものと理解されている。

屋敷跡は掘削中から木器類が出土したため、これを取り上げる必要があり、最初は屋敷単位に遺物を取り上げ、建物範囲が確定した段階で建物番号を与え、遺物も建物ごとにNo.１から順に取り上げていった。これにより同じ建物でも１号屋敷と注記されたものと、１号建物と注記されたものがある。やや煩雑になってしまったが、ご承知いただきたい。本書では、主屋と付属屋およびカワヤからなる単位建物を単位世帯と考え、これを屋敷と称することとしたため、１号屋敷に単位建物３群を認めることになり、便宜的に１ａ～１ｃ号屋敷と称し報告することとした。



第14図　１ａ号屋敷全体図

2．屋敷跡

（1）1ａ号屋敷（付図1）

1ａ号屋敷はミョウガ沢左岸にあり、斜面部を切り盛り造成したものである。屋敷跡は真田道南にあり、付近には天明泥流1ｍ弱が堆積していた。泥流の堆積厚は薄い方で、屋敷の周辺には復旧坑が密に確認されている。復旧坑は建物や石垣、農道などを明確に意識しており、被災直後に生活再建を試みた証拠とされているが、被災前の建物配置とダム建設移転前の住宅の建物配置が概ね一致していることから、被災者本人か血縁者が建物を再建したのは確実である。調査前この地点は農地として利用されていたが、泥流を掘り込んだ復旧坑群があり、また、建物に重なり泥流を掘り込んだ埋設桶が確認されており、被災者が直接災害復旧を果そうとした具体的痕跡と言えるだろう。

遺跡が段丘面にあるというと、地形的には平坦であるというイメージになりがちであるが、予想する以上に山側から土砂供給があり、凹凸が激しい。1号屋敷は境川ーミョウガ沢間にあり、川ぞいには小規模扇状地が形成されている。扇状地に挟まれた地点は窪地となり、この地形を横断するように、1ａ～1ｃ号屋敷が配置されていた。窪地にある1ｂ号屋敷付近には建築材・木器類が多量に出土しているが、建物が窪地にあり地下水の通り道となったことが影響したものと思われる。

屋敷周辺の地形は吾妻川に向かい緩く傾斜しており、見た目には平坦に見えるのであるが、それでも建物裏には高さ50cm弱の石垣が築かれていた。これに対し、建物南の石垣は低く、高さ20cmほどで畑に接していた。建物裏の石垣中央には井戸があり、水場と台所が機能的に配置されていた。敷地には街道からは直接出入することはできず、ミョウガ沢の手前を南に下る道を出入口（3尺幅）としていた。敷地面積は329.4㎡（99.8坪、1反歩）を測り、主屋・カワヤ各1がある。また、敷地の片隅には約17㎡の菜園があり、狭い土地を有効利用しようとする姿勢が窺えた。

主屋は土台建物であり、建物規模は桁方向14.2m・梁方向7.5mを測る。建坪は106.5㎡（32.3坪）で、建物南に出入口が、建物内には土間・居間・客間・寝間（納戸）があり、居間の背後に小部屋を設けていた。居間と座敷の前面には切り石が並んでいるが、この切り石と礎石の間はロームが貼られ、軒下は綺麗に整備されていた。3尺サイズの囲炉裏2ヶ所があり、いずれも石組構造が確認されている。土間には奥壁側中央に竈1があるほか、隣接して長方形状を呈する木組み遺構が、そして、北西隅に唐臼が配されていた。

建物下の調査では礎石が数ヶ所にあり、泥流直下建物礎石の下位に建替え前の礎石が確認されたほか、囲炉裏2・竈（1号土坑）1・焼土1・埋設桶2がある。繰り返し増改築が行われた可能性も浮上しているが、現状で改築前の建物の全体構造を明らかにするのは難しい。

主屋西の建物は土台建物（桁行3.60m・梁行2.62m）であり、埋設桶2が確認されている。埋設桶手前の空間には堆肥があり、堆肥置場に使われたことが確実である。

＜1号建物＞（第15図、付図2、PL.6～17）

位　置　真田道（道陸神峠ルート）をミョウガ沢手前で左折、畑1枚を過ぎたところに建物はある。地形的には緩傾斜地に建つ建物であり、切り盛り造成して敷地を確保、建物裏で高さ50～80cm程度の石垣を、建物前で高さ20cmの石垣を築いている。敷地北側に建物を配置、境界ぎりぎりまで建物を寄せている。

規　模　桁行14.2m、梁行7.5m（106.5㎡）

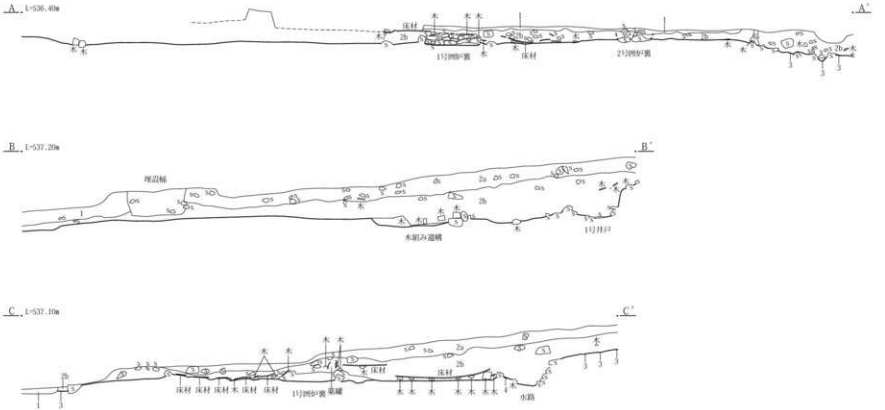
建物構造　土台建物で、土間・居間・客間・寝間（納戸）があり、土間には馬屋がある。居間・客間の後に小部屋を設けるタイプだが、土壁等は確認できていない。

戸口は平入形式である。戸口を開けてすぐ土間があり、下手側に馬屋、土間奥に竈が置かれている。土間の上手側は板の間となっており、建物表手前側が居間、奥が座敷、建物裏の二部屋が寝間（納戸）として利用されたものと見られる。

板の間（第15・19・20図、PL.13）　囲炉裏のある板の間が二間あり、それぞれ居間・客間に相当する。板の間は4分割され、各部屋の後には寝間（納戸）がある。床板の残存状況には差があり、最もよく残っているのが居間の後の小部屋で、続いて奥の小部屋（寝間）である。居間の床板は囲炉裏より奥の残存状況が良好だが、それ以外は床板材の痕跡を残す程度である。客間床板も同様で、床は浮いてしまったものや潰れてしまったものがほとんどである。床高に関するデータが残されていないが、土間

カクラン
カクラン
カクラン
カクラン
1号井戸
2号囲炉裏
1号囲炉裏
木組み遺構
1号竈
唐白支柱
馬屋
2号竈
1号竈
黄色土
壁土
0
1：80
2m

第15図　1号建物



1号建物A-A'～C-C'、b-b'

1．復旧坑覆土　小～大礫多量混入。

2a．灰褐色土(10YR4/2)　天明泥流。酸化鉄が付着して全体として下層より明るく見える。小～大礫を含む。

2b．灰灰色土(10YR4/1)　天明泥流。礫の含有量は上層と変わらないが、全体に色調は暗い。

3．As-A

4．褐灰色土(10YR4/1)　やや砂質、小礫を含む。建物床。

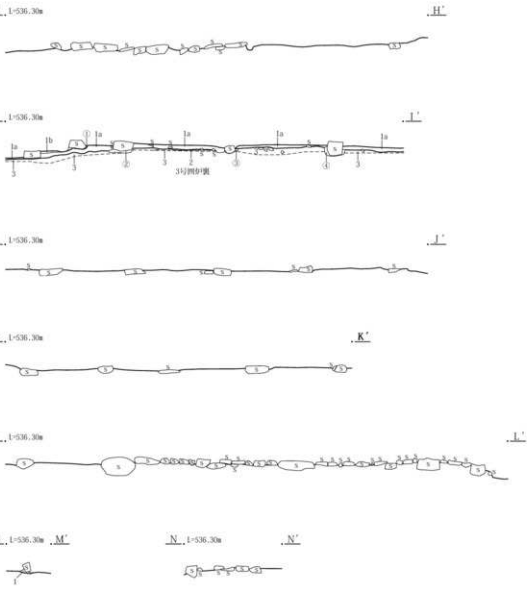
5．暗灰色土(10YR4/2)　還元気味で、やや青味を帯びる。

6．暗褐色土(7.5YR2/3)　3～5cmの礫を多量に含む。

0　1:80　2m

第16図　1号建物断面図1

第17図　１号建物跡前図２

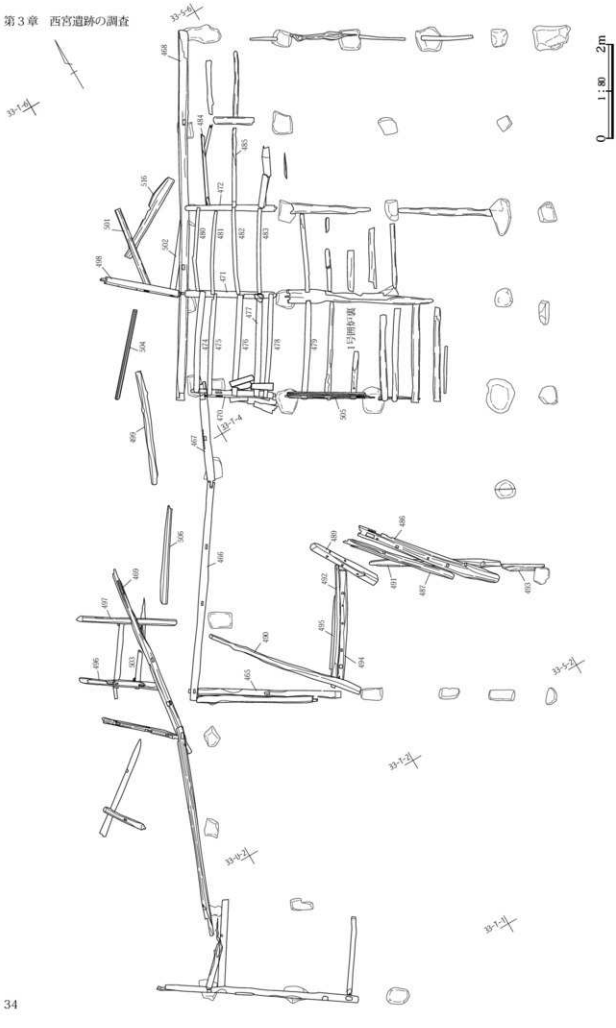


１号建物礎石D-D'
１．明黄褐色土(2.5Y7/6)　土間に塗られた化粧土
２．黒褐色土(5BG3/1)　径１～２cmの礫を多量に含む。しまり強い(建物整地土)。
３．極暗褐色砂(7.5Y2/3)　径５～10cmの礫を多く含む。酸化鉄の沈着が著しい。洪水起源の堆積物？
４．黒褐色土(7.5Y2/3)　径１～２cmの礫を含む(地山)。
4a．４層と同質、還元して青味を帯びる。
①．黒褐色土(2.5Y3/2)　ローム粒子を含む(馬屋西礎石の掘り方)。
②．黒色土(5Y2/1)　①と同質、粘性あり(馬屋西礎石の掘り方)。
③．褐灰色土(7.5Y5/1)　(礎石掘り方)
④．褐灰色土(7.5Y5/1)　(礎石掘り方)
⑤．暗オリーブ色土(5Y4/4)　(杭痕)

１号建物礎石I-I'
1a．褐灰色土(10YR4/1)　やや砂質、小礫を含む(建物整地土)。
1b．明黄褐色土(10YR6/6)　細粒の黄色土を用いた貼床。
２．純い黄色砂(2.5Y6/4)　洪水砂？
３．極暗褐色砂(7.5Y2/3)　径３～５cmの礫を含む(地山)。
①．暗褐色土(10YR3/3)　天井崩落が礎石掘り方に入り堆積する。
②．灰黄褐色土(10YR4/2)　礎石掘り方覆土
③．灰黄褐色土(10YR4/2)　②層に同質、やや明るい。礎石掘り方覆土。
④．灰色土(N4/)　礎石掘り方覆土

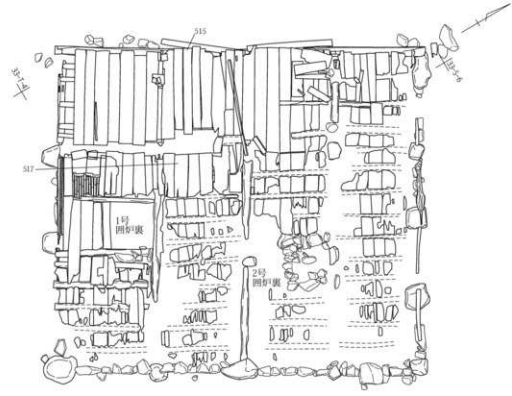
0　1:80　2m

第18図　１号建物断面図３

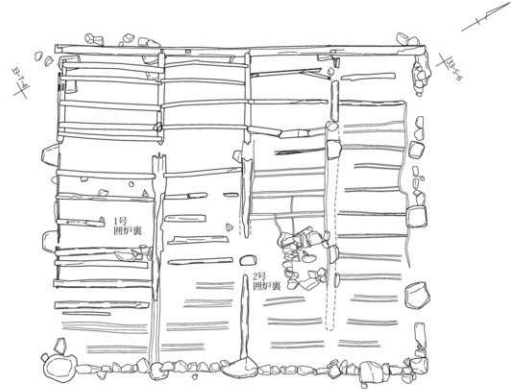


第19図　１号建物建築材出土状況１（土台・大引・根太）

１号建物床面平面図



１号建物根太大引平面図



第20図　１号建物建築材出土状況２（上：床板材、下：大引根太）

に接した奥の小部屋で礎石上に大引（４寸角）があり、上に根太・床板がのるだけである。床高は最大でも20数cmほどである。板の間では原則として梁方向に大引（角材）を置き、桁方向には根太を渡しているが、居間の大引として杭で固定した貫板を用いる例があり、注目しておきたい。居間に敷かれた床板には部分的にゴザの痕跡が残されていたが、被災した季節を考えれば板の間にはゴザなのであろう。寝間には厚く敷き藁して、厚手のネゴを敷いたというが、このことについては確認できていない。

土間・整地面　建物は上手側「板の間」と下手側土間に二分することができる。床面は平坦だが、上手側から下手側に向けて若干傾斜しているように見える。こうした傾向は建物奥に顕著で、板の間と土間には10～15cmの高低差が生じている。土間はロームで貼り床され、戸口から竈手前にかけては黄色に発色した貼り床が広がる。この貼り床は斑状に広がっているが、こうした色調差は泥流堆積後の帯水層の影響によるものであり、地点によって還元状態に差が生じたためであろう。

馬　屋（第21図、PL.11）　下手側土間の片隅にある。壁際の柱は土台建物に組み込まれているが、建物内部の柱は地中に埋め込んだ掘立柱で、それぞれ足固め用の横木を渡し馬屋境界としたのであろう。横木は杭で固定され（第21図）、傷んだ土間を貼り替える際も枠木として機能したことが確実視されるものである。

馬屋は概ね4.20m×2.70mで、確認時には全面に敷き藁が残されていた。馬屋中央は浅く窪み、し尿が埋設桶に流れるよう意図されていたが、埋設桶の一端が刳り込まれ、刳込部には横木を渡し、杭を打ち込み固定して、し尿が効率的に流れるよう工夫されていた。

埋設桶（第22図、PL.11）　戸口側の軒下に埋設桶１が確認されている。埋設桶は「小便桶」とされるものであり、戸口に近過ぎて通行等に支障がありそうであるが、問題にはなかったのであろうか。邪魔になりそうであるが、建替え前にも似た位置に埋設桶があり、とくに問題にはならなかったというのが実情かもしれない。

１号埋設桶がそれであるが、居間に続く縁側に接してある。径90cm弱・深さ60cmの桶が建物南縁の礎石と同じライン上に埋設されていた。埋設桶は軒下にあり、雨が吹き込めば、流れ込んでしまう位置にある。

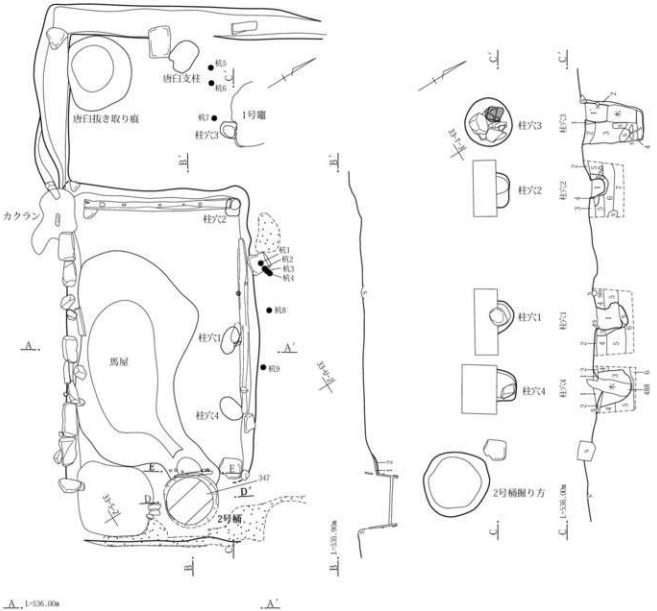
柱　穴　柱穴は馬屋柱３本以外に、竈脇および戸口先の埋設桶（小便桶）脇に各１本がある。竈脇の柱穴は内柱として機能したもので、馬屋柱の延長上にある。馬屋柱３本は、いずれも柱材が泥流で倒れた状態で出土しており、馬屋柱３本の延長上にある内柱も柱穴内に柱材が残されていた。

なお、竈脇の柱穴については調査所見が付されており、詳細は次項で取り上げる。

竈（第26図、PL.８）　建物奥に竈がある。竈は長軸1.36m・短軸1.06mを測り、鉄釜類を据える開口部の径は0.48mほどである。焚口前は灰を掻き出し、浅く窪んでいた。竈本体は粗く整形した板石を竈後方に「ハ」字状に置き、焚口には角柱状に整形した袖石を置き、板石と袖石の間には割り石を積み上げ竈原型を造り出していた。続いて開口部を意識して半円状に整形した天井石を焚口上に載せ、その面に合せるよう竈外周部に割り石を積み上げている。隙間は下部から適宜粘土で塞いだものと見られ、これが乾いたのち最終的に粒子の細かい粘土を塗り、竈に仕上げている。

調査所見の特記事項として、竈左側に積まれた板石（部分的に板石に代え角材を使用）に関する記載がある。竈左に内柱があることについては上述したとおりであるが、①柱穴３の柱材は途中で切断されていたという可能性に触れる一方で、柱穴３が馬屋柱３本の延長上にあり、内柱であること、②掘立柱は地中に埋まる部分は加工せず、地上に出る部分だけを柱状に加工するとして、柱材の段差に竈側面を噛み合わせ補強材として機能させたのではないか、とする見解が示されている。さらには竈内から出土した板材について、焚口を塞いだ板材が泥流で押されて竈内に出土した可能性を指摘している。同様に、竈内から出土した枝材について「火かき棒」「灰かき棒」ではないかとしているが、焚口の外まで枝材は延び、判断が難しい。

竈本体の構築材ついては凝灰角礫岩とされているが、天井石については安山岩類とされているだけである。後者については分からないが、前者についてはこれと同質のものが西宮岩除に露頭としてあるのを確認している。加工が容易であり、入手も容易である。これに対して、天井石は建物に使われた「切り石」と同質であり、竈本体の構造材より品質は良く石工の手によるものであろう。凝灰角礫岩の由来については、西宮遺跡の報告（事業団



1号建物馬屋
1．暗オリーブ灰色～黒色土(2.5GY3/1～2.5GY2/1)　植物遺存体の堆積層がグライ化したもの。
2．灰色土(7.5Y4/1)　やや粘性あり。
3．灰色土(5Y4/1)　径5～10cmの礫を含む。
4．褐灰色土(10YR5/1)　上面に酸化鉄沈着(雨落ち溝相当部分)。
5．黒褐色土(10YR3/1)　径5～20cmの礫を多く含む(人為的に埋め土)。
6．暗灰褐色砂質土(2.5Y3/2)　径1～3cmの礫を多く含む。

1号建物2号桶・馬屋
1．暗褐色土(10YR2/1)　植物質が腐食したもの。
2．黒色砂(5N2/)　植物起源の繊維質を含む。

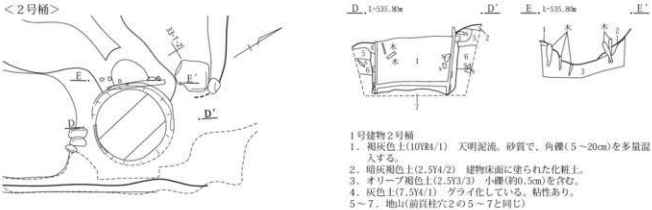
1号建物柱穴1(馬屋東辺中央)(1号建物柱穴3．2．1．4)
1．天明泥流
2．灰オリーブ色土(7.5Y4/2)　やや還元気味(建物床面化粧土)。
3．灰色土(7.5Y4/1)　やや粘性あり。やや還元気味(柱穴埋土)。
4．灰色砂質土(5Y4/1)　径1～5cmの礫をややや多く含む(地山)。
5．黒色砂質土(2.5GY2/1)　径1～3cmの礫をややや多く含む(地山)。
6．暗青灰砂質土(5BG4/1)　径1～2cmの礫を多く含む(地山)。

1号建物柱穴2(馬屋北東隅)
1．天明泥流
2．灰オリーブ色土(7.5Y4/2)　やや還元気味(建物床面化粧土)。
3．暗紫灰色土(5P4/1)　礫を含む。やや砂質(柱穴埋土)。
4．青味を帯びた還元層
5．灰色砂質土(5Y4/1)　径1～5cmの礫をやや多く含む(地山)。
6．黒色砂質土(2.5GY2/1)　径1～3cmの礫をややや多く含む(地山)。
7．暗青灰砂質土(5BG4/1)　径1～2cmの礫を多く含む(地山)。

1号建物柱穴3(1号建物竈の西に接する柱穴)
1．天明泥流
2．灰オリーブ色土(7.5Y4/2)　やや還元気味(建物床面化粧土)。
3．黒褐色土(5BG3/1)　礫を多量に含む(柱穴の埋め土)。
4．暗紫灰色土(5P4/1)　屋や砂質で、角礫を含む(柱穴の埋め土)。

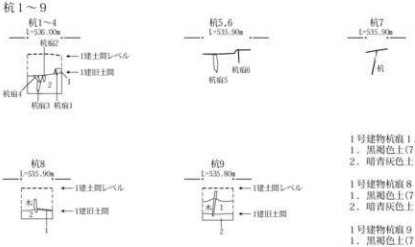
1号建物柱穴4(馬屋南東)(1号建物柱穴3．2．1．4)
1．天明泥流
2．灰オリーブ色土(7.5Y4/2)　やや還元気味(建物床面化粧土)。
3．灰色土(7.5Y4/1)　礫を含む。硬く締まる(埋め土)。
4．灰色砂質土(5Y4/1)　径1～5cmの礫をややや多く含む(地山)。ややや還元気味。
5．黒色砂質土(2.5GY2/1)　径1～3cmの礫をややや多く含む(地山)。
6．黒色土(2.5Y2/1)　径5～30cmの礫を多く含む(地山)。

第21図　1号建物馬屋



１号建物２号桶
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、角礫(５～20cm)を多量混入する。
2．暗灰褐色土(2.5Y4/2)　建物床面に塗られた化粧土。
3．オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　小礫(約0.5cm)を含む。
4．灰色土(7.5Y4/1)　グライ化している。粘性あり。
5～７．地山(前頁柱穴２の５～７と同じ)

第22図　１号建物２号桶

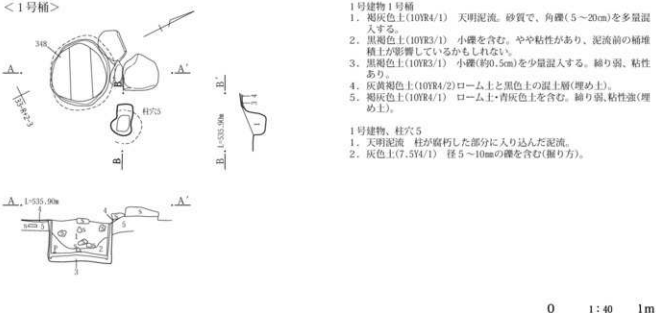


１号建物杭痕１，２，３，４
1．黒褐色土(7.5YR3/1)　径５～10cmの礫を多く含む。(土間整地土)
2．暗青灰色土(5BG3/1)　グライ化。(この上面が旧土間面)

１号建物杭痕８
1．黒褐色土(7.5YR3/1)　径５～10cmの礫を多く含む。(土間整地土)
2．暗青灰色土(5BG3/1)　グライ化。(この上面が旧土間面)

１号建物杭痕９
1．黒褐色土(7.5YR3/1)　径５～10cmの礫を多く含む。(土間整地土)
2．暗青灰色土(5BG3/1)　グライ化。(この上面が旧土間面)

第23図　１号建物木杭

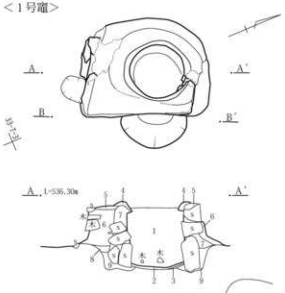


１号建物１号桶
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、角礫(５～20cm)を多量混入する。
2．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を含む。やや粘性があり、泥流前の桶堆積土が影響しているかもしれない。
3．黒褐色土(10YR3/1)　小礫(約0.5cm)を少量混入する。締り弱、粘性あり。
4．灰黄褐色土(10YR4/2)ローム土と黒色土の混土層(埋め土)。
5．褐灰色土(10YR4/1)　ローム土・青灰色土を含む。締り弱、粘性強(埋め土)。

１号建物、柱穴５
1．天明泥流　柱が腐朽した部分に入り込んだ泥流。
2．灰色土(7.5Y4/1)　径５～10mmの礫を含む(掘り方)。

第24図　１号建物１号桶

＜１号竈＞

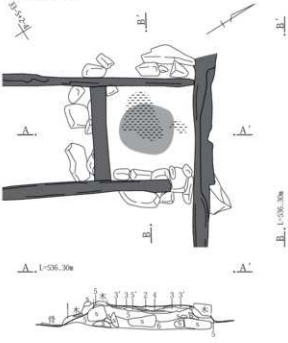


＜２面目＞

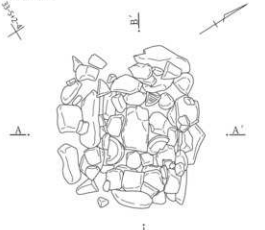
１号建物竈
1．天明泥流
2．極暗褐色土(7.5YR2/3)　有機質土壌、詳細は不明。焚口付近に堆積している。
3．灰層
4．黒褐色土(2.5Y3/1)　有機質土壌。しまり弱い。
5．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　竈化粧土。
6．褐灰色粘土(10YR4/1)　やや還元気味で、青味を帯びている。本来的には５層と同質か。
7．黒褐色粘土(10YR2/1)　植物質(スサ)を多く含む。やや還元気味。
8．暗青灰色粘土(5BG3/1)植物質(スサ)を多く含む。やや還元気味。
9．黒褐色粘土(10YR2/1)　ローム粒子を含む。粘性に富む。やや還元気味だが、やや明るい色調を呈す。

第25図　１号建物１号竈

＜１号囲炉裏＞



＜２面目＞



１号建物１号囲炉裏
1．天明泥流　砂質で、角礫(５～20cm)を含む。
2．褐灰色土(10YR4/1)　炭化物を多量に含む。
3．灰層
3'．３層と同質、炭化物・焼土を含む。
4．黒褐色土(10YR3/1)　　灰を含む。粘性なし。
5．明黄褐色土(10YR6/6)　これにより角礫を固定する。粘性に富む。
5'．焼土層
6．黒褐色土(7.5YR3/2)　砂質で、焼土粒を多量に含む。粘性あり。

第26図　１号建物１号囲炉裏

第643集）を参照されたい。

囲炉裏（第26・27図、PL.９）　囲炉裏は居間と客間にある。居間にある囲炉裏は部屋の中心を起点に北西側に切られているが、客間の囲炉裏は一辺を部屋の中心軸に合せ配置しており、いずれも３尺サイズの囲炉裏となっている。

１号囲炉裏は居間にあり、高さ20cmまで石を組み、粘土を貼り床面としている。囲炉裏は設計時から設置場所が意識されており、大引と根太で囲まれていた。囲炉裏石組高は20cmほどで、これに粘土を貼って灰を入れ仕上げるのが通例だが、使用面より下位に枠木が確認されている（写真７を参照）。左辺側は枠木の内側に礫を並べ、また、右辺側枠木は粘土で覆われていることから、古い枠木を芯材として用いその上に枠木を置いて使用したのであろう。

写真７　枠木・石組の検出状態

２号囲炉裏は１号囲炉裏より一回り小さいサイズで、囲炉裏サイズは内法0.75mを測る。囲炉裏は、座敷中央より居間側に寄せて配置され、石組高は現状で20cm弱である。

木組み遺構（第28図、PL.10）　竈右わきにあり、長さ1.58m・幅0.91m（内法長1.14m・内法幅0.66m）・深さ0.18mを測る。遺構長軸は梁方向を向き、その短辺は竈焚口の延長上にある。遺構は、まず長方形状に土坑（長さ1.73m・幅1.2m）を掘り、続いて井桁状に角材を組み、長軸方向の２ヶ所で角材２本を短軸方向に渡している。これが基本構造と言えるものであるが、上から竹簀子を掛け使用したものと見られる。横木は土圧により中央で折れ、これに伴い竹簀子も片側が落ち込んでいたが、本来は枠木にフタをするように置かれたものと思われる。建物奥側の横木を除けるとその下には３ヶ所に細い縄が残り、竹簀子は縄がけされていたことが明らかであるが、用途等詳細は不明である。竹簀子下から棒状の不明木製品（外面を面取り、芯は空洞の箸？）ほかがあるが、現状で遺構を性格づけるような遺物の出土はない。

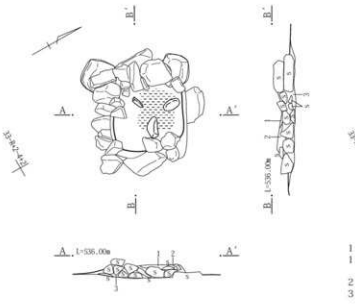
調査所見には「流し」「ムロ」の可能性についての記載があるほか、位置的には「洗い場」とするのが妥当だが排水できないのが問題とする所見がある。「ムロ」としても浅過ぎるということである。この種の遺構は竈に近接することが多く、これに関連する遺構ということになるが、その性格については不明と言わざるを得ない。竹簀子が枠木に接するところのすべてを縄で縛っていたのか明らかでないが、使用法を考えるには重要な要素になるだろう。土坑底面が戸口側に傾斜していることも意味があるだろう。これに似た遺構として、東宮遺跡に板材を釘で固定したものがある。

唐　臼（第29図、PL.10）　建物下手側隅にあり、唐臼は引き抜かれていた。この唐臼に伴う支柱穴が芯々で1.35m（４尺半）離れて確認されており、柱穴には支柱が傾いた状態で残存した。支柱（25cm）には枠を取り付ける柄が切られていた。唐臼は引き抜かれているが、深さ40cm前後とみられる。唐臼は土間から10cmほど臼の縁がでるように埋設されたものと思われる。

土台と支柱の間にはフネ（飼葉桶）があり、竈の裏には切り石が出土しているが、これについて唐臼使用時の踏み台ではないかという所見が残されている。

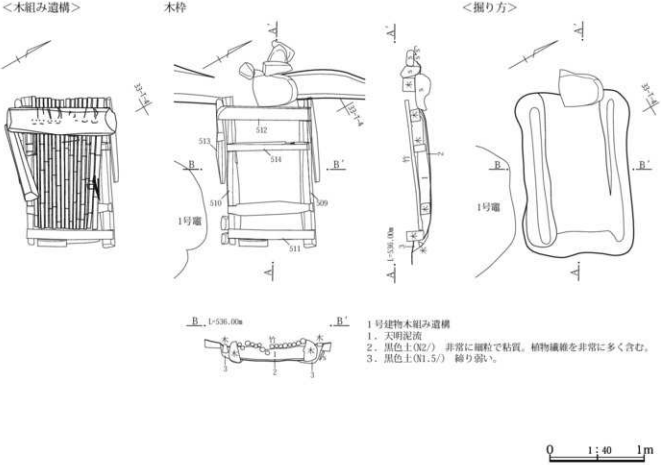
土　壁　建物裏の石垣２ヶ所に土壁が貼り付いていた。土壁は建物奥壁のものであるが、建物中心部の土壁が抜けており、戸口側から一気に泥流が押し寄せ、土壁を破壊したことが分かる。土壁は柱部分が抜けており、幅1.2mを測る。土壁からみた柱幅は12cmほどであり、４寸角クラスの柱材を用いていることが分かる。土壁には貫板も残り、また、竹で編んだ小舞も残り、良好な状態で出土した。土間側・客間側の外壁は土壁が想定されるにもかかわらず、その痕跡はなく、泥流により流出したものと考えている。土壁の断ち割り調査では、地表面下にAs-Aが堆積するのが確認されている。

雨落溝　庇先に面した建物南を除く、建物周囲を雨落溝が廻っていた。地形的には窪地に当たり、湧き水が差す場所だが軒先には切り石を並べており、自然排水させたのかもしれない。切り石から10～15cm離れて杭が列状に



１号建物２号囲炉裏
１．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　囲炉裏構築材(化粧土)。中央部分は被熱して赤化する。
２．褐灰色土(7.5YR4/1)　炭化物を含む。粘性に富む(角礫固定材)。
３．黒褐色土(10YR3/1)　砂質。しまりやや弱、粘性弱。

第27図　１号建物２号囲炉裏

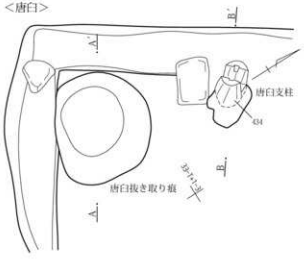


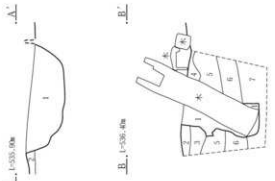
１号建物木組み遺構
１．天明泥流
２．黒色土(N2/)　非常に細粒で粘質。植物繊維を非常に多く含む。
３．黒色土(N1.5/)　締り弱い。

0　1:40　1m

第28図　１号建物木組遺構

＜唐臼＞

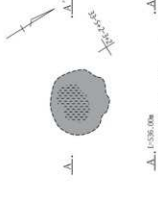




１号建物唐臼支柱
1．天明泥流
2．明黄褐色粘土(2.5Y7/6)　建物床面の化粧土。
3．黄灰色土(2.5Y4/1)　径１～２cmの礫を少量含む(整地土)。
4．暗青灰砂質土(5PB3/1)　径１～２cmの礫を少量含む(地山)。
5．暗青灰砂質土(5B4/1)　径１～５cmの礫をやや多く含む(地山)。
6．青黒色土(5PB2/1)　やや粘性あり(地山)。
7．暗青灰砂質土(5BG4/1)　小礫を含む(地山)。

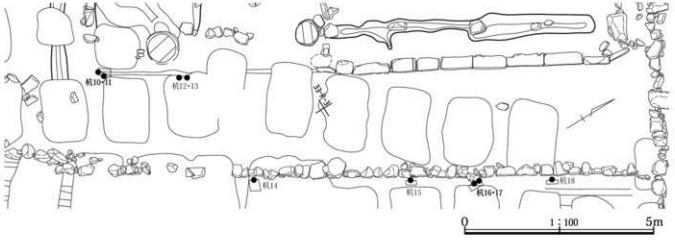
１号建物唐臼抜き取り痕
1．黒色砂質土(10Y2/)　径５～20cmの礫(泥流由来)を非常に多く含む。
2．明黄褐色粘土(2.5Y7/6)　建物床面の化粧土。

＜１号焼土＞



１号建物１号焼土
1．炭化物　小枝、粗朶が炭化したもの。
2．黄褐色ローム(2.5Y5/4)　上間床面に相当、被熱して赤化している。
3．黒褐色土(5YR3/1)　やや還元気味で、建物整地層に相当。
4．黒色土(7.5YR2/1)　径0.5～１cm程度の小礫をやや多く含む。

＜杭痕＞



１号建物杭杭12・13・15
1．暗灰褐色砂質土(2.5Y3/2)　径１～３cmの礫を多く含む(整地層)。
2．暗青灰色土(5BG3/1)　やや還元気味(地山)。

0　1：40　1m

第29図　１号建物唐臼・１号焼土・木杭

並んでいるが、これは厚板材を並べ、杭を打ち込んで石垣の側板として固定したものと思われる。

出土遺物（第30～32図、PL.15・16）　建築材を含む木器類が多量に出土したほか、金属器358点・陶磁器340点・石器類203点が出土している。天明泥流については吾妻川の狭窄部でダムアップして、これが逆流したとされているが、旧川原畑村では建物裏の石垣下に多量の遺物が出土したことや柱材が山側に傾いて出土したこと、土壁が石垣に貼り付いて出土したことから、泥流が山側に押し寄せダムアップした泥流で屋根が浮き、これにより下流へ押し流されたことが分かる。泥流により家屋が流出したわけであるから相当な破壊力があったのであろうが、本来的にあるべきところが分からなくなるほど遺物が大きく動いている様子はない、というのが大方の見解である。

基本的な遺物の出土状態として、建物裏に遺物が集中するのはまちがいなく、これに竈や囲炉裏周辺部の遺物集中が続く。このほか、土間に続く納戸の遺物出土量も多い。概して建物南や馬屋周辺の遺物の出土量は少ない、というのが実態である。以下、１号建物の遺物出土状態について、その概要を記す。

まず、屋内からみてみよう。竈焚口部には桶２があり、木鉢１がある。建物奥にも桶があり、桶は竈まわりで使われたことが分かる。

続いて土間と接する板の間に遺物が集中する傾向が指摘されるだろう。囲炉裏のある板の間には、幅55㎝の竹簀子があり、床下収納を想定してみたが、床下は約30㎝しかなく、収納は難しいようである。出土状態を考える際、建物構造を明らかにすべきであるが、①土間側の板の間（居間）には敷居があり、板戸で仕切られていたこと。②板の間と北の小部屋（納戸）は、板の間の北端で床板は途切れることから土壁か板戸で仕切られていたこと。③床板に釘跡がなく、固定されていなかったため、床板が大きく浮き上がってしまったこと。以上が建物構造に関する現状理解である。

出土遺物は、大部分が床下から出土している。これは床板が固定されていなかったためで、泥流で激しく上下したことで（写真８）、隙間から多量の遺物が床下に流れ込んだからであろう。本来の出土位置を想定すれば、居間の片隅に置かれたということになろう。特徴的な遺物として、籠に入った漆椀（写真10）や火打ち箱がある。日頃からよく使う道具類の収納法の一つとして、籠が利用されたものと思われる。

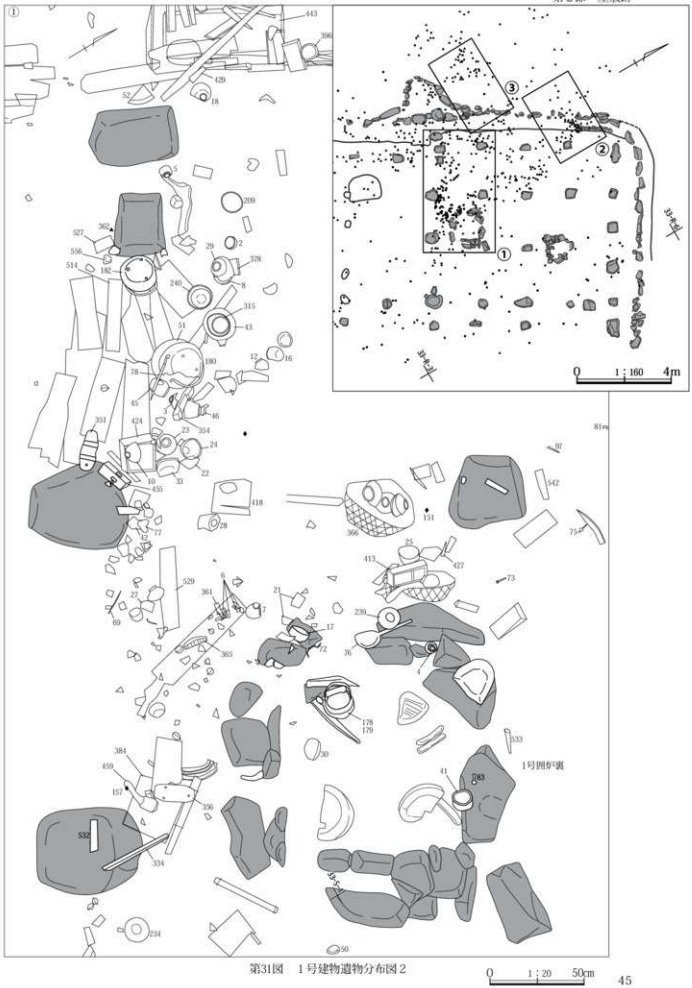
このほかにも特徴的な遺物があり、北側の小部屋（板の間）下に陶磁器類が直線的に並んで出土した。陶磁器類は居間の床下から出土したものは破片が多く、居間北

写真８　床板の出土状態１（北から）

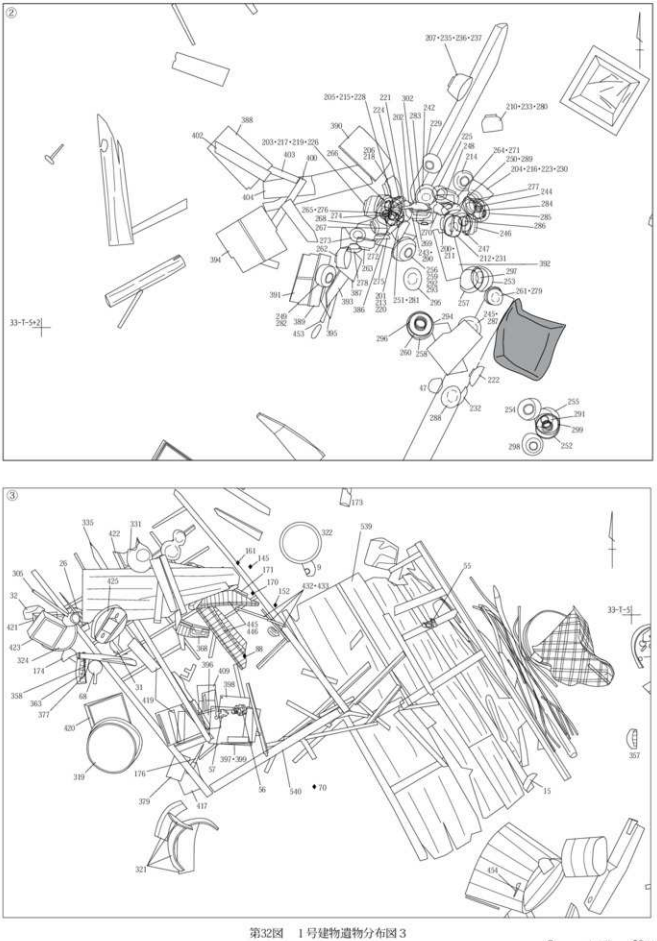
写真９　床板の出土状態２（南から）

写真10　床板下出土の籠入り漆椀

第30図　1号建物遺物分布図１



第31図　１号建物遺物分布図２



第32図　１号建物遺物分布図３

の小部屋から出土したものは完形品が多い。これは、恐らく落下地点が居間側にあり、破損を免れた陶磁器類が北に流されたものといえよう。

屋外では、まず建物奥から井戸・石垣間にオヒツや桶類の出土が目立つ。曲げ物もあり、なかからは銭が出土したものもあった。石垣を乗越えて勝手口から流された板戸や箱類、泥人形、オサなどが出土している。また、建物北東隅には漆椀が多量に出土しているが、箱入り漆椀である。その出土位置は寝屋に近く、漆椀の保管場所として注目している。

＜建替え前の状態＞

調査終了後、建物構造を確認するため、全域を掘り下げたところ、囲炉裏2ヶ所・竈1・埋設桶1・礎石5が明らかになった。上記遺構等は泥流直下の礎石建物の整地面を10cmほど掘り下げて確認されたもので、建替え前の建物と捉えておきたい。掘立形式から土台建物へ変遷するとみるのが常識だが、建替え前も土台建物であり、建物を建ててすぐなにがしか理由があり、建替えたのであろう。

建替え前の建物規模は不明だが、下層出土の礎石から考えてみると、囲炉裏上の礎石(S2・S3)および併設遺構を結んだラインを軸に建物裏が礎石S1まで、建物前は現状で礎石S4～S6のラインまでが見込まれる。どこまで桁方向を延ばすのか微妙だが、梁方向については礎石S1・S3・S6なら3.2m程度になり、囲炉裏と竈併設遺構周辺の土座と、S2より上手を板の間とする二間から建物が想定されよう。

2号竈(第34図、PL.16・17)　土間の貼り床を掘り下げ、礎石脇に略方形状の土坑があり、発掘調査ではこれを1号土坑として調査が行われた。調査図面(データ)には、1号土坑(囲炉裏)とあり、途中遺構認識を改めたようである。

遺構の形状は略方形だが、各辺が膨らみ円形に近い。中央に焼土があるほか、周辺部が溝状に窪んでいる状況が窺える。出土遺物は得られてないが、覆土中には礫が多量にあることや、周辺部の溝に凹凸があることを重視するなら、これを竈側石の痕跡と捉え竈基底部とすることも可能かもしれない。これに接して1号建物礎石下の根石がある。仔細に見ると、礎石は根石の中心から微妙に外れており、礎石とは別の遺構になる可能性も否定できないように思う。根石とした礫は中央に大きな偏平礫を置き、周辺に小礫を置いており、西宮地区囲炉裏の属性(PL.37－4・5)を備えており、囲炉裏と竈が列状に配置されていた(以下、併設遺構と呼称)。

この併設遺構には近接して焼土遺構2が広がっていたが、半截調査したところ、いずれも浅く不明瞭で、焼土分布の背景を明らかにすることはできなかった。

囲炉裏(第34図、PL.16・17)　囲炉裏2基がある。上述した間取り構成を前提にしてみると、3号囲炉裏が板の間の中央にあるのに対して、4号囲炉裏は妻側の壁に近過ぎるかもしれない。2基とも建替え前の囲炉裏だが、同時に機能したとは考え難い。

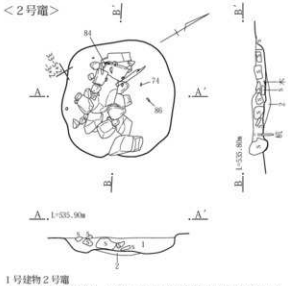
3号囲炉裏は、コ字状に木枠痕跡が残り、内法0.8mを測る。灰層が木枠に大きく広がり、囲炉裏中央部分が赤化している。4号囲炉裏は方形状を呈する。中央付近には焼土と灰層が混じり、囲炉裏の残骸であることが分かる。土層断面には途中間層があり、火床を貼り直している可能性がある。4号囲炉裏のコーナー部分には別の灰層が重複しており、一瞥して囲炉裏の重複であることがわかるが、これについては平面図と写真があるのみであり、断面調査の記載はない。

埋設桶(第35図、PL.17)　建替え後の戸口脇にも埋設桶があり、これを南に2.80m(1間半)延長したところに、やや大型の埋設桶が確認されている。

桶サイズは長径0.9m・短径0.7mを測り、形状は楕円形に近い。深さ0.8mほどが推定されており、小便桶としては大型である。桶の底板は完全に残存しているが、側板は上端部を大きく欠いている。覆土は黒色土で、板材3枚が出土しているのみである。桶は整地土で完全に埋まっていた。

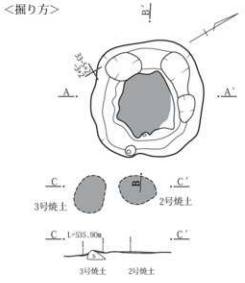
O
O'
L=536.00m
P
P'
1:80
2m
S1
S2
S3
S4
S5
S6
1号建物
2号建物
3号建物
4号建物
1号柵
2号柵
3号柵
4号柵
1号溝
2号溝
3号溝
4号溝
1号井戸
2号井戸
3号井戸
4号井戸
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
13号土坑
14号土坑
15号土坑
16号土坑
17号土坑
18号土坑
19号土坑
20号土坑
21号土坑
22号土坑
23号土坑
24号土坑
25号土坑
26号土坑
27号土坑
28号土坑
29号土坑
30号土坑
31号土坑
32号土坑
33号土坑
34号土坑
35号土坑
36号土坑
37号土坑
38号土坑
39号土坑
40号土坑

＜２号竈＞



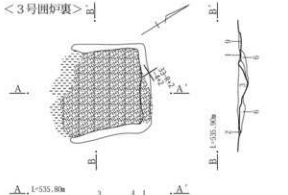
１号建物２号竈
1．黒褐色土(5BG3/1)　下層に薄く明黄褐色粘土が堆積するほか、上層には角礫主体で、焼土・炭化物を非常に多く含む黒褐色土が堆積する。
2．赤黒色土(2.5Y2/1)　全体に被熱して赤化している。

＜掘り方＞

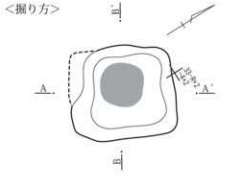


１号建物２号焼土・３号焼土
1．赤黒色土(2.5Y2/1)　ロームブロックが被熱して赤化している。

＜３号囲炉裏＞

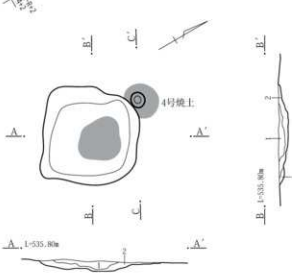


＜掘り方＞



１号建物３号囲炉裏
1．褐灰色土(7.5YR4/1)　やや暗く、木枠の痕跡と見られる。
2．暗灰色(N3/)　炭化物を多く含む。
3．灰層　中央付近は窪み、被熱して赤化している。

＜４号囲炉裏＞

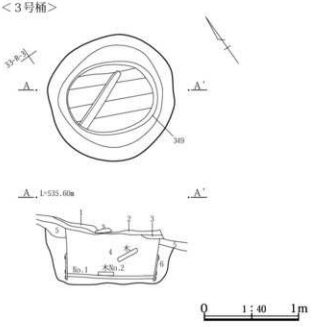


１号建物４号囲炉裏・４号焼土
1．ロームと焼土の混土層　建物建替え時の整地層と見られる。
2．褐灰色土(10YR4/1)　焼土・炭化物を多く含む(整地層)。
3．灰白灰(10YR8/2)　比較的明瞭に灰層が残る。
4．灰層
5．焼土層

0　1:40　1m

第34図　２号竈、３・４号囲炉裏(建替え前)

＜３号桶＞



１号建物３号桶
1．褐灰色土(7.5YR4/1)　天明泥流直下の畑耕土。
2．褐灰色土(10YR3/2)　小礫を含む(石垣掘り方)。
3．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子を多量に含む(整地土)。
4．褐灰色土(10YR4/1)　径５～20cmの礫を非常に多く含む(埋め土)。
5．暗灰色土(N3/)　径１～２cm礫を多く含む。
6．黒色土(N2/)　やや粘性あり(掘り方の覆土)。

第35図　３号桶(建替え前)

＜４号建物＞(第36図、PL.18)

位　置　１号建物西にある。建物の裏には主屋裏から続く石垣がある。

規　模　桁行5.40m、梁行3.90m(21.1㎡)

建物構造　土台建物である。建物南を除いて、土台の下には礫が並び、礫の配置から建物の規模が分かる。建物は妻側1.8m付近で仕切られ、埋設桶が埋設されているカワヤと、これに続く空間(堆肥置場)からなる。

なお、カワヤの片隅には0.5×0.4mの空間が礫で仕切られているが、これに似た空間が別のカワヤ(13号建物)で確認されている。そこでは桶が埋設してあり、機能的には小便桶とすることができるだろう。

埋設桶・堆肥置場　埋設桶は約２坪の空間にある。床面は半分ほどが貼り床されていたとあるが、本来的には全面が貼り床されていたものと思われる。カワヤに続く空間は14㎡(４坪)ほどで、堆肥の残骸が残されていた。また、建物北の石垣には壁材があり、植物の茎を束ねて壁材としたものと見られる。建築材等の出土写真には建物北に壁材が散乱しているが、太い茎を束ねているように見える。少なくとも、このカワヤ壁材には板材を用いることはなかったとしておきたい。

雨落溝　主屋側を除いて雨落溝が廻り、建物南の雨落溝は鉤の手に曲がり、建物南の畑まで続く。雨落溝の規模は幅25～40cm・深さ２～５cmで、建物から溝の中心部まで70cmほど離れていた。

出土遺物(第39図、PL.18)　出土遺物の大半は建築材だが、木製の鍬先と油絞り機が出土している。鍬先は柱穴１に意図的に埋め込まれた状態で出土しており、柱穴１には梁方向の浅い溝が確認されているが、PL.18－６・７にもある通り、柱穴の片側の礫と鍬先で仕切り材を挟み、堆肥置場を仕切ったのであろう。

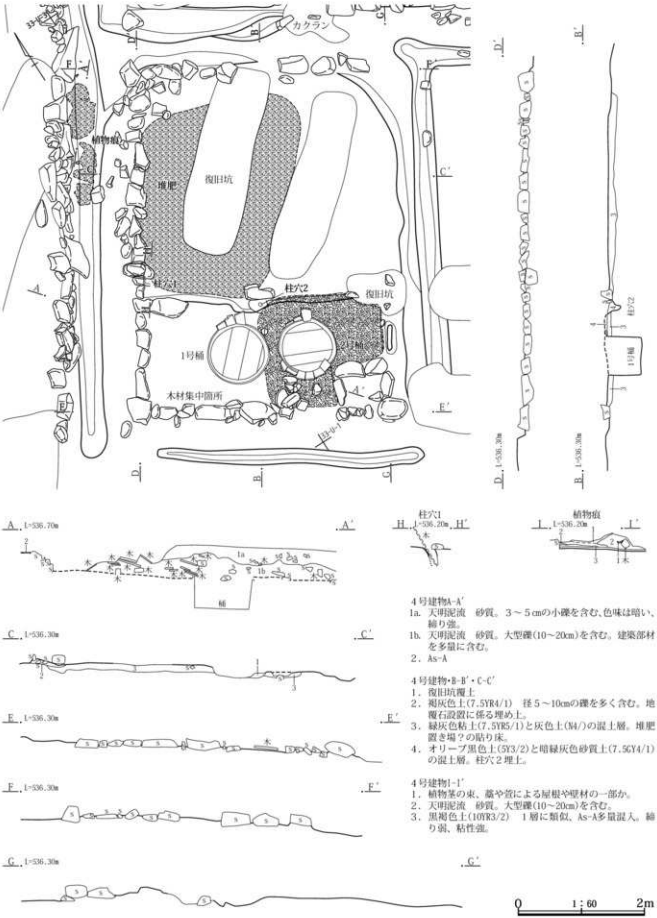
所　見　埋設桶は共に径90cm弱で、３尺タイプの桶を使用していた。カワヤと堆肥置き場が仕切られたのは確実で、中央に礫が残る以外に礫はない。構造的に引き戸とするのは難しく、ムシロで仕切られていただけかもしれない。また、カワヤ内には厚板２枚(いわゆる埋設桶に渡した二本橋)が出土した。埋設桶は建物中心部に並置されていたが、埋設桶が近過ぎカワヤ内部が二分された可能性は少ない。状況的に埋設桶を同時に機能させていないように思う。

＜その他の遺構＞

井　戸(第40図、PL.17)　建物裏の勝手口(木組み遺構東の奥壁部分)をでたところに井戸がある。石垣から突出するかたちで作られており、井戸の中心は建物を出て１間半のところにある。建物の周囲には水路が廻り、排水機能を果しているが、井戸と接する部分には大型扁平礫が並んでおり、これにより足場を確保したのであろう。桶・桝等の出土品が流れ込んで出土しているが、安全面を考慮して掘削途中で調査を断念した。

石　垣(第15・29図、PL.６・12)　建物北および妻側東に石垣を築く。石垣には大型の割り石を用いているが、その積み方は雑に思える。建物南の石垣は高さ20cmと低い石垣ではあるが、礫の面を揃え、杭を打ち込んで石垣を安定させている。

ニ　ワ　主屋の前と堆肥置場の前２ヶ所がニワになっており、L字状を呈す。面積は66.3㎡(20.1坪)ほどである。

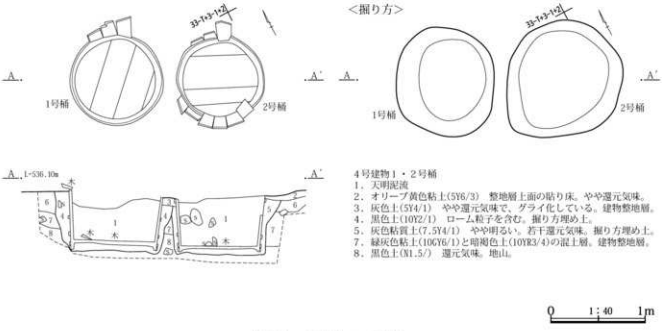


4号建物A-A'
1a．天明泥流　砂質。３～５cmの小礫を含む、色味は暗い、締り強。
1b．天明泥流　砂質。大型礫(10～20cm)を含む。建築部材を多量に含む。
２．As-A

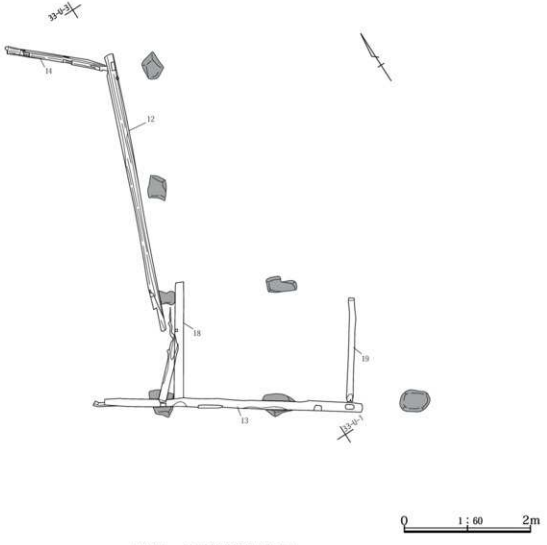
4号建物・B-B'・C-C'
１．復旧坑覆土
２．褐灰色土(7.5YR4/1)　径５～10cmの礫を多く含む。地覆石設置に係る埋め土。
３．緑灰色粘土(7.5YR5/1)と灰色土(N4/)の混土層。堆肥置き場？の貼り床。
４．オリーブ黒色土(5Y3/2)と暗緑灰色砂質土(7.5GY4/1)の混土層。柱穴２埋土。

4号建物I-I'
１．植物茎の束。藁や笈による屋根や壁材の一部か。
２．天明泥流　砂質。大型礫(10～20cm)を含む。
３．黒褐色土(10YR3/2)　１層に類似、As-A多量混入。締り弱、粘性強。

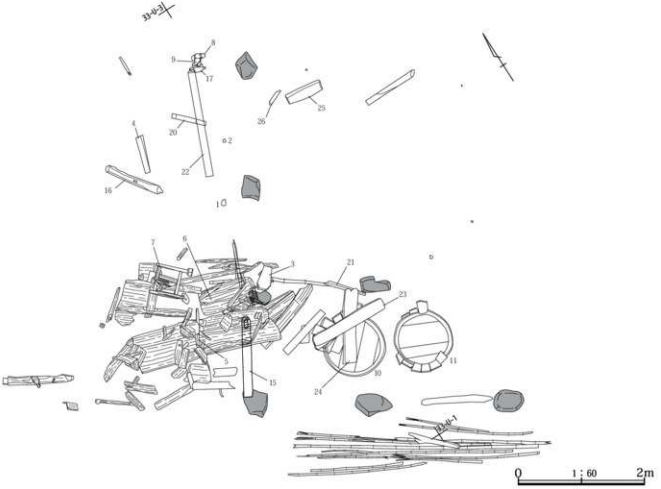
第36図　４号建物



第37図　４号建物１・２号桶

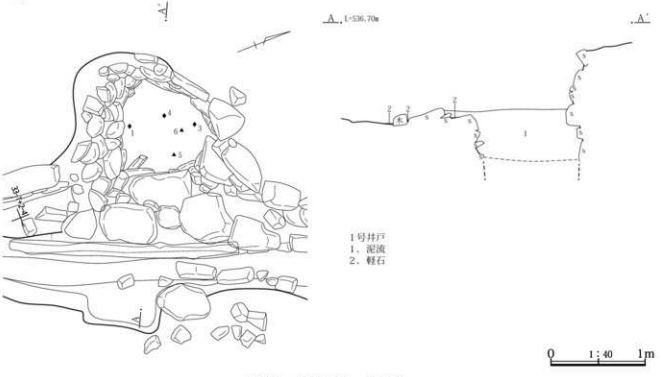


第38図　４号建物建築材分布図



第39図　４号建物遺物出土状態

＜井戸＞



第40図　１号井戸（１ａ号屋敷）

（２）１ｂ号屋敷(付図１)

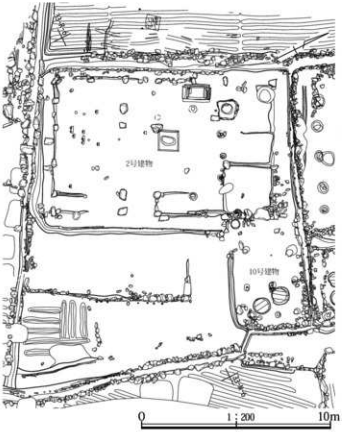
１ｂ号屋敷は、ミョウガ沢ー境川間の低地部にある。地形的には比較的平坦な地点を屋敷地としたもので、１ａ・１ｃ号屋敷に挟まれている。屋敷地は真田道(道陸神峠ルート)の南にあり、建物周辺には天明泥流１ｍ弱が堆積していた。泥流の堆積厚は薄い方であり、周辺には復旧坑が密に確認されている。調査前この地点は宅地として利用されていたが、被災前の建物配置と移転前の建物配置は、おどろくほど一致することを注意しておきたい。

この地点の屋敷群は連結するように建ち並び、同族が暮らす屋敷群のようであるが、特に１ｂ・１ｃ号屋敷は主屋が軒を連ねており、関連性が見て取れる。この地点の屋敷群の立地についてはすでに述べたとおりであるが、最も窪んだ地点に１ｂ号屋敷があり、隣接する１ｃ号屋敷とは高さ80㎝の石垣で仕切られている。出入口は真田道から分岐した10号道に面している。屋敷面積は224.9㎡(68.2坪)で、主屋を敷地北側に寄せ、南東隅にカワヤを置いている。やや広い庭先には菜園(16.3㎡、５坪弱)があり、ここでも土地を有効利用しようとする姿勢が窺われた。井戸は現状で確認されておらず、隣家の井戸を共同利用したか、ミョウガ沢の水を利用したか、そのどちらかであろう。

主屋には竈や馬屋線上に内柱(掘立柱)があり、やや古い要素を残す土台建物である。建物規模は桁方向11.5m・梁方向7.00mを測る。建坪は80.6㎡(24.4坪)ほどで、建物南に戸口、建物内には土間・土座・客間・寝間(納戸)があり、広間型の３間取りとなっていた。戸口を入るとすぐ土間になり、馬屋がある。建物奥には竈・木組み遺構(調査時は洗い場と呼称)があり、建物隅に唐臼および支柱がある。戸口から馬屋北にかけての土間は化粧土が貼られていた。戸口左には奥行１間(３尺)の収納スペースが確認されており、そこには鉄鍋も置かれていた。

土間の上手側は、居間になっている。居間にはゴザが敷かれていたが、囲炉裏付近では樹皮が敷かれており、樹皮の上にゴザを敷いた土座であったことが分かる。土座と客間の境界は、柱材や板材等で仕切られていたが、囲炉裏北東隅で土座が狭まっていた。建物奥壁には端材を敷いたうえに板材２枚が重ね置かれていたが、位置的には台所に接しており、日常使用する厨房具等を仮置くスペースであったかもしれない。土座は、最終的に木組み遺構に続いているが、木組み遺構の周辺には端材が敷かれていた。ここでも端材の上に板材が置かれたのか分からないが、意図的であることだけは確実だろう。

囲炉裏北には掘立柱が立ち、鉤の手に足固め様の建築材で仕切られ、１間四方のスペースが確保されていたが、ここが収納スペースとして機能したのか、納戸として機能したのか明らかにしたいところであるが、現状で判断



第41図　１ｂ号屋敷全体図

写真11　建物奥に置かれた厚板材

できる材料はない。

居間には全面ゴザが敷かれていたが、上手側の客間にもゴザが敷かれていた可能性があり、二間続きの土座になる公算が高い。具体的にはゴザの痕跡こそ確認できていないが、①居間のゴザを剥したときと同じ樹皮状の痕跡が広がること、②囲炉裏に近い客間礎石コーナーに厚板材・曲げ物・端材が規則的に並んでいたこと、③客間中央に板材が直線的に並び、板材の並ぶライン上に杭が打たれること、④客間南西側にも厚板材があること、⑤客間中央の板列を境に整地面(床面)には高低差があり、妻側土壁に近い客間整地面には竹簀子があること、⑥寝間には大型のフネ2点が逆位に置かれ、板の間の可能性も検討してみたが、写真から見る限り、樹皮状の敷物が敷かれていたようで、板の間は導入されてないと考えている。建物下の調査では暗渠1・灰層の分布を確認している。暗渠は、2号建物囲炉裏を起点とするように確認されているが、その詳細については明らかにすることはできていない。同じく、灰層についても方形に広がっているというだけで、その性格については不明とせざるを得ない。

主屋南に続く建物は、掘立柱建物(桁行3.14m・梁行2.32m)で、埋設桶2が確認されている。埋設桶手前の空間には堆肥が置かれており、堆肥置場に使われたことが確実である。

＜2号建物＞(第41～52図、付図3、PL.19～32)

位　置　境川を渡り坂道をくだりきったところに、街道から左に入る10号道(第148図)がある。10号道は最終的に吾妻川へ続いていくが、2号建物は街道から10号道に入り、二軒目の建物ということになる。

規　模　桁行11.52m、梁行7.00m(建坪80.64㎡)

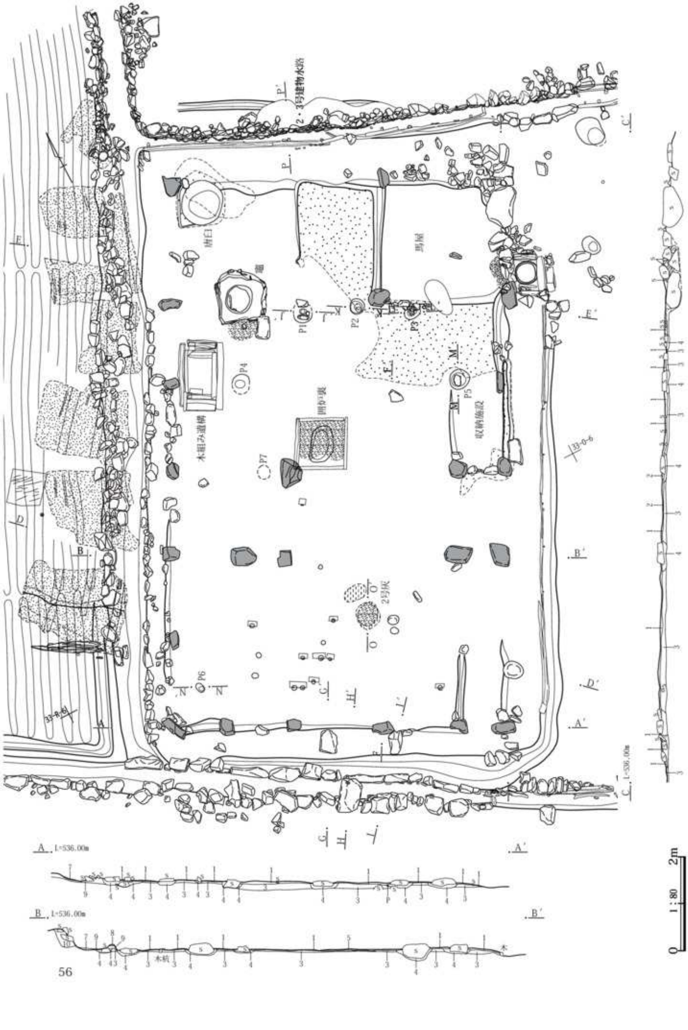
建物構造　竈付近に内柱を有する土台建物。建物の基本構造は居間が建物奥まで続く広間型となっているが、居間・客間とも土座となっており、それぞれが分割され、床構造が異なっていた。土座であるがゆえに部屋の空間利用が分かるデータとなっている(P380参照)。

建物の出入口は南側にあり、平入りとなっている。戸口を開けるとすぐ土間があり、馬屋・収納施設を兼ねたマキ置き場が両側にある。土間奥には竈があり、これに近接して木組み遺構がある。竈右隅には唐臼があり、土間の基本構造を備えているが、建物裏には土壁の痕跡が連続して残っており、この建物には勝手口がないことが判明した。

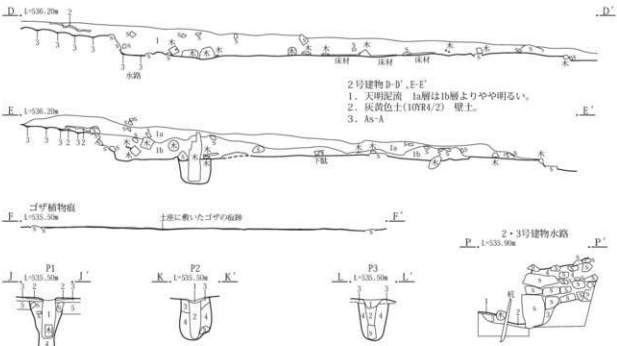
居　間(第42図、PL.23)　土間の上手側に囲炉裏付の居間があり、続いて客間となる。居間にはゴザが良好に残り、全面にゴザが敷かれていたものと思われる。居間は囲炉裏から奥が3尺ほど狭まり木組み遺構に接しているが、上手側の片隅が一間四方に仕切られ、居間とは別の空間が確保されていたほか、これに接した建物の奥には端材の上に厚板を置いたスペースがある(写真11)。この空間は台所に近く、厨房具の収納スペースとしても機能的に優れているが、詳細は分からない。居間は二間四方を占め、居間と客間の境界には板材が置かれていた。板材は計4枚があり、3枚が長さ90cm・幅15cm、1枚が長さ45cm・幅15cmほどである。居間と客間(座敷)は板戸で仕切られていてほしいが、板材には敷居を載せた痕跡はなく、はたして仕切られていたかどうか判断できない。建物前に目を転じてみると、ここにも収納スペースが1間幅で確保されていた。この空間は掘立柱を立てているが、土壁になるかどうかは判断できていない。これに続くスペースにはゴザが敷かれた痕跡はなく、図面には化粧土の範囲が示されているだけである。位置的には縁側ということになるが、ここでは土間としておく。

客　間(第42図、PL.20・25)　居間に続いて客間がある。客間は2間×2間ほどで、部屋の奥中央・右隅・手前側左隅の各所には24～42cm角の厚板材が置かれ、部屋分割の起点になっていた。部屋の奥や壁際には厚板が置かれていたが、厚板に直交させ板材を列状に並べ杭で固定、部屋を空間的に分割していた可能性が高い。また、上手側には竹簀子があり、これもまた杭で固定されていた可能性が高い。写真に残されていないが、図面には何本も並行して竹材が置かれていることから、部屋の片側(土間側)はゴザが敷かれ、客間の奥(妻側)には竹簀子が敷かれたのであろう。

さらに付け加えるなら、部屋の奥には厚板材と桶が置かれ、板材で固定されていたが、これに続いて端材が並んでいた(写真13)。部屋の中央北には、先端は二股に分かれた直径10cm弱の杭が打ち込まれていた(PL.32-8)。現状では端材の上には何も置かれていないが、居間ではこの上に厚板が載せてあり、厨房具類を置く絶好の空間


2・3号建物水路
唐臼
竈
馬屋
木組み遺構
囲炉裏
収納施設
2号灰
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A L=536.00m
B L=536.00m
1:80
0
2m

第42図　2号建物



2号建物D-D'、E-E'
1. 天明泥流　1a層は1b層よりやや明るい。
2. 灰黄色土(10YR4/2)　壁土。
3. As-A

2号建物A-A'～C-C'、G-G'～I-I'
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)　建物床面に堆積した化粧土。ローム粒子を含む。強く締まる。
2. 灰褐色砂質土(7.5YR4/2)　洪水起源の砂質土。酸化して鉄分が凝集してみえる。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/4)　炭化物を含み粘性に富んでいる。造成に伴う整地層に相当する。
4. 褐灰色土(7.5YR4/1)　粘性に富み、小角を含む。礎石を埋め込んだ際の掘り方の覆土。
5. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ローム粒子・小礫(1 cm以下)を多量に含む。粘性は弱い。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)　2号建物北側の水路内に堆積した砂質土。
8. 黒褐色土(7.5YR4/1)　ローム粒子混入。
9. 褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒子、角礫混入。
10. 褐灰色土(7.5YR4/1)　石垣構築時に詰めた入為的な埋め土で、小礫を含む。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1)　黄褐色土を少量混入するほか、礫小礫を含む。水路の掘り方を埋める。

2号建物、P1 A-A'
1. 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子を含む。下部に柱材が残る。
2. 浅黄色土(2.5Y7/4)　貼床化粧土。
3. 暗褐灰色土(7.5YG4/1)　建物造成後の整地土。強く締まる。
4. 褐灰色土(10YR3/2)　砂質土を主体としているが、若干粘質土を含む。
5. 褐灰色土(10YR3/2)　第6層に類似している。全体に酸化鉄が凝集する。

2号建物、P2 A-A'
1. 黄灰色土(2.5Y4/1)　粘質に富み、強く締まる。建物の床面に施した化粧土に相当。
2. 暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子混入。建物柱痕。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子が少量混入する。
4. 暗灰色土(N3/)　やや砂質で、しまりは弱い。埋土。

2号建物、P3 A-A'
1. 褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、礫(3～10cm)を含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性に富み、強く締まる。床面に施した化粧土に相当する。
3. 黒褐色土(10YR3/1)　酸化鉄の凝集が著しい、締まり弱い。建物の柱痕。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム土を多量に含む。柱材の埋め土。

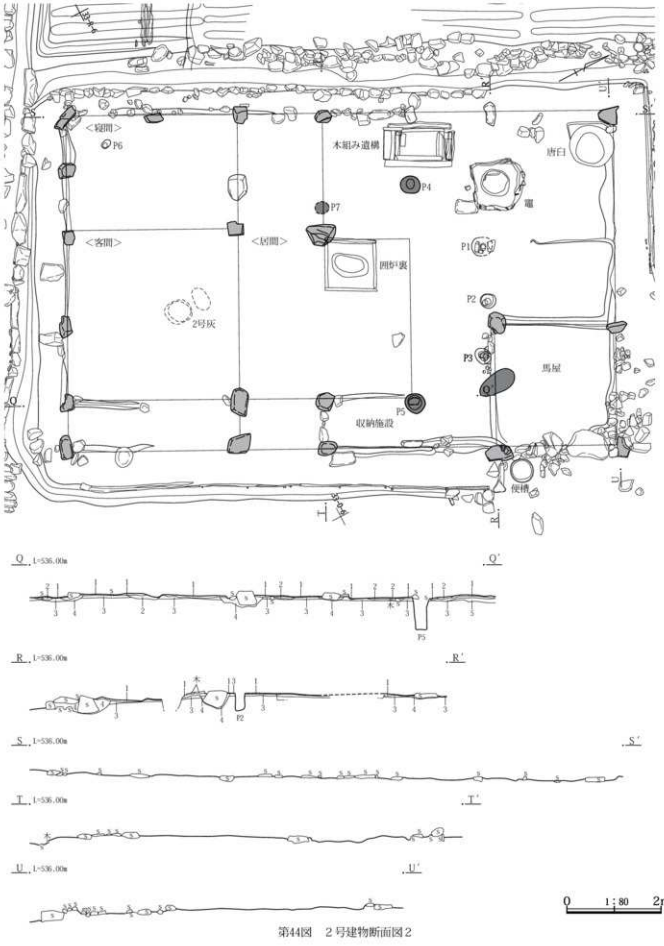
2号建物、P5 A-A'
1. 褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、礫(3～10cm)を含む。
2. 褐灰色土(10YR4/1)　砂質で酸化鉄が凝集する。1層に相似する。
3. 暗灰色土(N3/)　砂質で、大角礫を含む。

2号建物、P6 A-A'
1. 黒褐色土(7.5YR3/1)　ローム粒子を含む。
2. 黒色土(N2/)　粘性の富み、締まりには欠ける。下部に根石が残る。

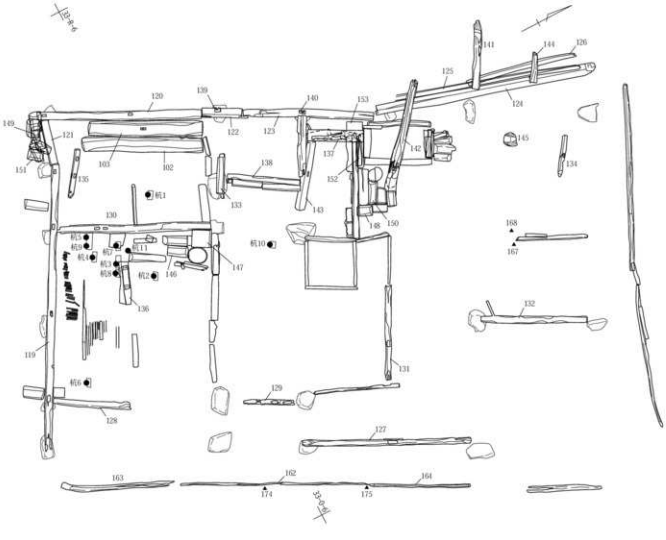
2号建物2号灰A-A'
1. 灰白色灰(2.5Y8/1)　灰層。炭化物を多量混入。
2. 黄灰色土(2.5Y4/1)　ローム粒子混入。建物の整地層相当。

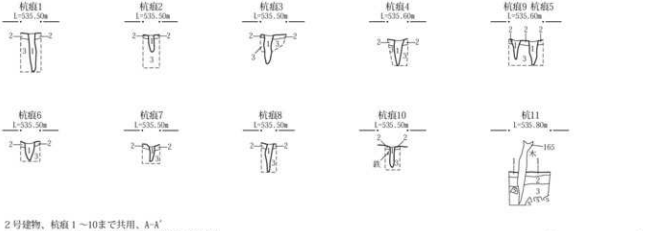
2・3号建物、水路A-A'
1. 黒色土(N2/)　砂質土、礫・木片を含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子混入。建物整地層相当。
3. 黒色土(N2/)　ローム粒子混入。やや砂質。
4. 黒褐色土(7.5YR3/1)　石垣および石垣の裏込め。

第43図　2号建物断面図1



第44図　２号建物断面図２





２号建物、杭痕１～10まで共用、A-A'
1．黒色土(CN1.5/)　杭が腐食して黒泥化したもの。
2．緑黒色土(5G2/1)　風化した小礫を含む。床面整形土。
3．黒色土(N2/)　粘性が強く、締まる。低地部堆積層か。
２号建物、杭11A-A'
1．黒褐色土(2.5Y3/1)　ローム粒子を含む。酸化鉄の沈着が著しい。建物床面(上床)に相当。
2．暗灰色土(N3/)　ローム粒子・青灰色土を含む整地層。
3．暗灰色土(N3/)　角礫を含む。低地部堆積層か。

第45図　２号建物建築材分布図、木杭断面図１

写真12　座敷床面の高低差と厚板材

写真13　板材で固定された桶

となっていた。ここにも、これに似た意図的空間を想定しておきたいが、詳細は不明である。

土　間(第42図、PL.29)　戸口から馬屋北側にかけて、綺麗に化粧された土間(PL.29-３・４)が確認されている。建物は土台建物とされるものであるが、内柱(３本)が併用されていた。このほか、柱穴２本が馬屋に並んで確認されているが、いずれも化粧された土間下の確認であり、泥流の発生時には機能していなかったものである。馬屋柱穴の軸線は竈開口部に続き、また、床下の柱穴２本は竈前面(焚口)のライン上に載り、当初から計画的に配置されたものであることが分かる。

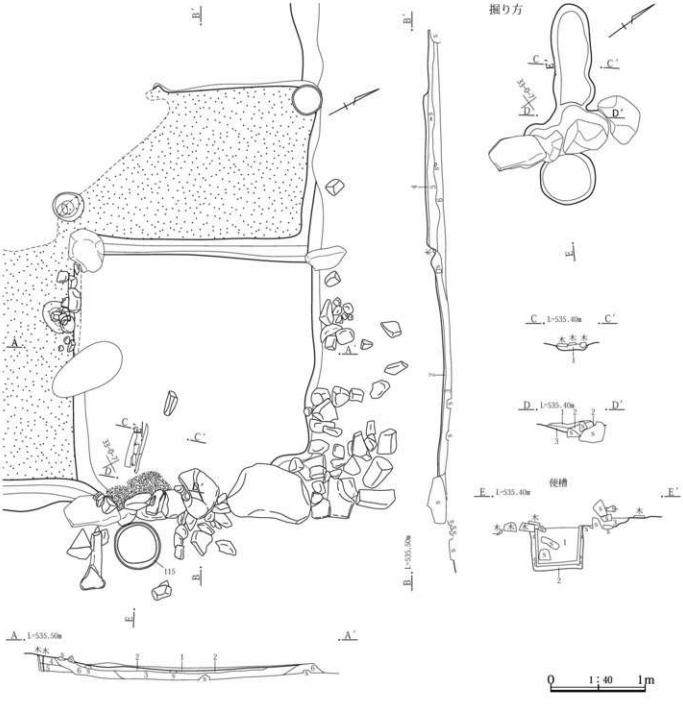
馬　屋(第46図、PL.28)　下手側土間の片隅にある。馬屋の柱間１間(2.6m)四方であり、土間側柱穴１本を除いてすべて礎石上に柱を立てている。掘立柱は建物奥の掘立柱とは異なり、戸口側に倒れていることが分かる(PL.25-７)。

馬屋は長軸2.62m・短軸2.58mを測り、形状は略方形状を呈していた。全面に敷き藁が敷かれ、馬屋中央は浅く溝状に窪み、し尿が埋設桶に流れるように意図されていた。馬屋前に埋設桶１があり、桶サイズは径0.45mを測る。１尺５分サイズの桶が使用されており、小便桶を兼用していたのかもしれない。

馬屋北側には、貼り床がある。調査所見には馬屋を埋め、土間とした可能性が指摘されているが、ここで注意しておきたいのは貼床下で確認された曲げ物(第51図87)で、床下に埋め込まれた理由が問われることになろう。曲げ物は径26cm・深さ５cmを測り、底板はない。機能的に解釈できないが、馬屋に係わる遺物とは考え難い。建物は土台建物、居間や客間は土座となっていた。居間と客間は框で仕切られただけであるが、客間の北東隅に桶があり、馬屋北床下の曲げ物も貼り床の隅である点で共通、なにがしかの関連がある可能性を指摘しておきたい。

写真14　馬屋北の貼床下から出土した曲げ物

柱　穴(第42・43図)　柱穴は６本(P1～P6)が確認されている。このほか、囲炉裏北に柱穴１本がある。柱穴(P7)は図面になくデータ化されていないが、囲炉裏枠木の延長上に柱材が出土しており、これに伴う柱穴である。この柱穴を含め７本中６本が土間に、１本が寝間にある。竈に近接している柱穴(P1)は竈焚口の延長上にあり、P2・P3も同じライン上に続いているが、P2・P3は貼り床の下にある。P1～P3の柱穴が同時に機能していないのは明らかであるが、P1～P3が馬屋の境界に接しているのも事実であり、調査所見にあるとおり馬屋北の貼り床までを初期馬屋範囲とする見解も否定できないであろう。P4・P5は戸口左から続く同じライン上の柱穴で、P4は竈および木組み遺構に、P5は戸口に近い位置にある。柱穴(P1～P5・P7)サイズは径36～42cm・深さ42～56cmに収まり、P1～P3には柱材(径12cm)が残存した。P6は寝間の壁際に置かれたフネの側縁を延長した位置にあり、機能的



２号建物馬屋A-A'・B-B'
1．黒褐色土(10YR3/2)　腐敗した植物痕(馬屋敷き藁？)
2．黒色土(7.5YR2/1)　ローム粒子混入。小礫(約１cm)を含む。
3．黒褐色土(10YR3/1)　ローム塊を混入するほか、小礫(３～５cm)を含む。
4．黄褐色土(2.5Y5/4)　強く締まる。建物床面に相当。
5．黒褐色土(7.5YR3/1)　ローム塊を多量に含む。小礫(0.5cm)を含む。
6．黒色土(2.5Y2/2)　粘質土で、小礫少量を含む。

２号建物馬屋C-C'
1．黒色土(N2/)　腐食した植物痕。

２号建物馬屋D-D'
1．明黄褐色土(10YR6/5)　建物壁土の崩落土。
2．暗褐色土(7.5YR3/3)　ローム粒子を含む。粘性に富む。
3．黒色土(7.5YR2/1)　褐色土を含む、腐食した植物繊維がベースとなり、粘性に富む。

２号建物便槽E-E'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、角礫(小～大)を多量に含む。
2．黒色土(2.5Y2/1)　ローム粒子を多量混入する。
3．黒色土(2.5Y2/1)　ローム粒子を含む。

第46図　２号建物馬屋

であることだけは確実だが、それがどのような役割を果したのか、具体的には分からない。

竈(第47図,PL.27)　竈は長軸1.10m・短軸1.08mを測り、鉄釜を据える開口部の径は0.42～0.48mほどである。焚口前は灰を掻き出し、浅く窪んでいた。竈芯材に大小の河床礫を用い、これを組み上げて粘土で被覆するタイプの竈である。

竈は、①まず掘り方を掘り、礫を敷き詰める。②奥壁を決め河床礫を置き、続いて側石に河床礫を並べ、最終的に角柱状に加工した袖石を置く。③引き続き天井石を載せ、天井石に合せるように隙間に割石を詰める。そして、最終的に粘土で覆い竈を完成させたのであろう。

竈の焚口は上手側に傾いており、泥流の影響が明らかであった。被覆した竈本体には杭跡があり、側面に板材を添え杭で固定したのであろう。最終的に被覆した粘土を取り除いたところ、側面は修復の痕跡があり、杭うちされた板材が出土しているが、樹種については記載されておらず明らかでない。竈芯材には河床礫を用いたようであるが、写真から見る限り、安山岩類か凝灰岩類と見られる。

囲炉裏(第48図、PL.27)　方形に組まれた木枠が整地面に残されていた。

囲炉裏の内法は、0.94mを測る。竈に近い土座の北東側が隅切され、そこに囲炉裏が切られており、動線を巧く考えた配置となっている。使用面には木片や消し炭が散乱していた。使用面以下の調査では、①掘り方の長軸に角材２本を並べ、②これに直交するよう板材10本を渡した上に厚さ６cmの扁平礫を置いたのち、③これを粘土で固定、最終的に灰で覆い囲炉裏を完成させていることが判明した。偏平礫を置き、これを粘土で覆い灰を厚く被せることで、囲炉裏下部構造が燃えてしまわないよう配慮しているが、結果的に木製構造物は焼け落ちていた。

囲炉裏掘り方に木製の構造物を採用したのは珍しい対応と言えるだろうが、囲炉裏掘り方に礫を埋め込む手法の代替という見方も可能である。なぜこうした手法を採用したのであろうか。これについて考えてみたい。

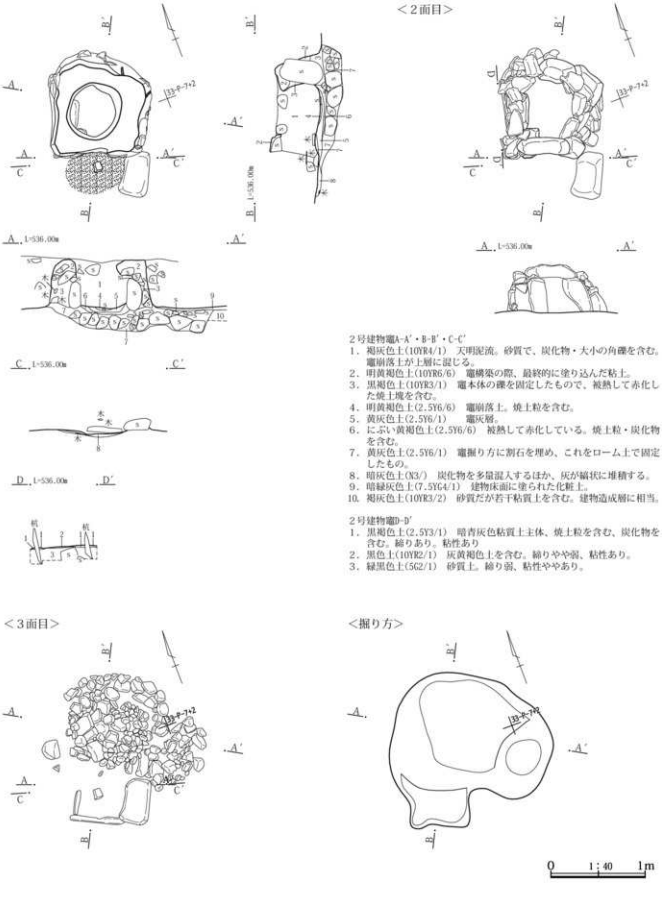
囲炉裏下部に板材を用いる手法を見た印象は、板材が燃えてこれでは機能しないというものであり、実際構造物は燃え落ちていた。このことについて、特に調査所見は残されていないが、下から湧く水処理の方策として、この構造が採用されたのではないかと見たい。すなわち、囲炉裏に取り付けた木製構造物のレベルが暗渠(第50図)のレベルより板材の厚み分だけ上にあり、暗渠が排水溝として機能したとする考え方である。暗渠は囲炉裏から戸口を通りニワ先に抜けており、その間10cmほど高低差がある。これがどの程度効果的であったか明らかでないが、すくなくとも囲炉裏の使用には耐えたということであろう。

写真15　灰層下から出土した大形礫と栗石

この囲炉裏南西側に１号灰の分布があり、これを掘り進めたところ、囲炉裏掘り方に比べてひと回り大きな土坑(長軸1.8m・短軸1.2m)が重複した。平面図には大形礫のみが図化されており、礎石と判断したのだろうが、西宮地区囲炉裏下部構造に大きな平石を置く例が多く、囲炉裏の重複となる可能性を指摘しておきたい。

囲炉裏に近接した礎石をよくみると、①囲炉裏調査前にはその輪郭が隠れ、まずは灰層が見えること、②灰層の下の礫が粘土で覆われていないこと、③土坑中央に平石がありこれが礎石に見えたのも、囲炉裏とすることを躊躇させたのであろうが、その他の礎石には栗石がないことを考えれば、囲炉裏としての可能性も検討する価値があるのではないだろうか。囲炉裏下部構造には、拳大の角礫を充填するものと、中央に大型の偏平礫を置き周辺を小型角礫が埋めるものがある。土坑出土の大型礫を礎石の下部構造とすることもできるだろうが、囲炉裏・下部構造としての可能性が否定できないように思う。

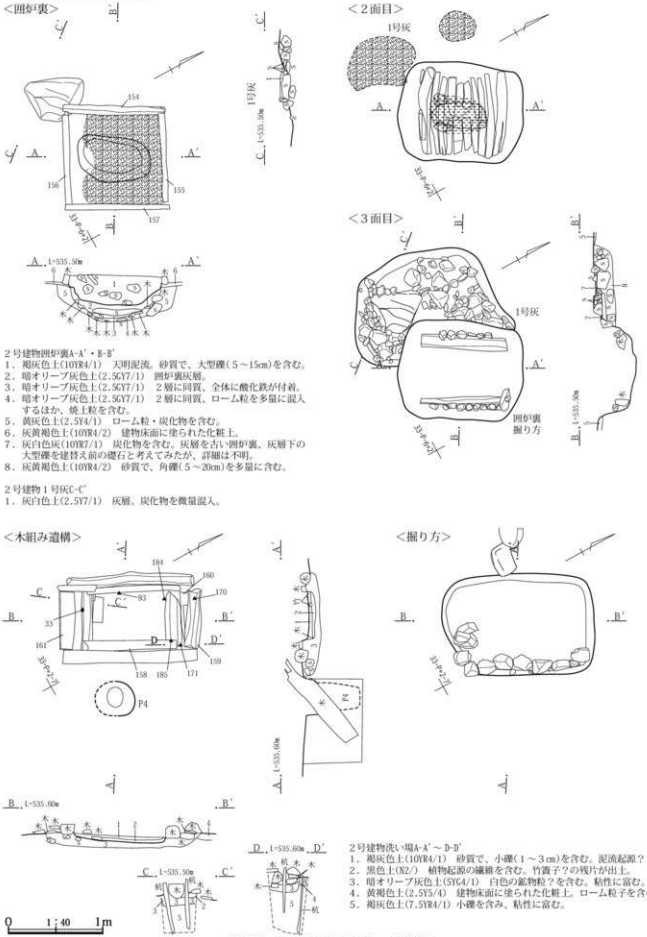
囲炉裏隅に薬罐が出土したほか、その対角線上に厚板が置かれていた(第52図42)。厚板(長さ35cm・幅15cm)は厚さ５cmほどであり、灰に埋もれることはなかったと思われる。



2号建物竈A-A'・B-B'・C-C'
1. 褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質で、炭化物・大小の角礫を含む。竈崩落土が上層に混じる。
2. 明黄褐色土(10YR6/6)　竈構築の際、最終的に塗り込んだ粘土。
3. 黒褐色土(10YR3/1)　竈本体の礫を固定したもので、被熱して赤化した焼土塊を含む。
4. 明黄褐色土(2.5Y6/6)　竈崩落土。焼土粒を含む。
5. 黄灰色土(2.5Y6/1)　竈灰層。
6. にぶい黄褐色土(2.5Y6/6)　被熱して赤化している。焼土粒・炭化物を含む。
7. 黄灰色土(2.5Y6/1)　竈掘り方に割石を埋め、これをローム土で固定したもの。
8. 暗灰色土(N3/)　炭化物を多量混入するほか、灰が縞状に堆積する。
9. 暗緑灰色土(7.5YG4/1)　建物床面に塗られた化粧土。
10. 褐灰色土(10YR3/2)　砂質だが若干粘質土を含む。建物造成層に相当。

2号建物竈D-D'
1. 黒褐色土(2.5Y3/1)　暗青灰色粘質土主体、焼土粒を含む、炭化物を含む。締りあり。粘性あり
2. 黒色土(10YR2/1)　灰黄褐色土を含む。締りやや弱、粘性あり。
3. 緑黒色土(5G2/1)　砂質土。締り弱、粘性ややあり。

第47図　2号建物竈

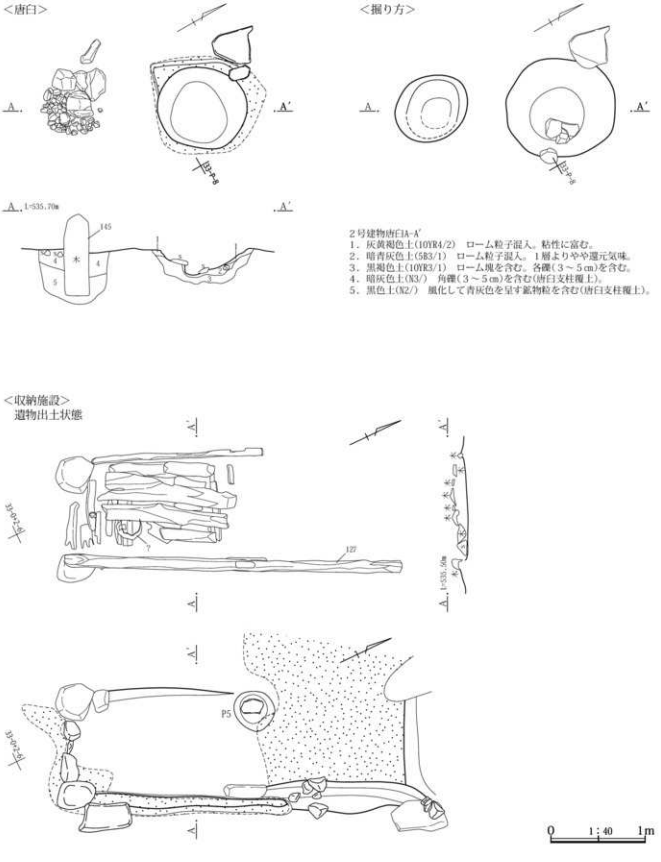


２号建物囲炉裏A-A'・B-B'
1．褐灰色土(10YR4/1)　大明泥流。砂質で、大型礫(５～15cm)を含む。
2．暗オリーブ灰色土(2.5GY7/1)　囲炉裏灰層。
3．暗オリーブ灰色土(2.5GY7/1)　２層に同質、全体に酸化鉄が付着。
4．暗オリーブ灰色土(2.5GY7/1)　２層に同質、ローム粒を多量に混入するほか、焼土粒を含む。
5．黄灰色土(2.5Y4/1)　ローム粒・炭化物を含む。
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　建物床面に堅られた化粧土。
7．灰白色灰(10YR7/1)　炭化物を含む。灰層を古い囲炉裏、灰層下の大型礫を建替え前の礎石と考えてみたが、詳細は不明。
8．灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質で、角礫(５～20cm)を多量に含む。

２号建物１号灰C-C'
1．灰白色土(2.5Y7/1)　灰層。炭化物を微量混入。

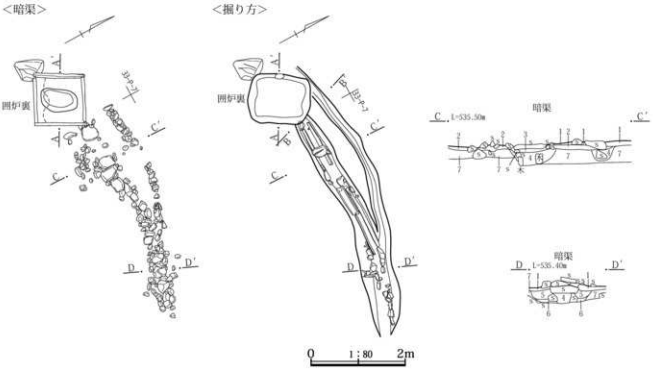
２号建物洗い場A-A'～D-D'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質で、小礫(１～３cm)を含む。泥流起源？
2．黒色土(N2/)　植物起源の繊維を含む。竹置子？の残片が出土。
3．暗オリーブ灰色土(5GY5/4)　白色の風物粒？を含む。粘性に富む。
4．黄褐色土(2.5Y5/4)　建物床面に堅られた化粧土。ローム粒子を含む。
5．褐灰色土(7.5YR4/1)小礫を含み、粘性に富む。

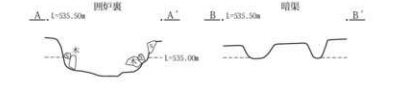
第48図　２号建物１号囲炉裏・木組遺構



２号建物唐臼A-A'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子混入。粘性に富む。
2．暗青灰色土(5GB3/1)　ローム粒子混入。１層よりやや還元気味。
3．黒褐色土(10YR3/1)　ローム塊を含む。各礫(３～５cm)を含む。
4．暗灰色土(N3/)　角礫(３～５cm)を含む(唐臼支柱覆土)。
5．黒色土(N2/)　風化して青灰色を呈す鉱物粒を含む(唐臼支柱覆土)。

第49図　２号建物唐臼断面図(上)・収納施設(下)





２号建物、暗渠A-A'・B-B'
1．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　建物整地層に相当する。
2．褐灰色土(10YR6/1)　ローム土多量混入。やや暗い色調を呈しているが、１層と同質で建物整地層に相当するものと思われる。
3．暗褐色土(10YR3/3)　ローム土を含む。鉄分が凝集する。
4．暗青灰色土(5PB3/1)　上層に小礫を多量に含む。全体的に還元気味で、本来的には排水機能を果したものと思われる。７層に相似。
5．褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒子を含む。水路に側石を設置したのち、これを埋め側石の上に扁平礫を載せ暗渠としたもの。
6．褐色土(7.5YR4/3)　ローム塊を含む。
7．褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒子を含む。

２号建物３号灰A-A'
1．褐灰色土(7.5YR4/1)　灰層。炭化物少量混入。粘性あり。

２号建物４号灰A-A'
1．褐灰色土(7.5YR4/1)　灰層(炭化物多量混入)。粘性あり。

第50図　２号建物暗渠・灰層

暗　渠(第50図、PL.30)　囲炉裏に端を発し、戸口を通り、屋外へ続いている。暗渠は囲炉裏南壁と東壁に取り付いているが、南東から南へ徐々に方向を変えている。これは旧地形を踏まえたもので、地形に逆らわず暗渠としたことで排水に成功したようである。暗渠の規模は長さ4.56m・幅0.2～0.5mを測り、囲炉裏東から続く暗渠には溝に礫を詰めただけ、囲炉裏南から続く暗渠には礫や伐採木を並べ、上から扁平礫を被せるなどしていた。暗渠は囲炉裏接続部の標高535.11mから発し、ニワ先(標高535.02m)で痕跡が消えている。４mで10㎝が下がるだけの傾斜であり、湧水は染み出す程度であったということかもしれないが、暗渠としての機能は果したということだろう。それにしても建物を建てるには立地条件(水はけ)が悪過ぎる。

木組み遺構(第48図、PL.24)　竈左側にある。木組み遺構の規模は長軸1.5m・短軸0.94m(内法：長軸0.94m・

短軸0.5m)を測る。深さ0.15mを掘り込んだだけであり、土坑底面は建物南側に若干傾斜するように見える。機能的名称として「洗い場」「流し場」「ムロ」の名称で呼ばれているが、機能的には分からないことが多い。便宜的に用いるなら、それもいいかもしれないが、ここでは木組み遺構としておく。木組み遺構の竈側短辺は竈焚口脇の偏平礫短辺と同じライン上にあり、何か意味がありそうである。泥流下建物の竈脇には木組み遺構が併設されていることが多く、板簀子や竹簀子を被せて使用することが判明している。建物外に排水する構造になっておらず、「洗い場」「流し」とするのは難しいようであるが、調理の主役が囲炉裏であるというなら、木組み遺構は竈に関連する施設であることは確実で、竈には囲炉裏とは異なる使用法があったということだろう。

唐　臼(第49図、PL.29・30)　建物奥の北東隅にある。唐臼は引き抜かれ、土坑が痕跡として残されているだけであるが、支柱が芯々で1.2mのところにある。支柱は長さ0.86mほどで、高さ36cmのところに枠を固定して使用していた。地中には0.5mを埋め、礫3点を並べ支柱を支えていた(PL.29-5)。

収納施設(第49図、PL.25)　収納施設は戸口左にあり、桁方向0.9m・梁方向1.8mを測る。面積的には1.62㎡(約1/2坪)と狭い。仮に、薪を単純に積み上げるとすると、人の背丈まで積み上げたとして2.5㎥弱の薪を収納することができる。

収納施設では端材の上に伐採木を並べており、明らかに長辺側に伐採木を並べようとしていたが、同時に鉄鍋も伏せた状態で置かれていた。鉄鍋は、偶然そこに紛れ込んだというより意図的である。薪は軒下に積み上げるのが通例であったろうが、すでに建物西の軒下に5m近い伐採木が集積されており、端材については建物内に収納したということかもしれない。

当初は調査所見同様に木材集積スペースと捉えてみたが、鉄鍋(第384図49・50)が出土しており、ここでは便宜的に収納施設として報告しておく。

灰の分布(第42・43・48・50図)　下層調査を含め、灰の分布が数ヶ所で確認されている。いずれも囲炉裏を想起させるものであったが、灰層を断ち割って確認した結果、囲炉裏として認定できるものはなく、単なる灰の分布域として捉えることとした(1～4号灰)。

遺物の出土状態(第45・51・52図、PL.31・32)　建築材が良好な状態で出土したほか、竈や囲炉裏周辺部、戸口左の収納施設周辺に特徴的な遺物分布がある。総じて遺物の出土量が少なく、遺物分布からどこまで使用実態を復元することができるか不安だが、上記建物施設ごとに遺物分布の概要を記していきたい。

まず、戸口および周辺域の遺物分布をみてみよう。戸口を開けるとすぐ左が収納施設になる。長さ35～80cmの板材や角材が梁方向に置かれ、これに直交するように長さ1.3m前後の伐採木が置かれていた。こうした在り方を踏まえれば、機能的には囲炉裏等で使う薪の集積場ということになろうが、鉄鍋が伏せた状態で出土していることから、収納施設としての可能性を検討してみた。

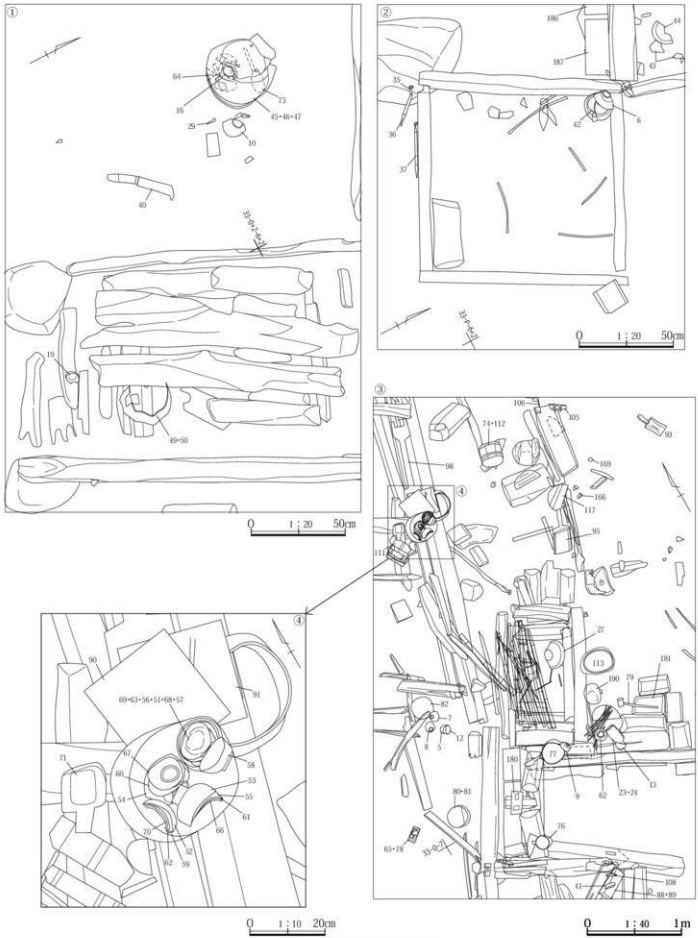
鉄鍋は、板材の上に置かれた状態(写真16矢印)で出土した。端材数枚を土間に並べているが、これは収納物が直接土間に触れるのを避けるためである。通常、薪を集積する際は横木を渡し、これに直交するよう薪を積んでいくが、ここでは施設の左側は梁方向に、右側は桁方向に端材を並べ、この上に伐採木を置いている。これとは別に、伐採木の上には板材3枚があり、それぞれが伐採木に直交ないし並行して平坦面を確保したという推測も可能な訳である。そうして得られた平坦面に置かれたのが鉄鍋(第384図49・50)であり、収納施設北の銚(第382図40)も収納物として浮上してくるのではないか。

なお、収納施設北の鉄鍋(第52図47)は底部を上に出土しているが、この鉄鍋を取り上げたところ、中にシャモジと碗があり、それとともに黄色有機物が残されていた。鉄鍋に残された雑炊という可能性もあるだろうが、内容物に関する記載がなく、詳細は不明である。仮に、雑炊ということになれば、囲炉裏に掛けた鉄鍋ということになる。あくまでも可能性に止まる指摘だが、江戸時代の紀行文には囲炉裏の切られた居間の隅に道具類が描かれており、現在的な収納概念とは異なる可能性がある。

第52図②には、囲炉裏周辺の遺物分布を示した。囲炉裏の隅には薬罐が、枠木に接しキセルが出土したほか、金属器(蓋)が囲炉裏北東側に出土している。1号建物と同様の傾向が確認されたものと考えている。

竈には木組み遺構が近接しているが、ここにも遺物が集中した。屋房の中心的存在であり、当然と言えば当然だが、竈まわりには桶類の出土が多く、土間と土座の境

第51図　２号建物遺物分布図１



第52図　2号建物遺物分布図2

写真16　居間南にある収納施設

界には陶磁器類の出土が多い。木組み遺構の性格は不明だが、その周辺には端材が敷かれており、端材の上には道具類が置かれることもあったのであろう。

屋外には鉄鍋や完形の陶磁器類が出土しているが、鉄鍋は竈北の延長線上にあり、完形の陶磁器類は土間と土座の境界延長線上にあるというのも、遺構と遺物の関係から考えるなら、当然ということができよう。

第52図④には、漆椀出土の微細図を示した。出土地点は建物北の石垣付近で、ザルに入れた漆椀が出土した。漆椀の出土地点は寝間の北側に当たり、石垣に阻まれて散逸を免れたものである。泥流で流された遺物の移動は想定より小さいという所見に従えば、本来の収納位置は寝間付近ということになろうか。

＜**10号建物**＞（第53～56図、PL.33）

位　置　屋敷敷地内の南東隅にある。この建物に接して１ｃ号屋敷のカワヤ（９号建物）が溝を挟んで建つ。

規　模　桁行3.46m、梁行2.40m（8.3㎡）

建物構造　掘立柱建物である。柱穴８本からなり、妻側から1.5m付近で仕切られ、埋設桶があるカワヤ部分と、これに続く堆肥置場からなる。建物の東側と南側には水路が走り、石垣により護岸されていた。

柱穴は直径24㎝・深さ38㎝（P1～P8の平均値）ほどで、東側柱穴が深く大きい。８本中６本（P1～P4・P7・P8）に柱材が残り、このうち数本は泥流で押された状態で出土した。掘立柱には足固め用の土台が取り付き、壁は茎を編み込んだ草壁（PL.38－８）が想定されよう。

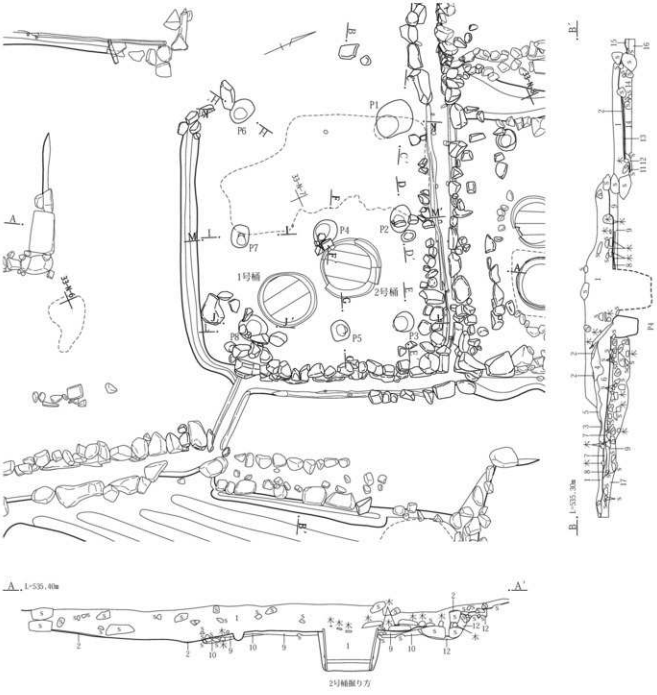
堆肥置場は境界に伐採木を埋めて、床面を整えているが、カワヤと堆肥置場の境には径６㎝程度の枝材を連続して並べ、これによりスペースが仕切られていた。埋設桶の置き方、敷地や建物配置からみるかぎり、カワヤと堆肥置場の仕切が切れる建物西側から出入したものと思われる。

埋設桶（第55図、PL.33）　埋設桶２がある。桶サイズは底径75㎝の桶を使用している。中央付近に埋設された桶を２号埋設桶、やや手前に埋設された桶を１号埋設桶として調査を進めた。埋設桶は、厚板を載せた状態で確認されているが、２号埋設桶の上面には薄板が井桁状に組まれ、その上に厚板が置かれていた。

通常カワヤには厚板２枚を渡して使用（通称「二本橋」と呼称）したようであるが、２号桶は塞がれて使用できない状態にあった。これに対し１号埋設桶は厚板１枚が失われているが、桶が塞がれておらず、使用可能な状態になっていた。

床　面　床面には植物遺存体が厚く残り、良好な状態で確認されている。植物遺存体は堆肥置場の対角線奥に厚く堆積しており、こうした在り方からすると堆肥の管理や搬出等は建物西からということになろう。堆肥置場側の床面がカワヤに向け傾斜していたほか、カワヤ部分も手前側に若干傾斜する傾向がある。床面を掘り下げるとすぐ石が厚く敷かれていることがわかり、さらにこれを掘り下げたところ、窪地となることが判明した。その形状は楕円形状を呈し、規模は長軸2.32m・短軸1.64m・深さ７㎝ほどである。中央付近には、長さ２m弱の材が並行して置かれ、その端部には南東に方向を変え長さ１mの材が続き、これを土止め用材とした排水構造が確認できたほかに、建物北と西に雨落溝が廻っていることが明らかとなった。建物面積は8.3㎡ほどで、カワヤ・堆肥置場とも約４㎡と、面積的には極めて拮抗していた。10号建物の後には主屋（２号建物）が迫り、１m弱しか離れておらず、これ以上スペースを割ける状況になかったようで、この建物北には板材２枚（第56図）が置かれ、主屋の馬屋桶やカワヤ堆肥置場に水が入り込まないよう配慮されていた。

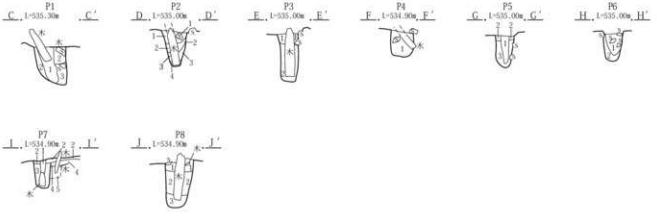
雨落溝　泥流直下では建物東と南に水路があり、建物西に典型的な雨落溝がある。建物から水路までは0.75m、雨落溝までは0.90m離れている。これに対し、掘り方の調査で確認した雨落溝（第56図右下）は0.45mと建物に近い。この雨落溝に並んで伐採木２本が出土しており、溝



10号建物A-A'・B-B'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。
2．As-A
3．明黄褐色土(10YR6/6)　ローム質。壁土崩落土に似る。
4．暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を含む。粘性あり。上面にAs-Aの薄層が堆積する。
5．黒色土(10YR2/1)　有機質起源の腐植土を主体とする。葉などが多量に含まれる。粘性に富む。
6．黒褐色土(10YR3/2)　有機質起源の腐植土を含む。粘性に富む。
7．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子・炭化物を含む。強く締まる。
8．黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子を含む。
9．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　ローム粒子を含む。しまりあり。
10．灰黄色土(10YR4/2)　上層に角礫を多量混入する。下層には排水機能が果せるよう材を並べる。
11．褐色砂(7.5YR4/3)
12．黒褐色土(2.5Y3/1)　ローム粒子混入。粘性は強い。
13．褐色土(10YR4/4)　強く締まる(上面は10号道)。
14．暗褐灰色土(7.5G4/1)　砂質で、礫を多量に含む。
15．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　炭化物を含む。As-A下の畑耕土。
16．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　炭化物を含む。15層よりやや明るい。
17．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を多量に、角礫を含む。

0　1:60　2m

第53図　10号建物



10号建物P1A-A'
1．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄褐色土を含む。小礫少量混入。
2．黒褐色土(10YR2/2)　1層より色味は暗い、黄褐色土を含む。
3．黒褐色土(10YR3/2)　小礫を含む。

10号建物P2A-A'
1．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ボソボソして、しまりは弱い、柱痕。
2．褐灰色土(10YR4/1)　カワヤ貼り床。しまりは強く、粘性あり。
3．黒褐色土(10YR3/1)　粘性に富み、黄褐色土を含む、しまりあり、粘性強。
4．黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子を含む。

10号建物P3A-A'
1．黒褐色土(10YR3/1)　カワヤ貼り床。白色軽石を含む。粘性あり。
2．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄褐色土を含む、小礫を含む。粘性に富む。柱穴埋め土。

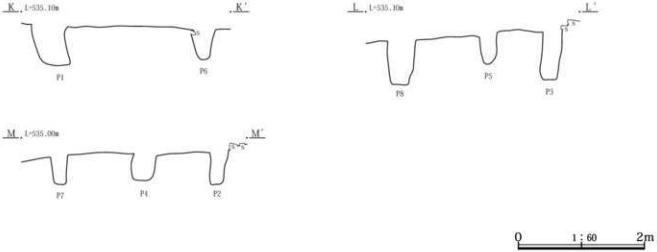
10号建物P4A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　カワヤ貼り床。炭化物のほかに小礫をふくむ。

10号建物P5A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。角礫(10～20cm)を含む。粘性は弱い。
2．黒褐色土(10YR3/1)　屋や砂質で、底面に木片を含む。締り弱、粘性は弱い。柱穴埋め土。
3．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子を含む。

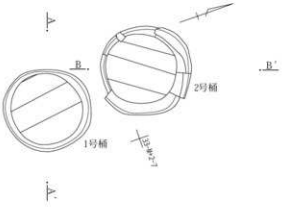
10号建物P6A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。角礫を含む。
2．黒褐色土(10YR3/2)　上層に黄褐色土を含む、粘性は強い。柱穴埋め土。

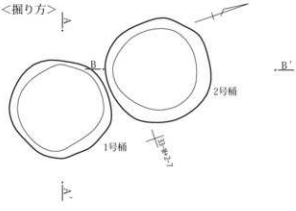
10号建物P7A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。角礫を含む。
2．灰黄褐色土(10YR4/3)　にぶい黄橙色粒を含む。粘性あり。柱穴埋め土。
3．黒褐色土(10YR3/2)　2層と同質だが、2層よりもしまりは強く、粘性も強い。
4．暗灰褐色土(N3/1)　小礫を含む。整地層。
5．暗灰褐色土(N3/1)　小礫を含む。

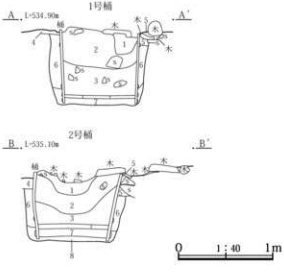
10号建物P8A-A'
1．黒褐色土(7.5YR3/1)　天明泥流。小礫を含む。
2．黒褐色土(10YR3/1)　灰白色軽石を含む。上層に酸化鉄が付着する。粘性あり。柱穴埋め土。
3．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄褐色土を含む。柱穴埋め土。



第54図　10号建物柱穴断面図



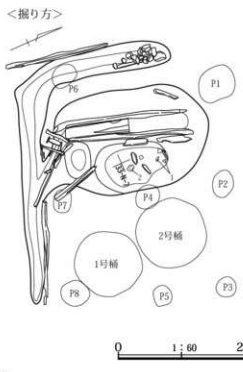




10号建物１号桶A-A'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　天明泥流。小礫(１～５cm)を含む。粘性ややあり。
2．黒褐色土(10YR3/1)　天明泥流。砂質で、角礫(10～15cm)を多量混入する。しまり・粘性共に弱い。
3．黒褐色土(10YR3/1)　天明泥流。小礫をふくむ。砂質土と粘質土が混じる。底面付近の粘性が強い。
4．青灰色土(5GB5/1)　カワヤ貼り床。粘性に富む。現状は還元され青味を帯びているが本来はローム土によるものと思われる。
5．黒褐色土(10YR3/2)　角礫を含む。鉱化鉄が付着。粘性あり。カワヤ貼り床。
6．暗灰色土(N3/)　桶の埋め土。風化して青味を帯びた軽石粒？を含む。
7．黒色土(10YR2/1)桶の埋め土。締り弱、粘性あり。

10号建物２号桶A-A'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　天明泥流。小礫(１～５cm)を含む。粘性ややあり。
2．黒褐色土(10YR3/1)　天明泥流。砂質で、角礫(10～15cm)を多量混入する。粘性、しまりとも弱い。
3．黒褐色土(10YR3/2)　砂質土と粘質土の混土層。底面付近は黒色有機質土となり、粘性が強い。
4．青灰色土(5GB5/1)　カワヤ貼り床。粘性・しまりとも強い。
5．黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色粒を多量に含む。粘性・しまりあり。
6．暗灰色土(N3/)　埋設桶埋め土。風化して青味を帯びた軽石粒？を含む。
7．黒色土(N2/)　埋設桶埋め土。６層と同質だがやや暗い。小礫を含む。粘性は強く、しまりは弱い。
8．黒色土(10YR2/1)　埋設桶埋め土。締り弱、粘性あり。

第55図　10号建物１・２号桶



第56図　10号建物遺物出土状態

の土止め材として使われたことが明らかであった。同様な出土状態を示す材２本が建物東にあり、これも水路脇の石垣崩落防止用の伐採木を木杭で止めたものである。

所　見　10号建物は、カワヤと堆肥置場からなることが判明した。このほか、カワヤの使用状況、堆肥を作る過程、壁構造など、貴重なデータが得られた。雨落溝の在り方から屋根の付け替え等が行われた可能性を否定するものではないが、その詳細を明らかにすることはできなかった。

堆肥置場の下部窪地については、先にも述べたように、窪地形状を呈し、中央付近には溝を配し、排水機能を有することが判明した。遺構を見て、馬屋窪地が浮かび、屋外で馬を飼育することも考えてみたが、埋設桶が確認できていないことや、これまでそうした事例は確認されていないことから、現状で窪地は堆肥置場の機能性を高める工夫、施設と考える。

＜周辺遺構＞　屋敷を構成する建物は石垣や水路で区画された中にあり、石垣や水路が敷地を守る役割を果していた。建築材等が多量に出土していることからも分かるように、屋敷は排水には相当に気を使っていたようで、修繕箇所も目立つ。屋敷に入る10号道は幅３尺にもならない細道だが、屋敷の出入口は２間弱を確保しており、ニワも石垣を築き広く確保していた。この石垣の前には収穫物や秣などを干す空間と菜園がある。以下、これらについて概要を記しておく。

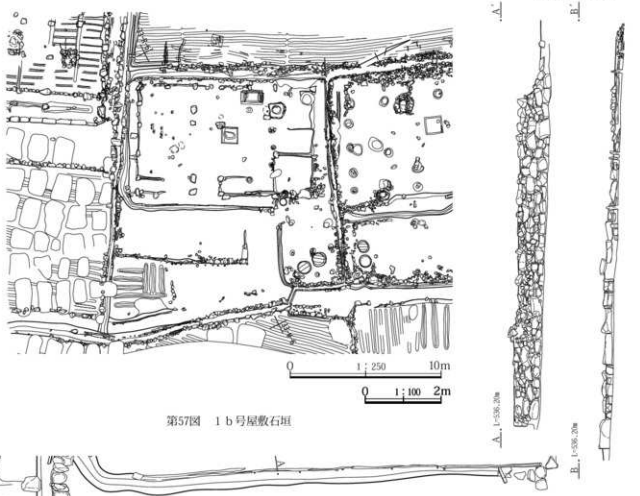
石垣・水路（第57図、PL.19）　敷地は１ｃ号屋敷側が高く、１ａ号屋敷側に下がる傾向にある。ここでは、１ａ－１ｂ号屋敷・１ｂ－１ｃ号屋敷間の石垣と水路について概要を記す。

１ｂ－１ｃ号屋敷間の石垣は高さ0.8mを測り、石垣下部に大型礫を横位に置き、面合せをしている。屋敷奥に比べて、屋敷手前では意識的に目がとおるように石垣を積んでいた。石垣の手前側は１ｂ号屋敷となり、石垣が低く積まれている。この石垣前面には板材を挟む程度の隙間をあけて石垣の崩落を防止するため木杭が打たれていた。

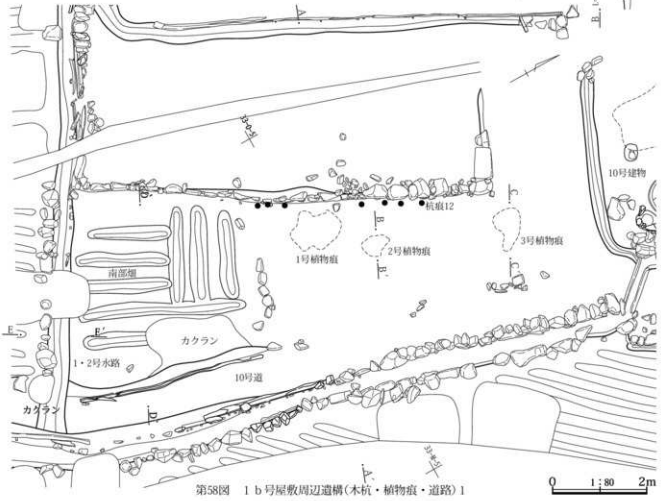
１ａ－１ｂ号屋敷間の水路は幅20cm、深さ15cm前後を測る。水路として機能したものであるが、建物手前側で水路の壁体が崩落しており、これに伐採木を当て木杭で止めていた。水路には途中偏平礫を渡し、隣家（１ａ号屋敷）へ渡る通路がある。

ニワ・植物遺体（第58図、PL.19）　主屋には主屋（雨落溝）－石垣間に26.5㎡のニワがあり、石垣を挟んで石垣の下にも別のニワ（12.8㎡）がある。都合40㎡弱だが、ニワとしては中間的なサイズである。石垣下のニワには、植物遺体の集中箇所が３ヶ所で確認されている。道際にはAs-Aが確認されたということであるが、植物痕付近ではAs-Aが確認できていないという。所見には屋根で覆われていた可能性が指摘されている。サンプルがなく、植物種等は確認できていない。

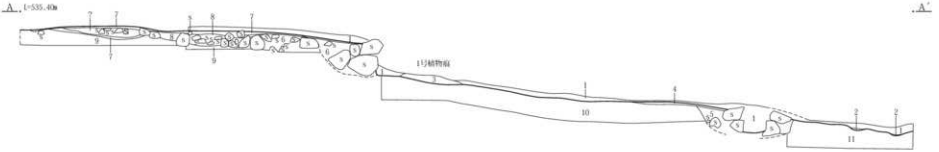
菜　園（第58図、PL.19）　菜園は16.3㎡ほどで、石垣下のニワに隣接している。畑のサク跡は横に５条、縦に３条があり、畝間は0.48mである。現状で、栽培作物等は判明していない。耕地を集約的に利用しようとする様子が見て取れる。



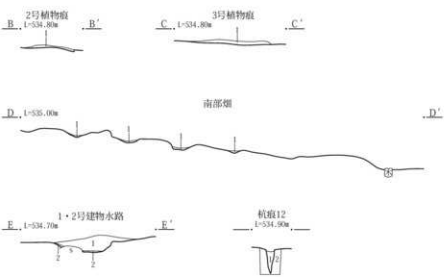
第57図　1b号屋敷石垣



第58図　1b号屋敷周辺遺構(木杭・植物痕・道路)1



２号建物、石垣・10号道・水路A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質、角礫(５～20cm)含む。
2．As-A
3．黒色土(10YR2/1)　植物痕(２建１号植物痕)。
4．褐灰色土(10YR4/1)　固く締まる(10号道)。
5．灰褐色土(7.5YR4/2)　炭化物を含む(水路埋土)。
6．暗褐色土(10YR3/3)　角礫を多量混入(石垣の裏込め)。
7．明黄褐色土(10YR6/6)　ロームを固く突き固めている(ニワ先に塗られた化粧土)。
8．灰黄褐色土(10YR5/2)　角礫を含む。粘性・締まりあり(建物造成土)。
9．暗緑灰色土(10GY3/1)　角礫を含む。締り弱。粘性あり。
10．暗灰黄色土(2.5Y5/2)　酸化鉄が付着、締り弱。粘性強。
11．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物・ローム粒子を多量に含む。畑耕土。
２号建物、２・３号建物遺B'-C-C'
1．黒色土(10YR2/1)　植物痕、暗オリーブ色土は１号植物痕より少量、締りあり、粘性あり。
２号建物、南部畑D-D'
1．As-A
1・２号建物、水路E-E'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。砂質土、小礫少量、締りあり、粘性弱。
2．As-A
２号建物、杭痕12A-A'
1．黒褐色土(10YR3/2)　杭痕跡。
2．褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒子を含む。



0　1:40　1m

第59図　１ｂ号屋敷周辺遺構(木杭・植物痕・道路)２

（３）１ｃ号屋敷（付図１）

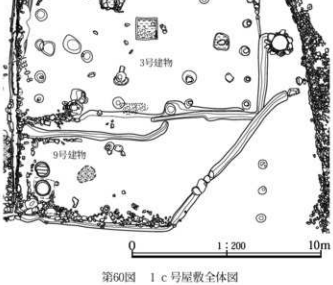
１ｃ号屋敷は７号道（真田道）と10号道が分岐する地点にあり、斜面部を切り盛り造成して屋敷地としたものである。主屋（３号建物）は隣家と軒を並べており、計画的に配置されたように見える。これまで１ｂ号屋敷が地形的に窪地にあることを繰り返し述べてきたが、隣接する１ａ・１ｃ号屋敷は１ｂ号屋敷よりやや高い地点にあり、やや乾燥した条件下にある。このことは、木器の出土量に大きく影響した。

屋敷の出入口は、街道から分岐して川原に下りていく10号道側にある。街道の分岐点には三角形状を呈した空間があり、柱穴３本が並んでいた。これを高札として評価できるのではないかと考えてみたが、具体的に遺構の性格を裏づけるような材料は得られていない。屋敷面積は198.4㎡（60.1坪）で、主屋を敷地の北に寄せ南西隅にカワヤを置いていた。井戸は街道下、建物妻側にある。建物出入口から遠い位置にあり、使い勝手は悪い。菜園は16.4㎡ほどであるが、敷地内に菜園を確保することができなかったため、道を挟んだ反対側を菜園としたものと思われる。

主屋は、建物北の側まわりだけに礎石を並べた掘立柱建物である。建物規模は桁方向10.86m・梁方向7.10mを測り、建坪は77.1㎡（23.4坪）ほどである。建物内には土間・居間・客間・寝間（納戸）があり、建物構造は広間型に近い。建物の残存状況が悪く、間取り等が確定できないが、囲炉裏には木枠の跡があり、居間は土座であることが明らかである。戸口は馬屋脇にある。戸口を入ると左に馬屋があり、建物奥には竈があるが、通常ある唐臼や支柱はない。土間はよく叩き締められているが、礫が頭を出して荒れている。馬屋北に土坑２基が確認されているが、土坑覆土からみて泥流堆積後に掘り込まれたものと考えておきたい。

土間の上手側は居間になっているが、どこが土間と居間の境になるのか判断できないでいる。可能性としては、①柱穴（P12）の延長線上か、②囲炉裏木枠のライン上となるだろうが、①の場合その延長線上には竈があり、手前で土座を狭める必要がある。②の場合、囲炉裏木尻が土間となり、囲炉裏は「コ」字状を呈することになるが、同タイプの囲炉裏は吾妻川流域の近世建物には少ないように思う。なお、囲炉裏には0.6m以上離れて土間側に礫２点が並んでおり、使われ方が気になるところである。隣接する２号建物の土座では端材等の上に板材を置き収納スペースとしていたように、あくまでも想定にすぎないが、礫の上に板材等を置き座る空間を確保しようとした可能性もある。客間に相当する場所に囲炉裏が残されているが、囲炉裏の構造的特徴から、客間は土座になる。居間・客間の奥には寝間（納戸）を想定しておきたい。当然空間は壁で仕切られていたと考えるべきだろうが、確証はない。

主屋南の建物は掘立柱建物で、埋設桶２が確認されている。建物規模は12.8㎡（3.9坪）ほどで、カワヤ部分と堆肥置場からなる。



第60図　１ｃ号屋敷全体図

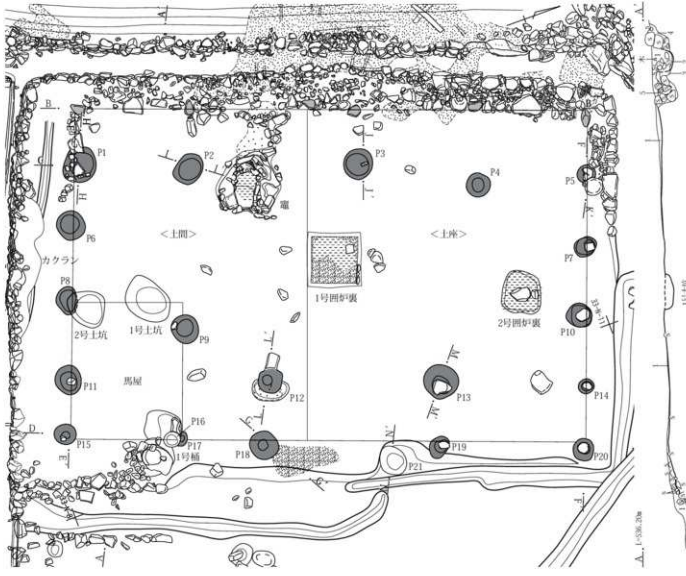
＜３号建物＞（第61～67図、付図４、PL.35～38）

位　置　境川を渡り坂道をくだりきったところに、街道から左に入る道（10号）があり、その分岐点に３号建物はある。

規　模　桁行10.86m、梁行7.1m（建坪77.1㎡）

建物構造　建物裏が礎石となる以外は、すべて掘立柱となっている。建物には土間・居間・客間・寝間（納戸）があり、土間には馬屋がある。

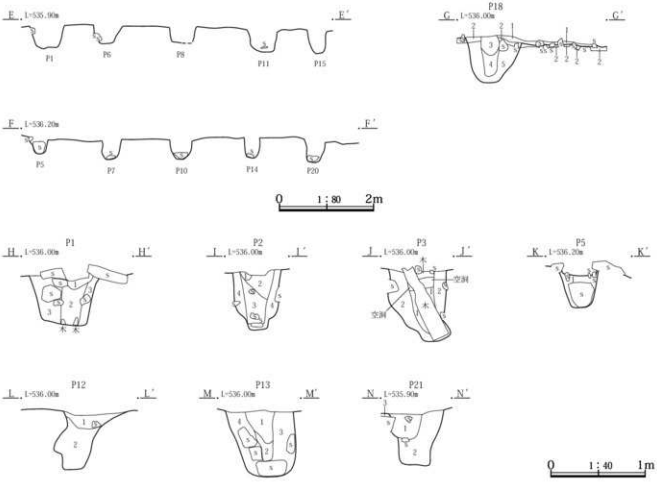
居　間（第61図）　土間に接して上手側に囲炉裏付の居間がある。居間の囲炉裏は枠木の痕跡が残り、土座である



３号建物A-A'
1．暗黄灰色土(2.5Y5/2)　明黄褐色土小塊を含む。囲炉裏周辺では炭化物を含む。小礫約1.0cmを含む。締り強く硬化、粘性弱。
2．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　砂質土、黒色土多量、にぶい黄褐色土を含む。締りやや弱、粘性弱。
3．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　酸化鉄分多量、角礫約10.0cm多量、締りややあり、粘性弱。
4．にぶい褐色土(7.5YR5/4)　角礫約10.0～300cm多量、締りあり、粘性弱。

0　1:80　2m

第61図　３号建物



３号建物P18
１．灰層(7.5Y6/1)　小礫を含む。囲炉裏等の灰を廃棄したものか。
２．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　角礫５～10cmを多量に含む。
３．黒褐色土(10YR3/2)　３～５cmの礫少量を含む。
４．暗褐色土(10YR3/3)　粘質土、明褐色粒を多量に含む。
５．灰黄褐色土(10YR4/2)　小礫を含む。
３号建物P1
１．褐灰色土(10YR4/1)　小礫を多量に含む。
２．明褐色土(7.5YR5/6)　粗粒砂を多量混入。底面に窩食を免れた柱材が残る。
３．灰黄褐色土(10YR4/2)　礫を含む。柱穴の埋め土。
３号建物P2
１．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘土化した赤土。柱材の根固め土か。
２．黒褐色土(10YR3/2)　砂質で、小礫を含む。
３．黒褐色土(10YR3/1)　砂質で、大型礫を含む。底面に根石が置かれる。
４．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　小礫(３～５cm)を含む。
３号建物P3
１．褐灰色土(10YR4/1)　１～５cmの礫を多量に含む。泥流で押された際の空隙がある。
２．暗灰色土(N3/)　粘質で、角礫を多量に含む。

３号建物P5
１．褐灰色土(10YR4/1)　砂質で、洪水砂？少量がまじる。底面に大型の根石が置かれる。
３号建物P12
１．暗褐色土(10YR3/3)　砂質で、３～５cm礫を多量混入。天明泥流。
２．灰黄褐色土(10YR4/2)　角礫を含む。粘性は弱く、やや砂質。
３号建物P13
１．黒褐色土(10YR3/1)　砂質で、角礫１～３cmを多量に含む。
２．黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土をブロック状に含む。
３．黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土をブロック状に含む。角礫が混じる埋め土。
４．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　角礫が混じる埋め土。３・４層は同質。
３号建物P21
１．暗褐色土(10YR3/4)　軟粘砂質で、小礫を多量混入。
２．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　砂質で、５～10cmの角礫を多量混入。
３．暗灰黄色土(2.5Y5/2)　黄褐色土をブロック状に含む。

第62図　３号建物断面図

ことは明らかである。土座は竈右にある柱穴(P3)列で仕切られるだろうが、手前側がP12～P14になるのか、それともP18～P20までになるのか、土座の範囲がどこまでになるのかはっきりしない。仮に、P12までということなら、構造的に似る２号建物と同様に、戸口脇の収納スペースが３号建物にあったということも可能性の１つとして考えておきたい。

客　間(第61図)　部屋の中央付近に、90㎝サイズの２号囲炉裏がある。囲炉裏は炭化物を多量に含んだ状態で確認されているが、大型の偏平礫を中央に据え周辺に割石を詰める構造は、１号囲炉裏下部構造と同じ構造であり、木枠の痕跡が確認できていないだけであると考え、客間も土座と考えておきたい。一方、居間と客間の境は明確ではない。

土　間(第61図)　泥流下建物の戸口は馬屋脇にあることが圧倒的で、ここも馬屋脇を戸口と考えた。この場合、P17－P18の柱間は1.8mしかないため、戸口を大戸とするにはP18－P19間に１間ほど敷居を延ばす必要がある。

P18～P20は間隔が広く、縁側になることも考えたが、馬屋脇に戸口を想定する以上は、縁側とするのは無理があるように思う。

戸口を開けるとすぐ土間があり、左側に馬屋がある。そして、奥には竈が築かれている。竈脇には木組み遺構があり、また、土間の片隅には唐臼があるのが普通だが、この建物には木組み遺構も唐臼も確認できていない。竈奥の建物壁際には礎石列に並行するように礫が置かれていた。建物裏の石垣には土壁が倒れ、現状で勝手口が想定できる状況はない。

馬　屋(第61図、PL.38)　北側に土坑２があり、柱穴と切り合っているが、柱穴が切られていることが確認されている。馬屋は両軸とも2.42mで、面積は5.9㎡(約1.7坪)と狭い。馬屋は全体が下がり気味になっているが、排泄物が流れる構造は見られない。敷藁等も確認できておらず、馬屋が機能していたのか断定できないが、馬屋埋設桶の下部には腐食した有機質土があり、馬の飼育を完全否定するものではない。馬屋に付属する埋設桶は通常は結桶が使われているが、ここでは伐採木を刳り抜いた筒状の木器を使用していた。底板に相当するものは確認できていないが、おそらく底板に代え、粘土を用い漏水を防いだのであろう。

柱　穴(第61図)　柱穴21本が確認されている。建物柱穴は掘り方レベルで直径50～70㎝が大部分だが、直径30～40㎝の柱穴があり、これが側まわり柱穴６本(P5・P10・P15・P17・P19・P20)に使われていた。柱材が残る柱穴１本(P16)があるほかは、柱痕が残る程度であった。建物の上手側客間の柱穴には根石を置いたものが多く、特徴となっている。南北の柱穴位置は馬屋柱筋(P1－P15、P2－P16)と建物東の側まわり筋(P5－P20)では一致しているが、居間・客間の柱筋はかならずしも一致した状態にはなっていない。

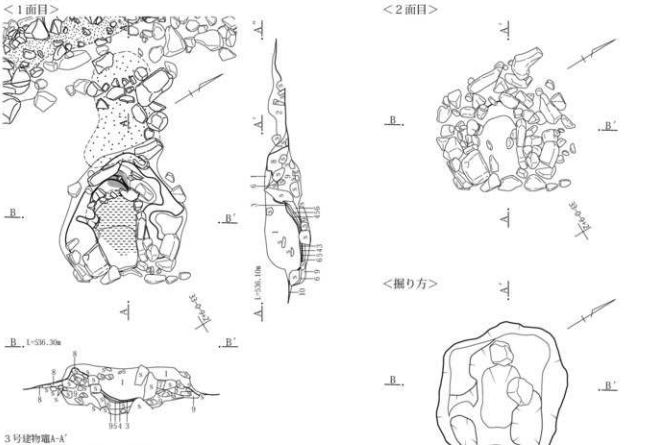
竈(第63図、PL.36・37)　戸口から続いた土間奥にある。形状は略五角形状を呈し、長軸1.38m・短軸1.32mを測る。竈上辺は泥流で破壊され、後方に竈化粧土が流されていた。掘り上げた状態を見ても、竈左袖が大きく変形しているように見える。竈の芯材として角礫が粘土で被覆されており、特に核となるような大型礫を用いる傾向は見られないが、袖石だけは大型礫を使おうとする意識が見える(掘り方の図を参照)。

竈焚口は幅46㎝程であり、数値的には標準タイプの竈ということになろう。竈開口部は泥流で壊され不明で、燃焼部は奥壁側に高まる傾向がある。

囲炉裏(第64・65図、PL.37)　居間および客間に各１基が確認されている。居間に切られた囲炉裏(１号)には木枠の痕跡が残されており、居間は土座であったことが分かる。木枠は痕跡から幅８㎝程度と見られ、全長1.12mを測る。内法は一辺0.94mほどで、３尺サイズの囲炉裏ということになるが、やや小ぶりである。囲炉裏の全面に灰が残り、建物奥壁側に炭が偏在しているが、泥流に押し流されたものと見られる。

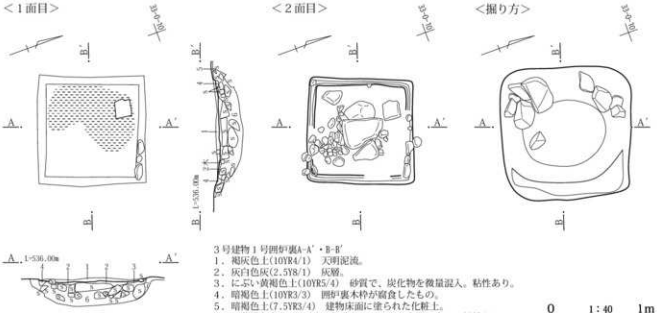
囲炉裏は、①掘り方を掘り、②礫を入れる、③粘土で固める、④灰を入れて造られるのであるが、この囲炉裏の場合、敷き込んだ礫を固める粘土が薄く、このことが特徴となっている。また、石敷き中央付近には偏平礫が置かれるというのも特徴的である。囲炉裏構築後の補修や変形も考える必要があり、囲炉裏枠木から使用面(燃焼面)までもう少し深い方が機能的であり、安全であるともいえそうであるが、枠木そのものは２号建物から出土したものがあり、これを踏まえれば、敷き込んだ礫が粘土で覆われていなくても、囲炉裏の使用は可能だろう。

１号囲炉裏は竈に近接して確認されている。両者の間



３号建物竈A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。
2．明黄褐色土(10YR7/6)　角礫を含む。竈構築材崩落土。
3．黒色土(10YR2/1)　炭化物主体。締り弱、粘性あり。
4．灰白色灰(5Y7/1)　灰層。
5．黒色土(5Y2/1)　灰が少量混入。締り弱、粘性あり。
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物を多量に含む。粘性は弱い。
7．明黄褐色土(5YR5/6)　焼土塊を含む。
8．黄灰色土(2.5Y4/1)　角礫を含む。竈構築材。
9．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　角礫多量に含む。竈構築材。
10．灰黄褐色土(10YR4/2)　建物床面に堆られた化粧土。

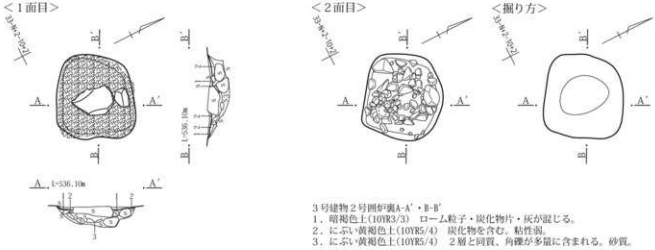
第63図　３号建物竈



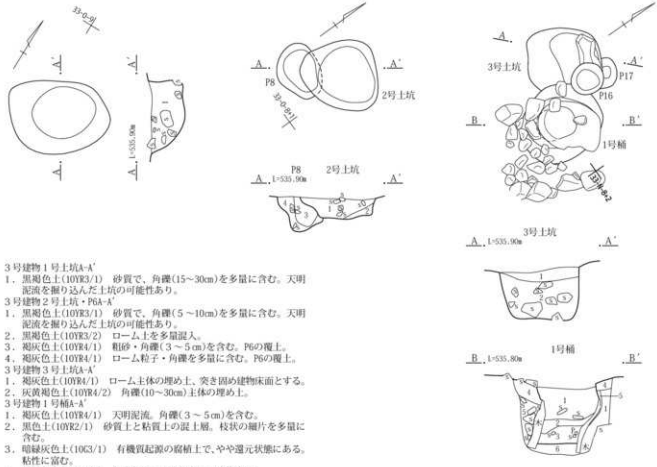
３号建物１号囲炉裏A-A'・B-B'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。
2．灰白色灰(2.5Y8/1)　灰層。
3．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質で、炭化物を微量混入。粘性あり。
4．暗褐色土(10YR3/3)　囲炉裏本枠が崩食したもの。
5．暗褐色土(7.5YR3/4)　建物床面に堆られた化粧土。
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　角礫(10～20cm)を多量に含む。粘性あり。

0　1:40　1m

第64図　３号建物１号囲炉裏



第65図　３号建物２号囲炉裏



第66図　３号建物１～４号土坑

隔は1ｍ弱の余裕しかないため、囲炉裏の一辺が土間に接したのはほぼ間違いないが、囲炉裏の下手側で接したのか奥側で接したのか、痕跡が残されておらず確定できない。ただ、下層調査(２面)で竈脇に攪乱があり、木組み遺構が置かれていたことも考えておく必要がある。木組み遺構は竈脇にある重要施設である。竈右に木組み遺構があるとすると、囲炉裏は建物奥土間側に接したことになるが、こうしたことがあるのか確証はない。

２号囲炉裏は、客間にある。長軸0.9m・短軸0.84mほどで、若干形状が乱れているが、ほぼ１号囲炉裏と同サイズの囲炉裏である。１号囲炉裏とは違い、木枠は確認されておらず、客間のみ「板の間」を想定してみたが、①囲炉裏中央に偏平礫が置かれること、②偏平礫を中心に灰層が見られること、③掘り方には礫が敷かれることが分かり、１号囲炉裏と同じ構造であることが判明、木枠だけが確認できないだけであるという結論に達した。

土　坑(第66図、PL.39)　土坑３基がある。うち、２基は馬屋北に確認されており、覆土が天明泥流である可能性が高く、建物には伴わないだろうと考えている。

１号土坑は略楕円形状を呈し、長軸1.02m・短軸0.78m・深さ0.38mを測る。隣接する２号土坑とは約1.2m離れており、この建物で確認されていない唐臼や支柱の可能性を考えてみたが、浅過ぎることからその可能性については否定的にならざるを得ない。

２号土坑は略楕円形を呈し、長軸0.80m・短軸0.77m・深さ0.22mを測る。土坑の性格が推定できるような痕跡等は確認できていない。建物柱穴(P8)と重複関係にあり、柱穴を切り土坑があることが判明した。

３号土坑は馬屋柱穴(P16・P17)の調査後に確認された土坑である。覆土中に礫が充填されており、山石の廃棄土坑で、直接馬屋には関係しないものと思われる。

遺物の出土状態(第67図、PL.40)　竈より上手側、１号囲炉裏より奥に遺物は集中している。建物奥には石垣があり、これに土壁が貼り付いて確認されているように、建物内部で使われていた(収納されていた)道具類は泥流で建物裏の畑に流されたのであろう。畑に流された道具類は少ないようで、ほとんど発見されていない。道具類の流出は２号建物が３号建物を上まわっているが、２号建物では陶磁器類や金属器類は建物の内部に止まるものが多く、屋外に流出したのは木器類が大半を占めたのであろう。こうした状況を念頭に改めて３号建物の道具類の出土状況をみてみると、①鉄鍋が囲炉裏北(竈東の土間)に出土すること、②陶磁器類や漆椀等の食器類が柱穴(P3)付近に集中出土していること、③１ｍ前後の板材が「寝間」に集中出土する傾向が見られる一方、建物裏の石垣で散逸を免れた陶磁器・木器類も多い。

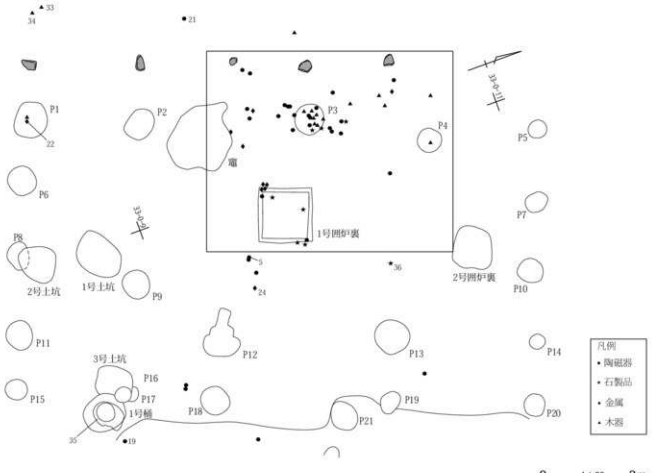
現象的には、寝間(納戸)に相当するところから大部分の遺物が出土しているのであるが、それは建物の壁際に出土するというより、泥流で壁際に押された遺物が壁で遮られ、屋内へ戻されたというべき出土状態にあると見たい。

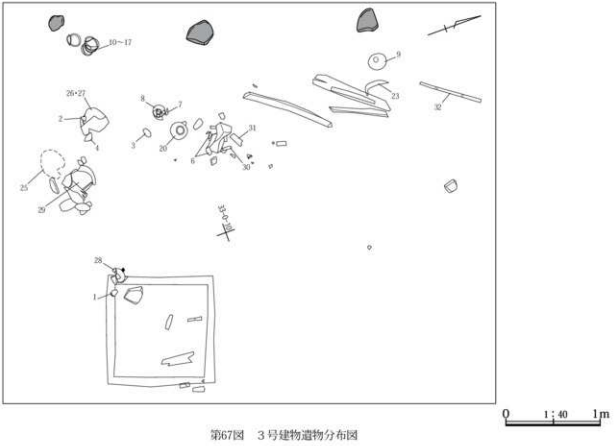
＜建替え前の状態＞

建物全域を掘り下げたところ、竈１・囲炉裏１・馬屋１・方形の木組み遺構１(１号木枠遺構)・柱穴３・溝１が確認されている。柱穴から下層建物の認定を試みたが巧く行かず、泥流直下の建物がそうであるように、馬屋を建物隅と見て建物規模を考えてみた。

建替え前の建物構造は分からないままであったが、①馬屋位置が建替え後と逆転していること、②竈も馬屋側にあること、③１号木枠遺構は屋外になってしまったが、類例が東宮遺跡７号屋敷にあることが分かり、この時点で梁行5.6m程度の建物になるだろうと考えた。桁方向については皆目見当がつかなかったが、居間・客間が土間と同程度の土座になるとして、桁行は8.8mになると考えてみた。あらためて図を見ると、桁方向にライン上に角礫が並んでいた。この石列については調査では特に注意されなかったが、図上にて想定したプランに重なることが判明した。これに似た石列が建物北に確認されているが、調査では水路として捉えている。石列は水路の側石として機能したとされたが、同時に屋敷地の境界と

写真17　建物奥(建替え前)の石列





第67図　３号建物遺物分布図

なったようである。この水路を建替え後の３号建物と比べてみると、水路側石の手前(側石前面)に石垣を積み直していることが明らかであった。

建物規模は桁行５間・梁行３間、建物構成は土間と土座の二間となるだろうが、肝心の柱穴が発見されておらず、実態は明らかになっていない。建替え前の建物(14号建物)は50㎝を掘り下げて確認されたものであり、竈や囲炉裏、馬屋・木組み遺構等が確認されているのに、なぜ柱穴が確認されないのか不思議である。柱穴が確認されないのは、柱穴が継続使用されているからかもしれない。現状で確認された柱穴は３本のみであり、しかも、想定した建物の範囲外にあり、建物が建たない状況は変わらない。ところで14号建物の調査記録に洪水砂を示唆する記載があり、これに注目しておきたい。建替え前の遺構が50㎝近く掘り下げて確認されているというのも、石垣を前に寄せて造り直しているというのも、土砂災害が絡んでいる可能性が強い。このことについては４号屋敷の建替え、７号道の拡張とも絡んでおり、別途検討が必要になる。

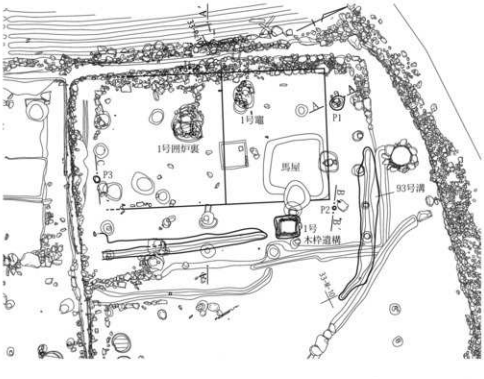
＜**14号建物**＞(第68図、PL.42)

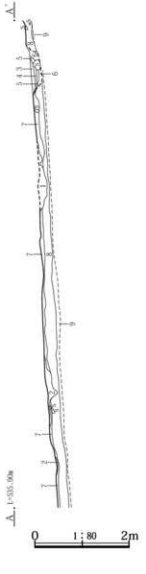
位　置　３号建物を40～50㎝掘り下げて確認され、位置的に３号建物と14号建物は完全重複している。

規　模　桁行8.8m・梁行5.6m(建坪49.3㎡)

建物構造　建物構造は明らかでないが、建替え前の建物同様に掘立柱建物と考えておきたい。建物内には、竈・囲炉裏・馬屋があり、土間と土座の二間構成になると見られる。屋外には木組み(木枠)遺構・水路・溝がある。

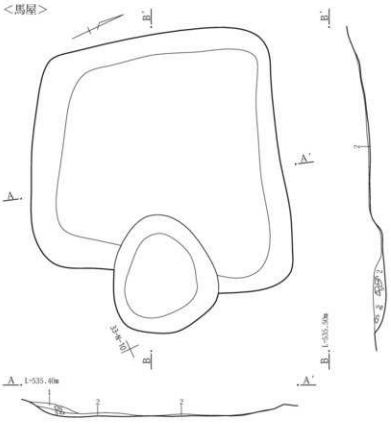
馬　屋(第69図、PL.42)　建替え後の３号建物馬屋とは真逆の、建物南東隅にある。馬屋は略方形状を呈し、



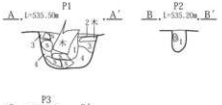


14号建物A-A'
1．青灰色土(5BG5/1)　礫を多量混入する。天明泥流起源？
2．オリーブ灰色砂(5GY)　細砂。締り弱、粘性なし。
3．黄灰色土(2.5Y5/1)　小礫少量を含む。締り弱、粘性弱。
4．赤褐色砂(7.5YR7/6)　粗砂(洪水起源)。
5．黒褐色砂(2.5Y3/1)　細粒。締り弱。粘性なし。
6．暗オリーブ灰色土(5GY3/1)　砂質。締り弱、粘性弱。
7．黒褐色土(2.5Y3/1)　小礫(約0.3cm)を少量混入。
8．暗オリーブ灰色土(5GY3/1)　ローム粒子を含む。粘性あり。
9．オリーブ灰色砂(5GY6/1)　細粒。締り弱、粘性なし。

第68図　14号建物



14号建物馬屋A-A'
1．暗緑灰色土(10G3/1)　砂質で、10～15cmの小礫少量混入する。
2．黒褐色土(7.5YR3/1)　ローム粒子を含む。腐食した植物片多量混入。粘性強。

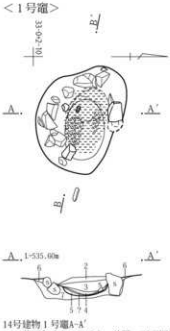


14号建物P1A-A'
1．青灰色土(10BG5/1)　柱材(角材)を残す。締り弱、粘性あり。
2．褐灰色土(10YR4/1)　ローム土を多量混入。強く締まる(貼り床)。
3．暗オリーブ灰色土(5GY4/1)　礫を含む。
4．オリーブ黒色土(5Y3/1)　粘質で、礫を多量に含む。

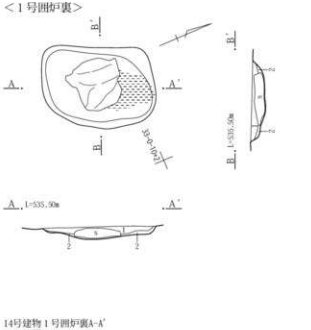
14号建物P2A-A'
1．灰オリーブ色土(5Y5/2)　小礫を含む。しまりやや弱、粘性強。

14号建物P3A-A'
1．黒褐色土(2.5Y3/1)　ローム粒子を含む。
2．暗オリーブ灰色土(2.5GY3/1)　角礫(10cm)を含む。粘性あり。

第69図　14号建物馬屋



14号建物１号竈A-A'
1．黄灰色土(2.5Y4/1)　砂質、天明泥流か。小礫を含む。粘性なし。
2．オリーブ灰色土(10Y4/2)　ローム粒子を含む。粘性あり。
3．暗緑灰色土(7.5GY4/1)　砂質で、小礫(0.5cm)を含む。
4．黒色土(N1.5/)　炭化物主体、灰を含む。粘性あり(使用面)。
5．オリーブ黒色土(7.5Y3/1)　オリーブ灰色土を含む、締りあり、粘性あり。
6．黒褐色土(2.5Y3/1)　粘質で、にぶい黄橙色細粒を少量混入。竈構築材。
7．緑灰色土(7.5GY5/1)　粘質で、灰色土を含む。粘性強。竈掘り方。



14号建物１号囲炉裏A-A'
1．灰層
2．暗褐色土(10YR3/3)　小礫を含む。
3．暗オリーブ灰色土(5GY4/1)　灰・焼土少量、締りあり、粘性あり。

0　1:40　1m

第70図　14号建物竈・囲炉裏

一辺2.8mほどである。南辺中央に長軸1.26m・短軸1.13mを測る土坑状の窪地があり、位置的には馬屋埋設桶に相当しているが、深さ20cm弱と浅く、埋設桶とするのは無理がある。これに近接して木枠遺構が確認されており、両者の関係が気になるところであるが、両者を結び付ける手掛かりはない。調査所見に馬屋とした根拠は示されていないが、おそらく浅く窪む土坑の形状を根拠としたのであろう。

竈(第70図、PL.43)　建物奥正面に確認されている。竈は略楕円形状を呈し、長軸1.18m・短軸0.84mを測る。竈石組は部分的に残されているのみであるが、奥壁と右袖に大型礫を配している。燃焼部は、奥壁側に傾斜しているが、全面的に炭が散り灰の残存状況も良好である。

囲炉裏(第70図、PL.43)　竈左側手前にある。囲炉裏は略長方形状を呈し、長軸1.20m・短軸0.86mを測る。囲炉裏中央には大きな偏平礫があり、薄く灰が覆っていた。当初は痕跡のみ残されただけと考えていたが、この種の囲炉裏構造は珍しく、木枠がないだけである。これ以上の情報は得られていないが、位置的に見て囲炉裏は土間から１mほど内側にあり、土座は囲炉裏付近でクランクさせ、そして、土間側を木尻としたものと思われる。

柱　穴(第68・69図)　３本が確認されているが、柱穴には大小がある。各柱穴のサイズは、１号から順に径42cm・15cm・24cmとバラツキがあり、いずれも建物柱穴とするのは難しい状況にある。特に１号柱穴は３号建物柱穴５に近接しており、３号建物柱穴として理解すべきかもしれない。

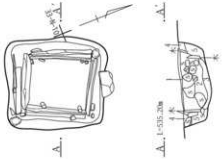
所　見　建替え前の戸口・馬屋を建物東から、建替え後は建物西へ戸口・馬屋を移動させていたが、これは建物西が湿気て、そのことを解消するためより水はけのよい扇状地側に居間や客間・寝間を移したためであろうか。１ｂ・１ｃ号屋敷は軒を並べており、屋敷の敷地面積も主屋面積も大きく変わるものではなく、建物構造も土座であり類似点が多い。異なる点を挙げるとすれば、それぞれの主屋の構造が水路を挟んで鏡合わせをしたように対称的であることくらいであるが、これも類似性に解消されてしまうのかもしれない。

木枠遺構(第71図、PL.42)

14号建物馬屋の南に近接してある。長軸1.08m・短軸0.96mを測る略方形状を呈す土坑を掘り方として、その中に板材を二重に置き、それを木杭で止めている。木枠遺構には底板がなく、機能的な所見は得られていない。木枠遺構は建物下の調査で確認されたもので、天明泥流より古い遺構になる。写真18は土層堆積状態だが、覆土に礫が多量に混じり、泥流で埋もれているように見える。写真では泥流のようであるが、泥流に入る礫と違い河床礫が主体を占めることから、泥流後の遺構になる可能性も考えている。東宮遺跡の同種遺構(９号屋敷７号土坑)も天明泥流後の土坑とされている。７号土坑と違い、本遺構には底板がない。仮に泥流前なら、東宮７号屋敷の炭出土遺構が類例となるだろうが、炭化物の有無という点で相違する。遺構の性格は不明とせざるを得ない。

溝(第68図、PL.42-１・２)　建物手前および建物妻側に各１条がある。

写真18　木枠遺構を埋めた泥流？



14号建物１号木枠A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。下層よりやや明るい。
2．暗緑灰色土(10G3/1)　天明泥流。円礫(10～20cm)多量混入。
3．緑黒色砂(10G2/1)　細粒。締り弱、粘性なし。
4．黒色土(N2/)　やや湿元気味。締り弱、粘性あり。
5．黒色土(N2)　５層に類似しているが、やや明るい。締り弱、粘性強。

第71図　14号建物木組遺構

建物手前の溝は長さ6.85m・幅0.6m・深さ0.09mを測り、木枠遺構付近から１ｂ号屋敷方向に向かう。溝は推定建物ラインから1.4～1.8m離れており、雨落溝と考えるのは難しい。妻側の溝(93号溝)は長さ6.82m・幅0.6～0.8m・深さ0.1mを測る。溝の真上に３号建物柱穴が並び、区画溝となる可能性がある。

＜９号建物＞

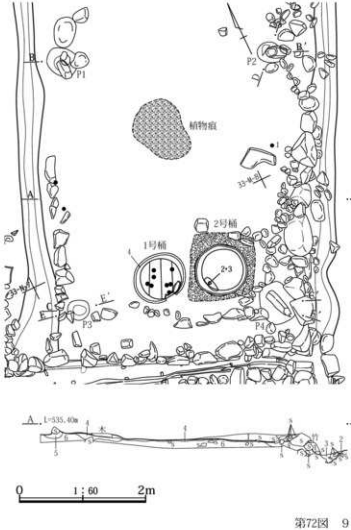
位　置　３号建物手前にある。３号建物と９号建物の間には雨落溝があり、西側の水路に続く。

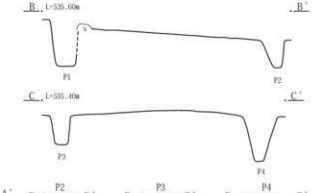
規　模　桁行3.95m・梁行3.30m(建坪13.03㎡)

建物構造　掘立柱建物である。柱穴は４本があり、４本中３本に柱材が残存した。妻側1.2m付近で仕切られ、埋設桶があるカワヤ部分と、これに続く堆肥置場がある。柱穴は直径0.35～0.55m・深さ0.45～0.68mを測る。建物の周辺には礫が直線的に並んでいるが、石列は各柱穴間をつなぐというより若干ずらしているようである。柱を安定させる足固め用の土台を載せたのではなく、アシヨシの類を束ねた草壁端部を受ける役割を果したのではないだろうか。

埋設桶　埋設桶２基がある。桶サイズは底径67㎝で、小ぶりである。街道(10号道)側の２号桶周辺のみ貼り床となっている。貼り床は方形状を呈し、枠木なしにはこうした形状にはならないだろうが、カワヤと堆肥置場が板戸などで仕切られていたのか、ムシロを下げる程度で済ませていたのか判断できていない。

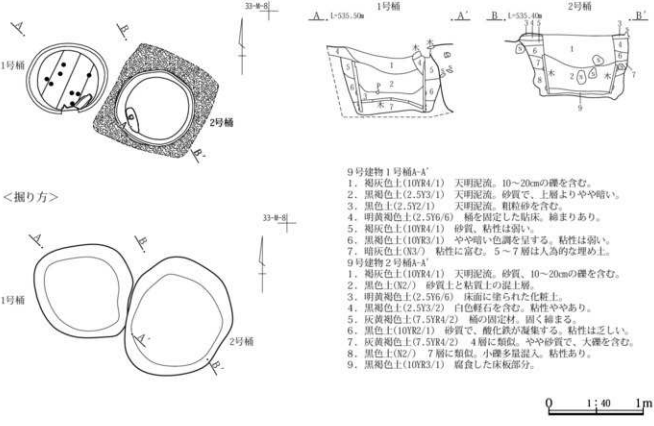
堆肥置場　カワヤから続く空間に長軸1.0m・短軸0.8mに亙り植物遺存体が確認されている。ごく限られた範囲ではあるが、カワヤに続く空間は同種痕跡が確認できることが多い。カワヤと堆肥置場はセットで考えるべき遺構ということだろう。





９号建物A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。
2．As-A
3．灰褐色土(7.5YR4/2)　角礫(５～10.0cm)を多量混入。締り弱、粘性あり。
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　角礫(10～20cm)を多量混入。締り弱、粘性あり。
5．暗青灰色土(N3/)　小礫を含む。やや砂質。締り弱、粘性あり。
6．黄褐色土(10YR4/2)　礫を含む。部分的に青みを帯びる。
９号建物P2A-A'
1．暗褐色土(10YR3/3)　炭化物を少量混入する。柱材が残る。締り弱、粘性ややあり。
９号建物P3A-A'
1．緑黒色土(5G2/1)　砂質、泥流起源？
2．As-A
3．緑黒色土(5G2/1)　やや砂質、腐食した柱痕か。締り弱、粘性弱。
4．暗緑灰色土(10G4/1)　砂質、締り弱、粘性やや弱い。
９号建物P4A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、５cm程度の礫を多量に含む。柱材が残る。
2．灰黄灰色土(10YR4/2)　小礫を多量混入する。締りやや弱、粘性あり。

第72図　９号建物



第73図　９号建物１・２号桶

雨落溝　堆肥置場と見た建物の妻側を除き水路があり、特に雨落溝は形成されていない。堆肥置場側も１号溝が斜め方向に走り、堆肥置場に雨水が流入することは心配していなかったのではないだろうか。

＜周辺遺構＞

屋敷まわりには石垣が築かれ、水路が廻っていた。排水には意を尽したのであろうが、それでも湿気は防げず、囲炉裏に排水機能(暗渠)を持たせ、建物の構造(３号：14号建物)まで大きく変えることとなった。

石　列(第68図、PL.42)　建物南西側に石垣様の石列が直線的に配されていた。石列は長さ1.3mを測る。石列を挟んで南側は低く、雨落溝が走り、恐らく土止め機能を担ったものと思われる。戸口前には石列と同レベルの段があり、この段を上がり、戸口へ進んだのであろう。

水　路(第68図、PL.42)　14号建物裏の石垣は片側に礫を並べるだけであったが、これを建替えた３号建物裏の石垣(水路)は二重に廻り、最終的に内側の水路を礫で埋めたものであった。水路は、現状で建物西の分を加え全長27.5m弱(幅0.4m前後)に及んでいるが、二重構造に

写真19　建物南西の石列

写真20　14号建物裏の水路

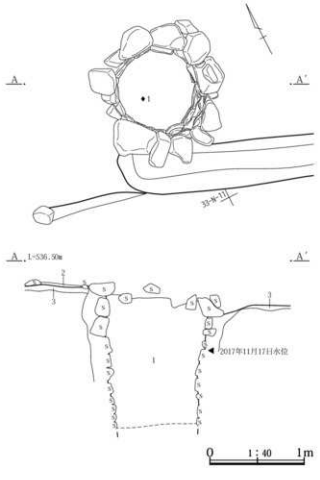
見える水路の詳細については調査所見にも取り立てて記載されておらず、分からない。

井　戸(第74図、PL.38)　主屋西にあり、径0.8mを測る井戸である。調査区境にセクションが掛かり、深さ1.4mまで確認しているが、どこまで掘り抜いているか、明らかではない。

柱　穴(第75図、PL.38)　１号溝と７号道(真田道)の石垣に挟まれた残地(112.5㎡・34坪)に、柱穴３本が確認されている。各柱穴の規模は、P1が径50㎝・深さ40㎝、P2が45×38㎝・深さ47㎝、P3が50×42㎝・深さ42㎝と概ね同サイズであった。柱穴間はP1・P2が1.4m、P2・P3は1.45mを測り、周囲は見事に貼り床されていた。

原図には上端と下端以外に、赤く囲まれた線(径10～16㎝)がある。柱穴の赤い線が何を意味するのか明らかでないが、おそらく柱痕になるだろう(第75図エレベーション図)。写真で見る限り、柱穴は礫層を掘り抜いているようにも礫が隙間なく詰め込まれているようにも見える。截割り調査が行われていないため、構築物の基礎となるのか地山となるのか判断できないが、先の赤い線が柱痕なら、しっかりとした上屋になるのは間違いないところである。

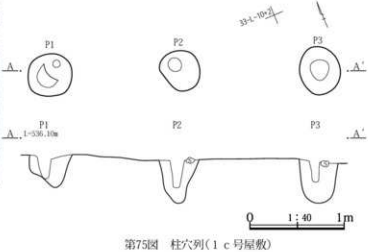
柱穴の上部構造が分からないなかで評価することは避けなければならないが、位置的に西側集落の中心にあり、上村から降りる街道が合流するところでもあり、高札を想定してみたが、推測の域を出ない。高札は、地引絵図には諏訪神社脇に描かれている。



1号屋敷2号井戸A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。角礫(10～20cm)多量に含む。
2．As-A
3．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　天明期地表面。鉄分が凝集。硬く締まる。

第74図　井戸(１ｃ号屋敷)

写真21　柱穴周辺の貼床



第75図　柱穴列(１ｃ号屋敷)

（４）２ａ号屋敷（付図１）

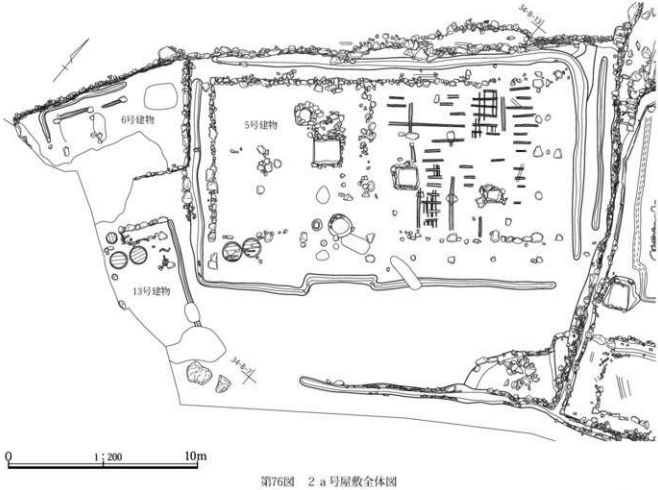
２ａ号屋敷は、ミョウガ沢左岸にある。ミョウガ沢は街道（真田道）付近で南東から南に流路を変え、吾妻川に流れ込んでいるが、屋敷北には崖線がある。崖線下には山側から土砂供給が繰り返されてきたものと思われる。現況図や敷地の切り盛り状況から考えて、２ａ号屋敷は崖線下の緩斜面に立地、崖線から湧き出る水を溝などを造りコントロールする必要があった。

屋敷跡は南東斜面にあり、北西側を1.3mほど切り土し、南東側を0.5mほど盛土して屋敷地を造成している。この屋敷には敷地内に井戸がなく、沢の水を汲んだのか、隣接する屋敷の井戸から水を確保したものと思われる。屋敷出入り口については確認できていないが、沢を渡る手前を出入り口としたのであろう。敷地面積は500.4㎡（151.6坪）ほどで、主屋１・カワヤ１・炉つき建物１がある。敷地内に菜園はなく、可能性として対岸の小さな畑が該当するかもしれない。

主屋は土台建物であり、建物規模は桁行17.2m・梁行8.2mを測る。建坪141.0㎡（42.7坪）で、建物南を出入り口として建物内には土間・居間・客間があり、背後に寝間を設えていた。居間と客間の前には縁があり、客間の上手妻側には下屋柱が並んでいた。囲炉裏跡は３ヶ所にあり、１ヶ所が土間囲炉裏であり、残る２ヶ所が板の間に切られた囲炉裏である。土間に切られた囲炉裏は掘り方を持たないものであるが、囲炉裏サイズがひと回り大きいこと、板の間の囲炉裏は掘り方を持つ３尺タイプの囲炉裏であることが判明している。また、通常は建物奥にある唐臼が戸口右・建物南の壁際にあり珍しい。

建物下の調査では囲炉裏１・焼土２が土間付近で確認されているが、動線上問題となる所に焼土遺構があり、評価が難しい。いずれも土間（貼り床）上面で確認されており、レベル差がなく、はたして５号建物の前身として捉えていいのか、検討を要する（第84図）。

カワヤと見た13号建物は、土台建物である。埋設桶が３ヶ所にあり、うち１ヶ所は屋外に配されていた。建物奥の埋設桶は板材で覆われ、使用できない状態にあり、手前側埋設桶は二本橋が架かり使用状態にあることを示していた。また、カワヤ北西隅には小型の桶があり、角



第76図　２ａ号屋敷全体図

礫で仕切られていた。埋設桶２ヶ所は建物内にあるのに対し、小型桶は建物外軒下にあり、単なる外便所であるのか、それとも別機能を考えるべきか、判断が難しい。

６号建物は主屋西にある土台建物で、建坪は推定だが16.7㎡（５坪）ほどになる。火処があり、陶磁器や鉄器類が出土していることから、作業小屋というより日常生活を送る小規模建物という可能性も考えておきたい。

＜５号建物＞（第77図、付図５、PL.44～50）

位　置　７号道（真田道）が沢を渡る手前の山側緩斜面にある。敷地は500.4㎡（151.6坪）と広く、建物は敷地奥の北東側に寄せて造られている。地形的に高い、敷地の北西側を切り、南東側に盛土したものである。５号建物東に積んだ石垣および敷地南東側の石垣に、切り盛り造成した名残が残る。

規　模　建物奥（幅0.45m）と建物東（幅1.15m）に下屋があり、建物手前（居間・客間）は縁になる。これを除いた建物面積は、141.0㎡（47.2坪、桁方向17.20m・梁方向8.20m）ほどになる。

建物構造　土台建物である。建物北と西の側まわりで、礎石間に礫を連続して並べている。囲炉裏を持つ板の間が土間に張り出すタイプの建物で、居間と客間には縁が付く。戸口は平入で、左から右に開ける引き戸である。開けるとすぐ左が馬屋であり、戸口右に唐臼がある。戸口からみて、建物奥右側に竈と張り出した板の間があり、作業スペースが竈の下手側に割かれている。ここでも竈脇の木組み遺構は確認されていない。土間に続いて居間・客間があり、大引・根太のプリント痕が明瞭に残されていた。居間・客間にはそれぞれ囲炉裏が切られており、その後が寝間（納戸）となる。西宮地区建物では２番目の規模で、建物手前に縁が付き、また、妻側には下屋が付いており、同じ主屋でも掘立柱建物とは構造差がある。土間に張り出した板の間も希だが、この建物の土間と居間の境には角礫が並べてあり、どのような施設になるのか興味深い。

居間１（第77図）　竈に近接して、土間に張り出した囲炉裏の付いた板の間がある。囲炉裏は土間側を板材で仕切り、他辺に石を組み上げ粘土で固め、灰を入れ囲炉裏としたものである。使用面は土間より10cmほど上になる。囲炉裏縁石は高さ12cm、枠木は厚さ８cm程度になる。通常、板の間は４寸サイズの大引に根太を架け、床板を乗せるので、床高は20cm程度にしかならず、想像以上に低い。隣接する２ｂ号屋敷７号建物で同種構造に床板を用いることが確認されており、これを踏まえ板の間を想定した。板の間とした場合、手前には唐臼があり、奥には竈がある。囲炉裏と竈は60cmしか空いておらず、ここを板の間とするわけにはいかないが、囲炉裏構造礫の在り方からするならば「コ」字型の囲炉裏が想定されることになり、どちらとも判断が難しい。囲炉裏－竈間には礫が散布しており、意図的に配置されたように見える。居間の構造を考えるうえで手掛かりになるかもしれない。

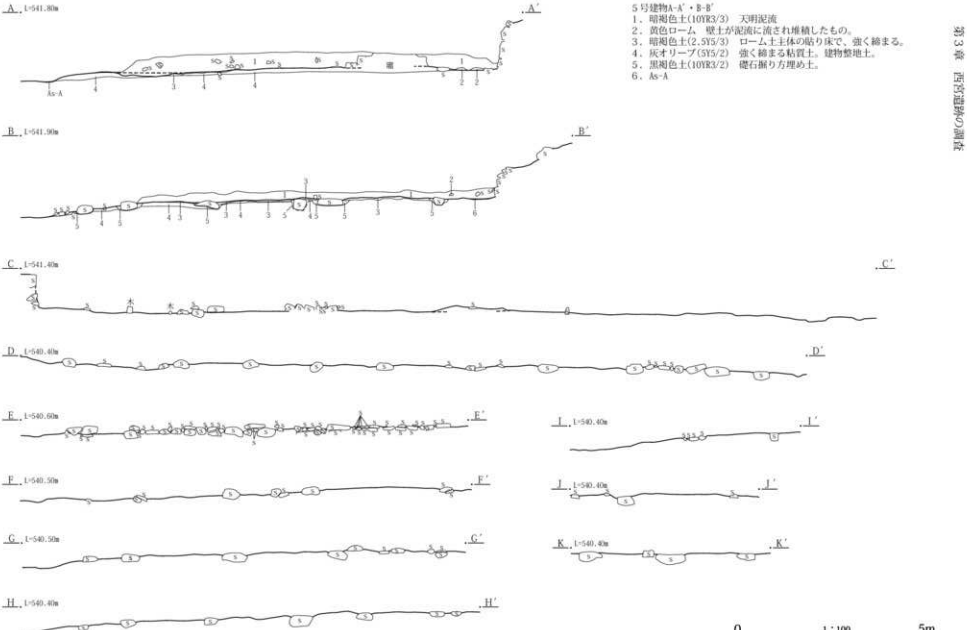
居間１には囲炉裏があり、竈や作業空間にも近く日常生活に関連して使われたはずであるが、これに続く板の間（居間２）とはどのようにして使い分けたのであろうか。このことについては民俗例が参考になるだろう。

居間２（第77図）　居間１（土間に突き出た張出囲炉裏）に続いて、上手側に居間２がある。居間は二間四方（桁方向4.30m、梁方向5.50m）で、23.7㎡（約７坪）ほどである。居間２の中央やや北西側に囲炉裏が切られている。囲炉裏枠木等はないが、３尺サイズの囲炉裏と見られる。囲炉裏北や南東隅には礎石相当の礫が置かれているが、床面に残されたプリント痕からみて、礎石相当の礫には囲炉裏の枠組に必要な大引が渡されたものと思われる。

客　間（第77図）　居間に続いて客間がある。客間も二間四方だが、桁方向が0.20mだけ長い。部屋の面積は24.75㎡（7.5坪）ほどである。部屋の中央からやや外れてやや小型の囲炉裏がある。囲炉裏は長軸0.90m・短軸0.55mほどで、構造礫が良く残り、本来的な姿を止めている。客間も囲炉裏位置に合せて大型礫を配置しており、大引のプリント痕が残されている。客間床面には土壁が確認されているが、位置的には妻側の壁材ということになろう。

５号建物平面図には大引等プリント痕が記されたもの（第77図）と、第２面とされたもの（第84図）があり、その解釈如何で建物構造の理解が変わる可能性がある。エレベーション図を見る限り、１面と２面の礎石レベル差はなく（第78図中のA-A′・B-B′参照）、１・２面を合せて理解すべきものにみえるが、別々に図化した理由が不明であり、ここではそのまま図示した。おそらく、プリント痕を図化する段階では、礎石が床面に見える程度の状

第77図　5号建物



第78図　5号建物断面図

態であったということだろう。居間2や客間の礎石は筋が通らず東石も散見され床の間などが想定されるなど、建物構造の複雑化が著しい。

土間・整地面(第77図)　建物は上手側「板の間」と下手側の土間に二分され、床面は概ね平坦になるのであろうが、エレベーション図から読み取れる二三特徴があり、これについて記しておく。セクション図のA-A′に建物前面に攪乱(床面を破線復元)があるとされるが、攪乱は泥流により抉られた痕跡かもしれない。同じくC-C′の11～13m付近は囲炉裏基礎の一部であり、同17m付近は土壁の残骸を示しているのであろう。エレベーションD-D′の1～4m付近およびエレベーションF-F′の5～9mは馬屋の窪地である。エレベーションG-G′(10.8～12.2m)は盛土した上に礫を連続して並べていた。

馬　屋(第77図、PL.48)　長軸4.60m・短軸2.46mを測り、馬屋面積は11.3㎡(3.4坪)ほどである。3尺サイズの桶2が建物前面に埋設されているが、いずれも側板が腐食しており、底板のみ残存した。どちらも泥流で埋もれたもので、同時に機能した可能性が高い。通常、馬屋には窪地が残されているが、図化されていないところを見ると、そうした窪地はなかったのであろう。馬屋柱3本は「石場立て」になっているが、建物本体・梁方向の礎石列に接しており、この梁に抱かせて柱を安定させていたのかもしれない。出土遺物は特に確認されていない。

竈(第79図、PL.46)　建物奥にあり、土間囲炉裏が近接している。竈は泥流で大きく変形しており初期状態を残していないが、概ね1.2m前後の大きさになるものと考えている。竈周辺には角礫が散乱しており、礫が竈焚口の横に並んでいるように見えるものもあるが、どれが竈の構成礫になるのか分からず、原位置の復元は難しい。

竈には、天井石と袖石に3号建物と同様の切り石が使われていた。切り石は長さ0.82m・幅0.25mほどで、片側がアーチ状に抉れ、開口部を構成することになる、焚口の幅は状況的に30㎝程度と見られる。竈は奥壁に柱状礫を、奥壁手前に大型角礫を置き、隙間を埋めるように角礫を積み上げていた。燃焼部が焚口側に傾斜しているのは他の竈と変わらない処置である。

竈本体の構築材について記録されていないが、切り石が購入材(安山岩製)であるのを除けば大部分は地山等に含まれる角礫を用いたのであろう。

囲炉裏(第79・80図、PL.47)　囲炉裏は土間および居間、客間の3ヶ所にある。居間・客間の囲炉裏は3尺サイズであるのに対し、土間囲炉裏は4尺半と一回り大きい。

1号囲炉裏は土間にあり、竈に接している。内法で1.35mほどであり、サイズ的には4.5尺になる。礫を積み上げ、粘土を塗る構築法を採り掘り方は確認できない。囲炉裏構造礫は建物下手側を除く3面にあり、土間に接する1面は板材を使用したものとみられる。整地面から竈使用面までが10㎝、構造礫頂部までが15㎝ほどあり、木枠高が8㎝であるとすると、座面は整地面から23㎝となり、「コ」字型の囲炉裏になるものと想定している。

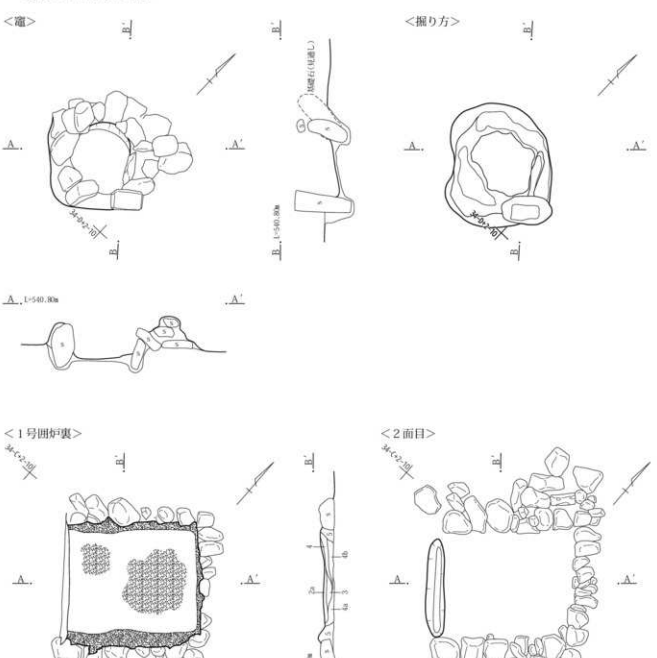
2号囲炉裏は居間にあり、1号囲炉裏より小形の3尺サイズである。一辺1.35m・深さ10～20㎝の掘り方を有し、方形に礫を敷き詰め、これを粘土で固めて囲炉裏としている。使用面は整形面から12㎝上、角礫上面まで20㎝弱、これに枠木を載せるとなると、30㎝ほど上に座面がくることになる。同様の傾向は3号囲炉裏についても言えることであり、相違するのは囲炉裏サイズ(内寸0.73×0.55m)だけである。

唐臼・支柱(第81図、PL.48)　建物奥に置かれることが通例だが、この建物では戸口を開けるとすぐに唐臼が埋設されたものとみられる。ここでも唐臼は泥流堆積後に抜かれていたが、唐臼抜取土坑中心から1.2m離れて柱穴があり、その位置関係から唐臼支柱を埋めたとみた。

土　壁(第77図、PL.46)　土壁は建物東の石垣に貼り付いて出土した。土壁は戸口正面奥の1間分が空き、勝手口が想定されたほか、勝手口から1間を置いて同サイズの隙間があるようである。後者については偶然土壁が流されただけなのか、当初から土壁がないのか、現状では明瞭な根拠が見当たらず判断できない。

雨落溝(第77図)　雨落溝は建物北西側・南東側コーナーを除き全周する。溝は幅0.5mほどで、下屋柱から溝の中心までは0.9～1.1mほど離れている。建物前面では雨落溝が逆コ字状を呈し、特徴的である。ちょうど唐臼を置いた土間の前面に当たっているが、なぜそうなるのか明らかにはなっていない。

遺物の出土状態(第82・83図、PL.50)　竈右の土間と板の間の境界付近に集中出土したほか、囲炉裏周辺に多く出土した。客間や寝間の出土遺物が少ないのは、道具類の収納という観点から理解すべきである。陶磁器類が建

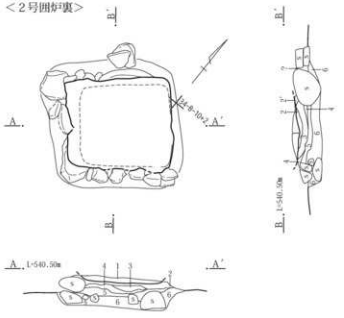


１号囲炉裏 a-A'・B-B'
１．黒褐色土(7.5YR3/4)　１cm大の炭化物・焼土ブロックを含む。
2a．にぶい褐色土(7.5YR5/3)　１層と灰の混土層。
2b．灰層
３．焼土層
4a．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物を含む(火床整形)。粘性に富む。
4b．にぶい黄褐色土(7.5YR5/3)
５．黄褐色粘質土(10YR4/2)　粘性に富む。

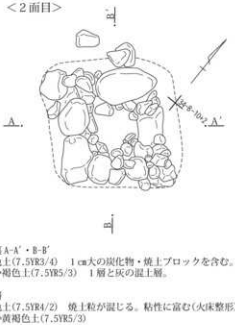
0　1:40　1m

第79図　５号建物竈・１号囲炉裏

＜２号囲炉裏＞

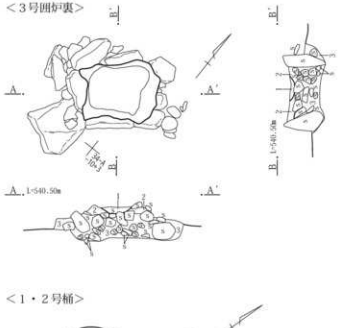


＜２面目＞

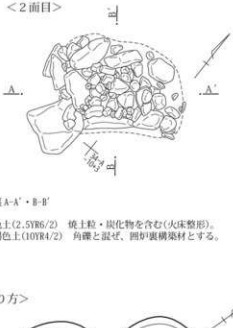


２号囲炉裏A-A'・B-B'
1．黒褐色土(7.5YR3/4)　1㎝大の炭化物・焼土ブロックを含む。
2．にぶい褐色土(7.5YR5/3)　1層と灰の混土層。
3．灰層
4．焼土層
5．灰褐色土(7.5YR4/2)　焼土粒が混じる。粘性に富む(火床整形)。
6．にぶい黄褐色土(7.5YR5/3)

＜３号囲炉裏＞

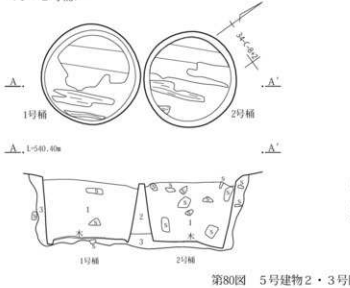


＜２面目＞

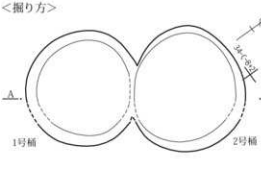


３号囲炉裏A-A'・B-B'
1．灰層
2．黄橙色土(2.5YR6/2)　焼土粒・炭化物を含む(火床整形)。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　角礫と混ぜ、囲炉裏構築材とする。

＜１・２号桶＞



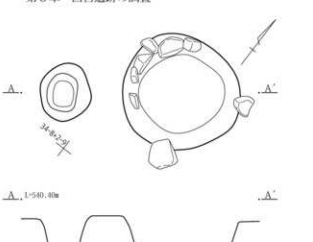
＜掘り方＞



５建物１・２号桶A-A'
1．天明泥流
2．黒褐色土(10YR3/1)　ロームブロック多量混入。締まりは弱い。
3．褐灰色土(10YR4/2)　ローム粒子・炭化物片を含む。粘性あり。

0　1:40　1m

第80図　５号建物２・３号囲炉裏、１・２号桶



第81図　５号建物唐臼

写真22　列状に並んだ陶磁器の出土状況(北から)

物裏の石垣下に集中するのも、建物内から押し流されたからである。

道具類は基本的に泥流に流され、その出土状況から得られる情報は少ないというのが実態だが、そうした中でも特徴的な遺物の出土状況がある。第83図に示した陶磁器類の出土状況がそれで、竈と寝間(納戸)の境界付近に陶磁器類(皿)が直線的に並んで出土した(写真22)。

この建物では建物奥から部屋毎に整地面が下がるように礎石半分程度の高低差を付けているが、上記陶磁器類が出土した地点(第83図、G-G')の礎石と居間礎石とは礎石１つ分ほど高い位置にあり、礫を連続的に並べていることから、厚板を置く等の施設が想定されるのであるが、これが障壁となり、これ以上遺物が流出するのを防いだということであろう。

第83図には、囲炉裏(１・２号)付近の遺物出土状態を示した。垂直分布図の作成に際して、囲炉裏付近を通るエレベーション図(これには囲炉裏縁が当たるため従来の床面を破線で示した)を作成、これに１m幅で遺物の垂直分布図を投影してみたが、床面から浮いたものより、床面に接して遺物が多く出土したことが分かる。

第83図からみると、泥流で大きく動いた遺物は意外に少ないようにみえるが、効率的に調査を進めるために、重機で可能な限り掘削を行なっているからで、当然泥流中から出土するものもある。そうした意味で、第83図は遺物出土のすべてを示しているわけでなく、このことについて留意していただきたい。

＜建替え前の状態＞(第84図、PL.49)

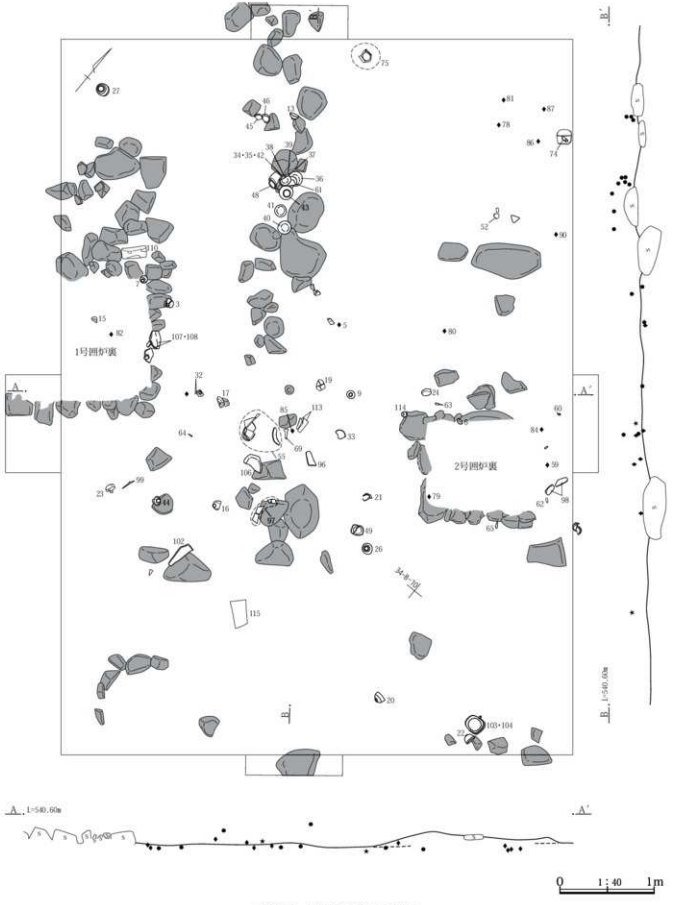
調査終了後、下層遺構の有無を確認するため、全域を掘り下げたところ、囲炉裏１・焼土遺構２を確認した。上記遺構は貼り床を剥いで確認され、①いずれも火処に係わる遺構であること、②泥流直下遺物とは貼り床１枚を挟んでいるだけでレベル差がないこと、③火処以外に建物を構成する礎石や柱穴、竈等の厨房施設が確認されないことから、建物の建て替え根拠にはならないだろうと考えている。

建替え前の遺構図(第84図)には、泥流直下の礎石を加え図化されている。泥流直下では大引・根太等のプリント痕を残す必要から、礎石が充分把握できず、これを建替え前の遺構図に追加したためであろうが、それほど微妙なレベル差しかないということである。

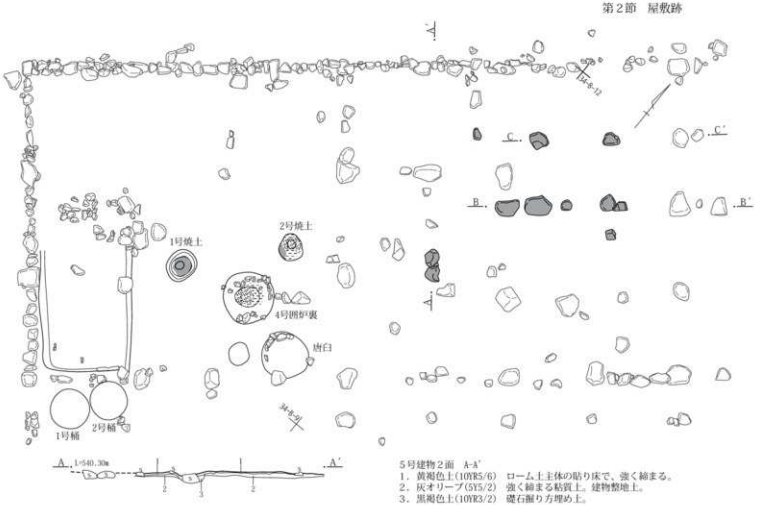
４号囲炉裏(第85図、PL.49)　４号囲炉裏は１号囲炉裏の南、約１m弱のところにある。囲炉裏中央付近に厚い灰層があり、掘り方は略円形で、径1.35m・深さ20cmを測る。囲炉裏は外縁の礫に囲まれて浅く窪んだ灰層が確認されたものであるが、方形に組まれた礫が確認できるのは部分的である。現状で推察するとすれば、内法で75～90cm程度の囲炉裏ということになろう。

１号焼土遺構(第85図、PL.49)　焼土遺構は長軸0.86m・短軸0.72m・深さ６cmを測り、略楕円形状を呈す。５号建物で言えば、戸口を開けてすぐの土間にある。浅く皿状を呈し、中央付近(径0.5m)が赤化していた。戸口右には唐臼や囲炉裏があり、建物奥には竈があり、動線的にはあり得ないところに焼土遺構がある。機能的には火処ということになるが、それが何に使われたのか評価は

第82図　5号建物遺物分布図 1



第83図　５号建物遺物分布図２



第84図　5号建物建替え前の痕跡

難しい。

2号焼土遺構(第85図、PL.49)　位置的には、1号囲炉裏手前コーナーに重なる。長軸0.74m・短軸0.64m・深さ6㎝を測る。灰と炭化物・焼土が広がり、囲炉裏の残骸に近い。詳細については不明だが、位置的には建替え前の土間囲炉裏とするのが妥当である。

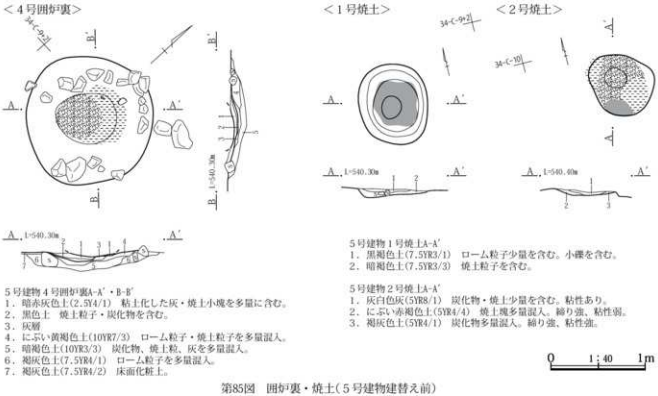
所　見　5号建物下の調査では、貼り床を剥いだところで囲炉裏1・焼土遺構2を確認した。いずれも火処に係わる遺構であり、その遍在性が気になるところである。4号囲炉裏は戸口まで直線で2mと近く、これまでこれほど戸口に近い土間囲炉裏は確認されていない。また、1号焼土遺構は戸口の正面にあり、建物奥へ移動するのに邪魔な位置にある。泥流直下の建物構造としては竈に囲炉裏が近接しており、唐臼が戸口脇にあることが建物を特徴づけていたが、これと何か関連があるのだろうか。火処に係る稼業を生業としたという可能性、戸口を妻側とした可能性もあろう。2号焼土については、位置関係から1号囲炉裏の前身ということができよう。

＜13号建物＞(第86・87図、PL.50)

位　置　5号建物西にある。建物西にはミョウガ沢が流れ、南側は真田道が通る。

規　模　桁方向(2.95m)・梁方向3.15m

建物構造　土台建物である。カワヤ部分と堆肥施設からなる建物で、竹簀子で仕切られていた。建物南は攪乱等で礎石が確認されず詳細は不明である。カワヤ妻側のみ礎石間に礫を詰めているが、これは雨水流入を防ぐ対応として捉えている。建物の桁方向には雨落溝があり、梁



第85図　囲炉裏・焼土（５号建物建替え前）

方向にはこれに直交するように大型礫が並んでいる。建物の妻側屋外には小型の埋設桶１があり、桶周辺に礫を並べ、床面としたようである。

埋設桶・堆肥置場　妻側１間(1.45m)で仕切られている。カワヤ部分には埋設桶２基が壁際に寄せてあり、主屋側にはもう１基が置ける程度の余裕がある。カワヤに続くスペースは堆肥置場として利用されていたが、第86図の断面図を見れば、堆肥置場が街道側に弱く傾斜していることが分かる。梁方向には雨落溝が形成されないのかもしれないが、雨落溝がめぐるとすれば、桁方向は３間となり、堆肥置場は13.7㎡ほどになる。

埋設桶を建物西に寄せていたことからも明らかであるが、堆肥残骸が建物西に偏在して確認されており、主屋側から管理利用されていたものと思われる。

雨落溝　建物東にあり、長さ5.8m・幅0.25m・深さ0.06mを測る。建物東に確認されただけであるが、建物西にも当然確認されるものと考えている。これに対し、妻側には小型桶(２号桶)を埋めているが、雨落溝が確認されていない。雨水対策として、流れ込もうとする雨水には石を並べて、埋設桶には板材を被せるなどしたのであろう。

出土遺物(第87図、PL.50・51)　カワヤから相当量の建築材・板材が出土している。建築材としてカワヤ土台が井桁状に組まれ出土した。この建築材と柱材の関係は明らかでないが、根固め用というより土台としたものと見たい。カワヤ内部には埋設桶があり、奥の桶は板材で覆い、手前の桶には二本橋を架けている。手前の桶から１m前後に切り分けた板材や桶の蓋、鋤先、攪拌棒、柄杓(第441～443図)等が出土している。

＜**15号建物**＞(第88図、PL.51)

位　置　13号建物下に重複している。

規　模　桁方向・梁方向とも不明

建物構造　埋設桶の妻側に礫が並んでおり、土台建物になるものとみられる。

埋設桶　４基がある。埋設桶には主屋側から１～４の名称を付した。主屋側２基の埋設桶には多量の板材を埋め込んでいた。奥側の埋設桶２基もタガが確認されただけであるが、３号埋設桶については痕跡のみとされ、４号埋設桶については輪郭を確認だけであり、詳細は明らかではない。

所　見　埋設桶４基が同時に機能していた可能性は低く、時間差があるものと考える。４基ともタガが残されているだけである。側板のすべてが外され、埋設桶内に

埋め込まれたということだろう。

＜６号建物＞（第89図、PL.51）

位　置　５号建物（主屋）西にある。主屋裏から続く石垣の延長上にあり、建物の屋根尻は石垣に重なる。

規　模　桁方向5.46m・梁方向3.38m（建坪18.5㎡）

建物構造　土台建物である。現状で桁方向の礎石３、梁方向の礎石２がある。残る部分は攪乱されて明らかではないが、スペース的に２間×３間の建物を想定するのが妥当である。

土　壁　建物裏の石垣に痕跡が残る。土壁には貫板と木舞痕が残る。

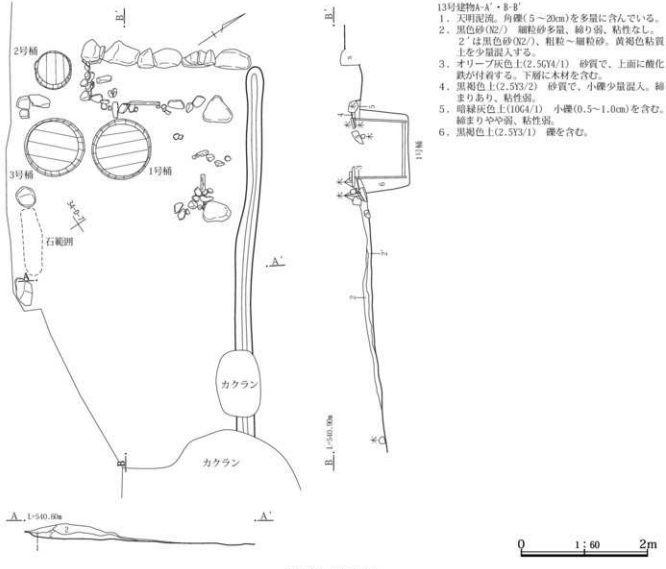
床　面　建物西１間分（1.82m）が土間、残り２間分が居間と見たい。土間には粘土が貼られており、酸化して錆色を呈していた。居間には床跡は確認されていないことから、板の間を想定せざるを得ない。

所　見　建物西・北に陶磁器類（第450図１～６）や、鉄鏃（同図９）や包丁（同図７）など鉄製品が出土しており、居住施設としての可能性がある。

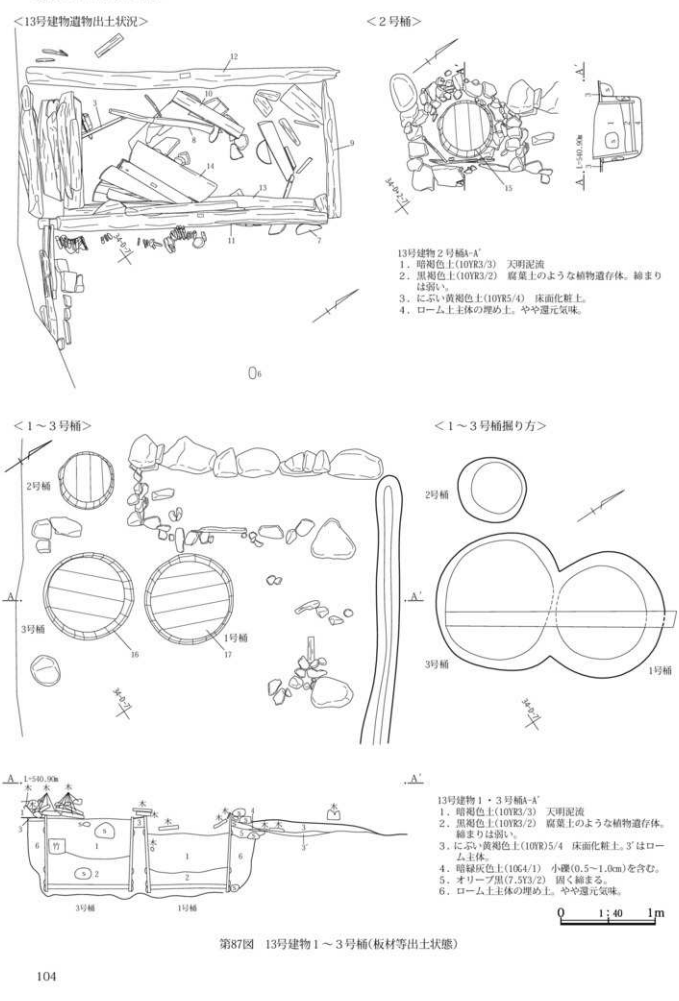
＜その他の遺構＞

建物西にミョウガ沢が流れているが、安全を確保するため、これを避けて調査が行われている。この屋敷の課題は井戸が確認できていないことで、未調査地に井戸が隠れていないか検討してみたい。

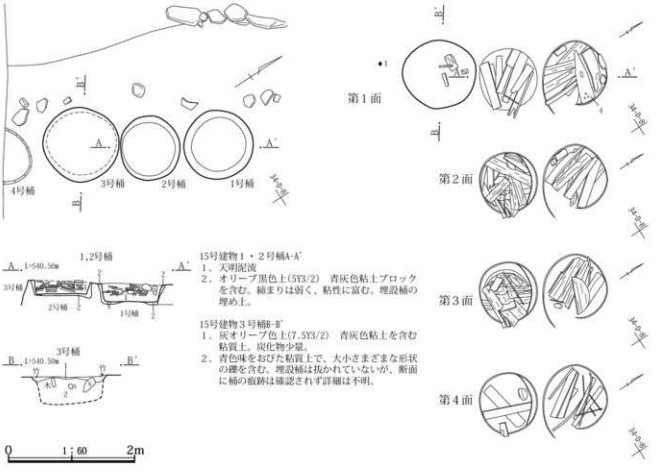
まず、天明期川原畑村の井戸の所有実態をみておこう。



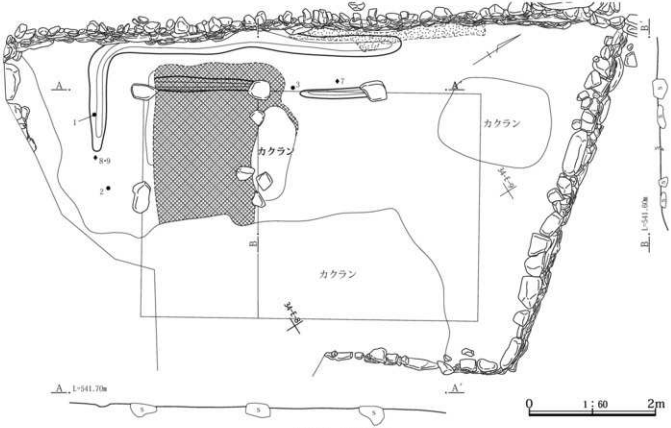
第86図　13号建物



第87図　13号建物１～３号桶(板材等出土状態)



第88図　13号建物(１～３号桶、板材等出土状態)・15号建物(４号桶)



第89図　６号建物

5号建物北石垣 L-L'
1．暗褐色土(10YR3/3)　ローム粒子を含む。1'は1層より明るい。
2．黒褐色土(10YR3/2)　粘性に富む。

第90図　２ａ号屋敷裏の石垣

平成26年度調査の西宮遺跡(１・２区)では屋敷３ヶ所が確認されているが、井戸１基が確認されただけであり、そこでは井戸を共同使用したとものと考えた。これに対し、境川を挟んだ対岸の東宮遺跡では、井戸を共同所有する例は皆無とはいえないが、大部分が屋敷内に井戸を備えることが判明、屋敷内に井戸を穿とうという住民の強い意志を示唆するものであった。２ａ号屋敷の井戸について考える際、上述した傾向を踏まえるべきであるが、状況的に屋敷内には井戸があるとは想定できないため、この屋敷の住人は沢から水を汲んだか、屋敷東を流れる水路から水を汲んだか、あるいは、２ｂ号屋敷の井戸を共同使用したか、いずれかであろう。以上が検討の前提となる。

ミョウガ沢は２ａ号屋敷付近で南東から南へ流路を変えているが、一般的に山を流れる沢水は降雨に敏感に反応して一気に流速を早め、流量も増える。２ａ号屋敷は増水時の攻撃面になることから、沢は護岸されていたと考えるべきである。井戸の共同利用は、共同帯の紐帯を維持するための装置として欠かせないものであったが、いまやこうした説明は現実的ではなくなっており、井戸は屋敷毎に確保したとすべきである。現状では、沢の水をダムアップしてそこから水を汲んだものと考えておきたい。敷地南東の段差については性格づけられていないが、この段差も水路に接する地点にあり、水に係る施設とすることもできるかもしれない。

その他の施設には、石垣裏の畑へ行く際の階段・通路が建物裏にあり、主屋の東には雨落溝とは別に浅い溝があり、溝は長さ9.2mを測る。溝は建物に並行しているが、詳細は分からない。

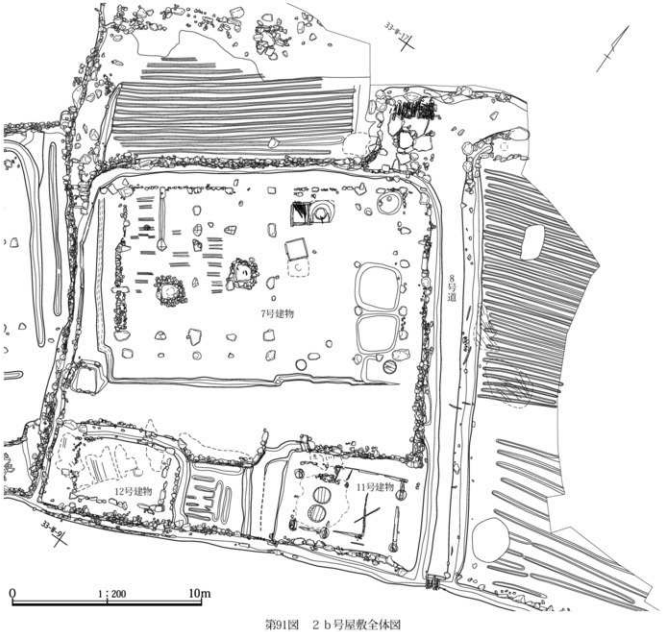
＜石垣＞　建物裏の石垣には根石に１m近い大型礫が使われており、見た目にも積み方は粗い。建物裏の石垣は中央付近をクランクさせ、上の畑へ行く通路(幅0.5m)が確保されている。石垣の礫は礫の側面を正面に据えるものが多く、天場石がないものも多い。西宮地区の石垣は全般的に目が通らず雑に見える。強度的にも弱く、石垣が変形、崩落したものも多い。

(５)２ｂ号屋敷(付図１)

２ｂ号屋敷南には真田道(７号道)があり、屋敷東には崖上の集落(上村)に続く８号道がある。前項でも触れたとおり、吾妻川流域の河岸段丘面には崖線から土砂供給があり、谷の出口に小規模な扇状地が形成されている。西宮地区ではその扇端部に屋敷があり、それがために湧水がある。これを排水するため屋敷まわりには石組水路が欠かせなかったようである。そうすることで継続的な排水が可能となり、ある程度快適な住環境が得られたのであろうが、降雨に敏感に反応する地質環境(地盤が脆く、側壁がくずれやすい)に原因があり、そうせざるを得ないということであろう。実際水路を仔細に見ると、いたるところ修繕だらけで、伐採木を石垣に抱かせ木杭で止め、溝に伐裁木を埋め込み溝の側壁を補強するなどした箇所が随所に残されていた。

２ｂ号屋敷は標高540m付近にあり、泥流は厚い所で１mほどであり、泥流到達点(標高544m)に向けて徐々に層厚を減じていくが、真田道(７号道)より上の復旧坑は意外に少ないのが実態である。真田道より下の１ａ～１号屋敷の屋敷まわりには例外なく復旧抗があり、これにより田畑が復旧されていたが、真田道より北の復旧はどのようにして行われたのであろうか。復旧坑はなく、これによる復旧は想定できないため、現状では建物から検討するしかない。

１ａ～１ｃ号屋敷では被災後も概ね同じ位置に建物が再建されていたが、被災後の２ａ・２ｂ号屋敷はどうかというと、従前の谷の出口に並んでいた在り方から、谷の出口を避ける建物配置に変化した可能性がある。ここには移転前４世帯があり、少なくとも天明期に倍する世帯がそこでくらしていたのであるが、被災後は谷の出口



第91図　２ｂ号屋敷全体図

を諦め、山側に屋敷を移したものと思われる。谷の出口を避けたのは湧水によるためであるが、木器の保存には最適となり、建築部材等が多量に出土した。屋敷面積は421.2㎡(127.6坪)で、西宮地区で３番目となる。敷地内には主屋１・カワヤ１・小さな土台建物１があるほか、菜園１があり、狭い土地を有効利用しようとする姿勢が明らかであった。

主屋は土台建物であり、桁方向14.75m・梁方向8.8mを測る。建坪は129.8㎡(39.3坪)で、建物南に戸口、建物内には土間・居間・客間・寝間(納戸)があり、建物構造は５号建物に近い。囲炉裏は３ヶ所にあり、うち１基は土間囲炉裏、残る２基が板の間に切られた囲炉裏である。竈脇には木組み遺構があり、建物奥には唐臼がある。

主屋の南側には、ニワを挟んで南側にカワヤと付属屋、そして、小さな菜園がある。カワヤも付属屋も壁土が石垣に貼り付いて出土している。カワヤには埋設桶２が確認されたほか、屋外に埋設桶１が確認されている。菜園北のニワにはAs-Aが集積されていた。

＜７号建物＞(第92～95図、付図６、PL.52～63)

位　置　屋敷跡は、７号道と８号道の分岐点にある。敷地は421.2㎡(127.6坪)と広く、建物は敷地奥に造られている。建物は崖線を刻む谷の出口から約70m離れた地点にあり、地形的には比較的平坦である。屋敷北・西側で

は傾斜地を切り、東・南側では盛土して石垣を積んでいる。

規　模　桁行14.75m・梁行8.8m（129.8㎡）

建物構造　土台建物である。建物北および西の側まわりの礎石間に礫を連続して並べている。とくに、西側の側まわりには礫を幅広く（40㎝幅）並べており、床の間など客間施設を示唆するかのようであった。建物構造は隣接する５号建物に類似、ここでも土間囲炉裏があり、客間には縁が付いていた。

戸口は平入であり、右から左へ開けるタイプの引き戸である。引き戸を開けるとすぐ右に馬屋があり、左には土間側に飛び出した板の間があり、そこには囲炉裏が切られていた。土間奥に竈があり、竈左には木組み遺構がある。唐臼は引き抜かれているが、その痕跡が建物右奥のコーナーにある。唐臼に伴う支柱は近接する柱穴（P3）を想定してみたが、深度が浅く支柱としては機能しないことが明らかで、はっきり断定できるものは確認できていない。土間に続いて居間があり、客間がある。居間や客間には、土圧で折れた部分のみ根太のプリント痕が残されていた。

居間１（第92図、PL.54）　竈手前に囲炉裏枠木があり、近接して１号囲炉裏そのものがある。これに付随して床板が出土しており、板の間に切られた囲炉裏であることが分かる。囲炉裏は厚い灰層もなく、礫を用いることもなく、焼土があり、枠木が確認されただけである。水位が高く、掘り方は確認できていないが、土間には枠木の痕跡が残り、大引を転がし根太として床板を置いたもので、居間２とは床の段差があるかもしれない。居間１南側の転がし根太（第94図）は中央馬屋柱筋にある。北側の転がし根太がどこになるのかわからないが、北側馬屋柱筋を想定した場合、面積は6.5㎡（桁方向2.42m・梁方向2.68m）弱となる。

居間２（第92図、PL.54）　居間１に続く上手側に居間２がある。居間は桁方向3.88m・梁方向5.62mを測り、面積は21.8㎡（6.6坪）である。居間中央より北東側に囲炉裏が切られている。囲炉裏は３尺サイズである。

客　間（第92図、PL.54）　居間に続いて客間がある。客間は桁方向3.78m・梁方向4.72mを測る。部屋の面積は17.84㎡（5.4坪）で、居間２より狭い。部屋の奥には幅4.72m・奥行0.45mの押板がある。囲炉裏は３尺サイズで、部屋の中央からみて居間側に寄る。

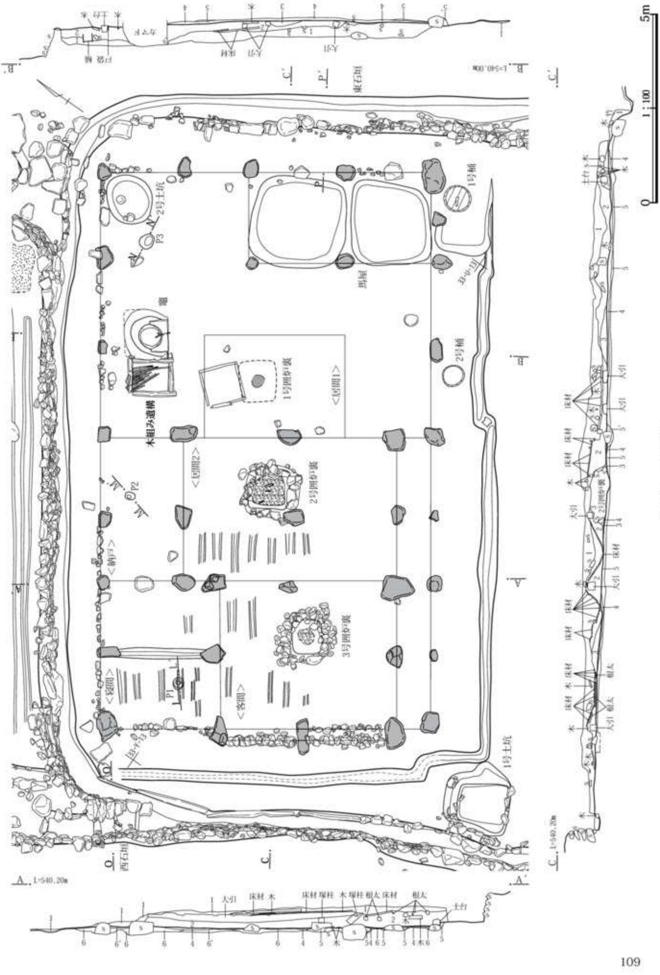
寝間（納戸）（第92図）　居間・客間の裏にある。土間に近い手前が8.5㎡弱、奥が12㎡弱になる。いずれも柱穴（P1・P2）があり、これがどのように建物構造に関連するのか不明だが、手前と奥の部屋では梁方向に３尺の差があり、可能性として押入や棚等が想定されよう。

土間・整地面（第92図）　梁方向に２本、桁方向に１本、土層図を図示した。これにより礎石と大引、床板の関係が良く分かり、建物奥～竈、竈～居間の中程、居間～建物南土壁が比較的平坦であり、各区画を境に床面に高低差があり、段差があることが分かる。同じく妻側にも石垣～客間の中程、客間中程～居間中程、居間中程～土間は、それぞれ比較的平坦だが各区画を境に段差が生じている。こうした傾向は総じて水はけ等に配慮した結果だが、礎石のレベルにはそれほど留意していないように見える。それは断面図を見れば明らかであるが、その頂部が水平になることはほとんどない。恐らく、これは器用仕事の典型的とされるもので、薄い板材を重ねることも間々あり、大引の代わりに貫板を縦に置いて代用するなどしたのであろう。

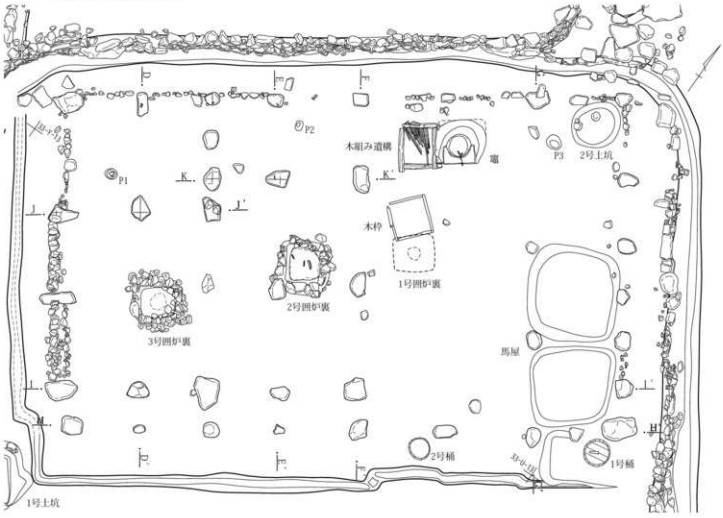
床面は良く叩かれているのだろうが、ロームを貼り、床を仕上げるようなことはなかったようである。床下の截ち割り調査では鉄の付着が著しく、多湿環境にあったことが分かる。

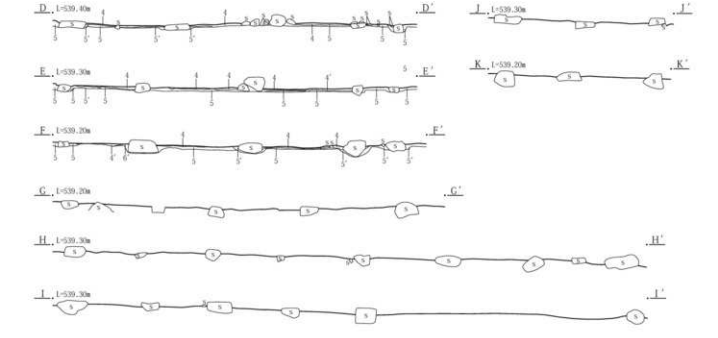
写真23　７号建物全景（東から）

馬　屋（第98図）　長軸4.78m・短軸2.48mを測り、馬屋面積は11.9㎡（3.6坪）になる。馬屋には排出物を掻き出した窪地がある。通常は窪地端部が解放され、埋設桶に排出物を流しているが、この馬屋の場合そうした仕組はなく、大きな窪地２ヶ所があるだけである。写真を見る限り、埋設桶に近い手前側窪地より奥の窪地の方が深く、


東石垣
西石垣
馬屋
1号桶
2号桶
2号土坑
1号土坑
竈
木組み遺構
1号囲炉裏
2号囲炉裏
3号囲炉裏
<居間1>
<居間2>
<納戸>
<寝間>
<客間>
P1
P2
P3
A　L=540.20m
B　L=540.00m
C　L=540.20m
大引
床材
塚柱
根太
土台
0
1:100
5m

第92図　7号建物





7号建物A-A'～F-F'
1．黒褐色土(2.5Y3/2)　天明泥流。鉄分が凝集し、やや明るく見える。
2．黒褐色土(2.5Y3/2)　天明泥流。上層よりやや暗い。有機質土が混じる。
3．暗褐色土(10YR3/3)　竈構築材を巻き込む。泥流起源。
4．にぶい褐色土(10YR5/3)　床面化粧土。4'は灰を含む。
5．にぶい褐色土(10YR5/3)　ロームブロックを多量混入。整地土。5'はローム土体の埋め土。
6．にぶい褐色土(10YR4/2)　ローム粒子多量混入。6'は6層よりややや明るい。

0　1:100　5m

第93図　７号建物断面図

第94図　7号建物建築材出土状況1（土台・大引・根太）

第95図　７号建物建築材出土状況２（床板材）

そして、図は簡略化されているが、窪地の南東側が深く抉れているように見える。馬屋は馬２頭が同時に飼えたはずであるが、埋設桶の数からみて、１頭しか飼っていなかった可能性が高い。埋設桶は建物南にあり、径70㎝サイズの桶が使用されていた。

埋設桶(第99図、PL.60)　戸口手前の下屋下に埋設桶１がある。桶サイズは底径が55㎝と小型である。小便桶と言われるものであるが、詳細は分からない。

竈(第96図.PL.59)　建物奥に竈がある。竈は長軸1.32m・短軸1.16mを測り、鉄鍋類を据え付ける竈開口部の径は50～53㎝ほどである。焚口は幅40㎝・高さ32㎝を測る。焚口前は灰を掻き出し、浅く窪んでいた。竈本体の構造は、奥壁と両袖に切り石を置き、その間に二重に礫を並べるというもので、製作意図が分かりやすい竈である。下部構造を造り終え、続いて、礫と粘土を混ぜて積み上げており、最終的に天井石を乗せ、粘土を塗り仕上げていくのであるが、こうした竈構築法は各建物とも同様であり、アーチ状を呈する天井石は長さ84㎝・幅52㎝を測る。アーチのサイズも変わらない。集落内では同じ材料を使い、同じサイズの竈を設置しており、同系列の工人集団(職人)が手掛けたものといえそうである。

囲炉裏(第96・97図、PL.59)　囲炉裏は居間の２ヶ所にあるほか、客間にも１ヶ所がある。いずれも３尺サイズの囲炉裏で、場所により異なるということはない。

１号囲炉裏は、居間１に切られた囲炉裏である。木枠が残り、囲炉裏サイズが分かる。木枠は泥流で北に木枠分だけ押されているが、流出前の場所にも木枠の痕跡が残されている。灰層は大部分が流され、焼土があるだけである。水位が高く、掘り方は確認できなかったようで、図は残されていない。居間１はころがし根太に床板を敷いた板の間であり、それほど高い床でなかったことは前述したとおりである。

２号囲炉裏は、居間２に切られた囲炉裏である。居間中央より北東側に囲炉裏はあり、厚く礫を敷き、これを粘土で固めて囲炉裏が造られたことについてはすでに述べたとおりである。囲炉裏の使用面と床面とは高さ30㎝ほどであり、居間１の床面とは10～15㎝ほどの高低差がある。囲炉裏は浅い掘り方がある。

３号囲炉裏は、客間にある。囲炉裏サイズや囲炉裏の切られた位置、囲炉裏構造については前述したとおりであり、特に付け加えることはない。囲炉裏構成礫は概ね床面を掘り込まず礫を敷き粘土で固め囲炉裏としたものである。

唐臼・支柱(第99図、PL.61)　調査中唐臼とされたものはないが、資料整理の段階で唐臼認定したものがある。調査中２号土坑とされたものがそれであり、これに伴う唐臼支柱は確認できていないが、土坑の検出位置から判断した。２号土坑は建物奥北東隅にあり、長径1.40m・短径1.20m・深さ0.34～0.40mを測る。土坑の形状は楕円形状に近い。唐臼は泥流後に抜き取られることが多く、位置的に「抜き取り土坑」として問題ないだろうが、これに伴う柱穴が確認できていないことだけが不安要素になる。

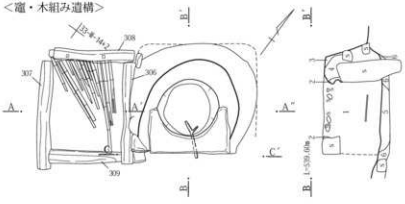
柱　穴(第99図)　建物構造には係わらないだろう柱穴３本がある。いずれも建物奥で確認されたものであり、P1・P2が寝間(納戸)に、P3が唐臼の抜き取り土坑付近にある。

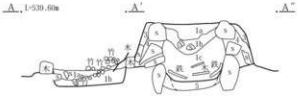
P1は、径30㎝深さ42㎝を測る。比較的しっかりした柱穴だが、それがどのように機能したのか分からない。P2は、径22㎝・深さ18㎝と浅く。これに対になるような柱穴がなく、詳細は不明としかいいようがない。P3は、径40㎝・深さ20㎝を測る。唐臼土坑(２号土坑)に近く、唐臼支柱を埋めた柱穴としてみたが、浅過ぎて支柱として機能しないのは明らかである。これもまた詳細は不明。

出土遺物(第94・95・100～103図、PL.54～58)　建築材及び農具・厨房具・食膳具など木製の道具類が出土している。建築材には土台・大引・根太・床板・柱・貫板・敷居などがあるほか、建築端材その他の不明板材が多量に出土した。第94図には、その部材が使われただろう場所が分かる構造材(土台・大引・根太)に加えて、木組み遺構・囲炉裏枠木・関連部材の出土状態を図示した。また、第95図には床板主体の出土状態を図示した。建物南を除く側まわりには土台が廻り、梁方向に大引があり、桁方向に根太があるという位置関係が明確にわかる。以上を踏まえることで、①柱を立てる位置、②部屋の仕切り、③囲炉裏の取り込み、④床板の高さ、⑤土台接手と端材使用の多様性が明らかになるのではないかと考えている。

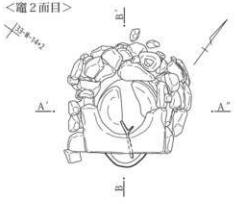
木製品(道具)類は多様性に富んでおり、それが木製であるがために、泥流で大きく流され、出土位置について過大評価することは避けるべきであるが、それでも各種

＜竈・木組み遺構＞



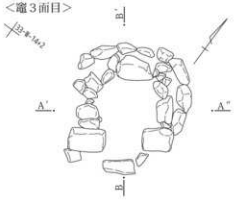


＜竈２面目＞



＜竈立面図＞

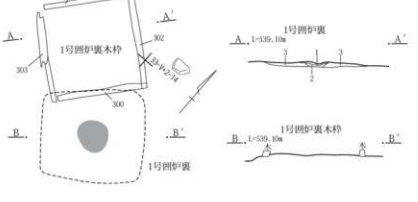
＜竈３面目＞



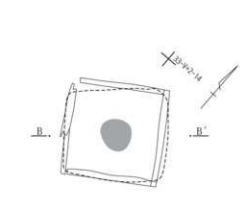
7号建物木組み遺構A-A'
1a．天明泥流。灰や炭化物をふくむ。泥流下層に対比できよう。
1b．天明泥流。1a層と同様、灰や炭化物をふくむ。1a層よりやや締まりに欠けて、全体にフカフカしている。

7号建物1号竈A'-A"
1．天明泥流。下層ほど炭化物や灰の混入が増える。A-A'では3層に細分。
2．にぶい赤褐色土(10YR4/4)　小礫を含む。竈芯材被覆土。
3．灰黄褐色土(2.5Y6/2)　粘土ブロックを含む。竈芯材被覆土。
4．灰オリーブ色土(7.5Y4/2)　小礫を含む。竈芯材。
5．灰層
6．黄褐色土(10YR0/0)　炭化物を含む。締まりは強い。

＜1号囲炉裏＞



＜木枠復元図＞



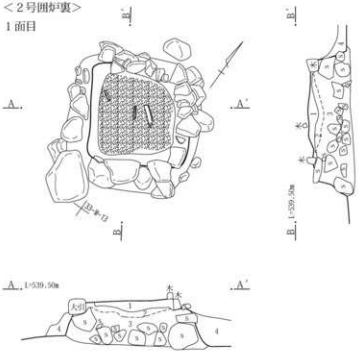
7号建物1号囲炉裏A-A'
1．鈍い赤褐色土(2.5YR5/4)　締まりはあるが、粘性には欠ける。被熱して粘土ブロックが弱く赤化している。
2．橙色土(7.5Y3/4)　被熱して赤化する。
3．暗褐色土(10YR3/4)　囲炉裏整形土が焼土化、炭化物散見。
※囲炉裏整形土とされているが、整形土を剥いで確認される掘り方の詳細は不明。

0　1:40　1m

第96図　7号建物竈・1号囲炉裏

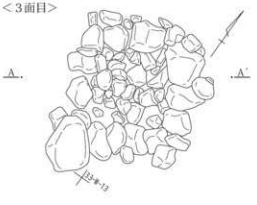
＜２号囲炉裏＞

１面目



＜２面目＞

＜３面目＞

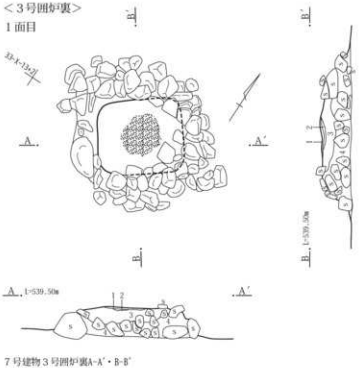


7号建物２号囲炉裏A-A'・B-B'

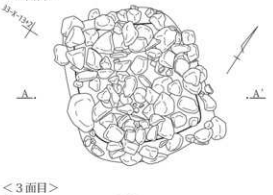
1．灰層。
2．にぶい赤褐色土(7.5YR3/4)　下層の３層が被熱して赤化している。
3．暗褐色土(10YR3/4)　囲炉裏整形土と見られる粘質土で囲炉裏構築礎を固めている。大粒のローム粒子を含む。
4．天明泥流

＜３号囲炉裏＞

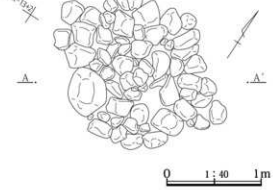
１面目



＜２面目＞



＜３面目＞

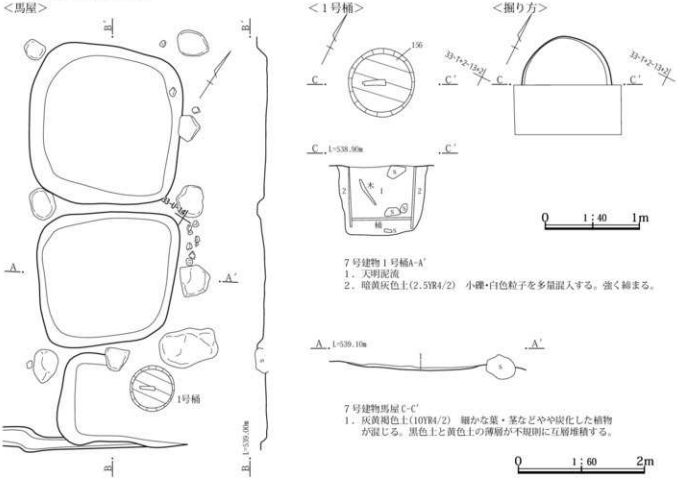


0　1:40　1m

7号建物３号囲炉裏A-A'・B-B'

1．灰層
2．暗褐色土(10YR3/3)　被熱して赤化する。
3．暗褐色土(10YR3/3)　炭化物・焼土粒を少量混入する。やや粘性に欠ける。
4．暗褐色土(10YR3/3)　３層と同質、鉄錆が凝集する。炭化物を少量混入する。

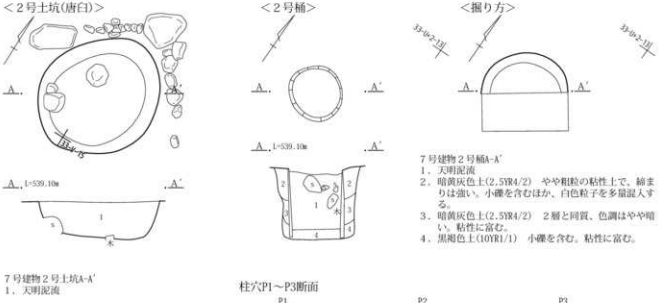
第97図　７号建物２・３号囲炉裏



７号建物１号桶A-A′
１．天明泥流
２．暗黄灰色土(2.5YR4/2)　小礫・白色粒子を多量混入する。強く締まる。

７号建物馬屋C-C′
１．灰黄褐色土(10YR4/2)　細かな葦・茎などやや炭化した植物が混じる。黒色土と黄色土の薄層が不規則に互層堆積する。

第98図　７号建物馬屋・１号桶



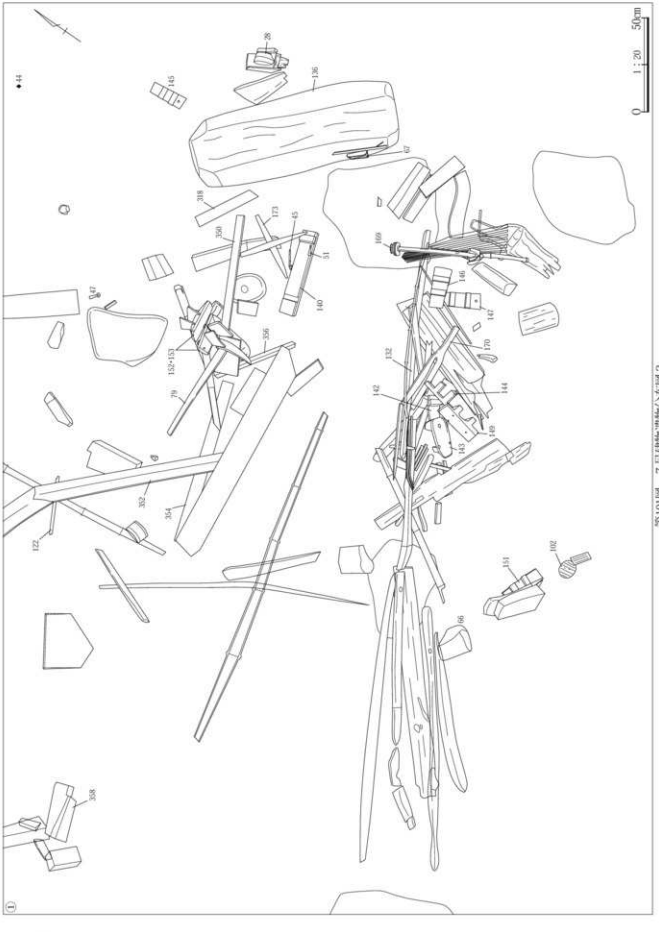
７号建物２号土坑A-A′
１．天明泥流

７号建物２号桶A-A′
１．天明泥流
２．暗黄灰色土(2.5YR4/2)　やや粗粒の粘性土で、締まりは強い。小礫を含むほか、白色粒子を多量混入する。
３．暗黄灰色土(2.5YR4/2)　２層と同質、色調はやや暗い。粘性に富む。
４．黒褐色土(10YR1/1)　小礫を含む。粘性に富む。

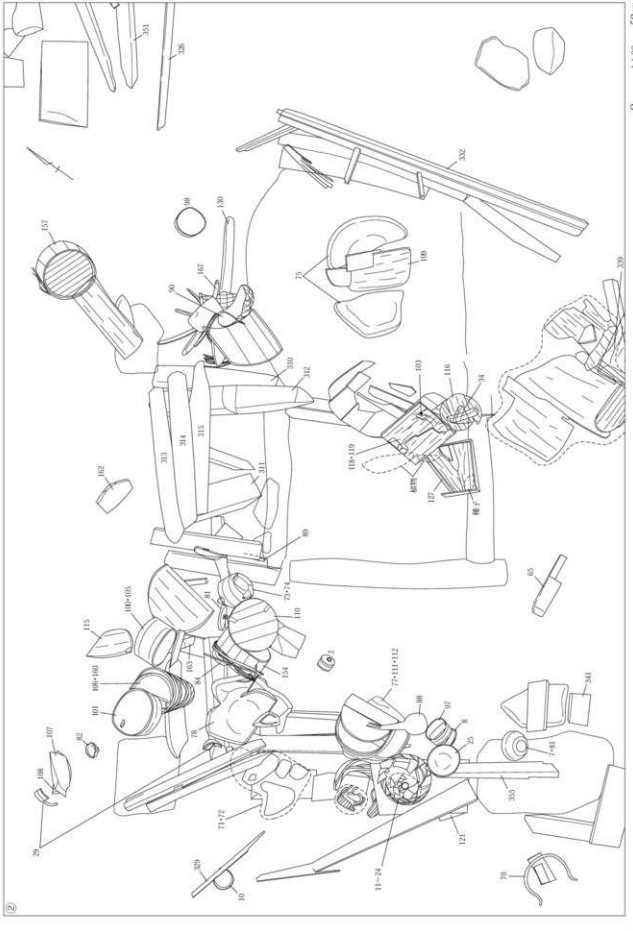
柱穴P1～P3断面

第99図　７号建物２号桶・２号土坑

第100図　7号建物遺物分布図1



第101図　7号建物遺物分布図2



第102図　7号建物遺物分布図3

第103図　７号建物遺物分布図４

施設と出土遺物を関連づけることができる場合があり、そのことに触れておきたいと思う。

第101図には、戸口に近い居間南東部の遺物分布を図示した。そこには不明板材等も多数出土しているが、下駄・傘・豆たたきが出土するなど、戸口という場の性格を反映した遺物が出土した。戸口を開けるとすぐ左が居間になり、居間の南は３尺の縁が付いているが、これに似た構造は２号建物でも確認されている。ここでは板を敷き詰めるなどする在り方は見られないが、①下駄が多出すること、②出掛ける時に持つ蛇の目傘、③特定農具（豆たたき）が出土すること、④やや離れているが、香炉と砥石が箱に収納され出土したことや、収納施設北１ｍで片ツルハシが出土するなど、①～④により収納施設と考えた次第である。居間２に接した土間にはフネが反転した状態で置かれ、これも上り口に使われたのであろう。当初、居間の手前には通例に従い縁を想定してみたが、土間側の１間分は収納施設とした可能性も考えておく必要があるかもしれない。

写真24　居間床板出土の下駄・片ツルハシ

第102図には、竈および木組み遺構周辺の遺物分布を示した。分布域には竈奥の側まわり土壁があり、居間奥には寝間（納戸）があり、そうした間取りを踏まえ、遺物分布を考える必要がある。傾向としては、寝間と木組み遺構の間に板材があり、板材の上には籠があり、籠には陶磁器類や繊維製品が収納されていたことや、籠に収納されないまでも、陶磁器（皿）や漆椀、杓文字、曲げ物がおかれていたことが指摘されよう。建物奥の壁際には桶やオヒツ、鉄鍋、薬罐があり、これらについては泥流で建物奥へ押し出されたということになろう。

竈には鉄鍋が掛けてあり、本来の位置を保ち出土しているが、木組み遺構の上に重なり出土した桶や箱類等は位置不明の流入物ということになる。

第103図には、１・２号囲炉裏周辺部の遺物出土状態を図示した。まず１号囲炉裏からみていこう。枠木から１ｍほど南に方形に広がる灰と焼土があり、ここが囲炉裏本来の場所であったことが明らかになっている。囲炉裏は「転がし根太」により低い床面に切られたことが分かっており、泥流で流れた枠木周辺の遺物は１号囲炉裏で使われていた道具類が出土したと考えた。続いて、２号囲炉裏だが金鉄や火箸があり、やや離れてキセル（完形品）や火打ち箱が出土した。キセルは完形状態にあり、囲炉裏の南側から出土したキセルが雁首と吸い口がバラバラであるのとは対照的であった。囲炉裏にキセル（火打ち箱を含む）はつきものであることから、囲炉裏南のキセルは雁首と吸い口が破損状態で出土した可能性が高く、箱等に破損品が収納されていたと考えておきたい。囲炉裏の機能はさまざまであるが、囲炉裏に関連してキセルや鉄鍋があり、陶器碗類が出土するという傾向は認めていいように思う。

続いて、板戸と障子の出土位置をみてみよう。客間に板戸２枚と障子、奥の寝間に板戸２枚、２号囲炉裏北に板戸２枚があり、うち１枚が戸外に流出していた。泥流が南から流入したことを思えば、前者は客間南の板戸と障子、後者は客間と寝間、あるいは居間と納戸を仕切る板戸ということになろうか。１号囲炉裏から竈周辺や、納戸から建物裏に板戸が出土しているが、これも手前側から奥へ押し流されたものだろう。

＜**11号建物**＞（第104～106図、PL.64）

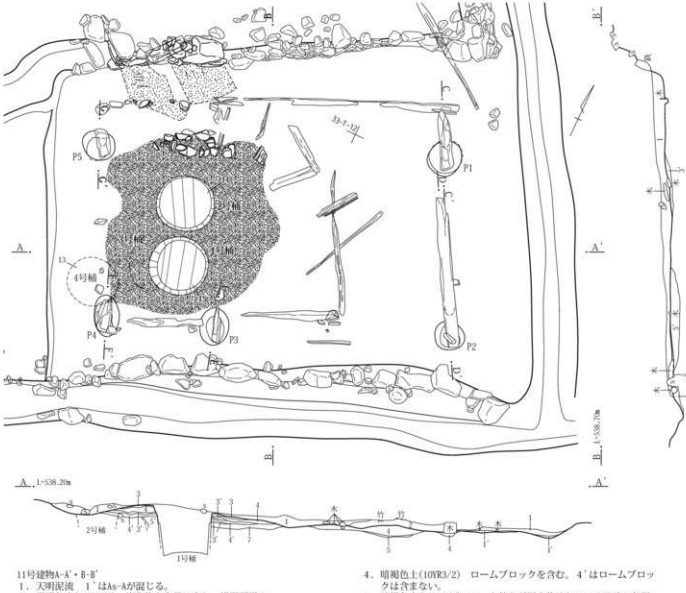
位　置　７号建物南にある。屋敷の出入口は敷地の中央にあり、街道から敷地に入るとすぐ右に11号建物（カワヤ）がある。カワヤ入口は桁方向に土壁があり、妻側になる可能性がある。北西側から段造成され南東側に石垣を築き盛土している。

規　模　桁方向5.50m、梁方向（西）2.80m・（東）3.05m

建物構造　建物西に街道から屋敷に入る進入路があり、建物北には庭の境の石垣が、建物南と東には街道脇の溝があり、区画されたなかに建物はある。

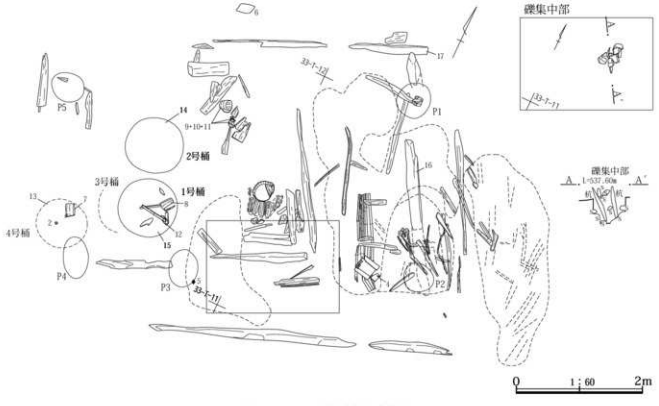
建物北に２mほど角礫を直線的に並べ、これより東は伐栽木を埋め込んでいる。雨落溝は図に示されていないが、建物西にある。このほかには建物を廻る雨落溝は確認できていないが、南水は直接街道脇の溝に流れ込んでいたと思われる。

掘立柱建物で、柱穴５本が確認されている。P3に対向する位置の柱穴が未確認だが、恐らく確認できていないだけのことであろう。建物はカワヤ部分と堆肥置場からなる。P1・P2には泥流で倒れた柱材が残り、街道脇の溝には杭で止めた土止め用の伐栽木の上に礫を並べて溝の側石としていた（写真26）。カワヤ埋設桶の北には礫が並んでいることから、柱に根固め用の横木を渡す構造とな



11号建物A-A'・B-B'
1．天明泥流　1'はAs-Aが混じる。
2．黒褐色土(10YR3/2)　炭化物を多量に含む。堆肥置場？
3．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ローム土主体の埋め土。貼床。
　3'はローム主体の埋め土、ロームは還元して青味を帯びる。
4．暗褐色土(10YR3/2)　ロームブロックを含む。4'はロームブロックは含まない。
5．暗褐色土(10YR2/2)　ローム粒など混入物はない。やや暗い色調。
6．青灰色土(5B6/1)　粘性が強い。還元気味。ロームが変質。
7．青灰色土(5BG4/1)　６層と同質、還元してロームが変質。

第104図　11号建物



第105図　11号建物遺物出土状態

るものであろう。カワヤ桶の周辺は、粘土で貼り床されていた。西宮地区のカワヤは竹簀子で仕切られているようであるが、ここではそうした構造は確認できていない。出入口は明らかでないが、建物北の石垣には土壁が貼り付いていた。カワヤ本体の柱穴ライン(P3・P4)より堆肥置場の柱穴ライン(P2)が街道側に0.3mほど突出、堆肥置場が街道側に広がるかもしれない。

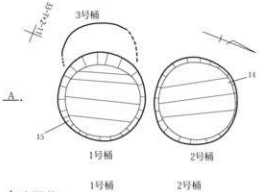
埋設桶・堆肥置場　妻側１間(1.8m)で仕切られている。埋設桶２基は直径0.9mサイズ(３尺)で、堆肥置場側に埋設され、妻側にスペースが空いている。

写真26　建築材の出土状況(建物手前の植木)

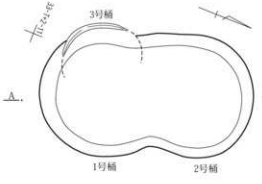
写真25　泥流の堆積状況

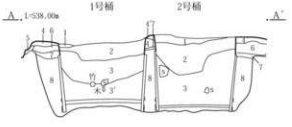
写真27　建築材の出土状態

＜１・２号桶＞



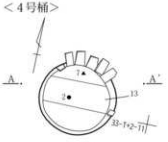
＜１～３号桶掘り方＞



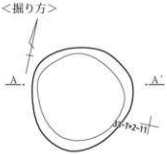


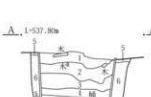
11号建物　１・２号桶A-A'
1．暗褐色土(10YR2/2)　天明泥流。ローム土を多量に含む。
2．暗褐色土(10YR3/4)　天明泥流。やや砂質、拳大の礫の混入。
3．暗褐色土(10YR3/3)　天明泥流。大型礫を含む。途中褐色土を境に上層が明るく、下層(３')は暗い。
4．黄褐色土(2.5YR5/6)　非常に締まりの強い粘土。
5．黒褐色土(7.5YR2/2)　ロームを多量混入する。締まりは強い。
6．黒褐色土(10YR2/3)　ローム粒を含む、固く締まる。
7．青灰色土(5BG5/1)　還元して青灰色を呈す粘土。４～７層は貼床。
8．黒褐色土(10YR2/3)　小礫を含む粘質土。

＜４号桶＞



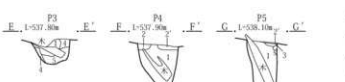
＜掘り方＞





11号建物　４号桶A-A'
1．黒褐色土(10YR2/2)　泥質土。締まり弱く、粘性に富む。
2．暗赤灰色土(2.5YR3/1)　１層と同質だが、やや赤味が強い。
3．黒褐色土(10YR2/2)　泥質土。30%ほど細かい砂が混じる。
4．黒褐色土(7.5YR3/1)　有機質が分解した堆積物、粘性に富む。
5．黒褐色土(10YR3/1)　礫を含み、固く締まる。貼床。
6．暗褐色土(7.5YR3/3)　泥質で、小礫が混じる。埋め上。

0　1:40　1m



11号建物P1～P5共通
1．暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒・炭化物を含む。埋め上。
2．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ローム土・粘土主体の貼床。２'はローム土を含む。締まりは強い。
3．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　暗褐色土と灰色粘質土の混土層。
4．褐色土(7.5YR4/2)　柱材の根固層、締まり強い。ローム粒子を多量に含む。
5．黒褐色土(10YR3/2)　最下層に見られるやや締まりを欠く弱粘性土。

0　1:60　2m

第106図　11号建物１～４号桶・柱穴

埋設桶は４基があるとされる。うち１基（３号埋設桶）は１号埋設桶内に痕跡として確認されただけである。残る１基はP4に近い建物外部に確認されたもので、外便所として機能したものと思われる。堆肥置場は桁方向に3.7m弱・梁方向に3.1m弱で、面積は11.5㎡(3.5坪)である。街道側に１尺ほど広がっているが、P3に柱１本を抱かせることで解消される広がりである。堆肥置場には建築材がにＬ字に出土しているが、建築材の交点は正にP3・P4の延長上にあり、Ｌ字に配した建築材は、仕切材としての機能を果たしている。

出土遺物　土台３・角材２・板材２・柄杓２・曲げ物２が出土した。このほか、箱１が出土しているが、状態が悪く、写真のみ記録しただけである。堆肥置場には植物繊維が多量に確認されている。

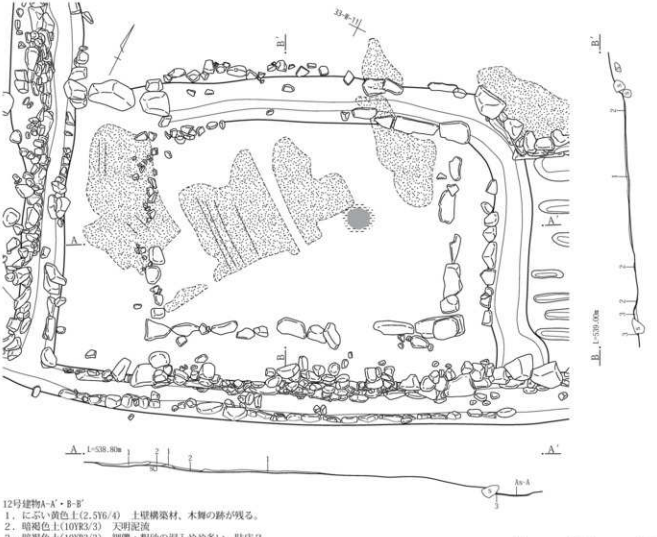
所　見　堆肥置場から出土したＬ字に組んだ建築材は恐らく仕切材(框)であり、堆肥置場が二分され、管理されていたと見たい。泥流直前、街道脇の溝の石垣が崩れ、伐採木を添え木杭で止め溝を補修、街道脇に水路を確保していた。

＜12号建物＞（第107図、PL.65）

位　置　２ｂ号屋敷の南西隅にある。

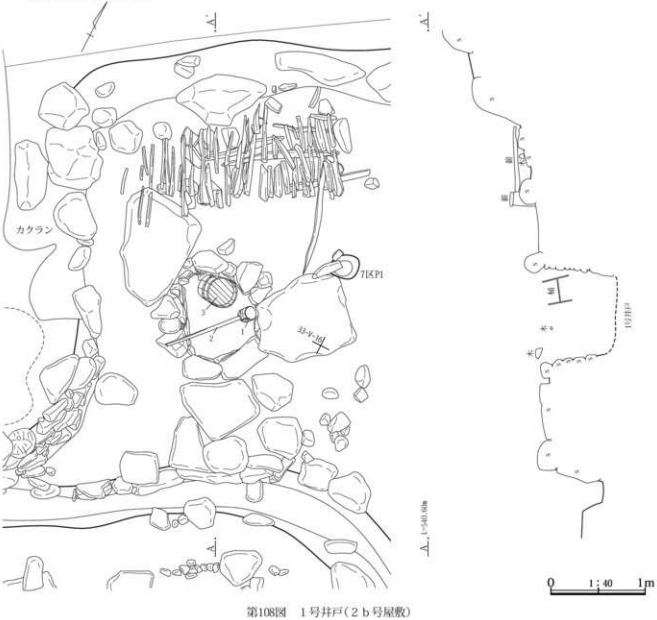
規　模　桁方向3.12m・梁方向1.80m(5.6㎡)

建物構造　土台建物である。土台はすべてが流され、痕跡は残していないが、土壁が建物内に倒れているのが確認されている。建物は小規模で貧粗だが、土壁となっている点が注目されよう。出入口は不明だが、建物東側は菜園になっており、建物西側か南側から出入りしたもの



12号建物A-A'・B-B'
1．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　土壁構築材、木舞の跡が残る。
2．暗褐色土(10YR3/3)　天明泥流
3．暗褐色土(10YR3/3)　礫・粗砂の混入やや多い。貼床？

第107図　12号建物



第108図　１号井戸（２ｂ号屋敷）

と思われる。

床　北西側が高くフラットであるのに対して、南側や東側の床面は傾斜しており、貼り床も明確ではない。炉が建物東、北壁から0.45m（１尺半）手前にある。

炉　略円形を呈し、径0.32～0.34mを測る。焼土を中心に炭化物がリング状に廻る。浅く掘り込んでいるのは明らかであるが、単なる地ガになるのか、上部構造に枠木を持つ囲炉裏になるのか、根拠がなく分からない。

雨落溝　建物北と東にあり、建物西と南は屋敷まわりの溝を利用している。幅0.4～0.5mを測る。

出土遺物　特になし。

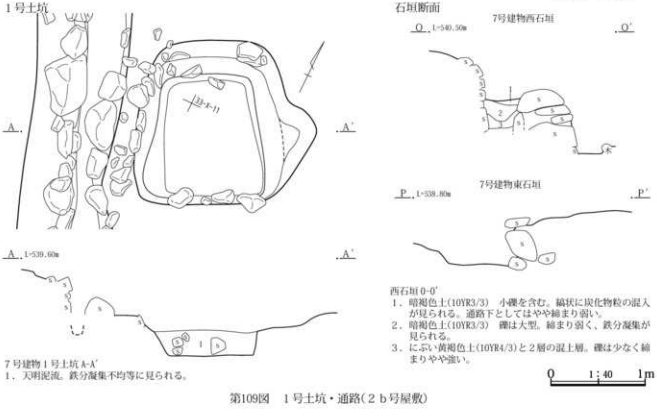
所　見　出土遺物がなく、建物には生活感がない。建物の特徴としては、壁が土壁であり、炉があるということになる。同サイズの建物が小作人の住まいとされる場合や隠居屋とされることもあるが、具体的な確証はない。

＜その他の施設＞

屋敷内には主屋やカワヤ・付属屋以外に井戸・薪置場、土坑、石垣（階段を含む）、築窯が確認されている。

２ｂ号屋敷１号井戸（第108図、PL.61）　石組の井戸で、主屋北東隅にある。井戸の形状は左側が直線的で、残る他辺が多角形状となり、全体としてはD字状を呈する。内法で、長軸0.82m・短軸0.70mを測る。井戸は深さ１ｍまでを確認した。出土遺物には桶１・桝杓１・角材・板材などが出土した。

井戸は主屋（２号建物）東、側まわりのライン上にある。



第109図　１号土坑・通路（２ｂ号屋敷）

井戸へは溝をまたぐこととなるが、特に恒久的な石橋を架けた様子はない。溝から井戸へは大型の偏平礫を踏み石としている。井戸の左右には大型礫を置き、その間に礫を積み、井戸に土砂が流入するのを防いでいる。井戸の左側には平坦面があり、大型の偏平礫が置いてあり、上の畑へ行く際の踏み台としている。井戸は屋敷北東側にあり、方位的に敬遠されがちであるが、水の安定確保を優先させたのであろうか。井戸が街道に接しオープンな状態にあることを踏まえれば、可能性として井戸の共同利用という線も検討すべきかもしれない。

薪置場（第108図、PL.61）　崖線を切り土して平坦面を造り、整地面に礫を並べ薪置場とする。薪を置く際、横木を渡しており、これに直交するよう長さ90cm前後の薪50本弱を並べていた。樹種については確認していないが、後述する別地点の粗朶木置場同様、コナラが主体となるものと思われる。

７号建物１号土坑（第109図、PL.61）　主屋西の雨落溝に接した位置にある。土坑の規模は長軸1.41m・短軸1.11m（下場1.00～1.31m）・深さ0.28mを測り、形状は長方形状を呈す。土坑断面は箱状に近く、長軸上端側が「ハ」字状に開く。１号土坑としての出土遺物はない。

同種遺構は東宮遺跡８号屋敷にあり、１号石組として報告されている。機能的には洗い場とされたものであるが、本遺跡１号土坑も西側に水路があり、水路に接した北西コーナーが低く、ここから導水した可能性もある。土坑の形状や立地条件が類似することは明らかである。

階　段（第92・109図、PL.53）　屋敷北西隅にある。４段があり、うち１ヶ所で断面を観察した。石垣の根石に大型礫を置き、この上に偏平礫を重ねる。階段下には天端石を支えるように縦位に礫を埋める。通路には大型の偏平礫を置いていた。

石　垣（第92・109図、PL.53）　２ｂ号屋敷が南東斜面部にあり、その北側と西側を切り土、南側と東側に盛り土して造成されたことはすでに記したとおりである。これに伴い石垣を築き造成地の安定を計ろうとしたものと思われる。石垣が崩れた際は横木を渡し木杭で止め、石垣を積み直している。ここでは７号建物東の石垣を取り上げ、屋敷と街道（８号道）、水路の関係をエレベーションにて図示した。

菜　園（第91図）　真田道から屋敷に入る進入路左に菜園はある。広さ8.7㎡（2.6坪）ほどである。菜園は中央付近で二分され、西側の区画は畝サクが比較的明確だが、東側は広いサクが残されているのみである。

（6）３ａ号屋敷（付図１）

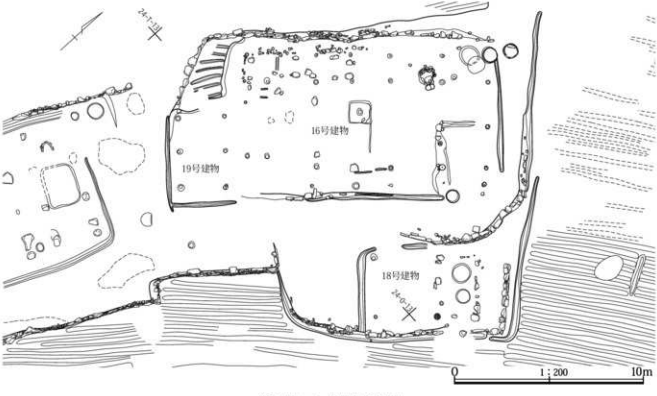
発掘調査では、隣接する屋敷跡を含め３号屋敷としているが、ここでは屋敷構成建物を主屋、付属屋、カワヤと見て、３ａ・３ｂ号建物として報告することとした。３ａ号屋敷は村境に近い諏訪神社に近接した丘陵斜面にあり、斜面部を切り盛り造成して屋敷地としたもので、建物３棟（16・18・19号建物）から構成されていた。

屋敷地は天明泥流が及んだ限界点にあり、これより高位に泥流は達していない。被災前の建物配置、および、ダム建設により移転した住宅の建物配置が一致していることから、被災者本人が建物を再建したのは確実であり、以来230余年を経過した姿が移転前の住宅ということになる。

屋敷地周辺の地形は諏訪神社側から略南東へ傾斜しており、同軸方向に切り盛り段造成し、北西側に石垣１列、南東側に石垣２列を築いている。これにより約270㎡（３畝弱）の敷地を得て、主屋、付属屋、カワヤを建てている。また、敷地内の片隅には菜園（約6.05㎡）１があり、狭い土地を有効利用した様子がうかがえる。屋敷北の街道付近には泥流が堆積せず、攪乱もあり、実態は明らかでないが、現ルートより約10m南に天明期の街道があり、街道に直接接続したかもしれない。街道と屋敷接続部の様子は判然とせず不明だが、３ａ号屋敷の敷地が隅切されていることから、両屋敷とも同じ出入口を使い出入したのであろう。

泥流の到達限界点付近では、どの程度の破壊力になるのか、データを持ち合わせていないが、この建物の検出状態を見る限り、主屋土間付近からカワヤまでが大きく抉られており、これがすべて泥流直下面なら、泥流が引く際は、予想以上に大きな浸食力が働いたということになる。泥流は川側から丘陵斜面を駆け上がり、建物表側から押し寄せ、建物を破壊したものと見られ、庭先の軽石は石垣際のみ残存（厚さ２～５㎝）していたが、建物東には厚く集積されており、庭先の軽石は泥流で大半が押し流されたとみていいだろう。被災直後に唐臼を引き抜いているが、建築材も使えるものは引き抜いているかもしれない。

主屋は掘立柱形式の建物であり、建物規模は桁方向が12.90m、梁方向が6.94mを測る。建坪は89.5㎡（27坪）ほどであり、建物南が出入口となる。建物内には土間・居間・客間・寝間があり、そして、居間には４尺サイズの囲炉裏がある。囲炉裏は石組構造にはならず、土座ということになろう。これに対して、客間南には日常使用する出入口とは別に、ロームで化粧された貼床が２間幅



第110図　３ａ号屋敷全体図

で広がっていた。主屋北東には埋設桶２基があるほか、近接して土坑２基がある。埋設桶については３ｂ号屋敷の主屋にも似た位置に埋設桶があり、建替え前のカワヤとすることもできるが、所見にはプラスチックの破片が出土したとあり、天明期より新しいカワヤとする可能性を残している。これに隣接する土坑は唐臼の埋設位置にあり、唐臼の抜き取り土坑となるならば、これまた泥流より新しくなる。

調査中は土間周辺域の構造物確認に手間取り、掘り過ぎてしまったところも多い。これは、建物基礎まで泥流で抉られていることがわからず対応が遅れたことや建替え前の竈・囲炉裏が複雑に重複していたことが原因している。発掘調査では、これを焼土遺構・粘土遺構として調査しているが掘り上げ状態は同形であり、当初は竈として捉えてみたが、最終的には竈と囲炉裏の併設遺構ということで落ち着いた。これまで八ッ場ダム関連の調査では類例は指摘されていないが、東宮遺跡や下田遺跡に竈と囲炉裏の近接した遺構があり、類例となるだろう。

主屋西の建物は掘立柱形式の建物(桁行3.69m・梁行2.46m)だが、囲炉裏など確認できていない。主屋南の建物がカワヤになる。埋設桶手前の空間は堆肥置場に使われたとされるが、写真に示した通り、泥流で破壊され詳細を明らかにすることはできなかった。

＜16号建物＞(第111～117図、付図７、PL.66～70)

位　置　諏訪神社下の街道南にあり、丘陵斜面を切り盛り段造成して屋敷地を確保、屋敷地の北側に寄せて建物が配置されている。建物正面左には付属屋(19号建物)があるほか、狭い庭先を挟んで南側にカワヤ(18号建物)がある。

規　模　桁行12.9m、梁行6.94m(建坪89.5㎡)

建物構造　掘立柱形式の建物で、変則的田字型、四間取り建物となっている。建物には土間・居間・客間・寝間・納戸があり、土間には馬屋がある。

戸口は平入形式である。建物内に入ると土間になり、下手側に馬屋、奥に竈が置かれている。上手側には囲炉裏を持つ居間(土座)があり、これに客間(座敷)が続く。居間と客間の裏には狭い寝間・納戸がある。建物の内部には居間や客間、納戸境界付近に大型礫が並んでいるが、東宮遺跡に類例があり、大引等を載せたことが判明している。奥の座敷には来客用の玄関が付き、ロームで化粧されていた。

建物裏の上手側と下手側では20㎝の高低差が、建物南の上手側と下手側では50㎝の高低差がある。建物内部は必ずしも平坦でなく、部屋毎に段造成している状況(第111図SPA-A′・112図SPF-F′を参照)にあり、建物内の排水、乾燥が最小限の労力で達成できるように配慮されていた。この結果、建物を巡る雨落溝はなく、標高の低い建物東側と南側に溝があるのみである。

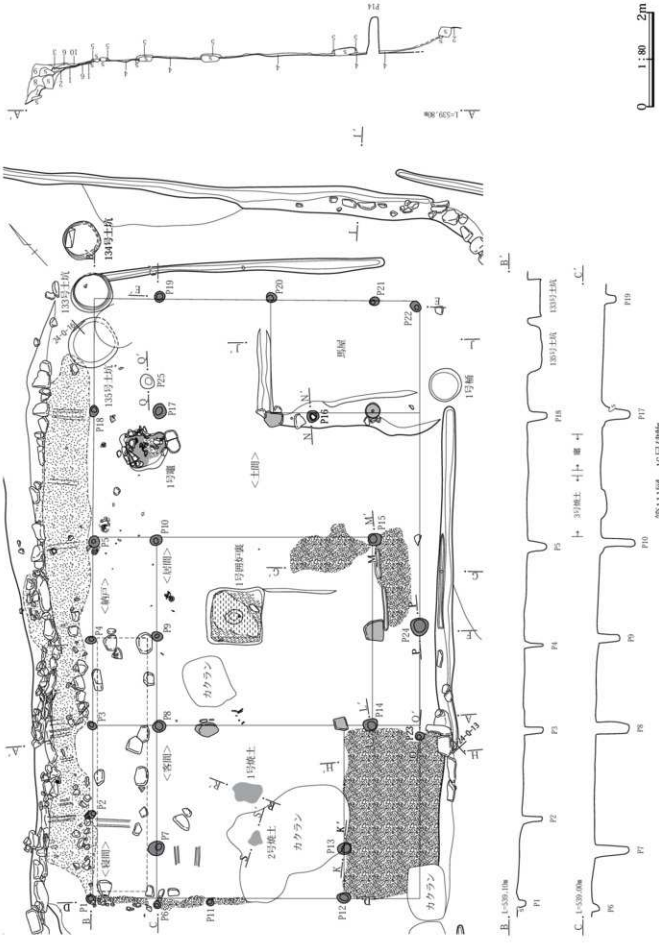
床　面　P24周辺を下げ過ぎてしまっているが、これと似た状況がSPG-G′に見て取れる。同じくSPH-H′は座敷に取り付いた玄関先エレベーション図だが、玄関先の標高は538.64mであるのに対し、同じライン上にあるP15付近(SPM-M′)の床面標高は30㎝以上も下がり、いくら段成形しているとはいっても、下がりすぎている。P10-P15間やP15-P24間には、ロームの貼り床が広がっているが、レベル的に使用面が下がってしまっているように思う。現状で、残存状況の良好な建物奥では桁方向で10cm程度、梁方向で納戸－客間が５cm弱、客間－玄関先土間が10cmの高低差となっている。土間周辺部の床面は泥流で浸食されており、復元的に考えることが必要で、上述した部屋単位の段造成を念頭に考えるべきだろう。

馬　屋(第111図)　建物表・下手側にあり、馬屋の規模は桁方向2.45m・梁方向3.16mを測る。外壁側の柱穴３本は素掘り柱穴だが、建物内の柱穴は１本(P16)のみで、残る２本が礎石を使用していた。

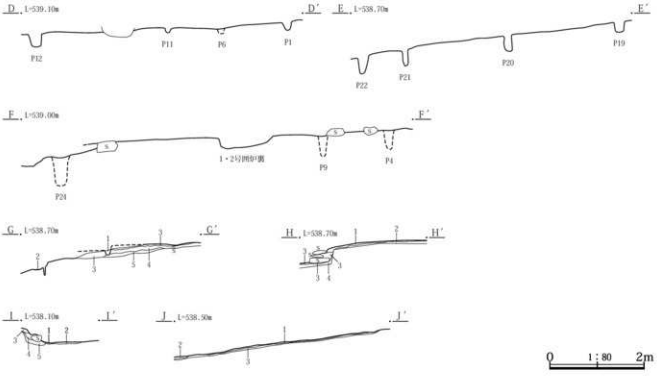
建物前に馬屋桶があり、泥流で埋もれていた。馬屋奥には土台痕跡が残り、馬屋桶に続く窪地も痕跡程度には残されていたが、泥流で大きく浸食され、馬屋内の窪地は確認できなかった。

土　間　本来よく締まっているはずであるが、泥流で土間が削られ、さらには、竈手前から戸口まで10㎝ほど掘り過ぎて下がってしまっている。居間と土間は框で区切られるのが通例で、高低差があるようには思われないが、囲炉裏の右辺ライン上には段があり、ロームが貼られていたようである。同じく囲炉裏の左辺ライン上の礎石と柱穴(P15)間には細い溝があり、その前面にはロームが貼られていた。

柱　穴(第111・112図)　柱穴は計27本が確認されているが、土坑等が重なり確認できていない柱穴数本がある。


0
1:80
2m
134号土坑
133号土坑
135号土坑
1号竈
1号焼土
2号焼土
1号囲炉裏
馬屋
カクラン
<土間>
<居間>
<客間>
<縁間>
<納戸>
1号桶
1号埋炉
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25

第111図　16号建物



16号建物A-A'
1．明黄褐色土(10YR5/6)　泥流で押され、石垣に貼り付いた土壁。
2．As-A
3．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子混入。締り弱、粘性あり。
4．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を含む。締り強、粘性弱。建物貼床。
5．黒褐色土(10YR2/3)　酸化鉄が付着、しまりややあり、粘性あり。
6．黒褐色土(10YR2/2)　細粒砂を含む、しまり弱、粘性弱。
7．黒褐色土(10YR3/2)　黄橙色した小礫を少量混入。しまりやや弱、粘性あり。
8．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を含む。黄橙小礫少量混入する。締り弱、粘性あり
9．黒色土(10YR2/1)　小礫を含む。7～9層は石垣裏込め。
10．黒褐色土(10YR3/2)　小礫を含む。強く締まる。

16号建物C-C'
1．天明泥流　柾目に流した槇木が朽ちて入り込んだもの。
2．As-A
3．明黄褐色土(2.5Y7/6)　床面に貼った粘土。
4．黒褐色土(7.5YR3/1)　小礫少量混入。締り弱、粘性あり。
5．黒褐色土(7.5YR3/2)　上層よりやや明るい色調を呈す。

16号建物B-B'
1．明黄褐色土(2.5Y7/6)　建物貼床。ローム粒子(0.5cm)多量混入。締り強、粘性あり。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物少量、小礫を含む。建物整地層。締り強、粘性ややあり。
3．黒褐色土(10YR3/2)　角礫(10cm)を含む。粘性あり。石垣裏込め。
4．黒褐色土(10YR2/3)　締り強、粘性弱。

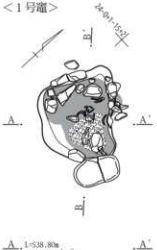
16号建物I-I'
1．黒褐色土(10YR3/2)　As-Aを含む。粘性弱。
2．黒褐色土(10YR3/2)　小礫(0.5cm)多量混入。道路硬化面か。締り強、粘性弱。
3．暗褐色土(10YR3/3)　角礫(0.5～1cm)多量混入。
4．黒褐色土(10YR3/2)　ローム塊を多量混入。
5．黒褐色土(10YR3/1)　4層と同質だが、やや暗い。3～5層は石垣裏込め。

16号建物J-J'
1．黒褐色土(10YR3/1)　小角礫を含。締り強、粘性弱。上面が馬屋床面。
2．灰黄褐色土(10YR4/3)　炭化物微量、小角礫を含む。粘性ややあり。
3．黒褐色土(10YR3/2)　小礫多量混入する。締り強、粘性ややあり。

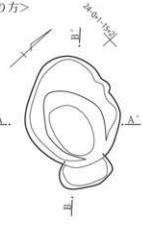
16号建物1～25号ピットK-K'～Q-Q'
P13
1．暗褐色土(10YR3/4)　ローム土を多く含む。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を含む他、小礫を含む。
P14
1．暗褐色土(10YR3/4)　ローム粒子混入。
2．黒褐色土(10YR3/4)　小礫を含む。
P15
1．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子を含む。粘性・締まりあり。
P16
1．黒褐色土(10YR3/1)　角礫多量混入。砂質。
P23
1．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　ローム粒子を多量に混入。
P24
1．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子・小礫を含む。
2．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子を含む。色調は暗い。
3．黒褐色土(10YR3/1)　2層と同質だが、小礫を多量に含む。全体的に色調は暗い。
P25
1．黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色粒子混入。
1．黒褐色土(10YR3/2)　小礫を含む。

第112図　16号建物断面図

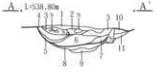
＜１号竈＞



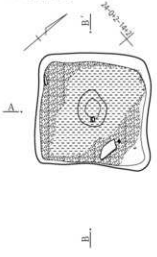
＜掘り方＞



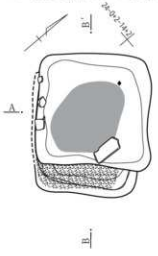
16号建物１号竈A-A'・B-B'
1．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　小内礫を含む。粘性弱。
2．褐灰色土(7.5YR4/1)　焼土塊、炭化物を含む。締り弱、粘性弱。
3．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、ローム粒を少量混入。締り強、粘性弱。
4．褐灰色土(7.5YR4/1)　焼土粒少量、炭化物多量混入。しまりあり、粘性あり。
5．黒褐色土(7.5YR3/1)　焼土粒・炭化物を多量に含む。
6．灰褐色土(5YR4/2)　焼土多量、小礫を含む。底面に炭化物多量に含む。粘性・締まりあり。
7．褐灰色土(7.5YR4/1)　砂質で、炭化物多量、焼土粒少量を含む。
9．灰白色灰(10YR8/1)　灰層。焼土粒少量混入。締り弱、粘性弱。
10．灰黄褐色土(10YR4/2)　明黄褐色粘土大～小塊を含む。
11．褐灰色土(7.5YR4/1)　焼土粒少量を含む。粘性弱。



＜１号囲炉裏＞



＜１号囲炉裏掘り方・２号囲炉裏＞



16号建物１号囲炉裏A-A'・B-B'
1．天明泥流
2．灰層
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒を含む。締り強。建物貼床。
16号建物２号囲炉裏
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒を含む。締り強。建物貼床。
2．明黄褐色土(2.5Y7/6)　１層と同質、やや締りには欠ける。
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　青味があり、やや還元気味。
4．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子混入。
5．灰白色灰層(10YR8/1)　炭化物・焼土微量に含む。
6．明黄褐色土(10YR6/6)　囲炉裏下部構造再構築のローム土？
7．黒褐色土(7.5YR3/1)と灰の混土層　粘性・締りあり。

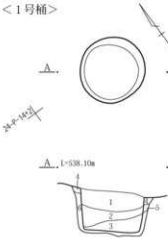
＜焼土断面＞

16号建物１号焼土R-R'
1．灰層　炭化物・焼土を少量混入する。締り弱、粘性弱。
2．黒褐色土(10YR2/1)　灰・炭化物・焼土粒を含む。粘性あり。
16号建物２号焼土S-S'
1．灰層　炭化物少量、焼土粒少量混入。締り弱、粘性弱。
2．焼土　炭化物少量混入する。下位に灰と黒褐色土の混土層がある。

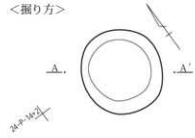
0　1:40　1m

第113図　16号建物竈・１・２号囲炉裏

＜1号桶＞

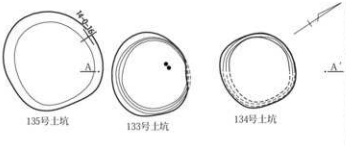


＜掘り方＞



16号建物1号桶A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、小礫少量を含む。天明泥流に類似する。
2．黒褐色土(10YR3/1)　1層と同質だが、締り弱、粘性弱。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　粗粒砂を含む。締り弱、粘性なし。
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　褐色土主体。埋設桶周辺の貼床痕跡。締まりは強く、粘性ややあり。上面にAs-Aを含む。
5．灰黄褐色土(10YR5/1)　ローム主体の人為的な埋め土。
6．黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子・小礫を含む。締まり強く、粘性は弱い。

＜133～135号土坑＞

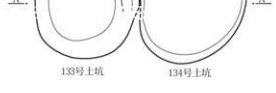


133号土坑A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、礫(約5～10cm)を多量混入。プラスチック片を含む。近現代の土坑？
2．黄褐色粘土(2.5Y5/4)
3．黒褐色土(5YR3/1)　黄褐色粘土を含む。

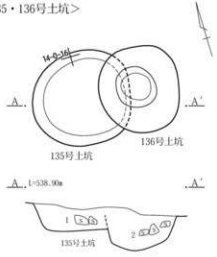
134号土坑A-A'
4．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、礫(約1～3cm)を多量混入。
5．黒褐色土(10YR3/1)　にぶい黄色粘質土塊を含む。

写真28　133～135号土坑全景

＜掘り方＞



＜135・136号土坑＞



135・136号土坑A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質土、約3.0～20.0cm礫多量、締りあり、粘性弱、133・134土と一連の桶か
2．褐灰色土(10YR4/1)　砂質土、約3.0～15.0cm礫多量、円礫を含む。黄褐色土少量、締りあり、粘性弱。

0　1:40　1m

第114図　16号建物1号桶・133～135号土坑

柱穴は最終的に29本ほどになるだろうが、このうち１本(P26)は貼り床の下で確認されたとあるが、P7と対をなす柱穴であり、所見どおりなのか、微妙である。外壁柱穴は15本があり、上手側柱穴４本(P1・6・11・12)は、建物奥外壁柱穴(平均深度40㎝)や下手側外壁柱穴(平均深度30㎝弱)、正面側外壁柱穴(平均深度60㎝)と比べ平均深度が20㎝弱(14～25㎝)と、浅くなっている。柱穴は梁方向が大きく空き、最大4.5m(15尺)ほど柱間が空いており、P8・P10・P19、P14・P15・P22を結んだライン上に上屋柱を立て、前後1.00～1.38m(3.3～4.5尺)を広げ、下屋柱を立てたように見える。

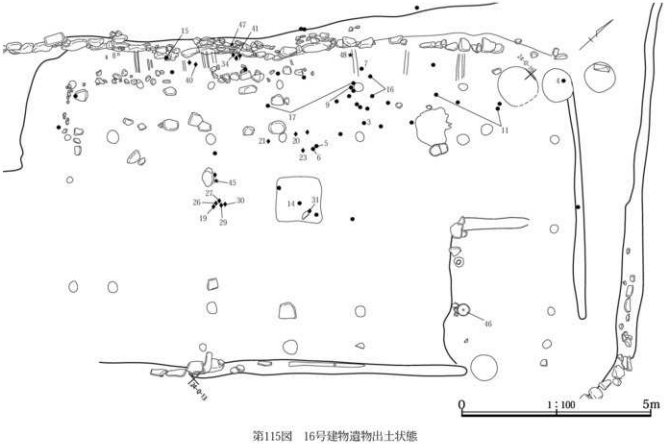
竈(第113図、PL.67)　戸口を入り、正面奥に竈がある。竈は長軸0.94m・短軸0.82mを測る。竈本体は礫を積み上げ、隙間に粘土を詰め、手前に焚口を設けている。奥壁と右壁に竈本体を組み上げた礫が残されているが、大部分は崩落してその原位置を留めていない。竈本体中心部には焼土層が形成され、手前焚口付近には厚く灰層が残されていた。

囲炉裏(第113図、PL.67・68)　土間から続く居間にある。居間は桁方向3.89m、梁方向4.56m、10畳ほどの部屋になる。囲炉裏は部屋の中心より土間側に寄り、新旧２基がある。

１号囲炉裏の使用面は地面から10㎝と浅く、敷物を敷いたとして座面から20㎝弱で使用面になる。囲炉裏は略方形(一辺1.2m)を呈し、全面に厚く灰層が堆積した。灰層を取り除いたところ、囲炉裏は対角線上が赤化していたが、これは自在鉤の使い方や燃木の「焼べ方」、利き手と関連するのであろう。木枠には３寸角程度の材を用いた可能性が高く、内寸３尺半程度が見込まれる。

２号囲炉裏は１号囲炉裏と重複、20%が残存するだけである。現状で長軸1.30m・短軸1.10mを測り、囲炉裏形状は長方形状を呈するものとみられる。囲炉裏は貼床で覆われていたが、覆土最下層には灰と黒褐色土の混土層があり、その上に薄くロームを貼り火処が再生されていた。

唐　臼(第114図)　唐臼は引き抜かれて不明だが、建物奥下手側の隅にある136号土坑に埋設されていたものと見られる。この唐臼に伴う支柱穴は確認されていないが、通常なら奥壁側の桁方向にあるはずである。136号土坑に切られ、135号土坑がある。同土坑は径84㎝で、これと



第115図　16号建物遺物出土状態

同形の土坑(133・134号)が並んでいる。133～135号土坑は径90cm前後の桶理設土坑とされるものだが、16号建物に伴うカワヤは18号建物に確定している。では、133～135号土坑はいつころのものだろうか。出土遺物がないため、土坑と建物の位置関係から考えるしかないが、135・136号土坑とも埋め土は泥流様(角礫及び河床礫を含む)というだけで断定は難しい。

土　壁　建物裏の石垣に、長さ約11.5mの土壁が貼り付いていた。土壁は真後に倒れた状態で、柱分が抜けた状態で出土した。土壁からみた柱幅は11cmであり、4寸角クラスの柱材を用いていたことが分かる。通常は木舞痕等も明確に確認されるのであるが、ここではその痕跡が分かる程度である。土間側・客間側の外壁は土壁が想定されるにもかかわらず、その痕跡はなく、泥流により流出したものと考えている。

雨落溝　屋敷地は丘陵斜面部にあり、集落内でも極めて乾燥した地点に立地している建物前上手側には石垣が積まれ、雨落溝に代わる機能を果しているが、途中土止め用の角材があり、このあたりから雨落溝となり、戸口前を通り馬屋理設桶付近まで続いているが、建物下手妻側の雨落溝も途中で消えている。建物と石垣間は1mほどしか空いておらず、下屋があることで雨水に配慮する必要はないだろうが、石垣－建物間の傾斜は建物側が低く、雨が降れば建物内に雨水が流れ込む状況にある。この建物でも雨水に対する配慮は覗われ、東宮遺跡5号建物で見られたような小礫を建物北に並べて対応しているが、建物奥の外壁全体から言えば部分的であり、最小限の配置に止まる。

遺物の出土状態(第115図、PL.69)　泥流下で59点(鉄器類14・陶磁器類39・石製品類3・不明3)が出土している。竈西に多く出土したほか、石垣に貼り付いた状態で出土したものもある。鉄器類は囲炉裏周辺(西側と北側)に集中出土しており、石垣付近の出土量は概して少ない。

囲炉裏付近では相変らずキセルが出土しており、関係性が明らかであるが、囲炉裏から鉄砲玉1があり、獣害対策と肉食事情が垣間見える。竈西側の陶磁器類の集中出土も特徴的で、陶磁器の完形品出土が目立つ。

＜**建替え前の状態**＞(第116・117図、PL.68・69)

調査終了後、建物構造を確認するため、全域を掘り下げたところ、土間から囲炉裏・竈併設遺構2ヶ所、客間前の玄関先から柱穴1(P26)が確認された。この建物については、掘立柱や竈など厨房施設の在り方から建物を建替えている可能性があり、ここでは2号囲炉裏を含め記載することとした。

囲炉裏・竈併設遺構(第117図、PL.68)　1号囲炉裏に近接して1基、1号竈に重複して1基が確認されている。

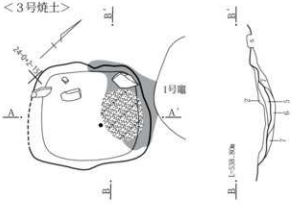
1号囲炉裏に近接した当該遺構は、下手側に灰層が、上手側に石組があり、これが連結したものである。当初粘土の広がりがあり、1号粘土として調査されたものである。下手側の灰層は厚さ10cmほどであり、略円形(径60cm)に広がっている。石組構造にはならないことから、土座に設えた囲炉裏ということが分かる。一方、上手側石組は、①粘土・灰を敷き込み、礫4点を平坦に並べ、奥壁側に分割面が内側になるよう大型礫を配している。②これ以上の石組構造は残されていないが、建物手前が焚口となる。③概形は囲炉裏と竈が連結した「ダルマ」状を呈しており、これを木枠で囲い使用したものと把えておこう。その際、木枠は5尺程度になり、これが使用時の姿となる。

もう一つ別の併設遺構がある。現場で3号焼土として調査したもので、手前側に灰層が見え、周辺が半リング状に赤化している。この方形状遺構は長軸1.30m・短軸1.05～1.15mを測り、ダルマ状とはいえないまでも、灰層が広がる部分と上手側では若干だが括れるように見える。併設遺構と見た場合、囲炉裏の灰は楕円状(長軸0.55m・短軸0.44m)に広がるのに対し、竈側には石組構造が見えず、わずか数点の礫があるのみである。現状で、そこに竈があるなど断定できる状況にはないが、近接する上記遺構に同程度の類似性があり、同種遺構と捉えて問題はない。囲炉裏と竈の併設利用は民俗誌には知られていたが、少なくとも八ッ場ダム関連発掘調査ではじめてということになるだろう。

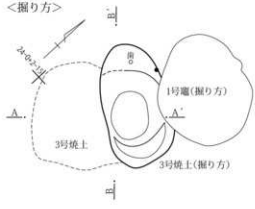
柱　穴(第116図)　16号建物、座敷南の貼り床の下から柱穴1基(P26)が確認されている。このほか建替え前の柱穴として確実なものはないが、上層建物の柱穴としては相応しくないものがあり、これを結んでみた。P25とP27の二本の柱穴がそれで、P26とP27を対角線上の柱穴とする建物が想定、これが建替え前の建物になるだろうと考えた。現状で根拠となる証拠を提示することはでき

第116図　16号建物建替え前の状態

<３号焼土>

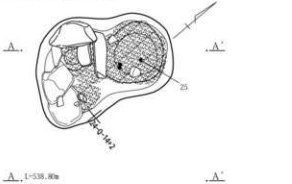


<掘り方>

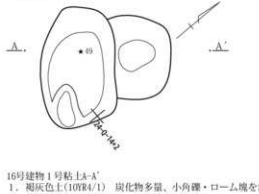


16号建物３号焼土A-A'・B-B'
1．黒褐色土(10YR3/1)　小礫少量混入。粘性弱。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　焼土粒・小角礫を含む。
3．黒褐色土(5YR3/1)　焼土小塊少量混入。粘性・締まりあり。
4．褐灰色土(10YR4/1)　灰と炭化物を含む暗褐色土の混土層。
5．黒褐色土(7.5YR3/2)　焼土粒主体。粘性弱。
6．青灰色灰層(5B5/1)　粘性弱。
7．暗褐色土(10YR3/3)　炭化物・焼土少量を含む。締まり弱、粘性あり。

<囲炉裏・竈併設遺構>

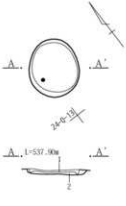


<掘り方>

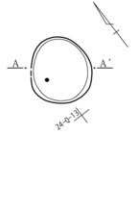


16号建物１号粘土A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　炭化物多量、小角礫・ローム塊を含む。
2．黄褐色土(2.5Y5/6)　ローム主体の埋め土。
3．黒色土と黄褐色土の混土層　灰・焼土・炭化物を含む。締まり弱、粘性弱。
4．褐灰色土(7.5YR4/1)　砂質で、焼土粒多量に含む。粘性弱。
5．褐灰色土(10YR4/1)　炭化物・小角礫多量混入。粘性あり。
6．灰層
7．明褐灰色灰層(5YR7/2)　橙色焼土小塊を含む。締まり弱、粘性弱。

<２号桶>



<掘り方>



16号建物２号桶A-A'
1．黒褐色土(10YR2/2)　小礫(0.5cm)を少量混入。桶底部の木片が残る。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム塊を含む。小礫(0.5cm)を少量混入。締まり弱く、粘性に富む。

0　1:40　1m

第117図　囲炉裏・竈併設遺構、２号桶(建替え前)

ないが、上層建物の妻側柱穴(P6・P12)は下屋柱となり、その内側にあるP7・P13が上屋柱となる上屋構造が想定されることになる。建物の基本構造が東宮遺跡５号建物と類似、そこで建物を建替えている可能性が指摘されていることも建替え説に影響しているが、囲炉裏・竈併設遺構確認の意義も大きい。これにより、屋房施設の変遷が予想されたからである。

遺物の出土状態(第116図)　合計64点が出土した。約半数が陶磁器類で、そのほかには鉄器類13点、石製品７点などがある。これら遺物の出土地点は竈や囲炉裏周辺がほとんどであったが、16号建物の客間玄関下に当たる地点の出土量も多い。この地点から出土した遺物には特に偏在性は指摘できないが、ヒデ鉢の破片が出土している。ヒデ鉢は16号建物裏の石垣下にあり、建物外に出土することが特徴になるかもしれない。同種遺物は１号建物や２号建物にもあり、みな建物外から出土している。火を灯したのは明らかであるが、実用具というより祭祀具的な使用法を考えるべきだろう。

<18号建物>(第118・119図、PL.70)

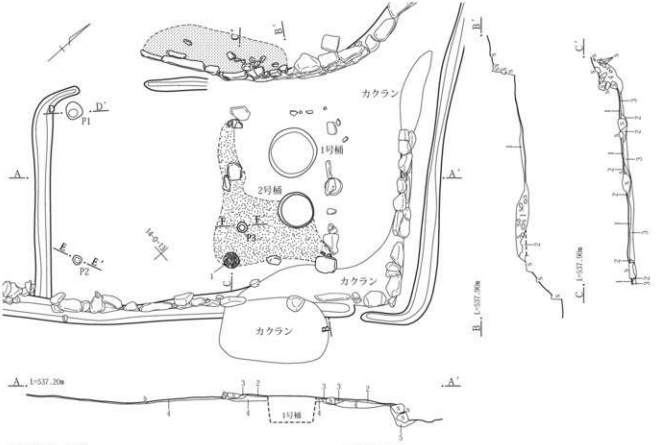
位　置　16号建物南にあり、屋敷南東隅に位置する。建物の前後に低い石垣が築かれている。

規　模　桁行5.40m、梁行3.15m(建坪17.01㎡)

建物構造　建物手前と奥にはそれぞれ石垣があり、石垣間で切り盛り段造成して平坦面を確保している。建物は大きく二分され、埋設桶が並置されるカワヤと、これに続く広い空間からなる。

床　面　泥流でカワヤ本体から続く空間の床面が大きく浸食され、窪んでいた。

雨落溝　建物側の低い石垣下と、建物南に廻る。雨落溝



18号建物A-A'・C-C'
1．黒褐色土(10YR3/2)　黄褐色土少量、小礫(0.5cm)少量。建物貼床。強く締まる。
2．灰オリーブ色土(5Y4/2)　ローム粒子・小礫を含む。礎石埋め土。
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム土主体の整地層。小礫多量に含む。粘性・締まりあり。
4．黒褐色土(10YR3/1)　角礫を多量混入。石垣裏込め。
5．暗褐色土(10YR3/3)　小角礫を含む。粘性あり。

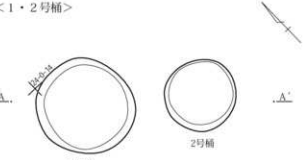
18号建物B-B'
1．天明泥流　砂質で、小礫が多量に含まれるほか、土壁の残片が散見される。粘性なし。
2．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　粘性の強いローム土で、土壁が倒れたものか。粘性は強い。

0　1:80　2m

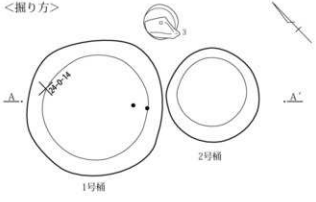
第118図　18号建物

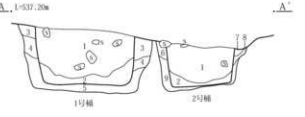
18号建物１～３号ピットD-D'～F-F'
1．黒褐色土(10YR3/1)　小礫少量を含む。締り弱、粘性強。
2．黒褐色土(10YR3/2　ローム粒子・角礫を含む。粘性・締りあり。
3．黒褐色土(10YR3/1)　砂質。ローム粒を少量混入。天明泥流に類似。

＜１・２号桶＞



＜掘り方＞

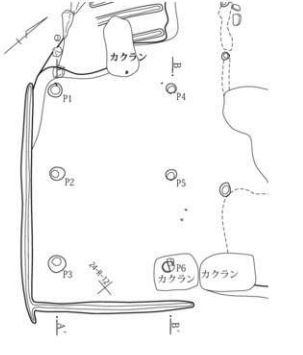


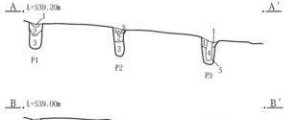


18号建物１・２号桶A-A'
1．天明泥流　砂質、角礫(20～30cm)多量に含む。
2．天明泥流　細粒砂、礫(５～10cm)を含む。粘性なし、締りやや弱。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を含む。締り強、粘性弱。
4．暗褐色土(10YR3/3)　小礫少量混入。３層よりやや暗い。
5．黒褐色土(10YR2/2)　ローム粒子を含む。締り強、粘性強。３～５層は１号桶の埋め土。
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子を含む。締り強、粘性やや弱。
7．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　砂質。締りあり、粘性弱。
8．灰黄褐色土(10YR5/1)　細粒砂主体。締りあり、粘性なし。
9．黒褐色土(10YR2/2)　締り強、粘性弱。６～９層は２号桶の埋め土。

0　1:40　1m

第119図　18号建物１・２号桶





19号建物A-A'・B-B'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子多量混入。粘性・締まりあり。
2．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子多量混入。小角礫を含む。粘性・締まりあり。
3．黒褐色土(10YR3/1)　締まりは弱く、崩れやすい。
4．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子を少量混入。粘性弱。
5．黒褐色土(10YR3/1)　ローム粒子を含む。粘性あり。
6．灰黄褐色土(10YR4/2)　小～大礫を含む。締まりややある。粘性あり。
7．黒褐色土(10YR3/2)　ローム粒子を少量混入する。粘性あり。
8．黒褐色土(10YR3/1)　小～大礫多量混入。締まりは弱く、崩れやすい。

0　1:80　2m

第120図　19号建物

の規模は幅30㎝・深さ６㎝で、建物から溝の中心部まで60㎝ほど離れている。

所　見　カワヤ部分にはロームが貼り床されていたが、泥流で土壁が倒れていたため、巧く床面で止めることはできず掘り過ぎてしまっている。カワヤは側まわりに配した礫の上に土台を置き、妻側から2.10m（７尺）で仕切り、柱を立てたものである。

埋設桶は２ヶ所にあり、径90㎝と75㎝サイズの桶が使われていた。桶は腐食して痕跡程度が残されていただけであるが、土層断面には高さ60㎝程度の埋設桶の痕跡が残されていた。埋設桶は、推定床面より若干下位で確認されているが、桶高は直径と同程度であることが26年度調査で判明しており、この所見に従えば、埋設桶は床面より20㎝ほどが露出していたことになる。

カワヤに続く空間は約10.4㎡（３坪強）があり、比較的ゆったりしたスペースが確保されている。柱穴は２本があり、土台建物に掘立柱建物が取り付くタイプになっている。屋根が掛かっていたのは確実だが、空間が壁で囲まれていたのか、これについては分からない。

＜**19号建物**＞（第120図、PL.70）

位　置　16号建物の西にあり、屋敷北西隅に位置する。建物南および西に浅い溝が廻る。

規　模　桁行3.68m・梁行2.40m（8.83㎡）

建物構造　掘立柱形式の建物である。柱穴は径30㎝・深さ50～60㎝で、泥流による柱穴の変形は見られない。

床　面　建物北と南では42㎝、建物西と東では15㎝の高低差があり、土間として使用されたとは考え難い。柱の根元には、足固め用の横木がとりつけられていたはずであるが、痕跡等は残されていなかった。

雨落溝　建物南と西に雨落溝（幅20～24㎝・深さ３～５㎝）がＬ字型に廻る。建物と雨落溝の間は桁側60㎝・妻側90㎝を測る。

所　見　建物面積は、8.8㎡（約2.5坪）と狭い。５坪未満の主屋も知られているが、建物内には囲炉裏等の存在を示唆する痕跡が確認できていない。住まいというよりも作業小屋というべきか。

＜**石垣**＞（第110図・PL.71）

屋敷地は斜面部を切り盛り段造成したもので、最終的には切り土側も盛り土側も石垣を築き、敷地を確保していた。街道脇の石垣と屋敷裏の石垣が近接し、屋敷南東コーナーおよび庭先には低い石垣が築かれていた。

建物手前の石垣は角礫を２～４段に積み上げたもので、主屋上手側客間の前にカワヤを建てるため、3.5m前方に石垣を築いていた。これに対し、建物奥の石垣は現行石垣により往時の姿を復元するのが難しく、当時の石垣は根石の部分のみという状況である。石垣は根石の部分も礫サイズがさまざまであり、角礫平坦面の面を合せる程度で、つくりは雑である。

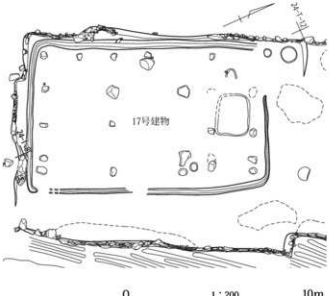
＜**畑**＞（第110図）　屋敷内北西部に６㎡余の菜園がある。畝間が広く、屋敷周辺の畑とは明らかに異なる。栽培種については明らかにすることができなかった。

（7）3ｂ号屋敷（付図１）

３ａ号屋敷に隣接、主屋１とカワヤ１からなる。３ａ号屋敷と同様に、３ｂ号屋敷も天明泥流の到達限界点にあり、ここにも天明期屋敷跡をトレースするように移転前の住宅が並んでいた。屋敷地の立地条件は３ａ号屋敷とまったく同様で、傾斜地を切り盛り造成することで屋敷地を確保している。

写真29　泥流到達想定ライン

主屋が建つ敷地は標高539m付近であり、発掘では標高543m付近まで畑が確認されている。これを泥流到達点と見れば、屋敷地の標高が539mであるから屋根までが泥流で埋もれたことになる。３ａ・３ｂ号屋敷は隣接していることから、完全流出したのであろう。３ａ号屋敷でも主屋土壁が石垣に貼り付いていたが、３ｂ号屋敷でも同様な状況が確認されている。被災後、現地に主屋を建て直したのも確実視されるところである。被災した



第121図　３ｂ号屋敷全体図

にもかかわらず、そのまま現地に建物を再建したのは背後に適当な敷地が確保できなかったからで、敷地が確保できた２ａ・２ｂ号屋敷とは対照的である。

屋敷地は約186.4㎡(56.5坪)で、主屋とカワヤが確認されている。主屋は土台建物であり、建物規模は桁方向が11.1m、梁方向が5.4mを測る。建坪は66.4㎡(20.1坪)ほどである。カワヤは主屋の北東隅にあり、貼り床と軽石の状況(写真30)からみて、主屋に連結させたものと見られる。

建物には馬屋がなく、竈や囲炉裏の位置も泥流下の建物とは構造が違い、建替えていることが明らかであった。また、抜かれた礎石も数ヶ所あり、居間に切られた囲炉裏も痕跡が確認されただけである。

＜**17号建物**＞(第121図、付図８、PL.71～73)

位　置　諏訪神社下の街道南にあり、16号建物に並んでいた。丘陵斜面を切り盛り造成して敷地を確保、敷地の北西隅に主屋を寄せていた。主屋とカワヤは接しているが、カワヤ柱穴が確認されておらず、詳細は明らかではない。想像をたくましくすれば、主屋東の下屋をカワヤとした可能性がある。

規　模　桁行11.1m、梁行5.48m(建坪60.8㎡)

建物構造　土台建物である。建物は、広間型の間取りとなっていたのであろうが通常ある馬屋がなく、竈や囲炉裏の位置も通常とは異なる。被災後も同じ地点に主屋を建てたのであろうが、攪乱が広範に及んでいるため、不明な点が多い。

まず、分かるところから記載してみよう。建物前面の礎石だが建物裏の礎石とは異なり、２間間隔となり下屋柱になる可能性だろうが、居間や客間になる上屋柱も判然とせず断定できない。戸口は平入型式と見られるが、建物前面に便所桶があり、建物右に囲炉裏や竈があり、建物構造が不規則で、間取り自体を明らかにすることができない。ここでは便所桶の脇を戸口としておくが、戸口としては狭すぎるかもしれない。

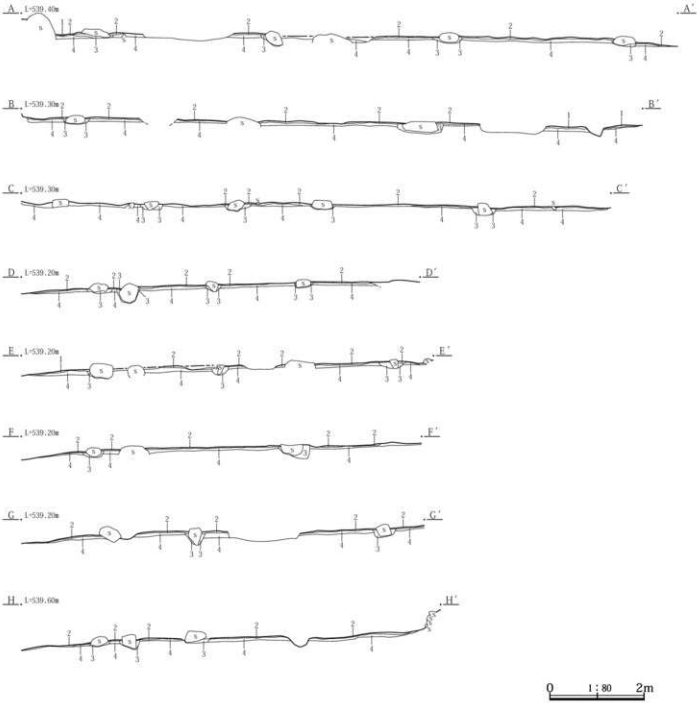
戸口を開けるとすぐ右が馬屋、建物奥正面が竈というのが一般的な建物構造だが、ここでは馬屋がなく建物奥の竈も建物右奥にあり、その手前に囲炉裏が接している。唐臼や唐臼支柱もなく、囲炉裏も通常より大きく、まったくないというわけではないが、作業空間としての土間が充分に確保できていない状況にある。

戸口左は手前が居間で、奥が客間になる。そして、居間と客間の奥は寝間(納戸)ということになるが、板の間に切られた囲炉裏の痕跡は確認できなかった。

写真30　礫の廃棄とカワヤ位置(南から)

写真31　礫の廃棄とカワヤ位置(東から)

第122図　17号建物



17号建物A-A'～I-I'

1．As-A

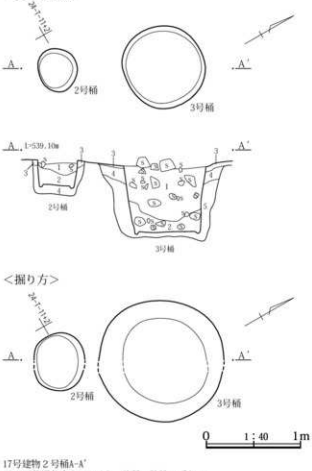
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　精選された細粒ロームを主体とする貼床で、固く締まる。

3．黒褐色土(10YR3/2)　ロームブロック・ローム粒子を含む。粘性・締まりあり。礫石握り方。

4．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ローム主体に埋め土で、小礫を含む。粘性・締まりあり。建物整地土。

第123図　17号建物断面図

<２・３号桶>



17号建物２号桶A-A'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質、粘性にぶい。
2．黒褐色土(10YR3/2)　砂質、粘性弱。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　小礫(0.5～１cm)多量混入。掘り方覆土。
4．黒褐色土(10YR3/1)　小礫(0.5cm)を含む。掘り方覆土。

17号建物３号桶A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流。角礫(10～30cm)を多く含む。
2．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、10～20cmの角礫を含む。粘性・締まり弱。天明泥流。
3．にぶい黄色土(2.5Y6/3)　粘質、建物貼床。
4．褐灰色土(10YR4/1)　ローム粒・小礫を含む。粘性・締まりあり。埋設桶貼床。
5．灰褐色土(7.5YR4/2)　小礫少量混入する。

第124図　17号建物２・３号桶

カワヤ(第124図、PL.73)　建物北東隅に連結させている。礎石・柱穴は確認されておらず、それがどのように連結されていたのかは不明だが、連結部分のみ雨落溝が切れ、軽石もなく(矢印部分)、上屋があったのは確実視されるところである。カワヤには埋設桶の大小があり、その周囲は貼り床されていた。どのように上屋があったのか明らかではないが、土台を回したのち柱を立て、これに屋根を載せた程度の建物を想定しておきたい。

埋設桶２があり、いずれも桶の痕跡のみが残されていた。桶には上端径83cmを測る大型の桶と上端径41cmを測る小形の桶があり、いずれも泥流で埋没していた。埋設桶の周辺はロームで貼り床され、これによりカワヤの範囲が判明する(PL.73－１)。カワヤと思しき地点には柱穴が確認されていないことから、土台を回したのち、柱を立て上屋を掛けたとしたいが、証明は難しい。

カワヤの南には後述するように腐植土の分布があり、堆肥置場に該当するかもしれない。この場合、腐食土の分布範囲はカワヤの上屋から外れることになり、露天の堆肥置場となる。

竈(第125図、PL.72)　建物奥下手側にある。工程上の都合で、建物部分を分けて調査したため、部分的に下げ過ぎ、竈構造が分からなくなってしまっている。現状で、竈は長軸(0.55m)・短軸0.60mを測る。

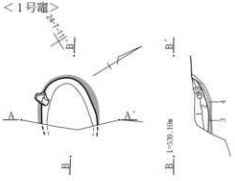
竈には灰層が厚く堆積、竈本体を組み上げた構造礫も残されていたが、被災後主屋を建替えた際、竈を壊し、廃棄したのであろう。竈の長・短軸比は１：１に近く、竈開口部も直径30cmを超えるようなことはないと思う。これより0.8m離れて囲炉裏があり、極めて近接した竈ということが分かる。

囲炉裏(第125図、PL.72)　長軸2.24m・短軸1.81mを測り、天明泥流で埋もれていた。泥流の下には薄い灰層があり、灰層下はロームで貼り床されていたが、貼り床は土坑より一回り内側で確認できなくなり、長軸2.0m・短軸1.6m程度が内法サイズとなる。いずれにしても、現状では西宮地区最大級の囲炉裏であることはまちがいない。原図には、焼土範囲と記されているが、実際は貼り床の範囲であり、焼土化した範囲は攪乱で壊された縁辺にコの字状に広がるだけである(第125図)。

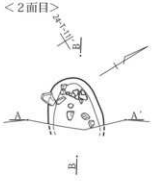
実際に使えるのは横座と下座に限られ、囲炉裏を囲炉裏として使用できなくなる状況にある。こうした類例があるのか、それとも上部構造を工夫することで対面して坐れたのか理解できないでいるが、東宮遺跡24号建物の囲炉裏(2.35×1.80m)サイズに近い。大きく掘り込む割に灰層は小さく囲炉裏は３尺サイズ、東宮例が深さ40cm、西宮例が深さ20cmであることから足を踏み入れることのできる囲炉裏かもしれない。東宮の例は泥流後とされている。

遺物の出土状態(第122図、PL.73)　出土遺物には場の機能を示唆するような出土状態はなく、遺物分布は全般的に散漫である。ここでも薬罐や陶磁器片が石垣に貼り付いて出土している。

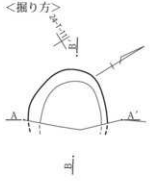
＜1号竈＞

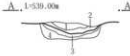


＜2面目＞



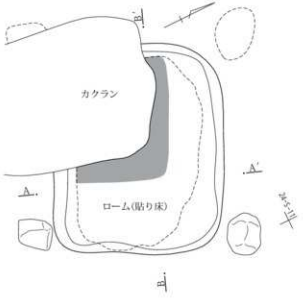
＜掘り方＞

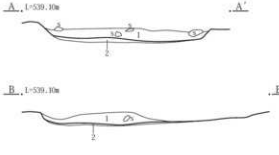




17号建物1号竈A-A'・B-B'
1．にぶい黄褐色土(2.5YR6/4)　ローム土主体の竈構築材。小礫を含み、粘性に富む。
2．灰黄褐色土(5YR4/2)　大型礫主体、竈構築材が崩れたもの。側壁に相当する部分は著しく焼土化している。
3．灰層　還元気味で青味を帯びる。
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　ローム粒子・小礫(0.5cm)多量混入する。粘性・締まりあり。

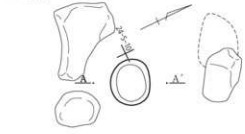
＜1号囲炉裏＞



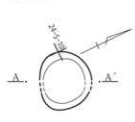


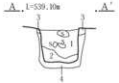
17号建物1号囲炉裏A-A'・B-B'
1．黒褐色土(7.5YR3/1)　砂質、礫(5～10cm)を含む。天明泥流。
2．褐灰色土(7.5YR4/1)　灰を多量に含む。ロームで貼り床され、灰層は不明瞭だが、囲炉裏使用面と捉えた。

＜1号桶＞



＜掘り方＞

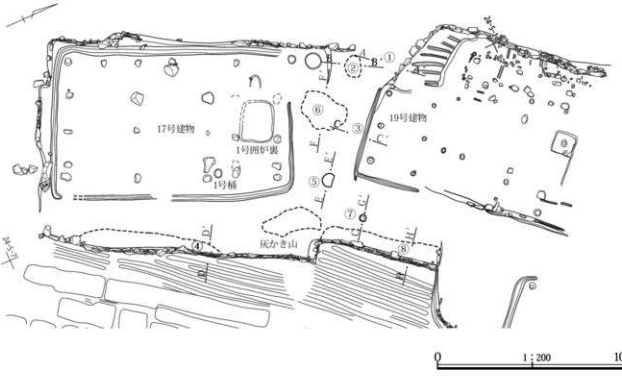


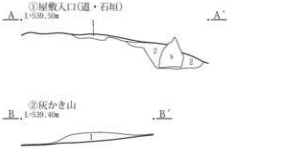


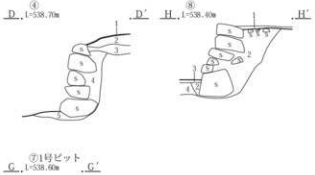
17号建物1号桶A-A'
1．褐灰色土(10YR4/1)　砂質、礫(5～10cm)多量に含む。締り強、粘性弱。天明泥流。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　1層と同質だが、やや暗い。天明泥流。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　小礫(0.5～1cm)多量混入。掘り方覆土。
4．黒褐色土(10YR3/1)　小礫(0.5cm)多量混入。掘り方覆土。

0　1:40　1m

第125図　17号建物竈・1号囲炉裏・1号桶







①屋敷入口A-A'
1．黒褐色土(10YR3/1)　固く締まる。道路硬化面。
2．にぶい黄色土(7.5YR5/3)　石垣の埋め土。
②灰かき山B-B'
1．As-A
③道・雨落溝C-C'
1．As-A
2．褐灰色土(10YR4/1)　固く締まる。道路硬化面。上面に酸化鉄が付着。
3．黒褐色土(10YR2/2)　角礫(１～３cm)を含む。

④石垣D-D'
1．As-A
2．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を多く含む。硬く締まる。建物庭先。
3．黒色土(10YR2/1)　小礫(0.5cm)を含む。整地層。
4．黒褐色土(10YR3/2)　小礫を多量混入。石垣の裏込め。
5．黒褐色土(10YR3/1)　小礫(１cm)を多量混入。
⑤1号粘土山E-E'
1．As-A　掃き集めた天明噴火の火山灰。
2．黒褐色土(10YR3/1)　強く締まる。建物庭先に通じる路面。
⑥1号腐植土F-F'
1．As-A
2．腐植土　葉が腐り、葉脈のみ残る。土壌化しているが、カワヤに続く堆肥置場と見られる。
⑦1号ピットG-G'
1．黒褐色土(10YR3/2)　黄色土を含む。
⑧石垣H-H'
1．As-A
2．黒褐色土(10YR3/2)　礫を多く含む。石垣の裏込め。
3．黒褐色土(10YR3/1)　黄色土を含む。畑耕土。
4．黒褐色土(10YR3/1)　３層に同質だが、やや明るい色調を呈す。

0　1:40　1m

第126図　３a・３b号屋敷周辺遺構(石垣、粘土、灰かき山、腐植土)

＜**その他の施設**＞(第126図、PL.73)

敷地内には石垣をはじめとする各種遺構がある。具体的には、火山灰集積場(灰かき山)・粘土集積場・腐植土分布域・柱穴が該当する。

火山灰集積場　調査記録には、灰かき山として記載されている。街道から屋敷に入る通路や庭先に降下した火山灰を掃き集めたものとみられる。石垣際の火山灰は数cm程度しかその堆積が確認できないが、泥流で大部分が流されたのであろう。

粘土集積場　調査記録には粘土山とあり、街道(７号道)から屋敷に入る通路際にある。高さ10cm内外で、取り立てて注目されるものもないが、何か施設を修繕した際の残土かもしれない。

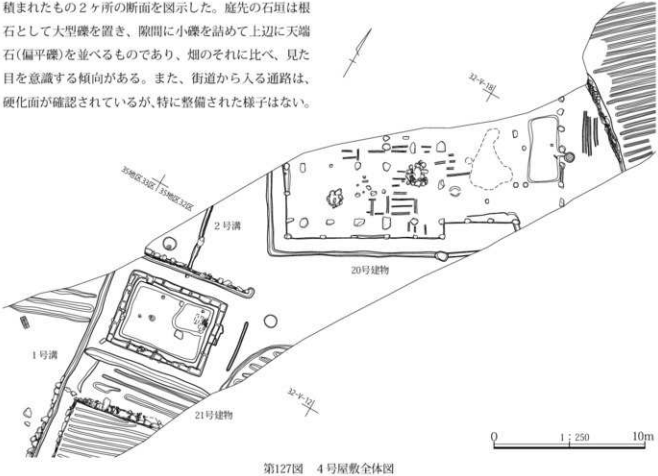
腐植土分布域　As-A下に腐植土があるとされているが、葉や茎など繊維質が残存したわけではなく、顕著なものではない。詳細については明らかでないが、カワヤ南にある腐植土ということになれば、堆肥置場としての可能性を検討せざるを得ないというだけである。現状では、その分布域と上屋の想定範囲は重ならないように見える。

通路ほか　このほか、石垣や通路がある。石垣は庭先に積まれたもの２ヶ所の断面を図示した。庭先の石垣は根石として大型礫を置き、隙間に小礫を詰めて上辺に天端石(偏平礫)を並べるものであり、畑のそれに比べ、見た目を意識する傾向がある。また、街道から入る通路は、硬化面が確認されているが、特に整備された様子はない。

(８)４号屋敷(付図１)

４号屋敷は、境川が形成した扇状地斜面にある。境川は東宮・西宮の境界を流れる小河川で、これを西宮側に渡り60mほどで４号屋敷となる。屋敷は街道南にあり、街道から直接出入が可能である。敷地は扇状地斜面を切り盛り段造成して約1,000㎡近い敷地を確保したものと見られる。このうち、本書で報告するのは屋敷1/2ほどであり、残る分の報告は次回報告となる。このため記載は限られたものになるが、屋敷敷地面積や建物規模など現状で把握できていることについてその概要を記載しておこう。

４号屋敷は、扇状地南西側斜面にある。その南端には旧ＪＲ吾妻線が走り、丘陵が大きく切り土されていた。加えて吾妻線の南も大きく削平され、屋敷跡の全貌は不明と言わざるを得ない。現状で、屋敷跡には主屋と蔵が確認されているだけで、本来あるべきカワヤや堆肥置場を欠いている。南に敷地が広がるのは確実で、どれだけ広がるのかが問題になる。敷地に関する問題は壬申絵図と耕地図によることになるが、この地点には地主２名の名があるだけである。本書では、主屋とカワヤ・付属屋



第127図　４号屋敷全体図

と見られる建物が建ち、石垣や溝で区画された範囲を屋敷と捉えた。さきにも述べたとおり、４号屋敷には主屋１(20号建物)、蔵１(21号建物)があり、最終年度調査分でもカワヤは確認できていないが、建物の配置状況からカワヤは旧ＪＲ線の軌道軸内が想定されるだろう。21号建物の南側や東側の畑は部分的確認にとどまっており、これがどのように広がっていくのか予測できないが、耕地図に示された区画を参照して台形状の区画を考えた場合、敷地は1,200㎡ほどになる。街道に接する畑108(第141図を参照)は菜園的で、南側畑の空白域を含めれば、1,500㎡を超えることになる。検地帳には屋敷面積の記載があり、川原湯・横壁・林村の記録が残されている。これによると(事業団報告書 第628集)、屋敷面積1,000㎡を超えるものが川原湯５・横壁２・林１があり、４号屋敷は流域最大規模の屋敷となる。

井戸も確認できていないが、現状で建物南の未調査区を想定せざるを得ない。カワヤに近い井戸ということになり、衛生面が懸念されてしかるべきであるが、気にはならなかったようである。

主屋は土台建物である。建物規模は桁方向が18.0mを測り、梁方向は７mを超える。建坪は140㎡(40坪)を超えるものとみられ、建物南に戸口があり、建物内には土間・土座・居間・客間・寝間(納戸)がある。居間や寝間には３尺の床や戸棚があり、１ランク上位の建物となるだろう。馬屋は、建物の下手側にある。戸口を開けるとすぐ右が馬屋というのが通例だが、妻側の側まわり中央付近に馬屋はあり、妻側に埋設桶があるというのも異例である。土間は幅３間と広く、焼土や炭化物等が広がるほか、囲炉裏様の粘土の広がりがある(１号土坑)。居間・客間にはそれぞれ囲炉裏があり、大引・根太のプリント痕が残されていた。

21号建物には、建物基礎に切り石が使われていた。切り石を伴う建物は、旧川原畑村では東宮遺跡10号建物(酒蔵)があるだけである。西宮地区では21号建物が該当、切り石が建物基礎に使われていた。これと同じ形式の建物が後述する７区にある(第138図)。いずれも蔵として機能したものであり、21号建物についても同様であろう。

４号屋敷は21号建物西を南北に走る溝(４号屋敷１号溝)を境に畑に接しているが、街道に接した畑(畑108)は畝間も広く菜園的で、その南に広がる空白域を含めて４号屋敷の敷地内とした。

＜20号建物＞(第128～133図、PL.74～76)

位　置　境川を渡り、西へ向い50～60mほど過ぎた地点に建物はある。屋敷跡は扇状地緩斜面を切り盛り段造成したもので、敷地の北東側に主屋を寄せ、南西隅に付属屋(蔵)がある。現状で、カワヤは確認できていない。

規　模　桁行18.11m、梁行8.00m

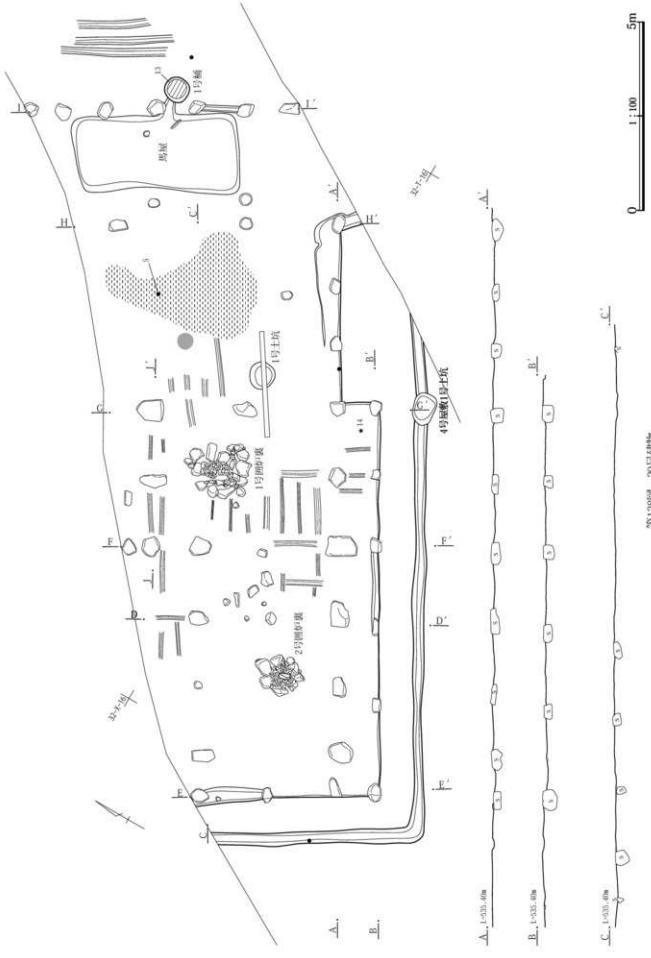
建物構造　土台建物であり、建物南の戸口は平入形式になる。建物内に入ると土間があり、妻側の側まわり中央に馬屋が付く。土間は推定40㎡弱が予想され、これまでになく広い。土間中央付近には炭化物が広がる。炭化物は後方の廂から掻き出されたものであろうが、詳細は分からない。これに隣接して焼土があり、また、２mほど離れて１号土坑と呼ばれる遺構があり、土座か低い板の間になるかもしれない。そこに転がし根太のプリント痕があり、方形の粘土範囲が見られるためであるが、土坑というより古い囲炉裏の痕跡としておきたい。

土間の上手側には、居間・客間、その裏に寝間(納戸)がある。廂等の厨房施設は調査範囲から外れており、現状で詳しいことは分からない。

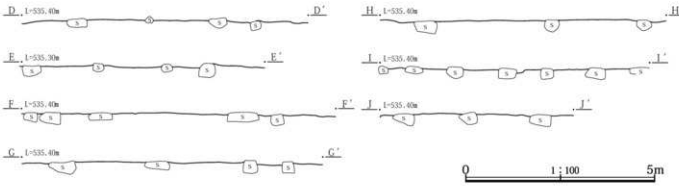
土　間(第128図)　土間はローム(黄色土)が貼られ、固く締まっていた。建物周辺もニワ先だけでなく、馬屋東にもロームが貼られていた。貼り床は数cmほどで、貼り床の下には厚く堆積した礫が全面に顔を出しているが(写真33)、これは土砂崩落に伴う砂礫層と思われる。また、居間南東隅の貼り床下には炭化物の広がっているが、(写真32)、なぜ炭化物が広がるのか、その理由は巧く説明できない。

同様に、貼り床を剥いだ下に白色粘土が略方形状に確認されているが、これも囲炉裏とすることが可能か、判断に苦しむ。１号土坑とされたものがそれであるが、調査データ通り新旧関係で捉えるべきなのか、調査過程を辿り整理しておきたい。

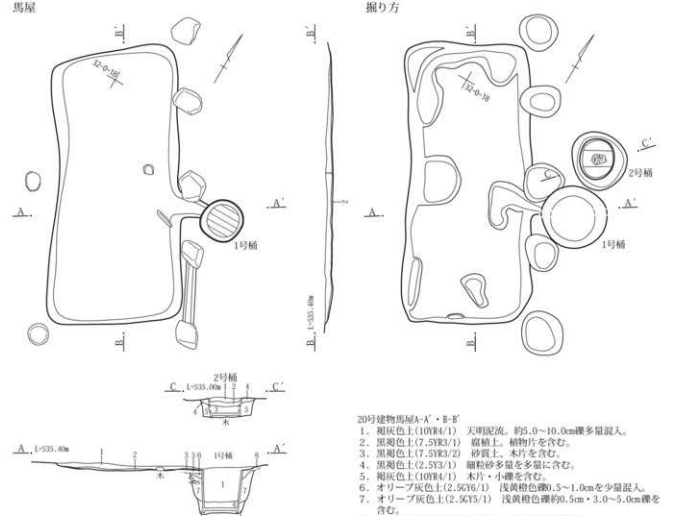
まず、土坑は礎石脇の方形遺構として認識されたようで、截割り調査が行われている(写真36)。断面観察が行われ、両側に灰白色粘土、中央部分に褐色粘土があり、重複土坑として調査が行われている。土坑は１面目と２面目で図化されているが、掘り下げ不足と判断したからであろう。


1号桶
馬屋
1号土坑
1号囲炉裏
2号囲炉裏
4号屋敷1号土坑
32-7-16
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
A'
B'
C'
D'
E'
F'
G'
H'
I'
J'
0
1:100
5m

第128図　20号建物



第129図　20号建物断面図



第130図　20号建物馬屋

写真32　土間に広がる炭化物

写真33　馬屋全景(西から)

写真34　貼床下の礫の出土状態

写真35　完掘した1号土坑

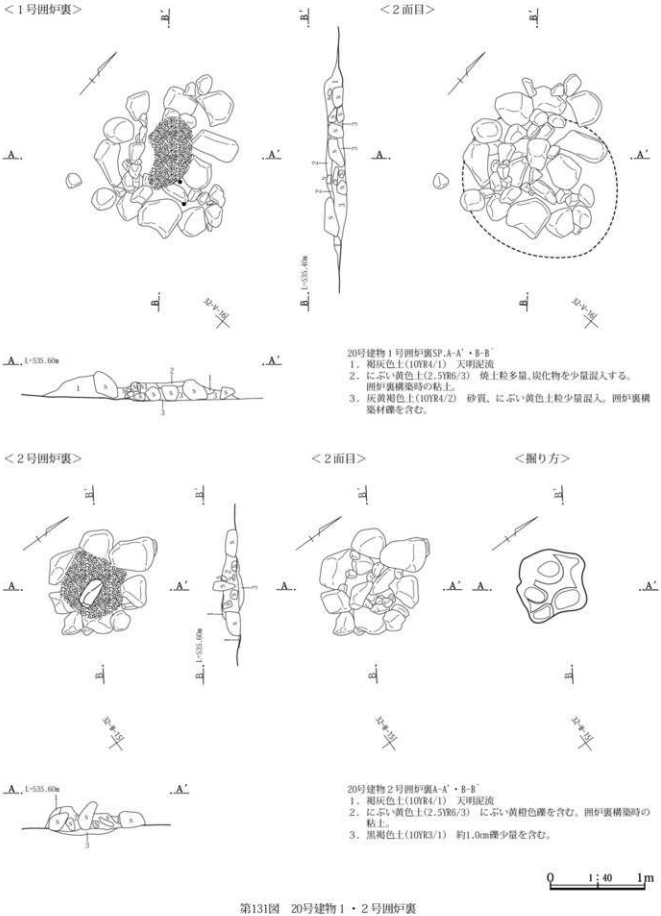
写真36　1号土坑(調査前：白色粘土が方形に廻る)

３面目以後の調査は遺構確認面が下がり、確認面の焼土が無視できないものとなり、また、完掘後の土坑壁面にも焼土が確認されたからであろうが、土坑形状は楕円形で、当初の方形プランとは異なってしまっている(写真35)。

土層堆積は土坑の重複と見ざるを得ない現象があり、常識的な対応と言えるだろうが、分層には無理がある。土層観察は見えるように素直に観察することが必要だが、最終的には解釈の問題から逃れることはできない。ここでは、方形プランの粘土を囲炉裏の構造材と捉えておこう。掘り下げた下層焼土は囲炉裏初期のものであり、囲炉裏が継続使用されていることを示唆するものと見たい。確認面の粘土に筋状に残る黒色土(写真35・36の矢印)は囲炉裏枠木の痕跡であり、土間に根太のプリント痕が残されていることから、低い板の間に切られた囲炉裏と捉えておきたいが、これも最終的には埋めて土間としたのであろう。板の間は戸口左にあり、最大15.5㎡(4.7坪)が見込まれる。

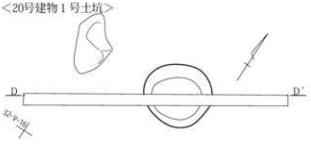
馬　屋(第130図、PL.75)　建物の東、妻側中央にある。長軸4.70m・短軸2.47mを測る。馬屋面積は11.6㎡ほどで、馬屋としては大型の部類になる。妻側の側まわりに礎石５、土間側に礎石３がある。土間側礎石３は梁方向の礎石と並行、0.64mの間隔があるだけで、馬屋柱は梁に持たせたものと思われる。

馬屋桶は妻側にあり、底径0.5mと小型桶を使用していた。床面は10㎝ほど窪み、床面から埋設桶に糞尿が流れるよう配慮されていた。床上には敷藁が薄く残されていた。

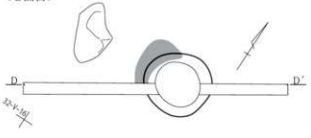


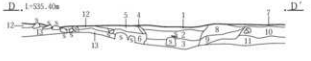
第131図　20号建物１・２号囲炉裏

<20号建物１号土坑>



<２面目>





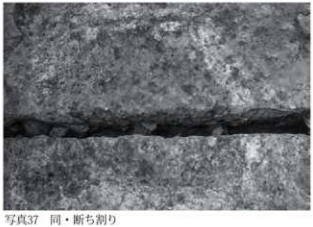
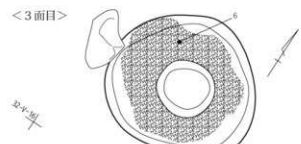


写真37　同・断ち割り

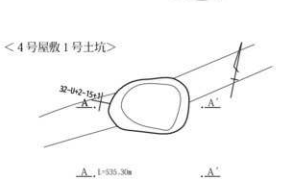
20号建物D-D'
１．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　砂質、約1.0～2.0cm礫多量混入。炭化物を含む。
２．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　角礫約5.0～10.0cmを含む。炭化物を少量混入。粘質土と砂質土の混土。
３．黒褐色土(2.5Y3/2)　角礫約10.0cmを含む。粘性に富む。
４．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　焼土粒多量混入。
５．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　炭化物と炭少量混入。
６．灰白色灰(7.5YR8/1)　炭化物を含む。
７．褐灰色土(7.5YR4/1)　炭化物を含む。建物整地面。
８．にぶい黄色土(2.5Y6/4)　第５層に類似、色味は暗い。
９．黒褐色土(10YR3/1)　灰を多量に含む。
10．黒褐色土(10YR3/1)　角礫約10.0～20.0cmを含む。
11．黒褐色土(2.5Y3/2)　角礫約5.0cmを含む。
12．褐灰色土(7.5YR4/1)　にぶい黄褐色土塊・粒多量混入。角礫約5.0cmを含む。建物整地面。
13．黒褐色土(10YR3/1)　角礫約10.0～20.0cm多量混入。
４号屋敷１・２号土坑A-A'
１．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
２．As-A
４号屋敷３号土坑A-A'
１．黒褐色土(2.5Y3/1)　黄褐色土を含む。整地面。
２．黄褐色土(2.5Y5/4)　角礫約10.0～15.0cm多量混入。

<３面目>

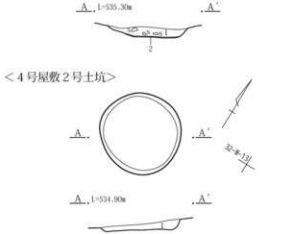


<４面目>

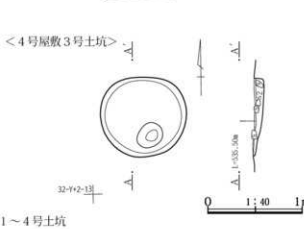
<４号屋敷１号土坑>



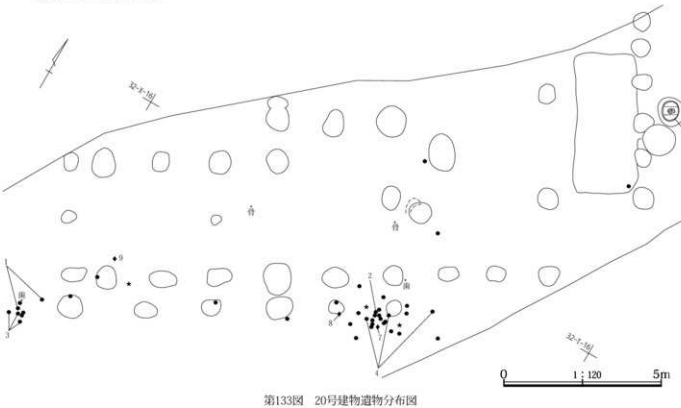
<４号屋敷２号土坑>



<４号屋敷３号土坑>



第132図　20号建物１～４号土坑



第133図　20号建物遺物分布図

居　間(第128図)　３間四方で、27.8㎡(8.4坪)と広い。北西隅には幅１間・奥行２尺の空間があり、棚や床の間等の施設が想定されよう。囲炉裏は「ロ」の字状を呈し、木尻は土間側になる。

客　間(第128図)　間口２間・奥行３間、面積は20㎡強(６坪)になる。囲炉裏が部屋の中央よりやや南に切られている。客間手前の礎石には束柱を想定しておきたい。客間西には３尺の空間があり、ここには床の間か縁が想定されるだろう。

囲炉裏(第131図、PL.75・76)　居間・客間に各々１基があり、客間の囲炉裏は若干小形であるように見える。

居間の囲炉裏構築礫は1.7m×1.5mの範囲に収まり、外縁に大型礫を置き、小型礫で隙間を埋める傾向にある。囲炉裏には小型礫が直線的に並んでおり、これに粘土が貼り付いていた。囲炉裏東辺や北辺には小型礫が直線的に並ばず、その残存状況は不良と判断、礫が直線的に並ぶ西片や南辺を基準に復元的に囲炉裏の規模を検討したところ、内法90㎝サイズの囲炉裏が想定されたところである。囲炉裏掘り方と礫分布は重ならず、掘り方は強く意識したものではないようである。

これに対し、客間の囲炉裏構築礫は1.3m×1.1mの範囲に収まり、大型礫が略円形に並んでいた。囲炉裏北西隅が部屋の中心にあり、全体として部屋の中心より南東側にある。礫分布の在り方から、囲炉裏構築礫は比較的良好に残されているが、囲炉裏サイズを検討した結果、囲炉裏サイズは60㎝程度と小さい。サイズ的には囲炉裏より炬燵と見たい。

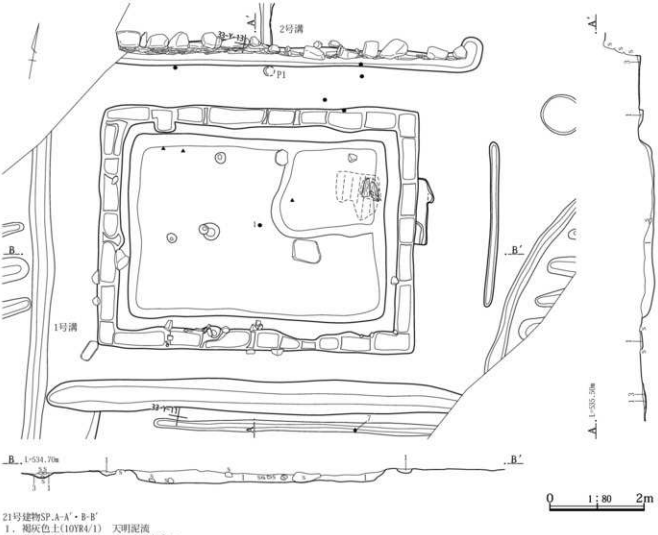
遺物の出土状態(第133図)　泥流直下では建物に伴う遺物の出土量は少なく、陶磁器３点と石製品１点が散漫に出土しただけであり、出土傾向については特に指摘することはない。一方、建物床下の調査では戸口付近および建物南西隅に遺物が集中出土した。戸口付近の集中部は建物南の側まわりであり、炭化物が集中することもあり、何か理由がありそうであるが、その意味するところは不明である。戸口側集中部には陶磁器片やキセル等が出土した。

＜**21号建物**＞(第134図、PL.76・77)

位　置　建物は主屋から５mほど南西側に離れた地点にある。建物基礎は切り石であり、７区で検出された切り石を伴う建物同様に、蔵と理解している。

規　模　桁行6.3m、梁行4.7m(建坪29.6㎡)

建物構造　外周に溝が廻り、20～30㎝空けて内側２間×３間(桁方向5.36m、梁方向3.72m、深さ22㎝)を掘り下



21号建物SP.A-A'・B-B'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
2．黄褐色土(2.5Y5/3)　As-A少量を含む。
3．As-A

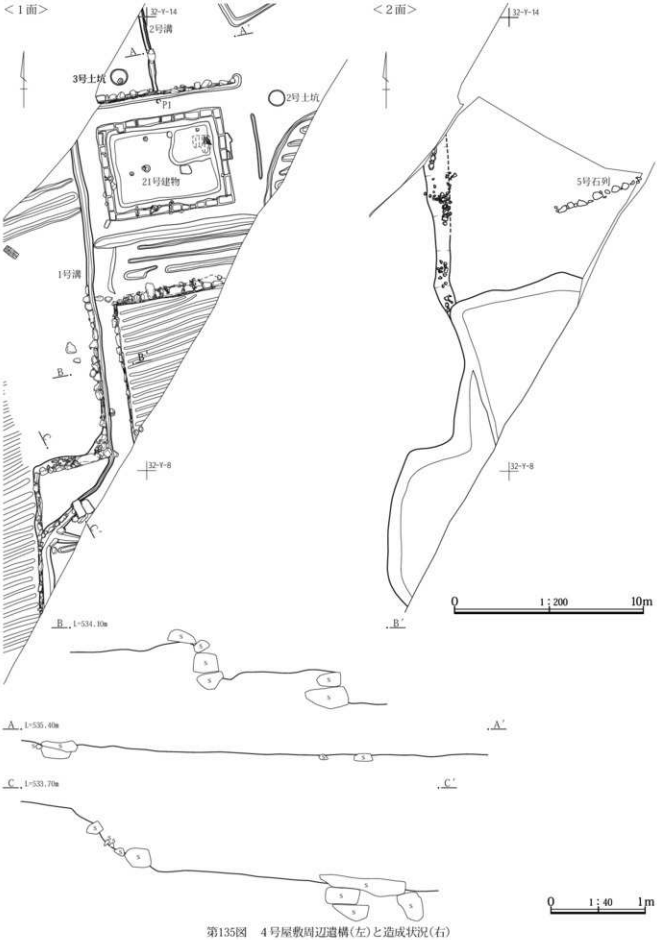
第134図　21号建物

げている。外周する溝には、切り石の痕跡約30ヶ所が残る。切り石は長さ40～80㎝のものが多用されているが、東宮地区の切り石(10号建物：長さ1.10～1.60m、８号井戸：長さ0.75～1.20m)と比べ小形で、商品価値の劣る端材が使われている可能性がある。建物東の妻側中央には、切り石が置かれていた浅い痕跡があり、出入口となる。建物内は20㎡弱(６坪)が窪地となり、床面には柱穴３・礎石１があるほか、北東隅が床面より約10㎝窪み、板材の痕跡が床面に密着するように残されていた。この窪地に接して礎石が置かれている。柱穴は不規則で、評価が難しい。

建物南に雨だれ痕？が連続していたが、これが雨だれ痕なら、屋根の規模を考える材料になる。

所　見　切り石はすべて抜き取られていたが、東宮遺跡10号建物などとは違い、切り石は規格性の乏しい端材を利用したものであった。建物としては、質素倹約を旨とした蔵というべきであろうか。

写真38　建物前面に延びる雨落溝(左端)と菜園



第135図　４号屋敷周辺遺構（左）と造成状況（右）

＜その他の施設＞

屋敷内には石垣や溝が廻り、土坑・菜園がある。現状でカワヤは確認できていないが、村役クラスが暮した屋敷であり、その全貌が明らかにできないのは、極めて残念である。この地点ばかりでないが、調査図面には第２面・第３面の遺構とされたものが多々あり混乱しているが、分かる範囲で修正報告する。４号屋敷の調査でも第２・３面の遺構とされたものがあるが、敷地造成時の痕跡を誤認したものであり、ここでは泥流直下の遺構面と下層調査面の関係が分かるように図を掲載したので参照していただきたい。

21号建物については上述したとおりであるが、建物の北側に石垣があり、これが街道に続いている。石垣北の通路は西側が高く、斜路となり主屋へ続く。21号建物は石垣の前にあり、建物西の通路は途中石垣が積まれ、通路も斜路となる。これと重なるように、下層遺構があるのであり、溝状の窪地に礫が敷き込まれ、あるいは石垣のラインに重なるよう段造成されている実態があり、敢えて下層遺構と捉えず、これと重ならない列石のみ中近世遺構として別項で取り上げた。

１号土坑(第132図、PL.78)　長軸0.84m・短軸0.58mを測る。土坑は深さ10cm前後と浅く、楕円形状に図化されているが、写真では手前側はダルマ状を呈しているように見える。土坑は20号建物南の雨落溝に重なることから、泥流より新しい土坑ということになろう。

２号土坑(第132図、PL.78)　土坑は蔵(21号建物)の出入口付近にある。径0.86m・深さ0.1mを測る浅い土坑である。建物に出入するのに邪魔にはならないが、土坑のあるべき理由は分からない。これも泥流より新しい可能性が高い。

３号土坑(第132図、PL.78)　土坑は、４号屋敷２号溝の西側にある。街道から屋敷に入るルート上にあることから同時存在した可能性はない。土坑は径0.9m・深さ0.1mと浅い。土層註に天明泥流なるものはないが、新旧どちらとも判断できない。

21号建物西、石垣-通路-畑エレベーション１(B-B′)

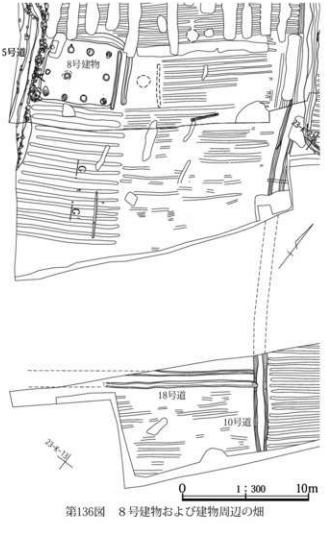
通路が斜路となっており、石垣は徐々に高まり、最終的には高さ１m程度の石垣となる。作図地点では石垣は高さ50cm程度で、脇に排水溝がある。

21号建物西、石垣-通路-畑エレベーション２(C-C′)

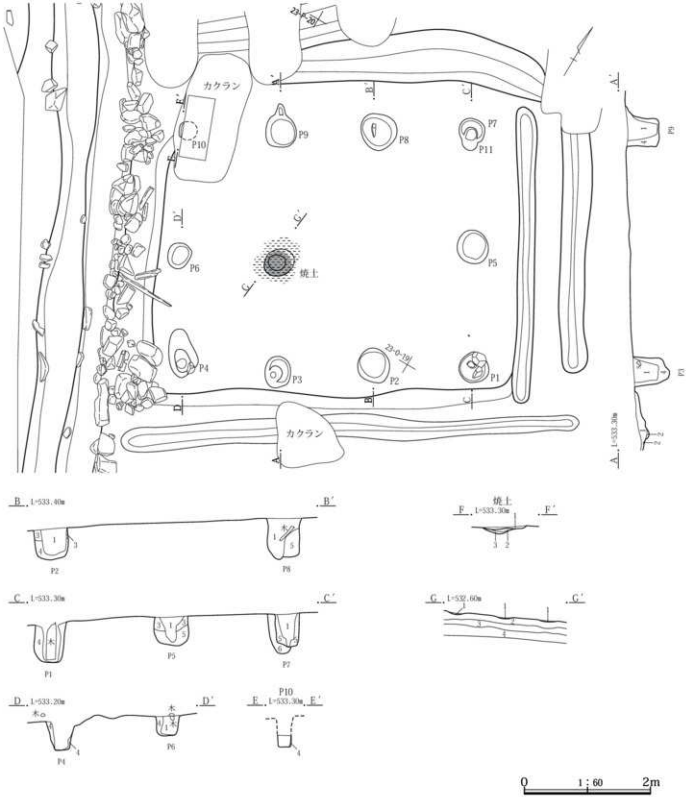
石垣は直角に折れているが、排水溝(４号屋敷１号溝)は斜交し、途中石橋が架かる。石垣が折れた地点は溝が斜交して三角形状を呈しているが、どのように使われたのか現状では分からない。

(９)そのほかの建物

６区では、主屋とカワヤからなる屋敷跡３ヶ所が確認されている。発掘調査では、当初建物配置が分からず広く１号屋敷と捉え屋敷毎に遺物を取り上げ、調査が進み建物配置が判明した時点で建物毎に遺物を取り上げた。こうした場合、屋敷毎に取り上げた遺物は建物毎に振り分けるのが一般的だが、遺物を振り分けることなく発掘が進んだ。報告書作成に当たり、混乱を避けるためにもそのまま報告することを考えてみたが、主屋とカワヤを基礎単位として捉えるべきであると結論し、これを屋敷と呼称し、遺物についても建物に還元できるものは建物毎に掲載した。



第136図　８号建物および建物周辺の畑



８号建物A-A'～E-E'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
2．As-A
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　砂質で、酸化鉄分を含む。
4．褐灰色土(7.5YR4/1)　砂質で、酸化鉄分を含む。角礫少量混入。
5．黒褐色土(7.5YR4/2)　窟倉した木材片を含む。色味は明るい。
6．黒褐色土(7.5YR3/1)　砂質土と粘質土が混じる。

８号建物焼土F-F'
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物多量、焼土小塊・粒少量を含む。
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　焼土多量混入。
3．暗褐色土(10YR3/3)　炭化物少量混入。

８号建物周辺畑G-G'
1．As-A
2．褐灰色土(10YR4/1)　炭化物を含む。畑耕土。
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　酸化鉄分多量、小約1.0～3.0cm少量混入。
4．暗灰黄色土(2.5Y4/2)　酸化鉄分多量、炭化物を含む。

第137図　８号建物

そうした中、これにあてはまらない掘立柱建物が存在することが明らかになった。８号建物と呼ばれた掘立柱建物がそれである。小作人が地主の屋敷内に住まうとは限らないというからどちらともいえないが、８号建物は６区屋敷群から南へ離れたところにあり、異質である。８号建物には火処があり、これに似た建物として、西宮遺跡１号掘立(第634集)や東宮遺跡25号建物がある。いずれも火処を有しているが、菜園はない。８号掘立柱建物の周辺にはやや畝間の広い畑があり、これを菜園と捉えることができれば、大百姓(名主クラス)の小作人とすることができるだろうが、現状で両者を結び付ける根拠はない。火処が小さ過ぎるという意見もあろうが、幅の広いウネ間が特徴的で、建物の東には３坪の空閑地があるなど、単なる作業小屋とはいいきれない要素がある。

＜８号建物＞(第137図、PL.43)

位　置　１号屋敷から南へ50mほど離れた地点にある。建物は５号道(ミョウガ沢沿い)に接しているが、敷地の東側に10号道が、南側に18号道が接している。

規　模　桁行4.56m・梁行3.78m(建坪17.2㎡)

建物構造　掘立柱建物である。柱穴10本からなる建物で、うち１ヶ所で柱穴(P7・P11)が重複している。柱穴は径0.47m・深さ0.50mが平均的サイズで、比較的しっかりしたものが多い。10本中１本(P1)に柱材が残っていたが、他の柱穴は泥流で埋まっており、柱材は流された可能性が高い。

炉　跡　建物西壁から１間を置いて、炉跡が確認されている。炉跡は長軸0.75m・短軸0.65mを測り、楕円形状を呈する。途中焼土層を挟んでおり、炉が補修使用されたことが分かる。

雨落溝　建物西を除く各面は、建物の間際まで耕作が及び隙間なく耕作されている。建物裏を除いて雨落溝が廻っているが、建物裏の幅広い溝を除けば、畑のサクと区別できない状況にある。建物部分は窪台状の高まりになっていることから、自然排水に任せたのかもしれない。

その他　建物東の畑と雨落溝に挟まれた空間(約11.5㎡)には畝サクがなく、特殊な空間を形成している。その中央に円形プランが描かれているが、果たしてこれが円形平坦面かデータがなく、確証はない。

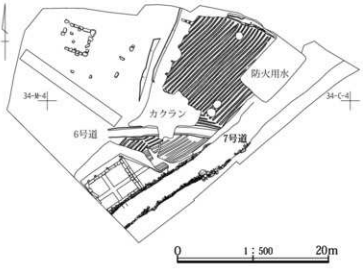
所　見　掘立柱建物には平地と高床建物がある。後者は床面が確認できないことが多く、得られる情報は少ない。前者は床面を確認することで、それが居住施設か、作業小屋か、物置か分かる。８号建物には炉があり、物置ということはなさそうであるが、居住施設か作業小屋か特に証拠となるものはなく、判断するだけの根拠はない。これまで確認されている各屋敷には主屋とカワヤがあり、屋敷によりもう１棟の建物があるというのが通常の在り方と言える。８号建物に関して言えば、主屋を伴う屋敷ではないということだけは明らかである。加えて、建物に接して畝間の広い畑があるというのも特徴となる。建物に目を転じてみると、５号道が建物西にあり、これを踏まえれば、入口は妻側となり、土間に炉跡、建物奥が土座となる建物構造が想定できよう。

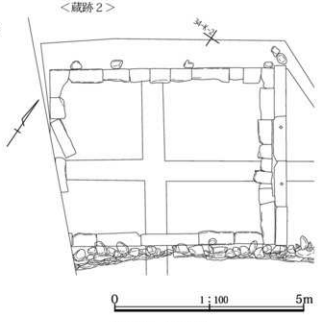
＜７区、切り石を伴う建物＞(第138図、PL.79)

切り石を伴う建物は、街道北(７号道)の調査区(７区)にある。切り石を伴う建物は２棟ともミョウガ沢の左岸側にあり、移転する直前まで蔵として使われていた。街道北には泥流が及ばず、建物が江戸期のものか、それとも明治期以降のものか、これらについて発掘調査で明らかにしようと考えた。実際には、時期決定することができず調査を終えているが、発掘調査や村絵図を含む文献の総合的検討を行なえば、最終的には被災前後の村の動向が明らかになると考える。

７区蔵跡１　移転前の主屋は６号道を直進した突き当りにあり、この主屋の東に７区蔵跡１がある。蔵は桁方向4.2m、梁方向3.5m(芯々で3.8m×3.2m)を測る。建物面積は約12㎡となり、ちょうど蔵跡２の半分の大きさになる。建物妻側の切り石は激しく乱れてしまっている。

７区蔵跡２　７号道北にあり、桁方向6.2m・梁方向4.7m(芯々で5.6m×4.3m)を測る。出入口は建物東にあり、礎石が２列に並ぶ。切り石は31個があり、長さ0.3～1.2mまでさまざまなサイズの切り石が使われていた。比較的大型のものが建物南と東に多く、建物北は小形の切り石を組み合せて切り石を並べていた。切り石の幅は0.3m～0.4mで、大差はない。東側の切り石は２列に並んでいたが、手前の切り石には軸受孔があり、ここで開閉、奥側の切り石に土台を置き、柱を立て蔵としたのであろう。こうした二重構造は、21号建物にはなかった構造である。





第138図　７区蔵跡

第138図にあるとおり、建物周辺域では泥流下の遺構として道や畑が確認されているが、調査前この地点には蔵２棟があり、有力農民の屋敷だろうとされた。地形的にもまだ屋敷を構えるだけの余裕があるということで、調査の動向が注目されていた。発掘調査では天明期屋敷跡があるともないとも確証がなかったため、まずこれを発掘して確かめようとしたが、竈や囲炉裏、礎石や柱穴など建物に関する情報が得られず、これについては検討できていない。発掘調査で得られたデータからすると、６号道西の畑が蔵側に広がるのはほぼ確定的で、泥流が蔵まで達していないというより、畑を壊して蔵を建てたといえそうであるが、決定的証拠がなく図だけ作成して調査を終えた。

ここでは、建物が「どこまでさかのぼるのか」、「被災後どのように集落が拡大してきたか」、「文献からどの程度まで明らかになるのか」について、耕地図や絵図から検討してみた。

耕地図は、皇紀2,600年の記念事業として昭和15年に製作されたものである。精度はバラツキが激しいという。川原畑の耕地図(長野原町11-2)も測量精度は低く、道や河川を手掛かりとして、相対的な位置関係が確認できる程度の図である。耕地図には河川・道・字界などが記載されているだけであり、これ以上の記載はない。耕地図(長野原町11-2)には当該地番として12ﾛ1とあり、１筆とされている。

壬申絵図は明治６年に作成されたものであるが、街道とミョウガ沢が交差する地点には高山何某の名があり、屋敷地であることが明記されている。同名の人物が何枚も畑の所有者として記載されている。これにより明治期の動向は明らかになった。江戸時代はどうだろう。

江戸時代の絵図として、天保８年の村絵図がある。天保８年の村絵図には、諏訪神社東のミョウガ沢を挟んで建物２棟が描かれているが、発掘により明らかにされたところでは天明期の建物は沢の西側にはない。よって、ミョウガ沢西の建物は被災後半世紀の間に限定することができるが、屋敷ごと移転したのか、分家として再出発したのか明らかでない。いずれにしても被災前この地点には蔵がないのは確実で、このことを前提にするならば、蔵が当初から同時存在したことには否定的にならざるを得ない。土蔵が同時存在したというより段階的に増えたとしたい。

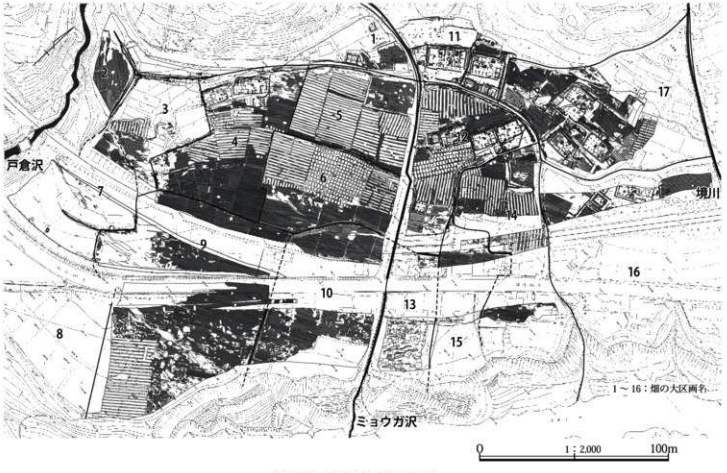
3．屋敷跡以外の遺構

屋敷以外の天明期遺構群には、畑、石垣、道、粗朶木置場などがある。長野原町ではダム建設に伴い民俗調査を実施、その成果が報告書として刊行されている。西宮地区では西宮岩陰や「川原畑の宝篋印塔」の民俗調査が行われているが、それとは別に埋蔵文化財の発掘調査も行われることとなり、取り残された石造物や経石の回収が行われた。西宮岩陰についてはすでに報告(第634集、平成21・26年度調査分)がある。宝篋印塔については「川原畑の宝篋印塔」として本書に掲載した。参照していただきたい。

八ッ場ダム関連の発掘調査では、旧川原畑村(下村)については全域の発掘調査が行われたことになる。調査が及んでいないところもあるが、絵図には御堂等も描かれており、概ね村の全貌を把握することができたものと考えている。なにより重要な点は天明３(1783)年の村が泥流に埋もれて発見されたことであり、村絵図を通じて描いてきた村の景観を目のあたりにすることができた点である。屋敷群も魅力的だが、村を通り抜ける街道、網目状に延びた農道、斜面に広がる段々畑、山裾に点在する御堂など、絵図で描かれた世界そのものを明らかにすることができ、大きな成果を得た。ここでは、以下の各種遺構について記載していこう。

(１)畑

平成28・29年度調査では、屋敷調査に並行して生産域(天明泥流下の畑)の調査が行われ、泥流下には広域に畑の広がることが明らかにされた。泥流下の畑については、久々戸遺跡や中棚Ⅱ遺跡の調査成果があり、その成果は報告書(第319集)としてすでに公表されている。具体的考察は、火山活動と農事暦、これに発掘された畑を加味したもので、調査内容は詳細に亙り、群を抜いていた。当時の文書には吾妻郡域で換金作物である麻やタバコの栽培が行われたとされ、近世史では商品経済の浸透が指摘されているが、どの程度まで商品経済が浸透したのか、



第139図　天明泥流下畑の大区画

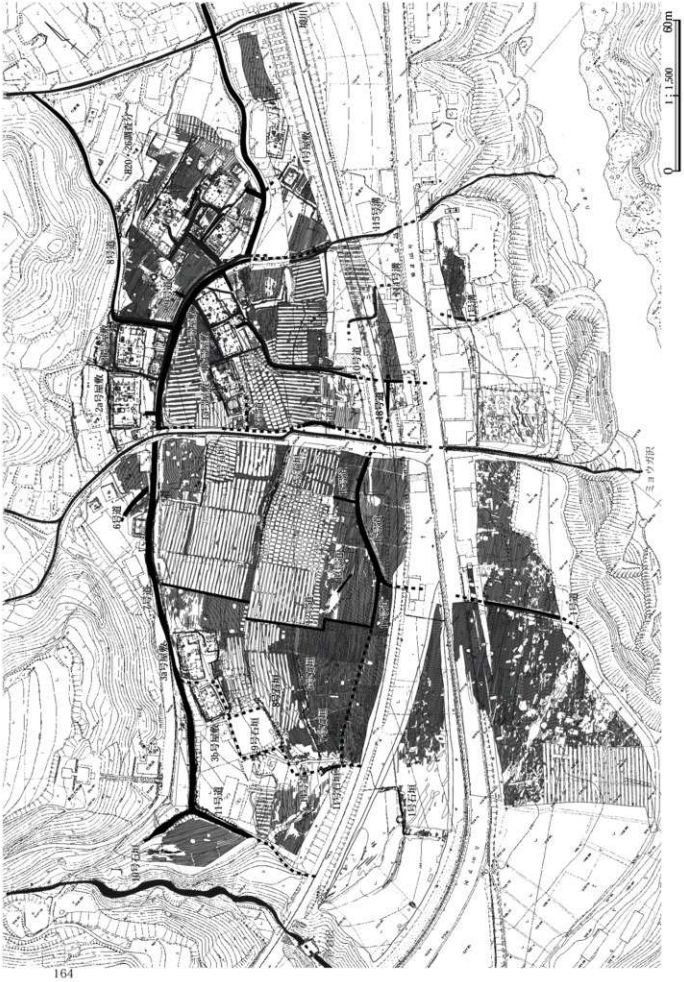
第140図　天明泥流下の畑（ミョウガ沢右岸）

その実態が問われている。当時、商品作物を栽培することは規制されていたが、それだけ商品作物の栽培が重視されていた証であり、境木にも桑や茶の木など経済的価値の高い作物を植えたとされる。栽培作物や境木の種類を明らかにすることができれば、より踏み込んだ議論が可能となり、考古学の真価を発揮する絶好の機会となるだろう。群馬県下では、埋没田畑調査の実績があり、泥流下畑の発掘でも何が栽培されていたのか、意欲的に取り組んできた。こうした問題意識をなくしたわけではないが、栽培食物痕を確認するには想像以上に時間が掛かり、ダム工事が本格化するのを見据え、泥流下畑の調査は全面精査から部分精査によることとされた。部分から

第141図　天明泥流下の畑（ミョウガ沢左岸）

全体を見通す作業が難しいのは日頃から実感するところであるが、全体が見通せてはじめて部分から全体も見通せるということを指摘しておきたい。八ッ場の調査成果は、利根川流域の平野部でも検証することが可能であり、そうした地域の発掘は絶好の機会になるだろう。

ここでは、天明泥流下畑について、沢や街道、石垣等で括れる大区画毎（第139図）に報告することとする。畑を考古学的手法で区切り（第140・141図）、これを絵図に描かれた畑と突き合わせることができれば、より実態を踏まえた議論が可能となるだろう。



第142図　泥流で埋もれた遺構分布(建物・塀を除く)1

a．畑の広がり

本遺跡で確認された畑は、現状で畑129ヶ所、面積にして21,707㎡である。西宮地区の区画構造は小河川や街道が地区を分断、これから派生する農道や水路で区画が区切られるという構造になる。西宮地区の畑は小河川や街道・石垣・水路などで17に区切れた(第139図)。まずは、ミョウガ沢の右岸側から説明することとしよう。

区画１　ミョウガ沢右岸にある。街道(７号道)から分岐した６号道の両側に畑がある。畑は252㎡、2.5畝ほどである。奥にダム建設移転前の家屋がある。敷地内には蔵２棟があり、江戸時代から続く屋敷の可能性も考えて調査に臨んだ。結論から言えば、天保期絵図には建物が描かれており、江戸時代から続く屋敷にはちがいないが、その起源については分からないということである。畑は道を挟んで両側にあり、畑１・２は併せて45㎡ほどである。畑１の畝間が37.2㎝、畑２の畝間が40.7㎝を測る。状況的には屋敷前の菜園に近い。畑３・４は併せて206㎡(２畝)ほどで、畝間は43.8㎝である。屋敷奥には崖線が迫り、そこに畑が拓ける状況はない。

区画２　諏訪神社の下にある。村境の畑で、北に７号道が、東に11号道があり、区画南西側を戸倉沢が流れる。畑は10号石垣を挟んで２段にあり、併せて460㎡(５畝弱)ほどが確認されているが、図上では最大700㎡強の畑が確保できたようだ。沢に近い南西側斜面部にも平坦面があり、これを併せれば約1,000㎡(１反)の畑となる。畑の畝間は42.3～49.5㎝の範囲内に収まり、50㎝を超えることはないが、畝は扁平で新鮮にはみえない。斜面部であり、どの程度まで畑とすることができたか分からないが、確認した畑460㎡より広く耕作できたようである。

区画３　３号屋敷西にあり、北に７号道が、西に11号道が、南に石垣があり、これに囲まれている。区画内には畑が確認できないところもあるが、全域が畑なら1,557㎡(１反６畝)ほどになる。この地点にはクランクして吾妻川へ向かう農道が現況図に残されている。これをトレースするように天明期石垣があり、恐らく石垣の上は道として機能した可能性が高い。屋敷の庭先から石垣へ続く農道が確実なら、区画を再考することになるが、その場合９号石垣で区切られることになる。

区画４　３号屋敷の南に広がる。区画の北と西に石垣が廻り、東と南に農道が走る。区画４の面積は2646.9㎡(２反７畝)ほどになり、区画としては標準的サイズである。区画内には石垣１が東西に延びているが、東側の石垣は切れ、サク３本が続いている。畝間は広く、ここでサトイモが栽培されていたのか判断できないが、久々戸遺跡ではこうしたところでサトイモの石斉型が採れている。当時の久々戸遺跡担当者の話では、サトイモの畝間は倍程度になるということである。

区画内には畑12枚を認定しているが、東側区画は短冊状を呈し、西側では石垣に規定され、畑の形状は大きく歪んだものとなってしまっている。比較的形状が整う畑17・22は間口11m幅(下辺６間)、やや歪んだ畑18は間口18m幅(下辺10間)となる。畑12枚は最大461㎡、最小94.1㎡、平均240㎡である。

区画５　ミョウガ沢の右岸にある。街道(７号道)南に広がる区画で、面積は2,523.6㎡(約2.5反)ほどとなり、区画としては標準的サイズになる。区画北に街道があり、東には沢が流れ、西には農道、南には石垣があり、これにより区画されている。区画南端の２号石垣の上は農道として使われたようで、畝サク３本が切られ、最終的に畑として耕作されている。

区画内には畑９枚を認定しているが、いずれも短冊状を呈し、畑の幅は12m・14m・21mの３種があり、畑は整然としている。畑１枚の面積は平均280㎡で、３畝が欠けているが、畑の縦列は畑23(529.9㎡)、畑24～26(817.5㎡)、畑27・29(558.6㎡)、畑28・30・31(617.6㎡)となり、平均面積は500㎡(５畝)前後になる。これを当初の畑サイズと考えておきたい。

区画６　ミョウガ沢の右岸にある。区画５の南に接しており、東側は沢に、西側と南側は農道に接している。

区画６の面積は2,677.2㎡(２反７畝)となり、区画としては標準的サイズである。区画内には農道２本(13・15号道)があり、特に、13号道とされたものは道に並行する畝サク３本があり、これに接する路面が部分的に残されている。いずれも耕作されており、道としての痕跡を止めるだけである。

区画内には畑12枚を認定しているが、広く復旧坑が重なり、厳密な意味で泥流下畑の区画認定は容易ではない。このため、ここでは畑の復旧作業は耕作者毎に行われたという前提で畑を区分しているが、区画５の延長上に区画６の畑が区分されたようで、畑の縦ラインが揃う傾向

にある。例えば、畑32・33・36・38は初期状態を良く止めているが、これに接する畑の境界は連続、畑１枚の面積は223.1㎡と狭小だが畑は整然としている。区画全域で見れば、畑は４群に分けることができる。各群の面積は畑32～35が1,009.7㎡、畑36・37が516.8㎡、畑38・39が631.6㎡、507.8㎡となり、初期状態(新田開発)の参考になるかもしれない。

区画７　戸倉沢に臨む区画１の南にあり、西側の農道(11号道)以外すべて石垣で区画されている。区画内には旧ＪＲ線が走り、これにより大きく削平されているほか、諏訪神社から続く丘陵も耕作が深く及んでおり、畝サクの残存状況は極めて悪い。このため、具体的な畑の様子は不明とするしかないが、畑の在り方は耕地図等が参考になるかもしれない。区画７の面積は1520.6㎡(１反５畝)ほどになる。

区画８　区画７の南にある。西を戸倉沢が、南を吾妻川が流れている。区画内には国道があり、これにより削平され畑の様子が分からないのは、区画７と同様である。区画８は計算上5,801.7㎡が見込まれ、標準サイズに倍する面積になる。この区画には区画を分けるデータが得られていないが、現代の道が天明期農道なり古い道を反映するものとしてみると、国道脇の農道を境に面積を算出したところ、農道北が3,335.7㎡、農道南が2,466㎡という数字を得た。農道北の面積が突出した数字となってしまったが、国道南の畑を広く考え過ぎたためかもしれない。

区画９　区画４の南にある。区画北と東の農道および西の石垣で区切られている。区画内には旧ＪＲ線や国道があり、部分的に畑の確認できないところもあるが、概ね全貌は把握できたものと考えている。全体図を見れば明らかであるが、この区画は被災時に泥流の直撃を受けている。このため畑の残存状況は最悪であり、畝サクの切り替え部の把握が難しい状況にある。それでも部分的に確認された畝サクの境界は国道北の畑の畝サクに続いていることが明らかであり、畑を分ける際の計画性が見て取れる。旧ＪＲ線北には畑５枚(46～50)があり、これがＪＲ線南まで続いたのであろうが、畑47と畑48はＪＲ線を超えてすぐ畝サクの方向が異なる部分がある。これを畑１枚とするならば畑47が424.2㎡(空白部234.4㎡)、畑48が418.4㎡(空白部257.2㎡)となり、ほぼ同サイズになる。これがこの区画の畑の標準サイズになるとして16号道に並ぶ畑５枚を比べてみると、畑の幅は畑46・47が15.5m、畑48が19m、畑49・50が10mとなり、面積は畑46が488㎡、畑47が424.4㎡、畑48が418㎡、畑49・50が479.8㎡となり、ほぼ等分されていることが分かる。

一方、この区画には復旧坑56に見られるように、区画の広い畑もあり、即断することは難しい状況にある。平成28年度調査分の畑がそれで、畑46・52から続く畝サク境および、この畝サク境と１号道(16号道と同じ)の中間に縦方向の畝サク境があり、いずれも幅23m前後であり、復旧坑の幅(屋敷まわり)と同サイズである。こうした在り方からして、区画が計画的であるのは明らかであるが、明示できないのが現状である。

区画10　ミョウガ沢右岸にあり、最も吾妻川に近い。区画の北と西に農道があり、これにより区画されている。この区画には旧ＪＲ線の未調査地点と、調査対象から外れた地点がある。このため全貌は不明だが、空白域を挟む南北の畑の畝サク境は続いていくことが明らかで、１筆の畑とすることも可能である。16号道南には畑４枚(畑57・58・66、59・60、61・62、63～65)が並んでいるが、畑57・58・66が573.4㎡、畑59・60が892.3㎡、畑61・62が822.4㎡となる。畑63～65は沢が近く畑の限界が確認できていないが、それほど大きな差はないものと思われ、原型を良く止めた畑と言えるであろう。

畑68・69の北は農道(畑67)で、これが耕作されたものと見られるが、畑66の地境は畑55の地境につながる可能性があり、畑57・58・66が合さり１筆の畑ということもあるかもしれない。

区画11　ミョウガ沢の左岸にある。２ｂ号屋敷とした屋敷の裏にある畑のみからなるが、隣接する２ａ号屋敷の裏にも空白域があり、畑として耕作されていた可能性が高い。これより後方は崖線となり、谷間の狭い空間も耕作されていた可能性を否定するものではないが、詳細は分からない。

区画11には畑70がある。面積は67.2㎡ほどで１畝にはならないが、菜園としては広い。２ａ号屋敷の裏に移転前の家屋があり、これが２ｂ号屋敷の再建家屋である可能性もある。建物より山側の様相は調査対象から外れているが、建物を再建するには山側に屋敷を移した、と考える以外ない。

区画12　ミョウガ沢の左岸側にあり、街道南に広がる。区画北に７号道があり、東に10号道が、南に18号道(区画６と10を分ける16号道に同じ)があり、これにより区画されている。区画12の面積は1,821.9㎡(１反８畝)と、やや狭い。区画12の形状は扇状を呈し、独特である。畑は短冊状を呈するというより横長で、その在り方は10号道に規定、屋敷の方向まで規定しているように見える。

区画12には屋敷３・掘立柱建物１があり、そして屋敷にはそれぞれ菜園がある。畑77・79～81が菜園となるもので、10m前後のものと20m前後のものがある。これに対して、８号掘立柱建物東には空白域を挟んでウネ間の広い畑83があり、これが菜園になるかもしれない。区画12には菜園を除いて畑11枚があり、広い畑(71・78・82)でも３～５畝、残る畑８枚は１畝にみたないものばかりであった。

区画13　ミョウガ沢の左岸側にある。区画北に10号道、区画東に18号道があり、南側は吾妻川が流れる。区画13の面積は約1,500㎡弱というところである。泥流による破壊が著しく、区画に関する情報は得られない。

区画14　街道から分岐した10号道の南にある。区画14の西はクランクして流れる114号溝、東は115号溝で区切られ、その形状は変則的である。畑は旧ＪＲ線以北と、国道南の小範囲で判明しているだけである。ＪＲ線北の畑は平成21年度調査分であり、既に報告が済んでおり、区画内の畑を報告するため、全貌が分かるよう再掲載したものである。

畑の全貌は不明だが、畑13枚がある。畑13枚の面積は大きくはなく、畑96～99の平均値は202.8㎡ほどである。

第３表　畑計測値一覧表

区画No.	畑No.	面積㎡	畑間口1(m)	畑間口2(m)	畑長さm
1	1	11.2	—	—	—
1	2	**34.3**	—	—	—
1	3	34.0	—	—	—
1	4	172.4	—	—	—
2	5	283.6	—	—	—
2	6	83.5	—	—	—
2	7	53.9	—	—	—
2	8	39.7	—	—	—
3	9	373.3	—	—	—
3	10	(36.7)	—	—	—
4	11	157.1	15.8	12.8	11.0
4	12	178.0	18.6	16.6	13.6
4	13	461.3	16.8	11.4	35.7
4	14	196.4	17.4	20.1	12.2
4	15	184.3	14.2	11.2	16.8
4	16	343.9	22.6	14.0	20.6
4	17	216.4	11.2	10.2	21.2
4	18	94.1	9.4	10.6	11.6
4	19	136.3	9.4	9.2	17.2
4	20	131.3	9.6	5.6	18.6
4	21	291.5	18.0	11.6	23.2
4	22	**373.5**	10	14.6	21.8
5	23	529.9	14.0	14.6	38.8
5	24	318.1	20.2	21.2	15.4
5	25	223.7	8.4	9.1	26.2
5	26	275.7	10.6	10.6	25.2
5	27	220.9	11.6	12.2	15.6
5	28	2049.7	▽12.0	▽12.0	16.2
5	29	337.7	9.6	16.4	28
5	30	**195.7**	▽17.0	▽12.0	12.0
5	31	212.3	▽11.8	▽11.8	19.6
6	32	258.2	11.4	10.8	24.4
6	33	300.8	12.0	11.4	24.0
6	34	137.9	22.6	22.6	6.8
6	35	347.7	—	—	17.8
6	36	282.8	13.2	12.6	23.4
6	37	210.4	—	—	14.0
6	38	432.3	18.4	17.4	24.6
6	39	199.3	17.2	16.8	16.6
6	40	125.3	▽15.0	▽16.6	9.4

区画No.	畑No.	面積㎡	畑間口1(m)	畑間口2(m)	畑長さm
6	41	223.9	▽16.6	▽18.4	13.4
6	42	112.8	12.6	13.2	9.4
6	43	45.8	▽4.8	▽4.2	10.8
7	44	71.2	—	—	—
7	45	54.1	—	—	—
9	46	123.2	16.6	—	—
9	47	127.3	15.6	—	—
9	48	140.9	18.6	—	—
9	49	54.3	9.8	—	—
9	50	55.5	9.8	—	—
9	51	272.4	16.0	—	—
9	52	542.7	—	—	—
9	53	62.5	16.6	—	—
9	54	20.3	16.2	—	—
9	55	328.9	—	—	—
9	56	975.3	23.0	28.0	44.0
10	57	104.8	14.0	—	—
10	58	81.4	10.2	—	—
10	59	277.7	15.0	—	—
10	60	153.4	16.2	—	—
10	61	229.1	13.4	—	—
10	62	204.8	15.8	—	—
10	63	68.8	▽6.6	—	—
10	64	122.5	7.8	—	—
10	65	76.5	▽4.8	—	—
10	66	30.6	9.6	—	3.1
10	67	74.1	—	—	—
10	68	321.4	12.2	15.4	—
10	69	152.0	13.1	11.6	—
11	70	67.2	—	—	—
12	71	496.7	—	—	—
12	72	89.3	—	—	—
12	73	23.9	—	—	—
12	74	32.5	—	—	—
12	75	53.2	—	—	—
12	76	77.5	—	—	—
12	77	19.7	—	—	—
12	78	374.8	—	—	—
12	79	9.2	—	—	—
12	80	21.7	—	—	—

畑の形状は、短冊状というより横長に近い形状となっているが、畑92～94、畑96・97、畑98・99の畝サク境は続いているように見える。本来的には、１枚の畑と考えてみても不思議はない。

区画15　区画13・14に挟まれている。区画15の西は10号道で、東は114号溝で区分されることになるが、10号道が農道をトレースしたものとして具体的に線引することができるのに対して、東側を画す114号溝のルートを示す指標は現況図を含め確認できない。国道南には複数の水路があり、ルートとしては平成28年度調査分の１号溝に繋がるのではないかと考えている。

区画16　境川右岸にある。街道南の区画で、面積は6,000㎡を超える。区画内には旧ＪＲ線があり、遺構は大きく削平されている。旧ＪＲ線の南についても削平が広域に及んでいたが、畑が広域に展開したとみてほぼ間違いない。

区画16では、屋敷が確認されている。蔵があり、地区有力農民の屋敷と目される。敷地の南東側情報を欠いているが、１反を超える屋敷になることも考えておきたい。

区画17　境川の右岸にある。平成26年度に発掘調査が行われ、すでに報告書が刊行されている。区画17には屋敷３棟があり、屋敷間の道は網目状を呈している。主屋は礎石・掘立柱併用建物２、土台建物１があり、断続的に屋敷群が形成されたことを示唆する。標高543m付近が泥流の到達点で、それより高い地点の遺構は確認できていない。被災後の再建状況については明らかではないが、３棟中１棟のみダム工事直前まで住民が暮した家屋と重なる位置に建物があり、注目しておきたい。

屋敷群は扇状地の南西側斜面部にあり、当初は井戸を共同利用したのではないかと思われた。井戸は戸別所有を前提としたのであろうが、井戸を共同利用することもあったということだろう。

ｂ．畑の形状

畑は今回報告分だけで114枚以上が、前回報告分を含めれば129枚以上がある。旧ＪＲ線で分断されている畑や次年度報告予定の畑もあり、詳細については全貌を明らかにしてからになるが、

①境川－ミョウガ沢間に屋敷が点在、屋敷周辺に広がる畑は細分(分筆)傾向にあること、

②ミョウガ沢－戸倉沢間の畑はミョウガ沢の軸方向に分

区画No.	畑No.	面積㎡	畑間口1(m)	畑間口2(m)	畑長さm
12	81	11.1	—	—	—
12	82	323.6	—	—	—
12	83	41.4	—	—	—
12	84	16.4	—	—	—
12	85	100.1	—	—	—
12	88	126.2	—	—	—
12	89	5.6	—	—	—
13	90	69.6	—	—	—
13	91	775.7	—	—	—
14	92	34.5	—	—	—
14	93	151.4	—	—	—
14	94	60.5	—	—	—
14	95	60.6	—	—	—
14	96	196.7	—	—	—
14	97	230.6	—	—	—
14	98	189.3	—	—	—
14	99	194.8	—	—	—
14	100	277.6	—	—	—
14	101	▽106.4	—	—	—
14	102	▽111.3	—	—	—
14	103	▽32.9	—	—	—
14	104	▽18.8	—	—	—
15	105	▽114	—	—	—
15	106	▽113.2	—	—	—
15	107	▽69.5	—	—	—
16	108	▽9.6	—	—	—
16	109	▽3.3	—	—	—
16	110	200.4	—	—	—
16	111	▽18.7	—	—	—
16	112	▽10.3	—	—	—
16	113	▽1.1	—	—	—
16	114	354.2	—	—	—
17	115	384.3	—	—	—
17	116	68.2	—	—	—
17	117	176.3	—	—	—
17	118	16.8	—	—	—
17	119	50.9	—	—	—
17	120	34.1	—	—	—
17	121	150.8	—	—	—
17	122	223.0	—	—	—
17	123	12.8	—	—	—
17	124	39.1	—	—	—
17	125	78.9	—	—	—
17	126	29.2	—	—	—
17	127	▽49.2	—	—	—
17	128	18.3	—	—	—
17	129	603.5	—	—	—

21707.9

※畑86・87は欠番

▽＝現況値

割されていること、
③1・16号道も沢と同軸にあること、
④ミョウガ沢から1・16号道に至る間は均等な分割傾向が明らかで、畑4枚に分れること、
⑤均等な分割傾向は山側では12号道付近まで、吾妻川側では畑56まで見られるようである。

畑は短冊状を呈し整然と並んでいるが、実際の畑の計測サイズは微妙に異なる。規則性が見えるようで見えてこないのは、石垣を築き造成する必要があるなど、地形が平坦でないためである。戸倉沢に近づくほど東西方向の石垣が弧状になるのも南北方向の石垣がクランクするのも、みな地形が原因しており、結果として畑の形状が変形する要因になっている。

c．平坦面(第143・144図、PL.81)

平坦面は、28基が確認されている。平坦面は当初からその存在が知られ、久々戸遺跡では短冊状の畑500㎡前後に3ヶ所の平坦面があり、やや狭い畑には平坦面1基が分布することが明らかにされている。前者は地境に平坦面1基があり10m間隔で続き、後者は畑の中央付近に確認されることが多い。これと同じ状態が、中棚Ⅱ遺跡でも確認されている。

本遺跡では屋敷周辺に復旧坑が掘られ、畑の平坦面は確認できないことが多く、平坦面は吾妻川に近い1・2区(平成28年度調査分)、8区(平成29年度調査分)、10区(令和元年度調査分)に集中している。その形状は長方形状(方形状)を呈するもの、円形を呈するもの、楕円形状を呈するものなど多様である。サイズ的には1.1～2.4m程度であり、周溝・中央溝の有無もあるなどさまざまであるが、ミョウガ沢右岸側、16号道を前後する畑で確認されたものが多い。

形態　平坦面には、長方形状・円形・楕円形状を呈するものがあるほか、「コ」字状を呈するもの1基がある。量的には楕円形状を呈したものが28基中13基(46.2%)を占め最も多い。続いて、円形を呈するもの10基(35.7%)があり、長方形状を呈するものは4基(14.2%)と少ない。「コ」字状を呈するものが果して平坦面として妥当か、根拠がなく判断が難しい。

規模　楕円形状を呈する平坦面は長軸1.81m・短軸1.45mが平均サイズとなる。円形を呈するものは径1.62～1.74mが平均値になり、大きな差はない。長方形状を呈するものはサンプル数が少なく不安だが長軸1.59～2.06mが平均値である。

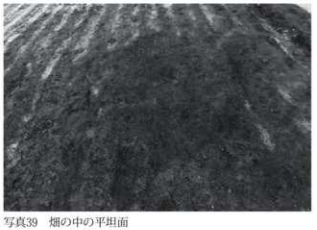


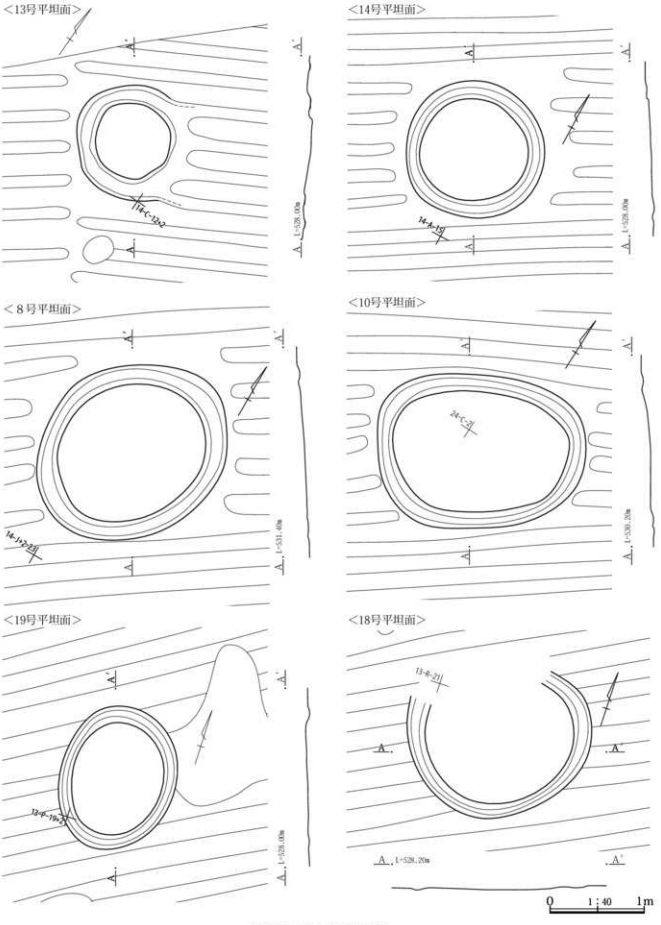
写真39　畑の中の平坦面

分布　先にも述べたとおり、平坦面は16号道を前後する畑で多く確認されている。この地点は短冊状を呈する畑が多く、畑1枚に平坦面が直線的に置かれる傾向がある。その数は遺跡により異なるとされるが、130～200㎡程度に1基とされ、平坦面を想定する際の有力な手がかりになる。長方形状を呈する平坦面は畑の地境にはなく、畑の中ほどにある傾向がある。

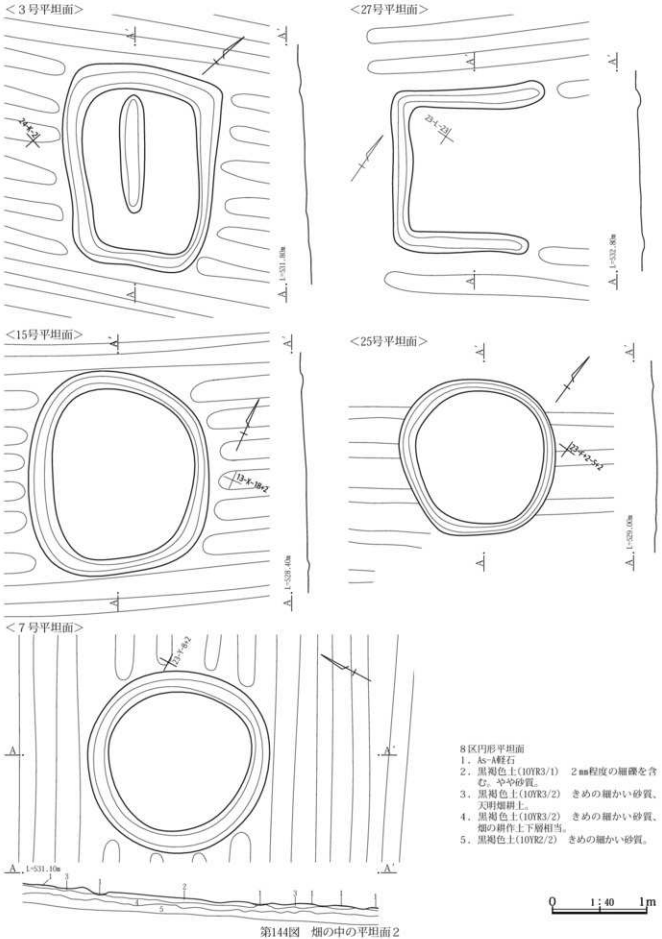
平坦面を考えるには、久々戸遺跡や中棚Ⅱ遺跡の在り方が参考になるだろうが、本遺跡では耕作に関する情報が少なく、これがどのように平坦面と関連するのか検討することができない。

その他　平坦面には溝がなく、円形状に畑のウネサクが区切れるものがある。平坦面内のレベル差が3～8㎝程度に収まるもの(平坦面9・11・12・16)と、20㎝以上のレベル差があるものがあり、どのように解釈するのか問題になる。

また、8号建物東の平坦面や「コ」字状になる平坦面が気掛かりである。いずれも情報不足で、どのように解釈すべきであるか苦慮している。



第143図　畑の中の平坦面１



第144図　畑の中の平坦面２

（２）石垣

石垣は、９ヶ所で確認されている（第142図を参照）。平成27年度以降の調査では、畑の石垣のみ連番になっているが、屋敷まわりの石垣は修復箇所や階段施設、屋敷間の石垣断面など、特徴的な箇所のみが記録されているだけである。このため、その他の情報は全景写真から得られる程度の情報しかないのが現状である。

石垣の概要を総括的に述べれば、①屋敷まわりの石垣は畑の石垣より丁寧に築かれる傾向にあること、②基本的に、石垣は野面積であること、③屋敷まわりの石垣にも積み方に精粗があること（東宮の酒蔵：布積）、④畑の石垣は根石サイズが不規則で乱積傾向が明らかであり、全体的には雑な印象を受ける。屋敷まわりの石垣は職人の手によるものだろうが、畑の石垣は雑であり、百姓の器用仕事に見える。

１号石垣（第145図、写真40）　戸倉沢に近い丘陵斜面部（４区）にある。等高線に並行する石垣と直交する石垣があり、クランク状を呈する。総延長28mほどで、高さ0.3～0.5mの石垣を築いているが、東側は段差がほとんどなくなる。石垣は天端石が外れ根石のみ残る状態で、残存状況は悪い。石垣は直線的だが、途中ドーム状に突き出た石積み遺構（径3.0m）がある。これが天明期の遺構か分からないが、石垣に伴う遺構なら極めて稀で、現状で類例はない。壁面に礫が貼り付いているが、土層注記に炭化物や焼土の記載はない。

写真40　ドーム状に突き出た石積み遺構

２号石垣（第145図）　ミョウガ沢の右岸（５区）にある。石垣は長さ47.5mほどであり、等高線に並行して築かれている。ほぼ根石が引き抜かれた状態で、残存状況は極めて悪い。石垣に重なるように現代石垣があり、天明期石垣の礫を抜いて石垣を築いたものであろう。前後の高低差は0.80mほどであり、石垣としては比較的しっかりとしたものであった。

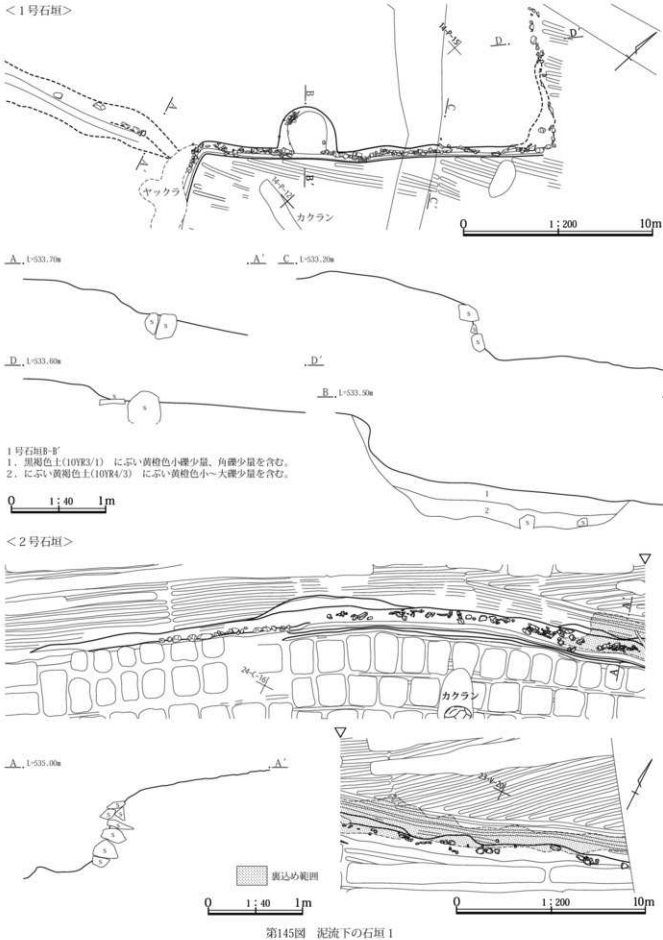
３号石垣（第146図、写真41）　ミョウガ沢の右岸にある（５区）。石垣は長さ24.5mほどで、等高線に並行して築かれている。石垣の下には古い石組暗渠（１号）があり、この上に石垣が築かれていた。後述するように（204ページ参照）暗渠北には掘立柱建物が建ち、居住域を挟んで前後に畑が広がる段階を経て、天明期には全域が畑へ土地利用が変わり、村が大きく様がわりしたことを示している。具体的には、新田開発に伴う屋敷の移転等が想定されよう。

写真41　３号石垣全景

６号石垣（第146図、PL.79）　３号屋敷南にある（８区）。石垣は長さ21.5mほどであり、等高線に並行して築かれている。石垣の西はクランクして７号石垣に続く。30～40cm角の礫を並べ石垣としているが、石垣は１段しか積んでおらず土止め機能を果したものと捉えている。泥流で石垣が破壊され、部分的に石垣を欠いている。断面図には地中に角礫１があり、これを見る限り、意図的に根石として埋め込んでいるかのように見える。

７号石垣（第146図、PL.79）　６号石垣に続いている（８区）。石垣は20mほどであり、等高線に並行して築かれている。石垣東では段差が大きく石垣を積み上げたようであるが、根石だけが残された状態である。

８号石垣（第146図、PL.79）　３号屋敷南にあり、６・７号石垣の北にある（８区）。石垣は長さ37.5mほどであり、等高線に並行する。石垣は裏込め石が残されるのみで、その姿を止めていない。こうした石垣の変形が天明泥流によるものか、その後の復旧作業によるものか、確証が



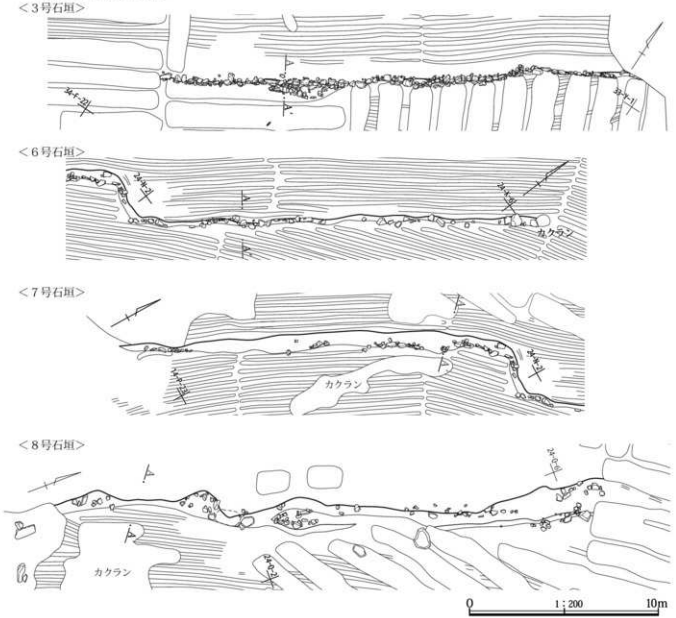
第145図　泥流下の石垣１

<３号石垣>

<６号石垣>

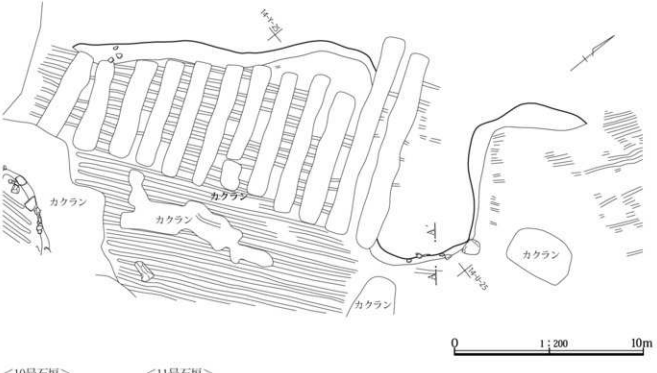
<７号石垣>

<８号石垣>



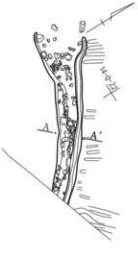
第146図　泥流下の石垣２

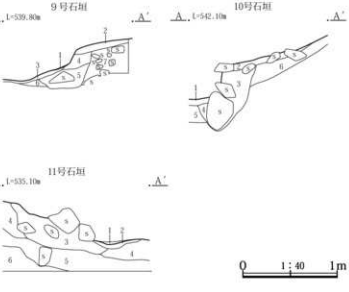
＜９号石垣＞



＜10号石垣＞

＜11号石垣＞





9号石垣A-A'
1．As-A
2．黒褐色土(10YR3/2)　黄橙色小礫約0.5～3.0cmを含む。
3．黒褐色土(10YR2/2)　泥流直下の畑耕土。小礫約0.5cm少量混入。
4．黒褐色土(10YR3/1)　角礫少量を含む。
5．黒褐色土(10YR3/1)　石垣裏込め。
6．黒褐色土(10YR2/3)　小礫約1.0cm少量を含む。
7．黒褐色土(10YR2/3)　小礫約1.0cm多量混入。

10号石垣A-A'
1．黒褐色土(10YR3/1)　As-A少量が混じる。
2．黒褐色土(10YR3/1)　大形の角礫を含む。
3．黒褐色土(10YR2/2)　角礫少量を含む。
4．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粗粒砂を含む、色味は明るい。
5．暗褐色土(10YR3/3)　黄橙色小礫約0.5cmを含む。
6．明黄褐色土(10YR6/6)　30.0cm大の礫を多量に含む。

11号石垣A-A'
1．As-A
2．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄橙色小礫約0.5cm少量を含む。
3．黒褐色土(10YR2/3)　石垣の裏込め。
4．黒褐色土(10YR2/3)　炭化物微量、小礫少量を含む。３層に近い。
5．黒褐色土(10YR3/1)　角礫約20.0cm以上を含む。
6．黒褐色土(10YR3/1)　細粒砂を含む(鮫川テフラ？)、にぶい黄橙色小礫約0.5～1.0cm少量を含む。

第147図　泥流下の石垣３

なく分からない。

９号石垣(第147図、PL.79)　３号屋敷西にある(８区)。石垣は長さ27.5mほどになるが、途中舌状に突出した部分がある。石垣とされているが、石垣が築かれたようには見えず、突出部のみ石垣があるだけで、それも土止め程度のものである。石垣の東に農道があり、これに影響されているのかもしれないが、はっきりしない。

10号石垣(第147図、PL.79)　戸倉沢に近い丘陵斜面部にある(８区)。石垣は長さ15mほどであるが、掘り方には根石を置き、その上に石垣を積み上げたことが分かる。石垣は街道(真田道)に接しており、これが字界となり、西宮と戸倉沢を分けていた。

11号石垣(第147図)　８号石垣が南に折れ、11号石垣となる(８区)。11号石垣は長さ10m弱ほどしか確認されていないが、１号石垣に接続したものと考えている。石垣は丘陵の尾根上にあり、石垣下には14号道がある。このルートは現代にも引き継がれ、農道としてその痕跡が残されている。

(３)道

合わせて14本が確認されている。７号道と呼んだものが「真田道」(道陸神峠ルート)であり、信州上田と上州沼田を結ぶ幹線道路である。川原畑村の起源は中世までさかのぼるが、新田開発が進んだことで街道に面して屋敷が立ち並んだことで、結果的に路村に近い佇まいを見せるようになったと思われる(第148図)。

真田道は段丘面を東西に走る街道だが、これから分岐して段丘上の集落(上村)に続く道が８号道である。８号道は７号道に次ぐ道ということになるが、上村を抜けた先の秣場に向う道でもあり、村には欠かせない生活道ということになろう。屋敷出入口は、街道に面している。これに対して、平成26年度調査地点では道が複雑に入り組んでおり、道は屋敷群西にある井戸に続いていた。この地点の屋敷群は扇状地上にあり、水が得られないために井戸を共同利用したのであろう。平成29年度調査で、この地点の屋敷内(平成26年度調査１号屋敷、第634集)に井戸が確認されているが、残り２棟の屋敷が井戸を共同利用したことには変わりはない。井戸の戸別所有を志向していたのは確実だが、水が得られないという特殊事情があったということだろう。西宮地区には境川・ミョウガ沢・戸倉沢３本の小河川があり、これに規定されて生産域(畑)がある。最終的には、崖線から染み出る湧水を流す排水対策(水路設置)を踏まえ、畑へ続く農道が整備されたのであろう。村内の街道・農道は以下の通り説明されよう。

境川を渡り、最初の屋敷が街道左にある。蔵が建つ地区の有力者の屋敷である。斜面下には屋敷が街道の両側に並んでいるが、１号屋敷の手前に吾妻川へ続く10号道がある。同様に、ミョウガ沢の両岸にも道があり、屋敷や畑に通じていた。戸倉沢に至る間も同様で、６・11・14号道が街道から枝分かれしていた。農道は山側にも吾妻川にも続いているが、吾妻川に向う農道は途中東西方向の農道と交差する。16・18号道とした道がそれで、７号道が街道として整備されるまで、７号道に代わる道として機能した可能性があるだろうと考えている。それは前代の古道が重複するからであるが、道の両側に礫を並べるもので、構造的にも幹線道路に相応しいためである。

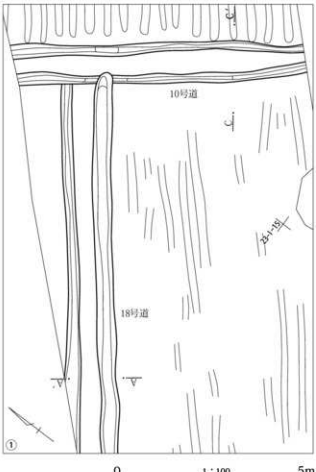
生産域(畑)の農道は比較的単純で、街道や農道から畑に直接出入できるようになっていた。農道には恒常的に使われるものと馬入れ的に使われるものがあり、後者は作業道であり、最終的には畝立てて畑として耕作されたようである。同様な状況が石垣上の畑にもあり、石垣上が作業道として利用されていたことが分かる。

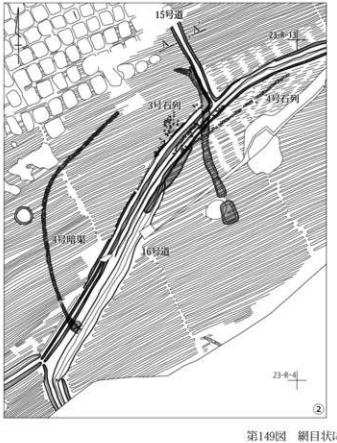
発掘調査で確認された道には地方の幹線街道があり、集落間を結ぶ街道があるほか、屋敷間を繋ぐ道、屋敷から畑へ向かう農道がある。いずれも、現況図に記された道に重なることも多く、驚かずにはいられない。道には欠番(２・４)としたものもあるが、７号道(真田道)が最も長く359mが確認されている。続いて10号道の95.4m、12号道の52.2m、16号道の50.5mとなる。

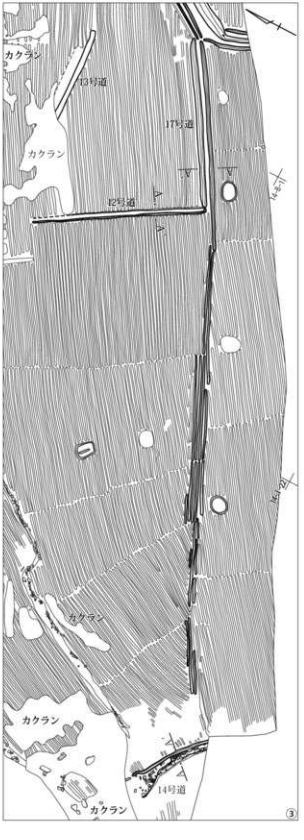
ａ．７号道(真田道)

戸倉沢－境川間の西宮分359mが確認されている。そのルートは現道(町道)に重なり、300年の歴史を刻む街道であることが明らかになった。７号道の道幅は概ね１間幅(1.8m)があり、下層には礫が、上層には良く淘汰された細粒土が敷き込まれ、路面は堅い硬化面となっていた。道の両側に石垣があり、水位の高い所では水路を掘り、路面を確保していた。確認できていないが、沢を渡る地点では橋を架けたものと思われる。７号道は３号屋敷を過ぎ、戸倉沢を渡り林村に向かって山道に入って

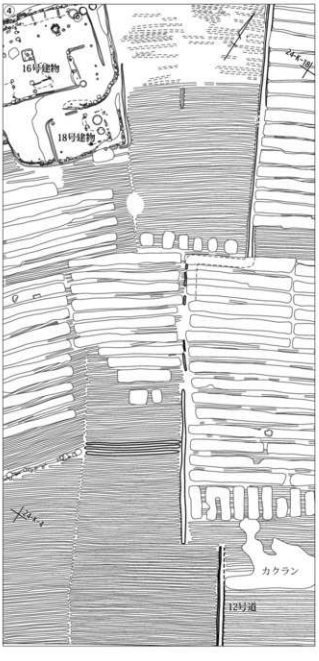
第148図　雛田状に広がる屋敷 1







第149図　網目状に広がる農道２



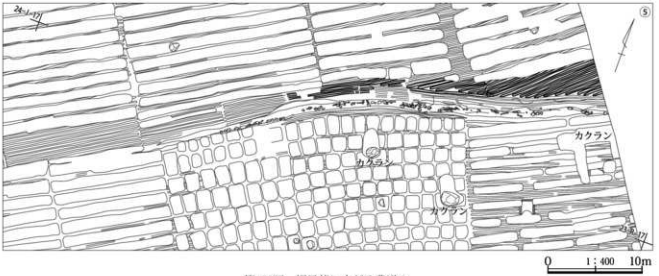
いくが、天明期街道は現道より南側を抜けていたものと思われる。それは7号道から11号道が分岐していることでもわかる。分岐点から東の截割り調査地点は2地点とも路面が崩れており、想定を裏付けるまでにはいたっていないが、7号道が現道より南にあったのは間違いないだろう。

諏訪神社の参道付近は泥流の到達限界点にあり、泥流で覆われた街道を確認することはできないが、明治6年の地引絵図には神社下にルートが描かれており、焼失神社の再建に際し街道を再整備したともいえよう。

b．樹皮を敷いた道

10・18号道で確認されている。南北8m・東西10mの範囲に広がり、道の両側の溝に樹皮の痕跡が見られた。水位が高く、樹皮が残存したものと思われる。樹皮は杉皮と見られ、湿地を埋め立てる際にはよく使われるものであるが、側溝に敷き並べる事例は聞いたことがない。これと同じ状態が1号道（1区）でも確認されている。同地点では路面にも樹皮が敷かれていたようにみえるが、

写真41　側溝に敷かれた樹皮（1号道）



第150図　網目状に広がる農道3

鉄分が付着して判別は難しい。

10・18号道（第149図①、PL.86）　１号屋敷前を通り、南へ170mほど進んだところに分岐点があり、道の側溝に杉皮が敷かれていた。確認直後の杉皮は鉄分が付着していたが鮮明であり、とりわけ18号道の溝に敷かれた杉皮の残存状況は良好であった。杉皮を敷き込む目的は路面の確保を前提としたものであり、排水機能を高めるための対応ではないかと考える。路面も鉄分が付着するほどであり、路面に杉皮が埋め込まれていてもいいが、そうした痕跡は確認されていない。

ｃ．古道を踏襲した道

当事業団では、未報告遺跡の場合、遺構番号は連番とすることとされているが、調査地点が大きく離れた道については１本の道として妥当か判断できないため、複数の遺構番号が付されてしまうこともある。樹皮を敷いた道（１・18号道）も本来ならば遺構番号を統一させて報告したいところであるが、データの修正問題があり、そのまま報告せざるを得ない事情がある。これと同じ事情が16号道にもあり、上述した１・10・18号道と同じ道になる。古道を確認したのは16号道とされたところであり、ここでは16号道と呼び、前代の道と比較説明していきたい。

16号道（第149図②、PL.85～87）　16号道は、７号道から分岐した10号道が途中枝分かれして、西に延びる農道である。この農道（16号）は弓なりのルートを採り、その頂部で15号道と合流し、道が南西に向う地点に粗朶木置場がある。その先で道は二股に分かれているが、直進するのが17号道、南進するのが16号道（１区１号道に続く）である。15号道の両側にも溝が付き、これが16号道の側溝に続いている。道の両側に付く溝は排水用だが、道の分岐点では途切れており、16号道の路面に段差があり、南進以後の16号溝には路面中央に溝があるように見える。同じ状況が１区１号溝にもあり、あたかも中央分離帯のように見える。以上が16号道の概要である。続いて、下層で確認した列石（213ページ参照）を取り上げ、16号道と列石の関係について記していこう。

ここで取り上げるのは、平成29年度調査分の第２面の遺構で、列石２（３・４号）、暗渠１、溝２（97・98号）がある。列石とされるものが何か、所見は記されていないので記録類から判断するしかないが、図面を重ねてみたところ、列石２が16号道と重なることが判明、併せて溝も10号道に部分的に重なり、５号暗渠も16号道に続いていることが分かり、これが泥流直下の10・16号道に引き継がれるのではないかと考えてみた次第である。５号暗渠は３号石垣下の暗渠（第174図）と同じ構造であり、中・近世遺構とした掘立柱建物にも近い。両者の関連性が問われるところであるが、やや離れており断定は難しい。恐らく第２面遺構とされたものは泥流前の遺構群ということになるが、より限定的に言えば近世的集落成立前（街道に並ぶ屋敷群）の遺構群ということになる。

石列は幅1.1mを測り、16号道と同サイズである。道の両側に石を並べる例は農道レベルにはなく、真田道の前身にもなる可能性がある。

ｄ．痕跡として残る農道

畑の中に、畝サクの方向が乱れる地点が数ヶ所で確認されており、かつてそこが農道として機能したことが想定されるところがある。

第149図③は、17号道から12号道が分岐して西側に向う直線部分に畝サクの乱れる地点があり、この地点の畝サクを図化したものである。畝サクは11号石垣下の14号道に向け明らかに直進している。12・14号道は55mほど離れている。この間、畝サクは畑５枚を横断している。

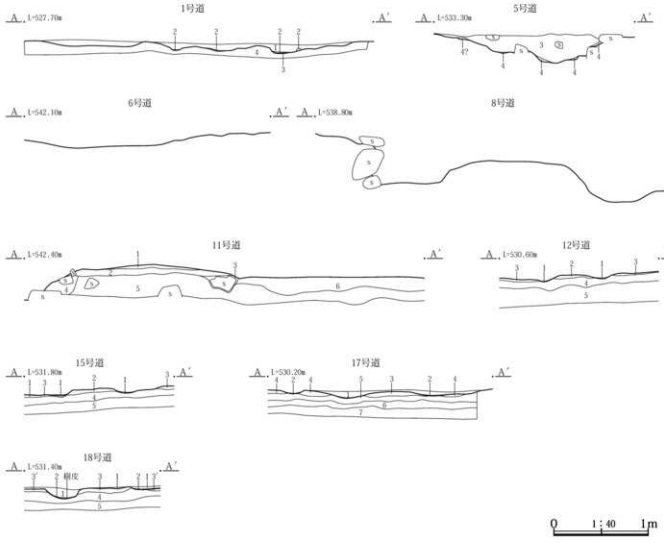
第150図④には、３号屋敷から南へ30mほど離れた地点の畝サクを図示した。この地点の畝サクは東側が12号道に直交、西側が６号石垣に接しており、ここだけ畝幅が明らかに広がっている。畑に植えたサトイモの石膏型が取れた経験から、広い畑の一サクすべてにサトイモを植えることがあり、サク幅は通常の２倍になるということであるが（関俊明の教示）、この地点の畝幅は50～60cmほどである。畝間が広がり、根菜類が確認されてもおかしくなかったが、確認調査は行われていないようである。

第150図⑤は石垣上に残る畝サク跡である。石垣に並行した畝サクが４列ほどある。

ｅ．その他

ここまで、両側側溝を有する道を取り上げてきたが、道にはやや窪んだ踏み分け道（５・６・14号）程度のものもある。この種の道（６・14号道）は農道であり、特に、路面を強化・補修するような痕跡は確認できていない。

５号道（第148図）　ミョウガ沢左岸にある。ミョウガ沢から引き込んだ水路と重複しているが、切り合い関係と



1号道A-A'
1．褐灰色土(7.5YR4/1)　天明泥流
2．As-A
3．明赤褐色土(5YR5/6　樹木表皮が残る。
4．褐灰色土(10YR4/1)　天明畑耕土

5号道A-A'
1．暗褐色土(10YR3/3)　現表土・盛り土
2．褐灰色土(10YR4/3)　約30.0～40.0cmの礫少量、木材を含む。
3．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
4．As-A
5．黒褐色土(10YR3/1)　やや砂質で、小礫を含む。

11号道A-A'
1．黒褐色土(10YR3/1)　黄橙色小礫少量を含む。
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　黄橙色小粒多量、にぶい黄褐色土多量混入。
3．褐色土(10YR4/4)　農道縁石の埋土。
4．黒褐色土(10YR3/2)　農道縁石の埋土。３層に比べ色調は暗い。
5．明黄褐色土(10YR6/6)　角礫小～大多量、風化した大礫を含む。
6．黒褐色土(10YR3/1)　小礫を含む。第１層に類似する。

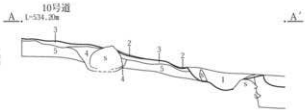
12号道A-A'
1．As-A
2．褐灰色土(10YR4/1)　炭化物を含む。上面が路面。
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　明黄褐色土小礫を含む、炭化物片微量混入。
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　炭化物多量、角礫約0.5～1.0cmを含む。
5．黒褐色土(10YR3/2)　角礫約5.0～30.0cmを含む、炭化物を含む。

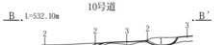
15号道A-A'
1．As-A軽石
2．黒褐色土(7.5YR2/2)　砂を多く含む。路面。
3．暗褐色土(7.5YR3/3)　砂質土。締まりやや強く粘性あり。
4．黒褐色土(10YR2/2)　天明畑の耕作土。
5．黒褐色土(10YR2/2)　砂質土。しまりは欠ける。

17号道A-A'
1．黒褐色土(10YR3/2)　天明泥流
2．As-A
3．黒褐色土(10YR3/2)　やや砂質、堅く締まる。路面。
4．黒褐色土(10YR3/2)　砂質土。締まりわずかにあり。
5．黒褐色土(10YR3/2)　砂質土。畑耕土。
6．黒褐色土(10YR2/3)　砂質土。締まりわずかにあり。粘性あり。
7．黒褐色土(7.5YR2/2)　砂質土。鉄分凝集が部分的に見られる。

18号道A-A'
1．黒褐色土(10YR2/2)　天明泥流
2．As-A
3．黒褐色土(10YR2/3)　路面として堅く締まる。3'は畑耕土。
4．黒褐色土(10YR3/1)　砂質土。締まりには乏しい。耕作土。
5．暗褐色土(10YR3/4)　砂質土。締まりなし。

第151図　同・断面図１

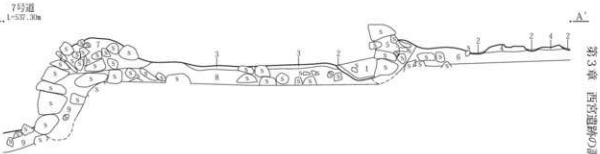


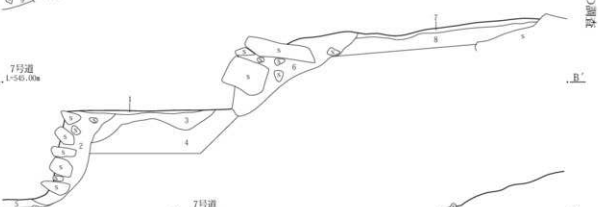


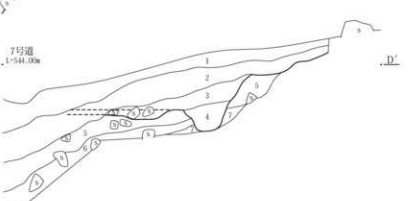
10号道A-A'
1. 褐灰色土(10YR4/1) 砂質土、天明泥流、大礫を含む、締りあり、粘性弱、水路埋没土
2. As-A
3. 暗灰色土(N3/) 酸化鉄分上面に含む、暗青灰色小粒少量、締り強で硬化、粘性弱、10号道
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘質土、大礫を含む、締りあり、粘性弱
5. 褐灰色土(7.5YR4/1) 小～大礫多量、締り弱、粘性強

10号道B-B'
1. 褐灰色土(10YR4/1) 砂質土、天明泥流、小～大礫を含む、締りあり、粘性弱
2. As-A
3. 緑黒色土(10G2/1) 暗青灰色小礫約0.5cm少量、全体が硬化、粘性弱
4. 青黒色土(5BG2/1) 暗青灰色小礫約0.5cm少量、締りあり、粘性あり
5. オリーブ黒色土(5Y3/1) 粘質土、締りやや弱、粘性強
6. 暗オリーブ灰色土(5GY3/1) 小角礫約3.0～5.0cm少量、粗粒砂を含む、締りあり、粘性あり。

10号道C-C'
1. 黒褐色土(10YR2/3) 2～5mmの細礫が混ざる砂質土。天明泥流。締まりゆるく、粘性わずかにあり。
2. As-A
3. 黒褐色土(10YR2/3) シルトを多く含む砂質土。締まり強い。粘性ほとんどなし。道として固められている。3'は土質似るがやや締りに欠ける。道と畑の境界として高められている。
4. 黒褐色土(10YR3/1) シルトを多く含む砂質土。締まりなく、粘性わずかにあり。耕作土。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1) 粘土を多く含む砂質土。締まりゆるく、粘性あり。







7号道A-A'
1. 褐灰色土(10YR4/1) 天明泥流。7号道水路埋没土。
2. As-A
3. 褐灰色土(7.5YR4/1) 堅く締まる。街道路面。
4. 灰黄褐色土(10YR5/2) にぶい黄橙色小礫を含む。畑耕土。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 角礫を含む。石垣の裏込め。
6. 灰黄褐色土(7.5YR5/2) 畑耕土。角礫を含む。
7. 黒褐色土(7.5YR3/1) 角礫を多量混入する。
8. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 人形の角礫多量混入する。
9. 褐灰色土(10YR4/1) As-Aを含む。やや砂質。

7号道B-B'
1. 黒褐色土(10YR3/1) 7号道整地面。黄橙色小礫少量を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 石垣理土、裏込め小礫多量混入。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 小角礫を含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 小～大角礫多量混入する。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 小角礫を含む。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 石垣の裏込め。黄褐色土を多量に含む。
7. 黒褐色土(10YR3/2) 時期不明の整地面。堅く締まる。
8. 暗褐色土(10YR3/4) 小角礫を含む。

7号道D-D'
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 角礫を含む。客土？
2. 黒褐色土(10YR3/1) 5.0～10.0cmの礫を含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 黄褐色土粒を含む、礫10.0cm以上を含む。
4. にぶい黄褐砂(10YR4/3) 粗粒砂、小礫多量を含む。7号道側溝。
5. 黒褐色土(2.5Y3/1) 角礫約5.0～20.0cm多量に含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)20cm大の礫を含む。石垣から崩れた礫か。
7. 黒褐色土(10YR3/1) 明褐色小礫約0.5cmを含む。小角礫を含む。下面が古い道か。

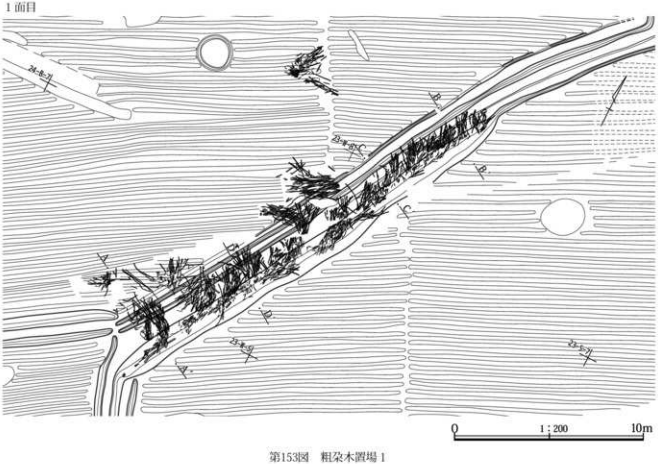
第152図 同・断面図2

して理解すべきか、共存したのか、確証はない。道は片側のみ判明しただけであるが、恐らく両側側溝を持つ溝にはならないだろう。

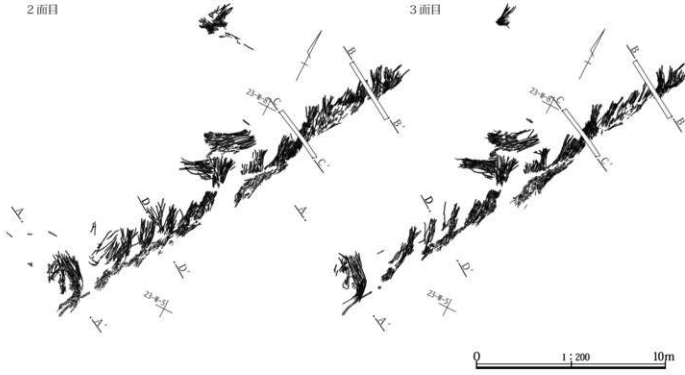
（４）粗朶木置場（第153・154図、PL.85）

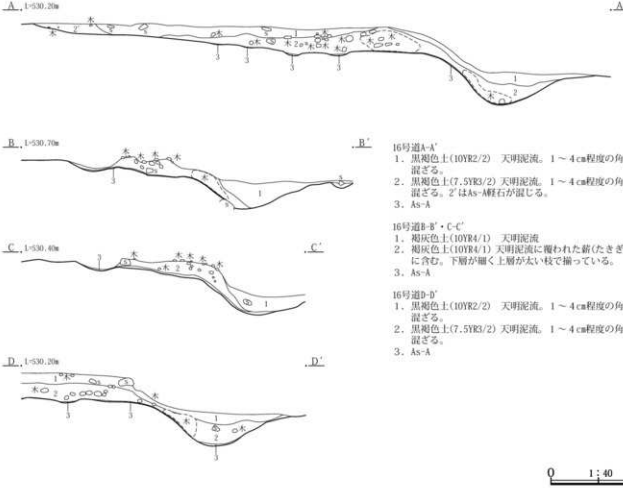
16号道の路肩に径２～５cm程度の粗朶木が４群、畑の手前に２群、畑奥に１群、計７群が出土した。東宮遺跡では平成26年度の調査で１号屋敷の敷地内に長さ90cmの枝材数千本が２列に置かれていたこともあり、西宮遺跡でも薪材として取り上げているが、発見場所が屋敷から遠く離れた畑の中にあることから、より用途の広い粗朶木置場として報告することとした。

発見当初は泥流で流された枝材が道脇の側溝に流れ着いたものと単純に考えていたが、仔細に見ると、溝の底面に近い部分に細かな枝材が束で置かれ、その上に直径数cmの枝材があり、泥流で流されたものは路面中央付近と畑の中の枝材だけであることが判明した。現状で枝材を数値化したデータは持ち合わせていないが、図上で材をカウントしたところ、第１面だけで1729本を数えた。第２面は第１面と変わらない密度で出土、第３面も半減することはないが、半減するとして5000本弱の材が集積されたものと思われる。枝材そのものを見れば、いずれもボヤ（付け木）として利用することができるが、粗朶木の出土位置を踏まえれば薪置場とすることはできない。なぜかといえば、側溝を伴う道は複数確認されているが、①16号道に取り付いた溝は、幅１ｍを超えること。おそらくこの幅広の溝は計画的、意識的なものであること。②夏とはいえ溝には水気があり、薪が乾かず、薪置場としては条件が悪すぎること。粗朶木はコナラ属やサクラ属が主体（第４章）であり、伐採地点は山の秣場よりも、吾妻川の崖際等が想定されるということであった。このことから枝材は薪に限定するより、広く用途を考えた方がいいのではないかと考えている。現状では「それが何か」具体的に分からないが、畑の中にあるということからみて、獣除け等を含む畑作関連施設か、農道維持等に関する資材ということになろう。



第153図　粗朶木置場１



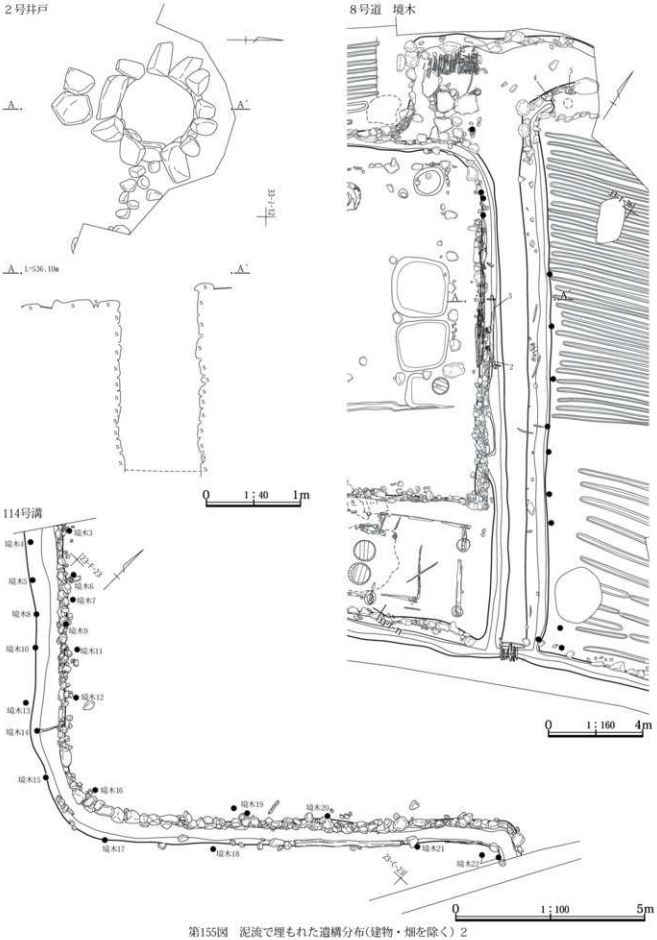


16号道A-A'
1．黒褐色土(10YR2/2)　天明泥流。１～４cm程度の角礫20%混ざる。
2．黒褐色土(7.5YR3/2) 天明泥流。１～４cm程度の角礫10%混ざる。2'はAs-A軽石が混じる。
3．As-A

16号道B-B'・C-C'
1．褐灰色土(10YR4/1)　天明泥流
2．褐灰色土(10YR4/1) 天明泥流に覆われた薪(たきぎ)多量に含む。下層が細く上層が太い枝で描っている。
3．As-A

16号道D-D'
1．黒褐色土(10YR2/2)　天明泥流。１～４cm程度の角礫20%混ざる。
2．黒褐色土(7.5YR3/2) 天明泥流。１～４cm程度の角礫10%混ざる。
3．As-A

第154図　粗朶木置場２



第155図　泥流で埋もれた遺構分布(建物・畑を除く) 2

（５）境木

境木とされるものが、２地点で確認されている。１ヶ所が７号建物（２ｂ号屋敷）東を通る８号道の脇であり、１ヶ所がクランクして流れる114号溝と呼んだ排水路脇である。境木は境界木のことであるが、八ッ場ダム関連の調査では久々戸遺跡や中棚Ⅱ遺跡の報告例がある。当初は根の痕跡だけが発見されただけであったが、ここでも石膏型が取られ、その痕跡から桑の木の根であろうとされた（第319集）。本遺跡では木の根が腐らず形状を止めており、約30ヶ所で確認されている。

８号道脇の境木（第155図右、PL.84）　８号道東の側溝に沿って８本、西側側溝に沿って３本の境木がある。境木は2.1～4.5mほど間隔を空けている。途中10m以上も間隔が空いているが、本来的には境木の間隔は１間程度と見込まれる。

道西の境木は山側に近い３ヶ所にあり、６～７ｍの間隔を空けている。境木は石垣の補修地点より山側にあり、途中もう少し間隔を狭めて境木があったのか、詳細は分からない。

114号溝脇の境木（第155図左）　上流側からみて左岸側に９本、右岸側に12本の境木が確認されている。両者とも上流側間隔が短く（1.8～2.4m）、下流側は５～7.5mと間隔を空け気味である。

境界木は残存状況が良好で、それぞれ連番が付されたように樹種同定を意識した調査が行われているが、試料が確認できず樹種同定は実施できていない。境界木にはウツギや桑の木、茶の木などが知られているが、８号道や114号溝には境界木としての機能は期待されていないのは明らかである。地境に木を植えることは当時規制外であり、桑の木か茶の木であることを期待しているが、写真を見る限り、それらしいものはない（写真43）。

（６）井戸

７号道北にある。発掘では６区１面の井戸とされ記載されているが、３号屋敷の敷地内（平成26年度調査分）にあり、本来は３号屋敷井戸として理解すべきものである。前回調査でも井戸の1/2程度は確認できていたが、調査区境にあり、よくわからないまま調査を終えてしまった。八ッ場では泥流が厚く、調査区境の未調査部分の対応が度々検討されたところであるが、この地点も無事空白域の調査が行われ、飲料水確保に係わる重要遺構＝井戸が確認されたことは大きな成果といえよう。

井戸のある屋敷の庭先は路面と同レベルにあり、井戸正面は街道側にあり、踏み石２が置かれていた（第155図）。直径は0.8mで、深さ1.8mまで確認されているが、それ以下については安全が確保できず調査を断念した。石組井戸で、良く面合わせされており、職人の手によるものと思われる。写真43は確認状態だが、礫が隙間なく並んでおり、井戸を廃棄する際、丁寧に埋めていることが分かる（写真44）。

写真43　道脇の境木（ウツギ？）

写真44　丁寧に埋め立てた井戸